

誰やら表に人が居るさうなと。立寄るお棍を押退けて。風呂敷包みひつ抱へ。門の戸引明けそれも形見ぢや持つて往け。ハアとばかり押載きこけつ轉びつ走り行く。

一二 恩愛廊日記

地思ひなくて載入したき親里へ。與五郎が嫁おてる去らるゝとなく去るとなく。呼び戻されて明暮れに。辛氣辛氣のぶら／＼病ひ。さのみ床にも就かねどもつれなき床も懐かしき。お氣のもつれを慰むる下女が按摩も話伽。詞申し御りよん様。私や先日お隣貰うて。京の芝居見て参りましたがな。中村七三が傾城買ひ女形は花井あづま。奥州といふ大夫になつたよさ。それはそれはどうも云へぬ。あれならほんにとちらからも惚れる筈ぢやと思はれまするでござりますると。餘所の噂も身に當り。ム、其あづまとやら傾城になるかや。ア、見たい事ぢやなう。色あづまといふ名で太夫になれば與五郎様の惚れてござる。藤屋のあづまも同じ事。ウレヒどの様にすれば殿達に。思はるゝのぢやわしや見度いと。いとよくよくひよんな事。云ひ損ひの出直しに、フッお薬上げうと立つて

行く。カ、リかゝる折ふし與五郎は。あづま引連れ來りしが。あづまを暫し小蔭に隠し。すつと通れば。與五郎様ようお出でなさんしたと。色云ひつゝちらりとあづまを見て取る廻り氣。與五郎様聞えませぬ。わしが病ひもあづま殿故。悵氣で去なぬとお腹を立て。面當にあづま殿。連れて來て是見よがし。ウレヒわしや近附きになりませう。父様はどこで立つ。夕も讀んだ本の中悵氣も少しは愛想ぢやと書いてはあれどけがな事。思ひもせにや云ひもせぬ。私ばかりか父様までそれ程お前は憎いかえ。お胸怨やと恨み泣く。傍で聞入る夫より洩れ聞くあづまが切なさば。スエフ身を悔むより外ぞなき。詞イヤさうでない。是には様子のある事。マア奥でゆるりと咄さうと。オトシ手を引き一間に入りける。詞かゝる所へあづまが親鷺の甚兵衛。跡を慕うて來りしが。コリヤあづま先が親に乘せて居る内。始終いうて聞かした通り。おれを親と知らぬも無理でもなし。モウ長うは云はぬ。おてる様や親御様に私が意見して。思ひ切らせませうと請合うた親が詞がある。久振りで逢うた親が頼みぢや。コレ聞

分けてたも聞分けてと。すゝり上げく。わつとばかりに咽せかへる。駕が涙は、カハリン息杖の休む隙なき思ひなり。ウレヒあづまは涙拭ひ。合今といふ今迄も合父様ありとは聞きながら。お前をわしが父様とも知らぬ道筋是非もなや。野邊の送りの親の奥子が昇くところ聞くものを。いかに知らぬといふとても。合現在親に駕昇かせ合乗つたわたしに神様や。佛様が罰當て、なぜに私を逆様に。落して殺して下されぬ。神や佛が恨めしいまだ其の上に與五郎様の。のけとおつしやる御意見も無理とは更々思はねど。よう思うても見さしやんせおてる様といふ奥様のあるを知りつ、逢うた客初めの勤め後の情人。女夫になろとも去らさうとも。微塵も思やせぬけれど。いやな客から請出すと儘ならぬ身は是非なくも。連れて退いたる與五郎様。軽いお身ならそもないに逢ひかゝるからヒロヒ今迄も合重る節句の年の暮。お世話になつた此

のあづま。あんまりく嬉しうて禮云ひに來たわいな。今又わし故難儀のお身。まかせぬ時に振捨て、どうまあ義理が立つものぞ。これ手を合せて拜みますエ、ナア申

し是なあと。親に取付き泣く娘粹なフッ育ちも涙には涙も隔てもなかりける。詞後に立聞く二親は。與五郎おてるを伴ひ出で。始終残らず皆聞いた。甚兵衛の志。あづまの心底聞く上は。與五郎に跡式ゆづり。おてるは本妻あづまはお妾。この與次兵衛が身請けせん。三人仲よう頼むぞといふに家内が勇み立ち。先づ御祝儀の御壽と打連れ奥にぞ入りける。

一三 おなつ極粉色娘扇

三下り唄君と我とは扇の骨よ。逢うつ別れつ要をしめて、胸に疊んで開いて見れば。いとし可愛のな。戀風が吹く。わしやナホス疾うからとつて居る地戀は浮世の人の花。忍びに忍び忍ぶれど。度重なればいつの間に。合浮名大松清十郎合おなつと深い二世の縁。タ、キ未來かけたる戀仲も。月に叢雲花に風。添ふに添はれぬ殿御をば合思ひ初めたる徒らを。神や佛に耻かしや。あらぬ願をかけまくも。繪馬に浮名を。立田山ハヅミンツ夜半にや君と合二人連。おなつくと難波江の噂も派手に。云ひ觸らす下着に色を染込みし。戀といふ字の金糸縫。裾に清

十郎と只二人 八郎兵衛フシ寝亂れ髪も宵のまゝ。合人目思へば跡や先。オクリ老松一町へと心ざし。只一筋に行く道も。合冷泉胸に涙を日隠しのオクリ草履も濕める草の露。合濡れて數添ふ諸袂。合二人手に手を取交はし。昨日の難儀くり返し。話す詞の内よりも。おなつはフシふいと顔背け。詞お前を思ふお品さん。色可愛からうとどこやらを。抓れば抓る紅のはな。色に染むとは廻り氣と。じつとフシ縮むれば締めかへし。そりやマア定かほんかいな。合疾うからわしが身の上は。合娘そろへの數に入り。合唄繪草紙に載せられても。親の意見は空吹く風よ。合お前の事を明けるから。合タ、キ晝も。日暮れも。寝臥しにも合片時逢はねば案じられ。父様や母様の。留守な時には合門を覗いて。待侘びて。合辻へ見えるはお前ぢやないか。笠がよう似た。合萱笠とわしや。浮名の立つが。嬉しうて。知らぬ人にはこちらから。云うて。聞かして。わしが氣で可愛らしいと思ひ詰め。合長地夏帷子の。模様まで合何に染めうとお前に問へば。合當世茶より粹らしう。タ、キざつと淺黄に駒形が執拗うなうて。よから

うと小紋ばかりを對にして。色は人目をかへて着る心の内は女夫ぢやと。思へど人目の關あれば。合清十郎どうしや斯うしやと。云はねばならず云ふ度に。勿體なうて悲しうて。ひよつと口が歪まうか。そしたら愛想が盡きようかと。あられぬ事の案じなき。わしや是程に思うて居る。せめて朔日節句には。ほんの女夫と云うていのと。フシ取付き縋り泣き居たる。清十郎も今更につい云ふ事をその様に。悪い癖ぢやと背叩き。賺し宥めて行く空も。はや東雲の明烏。寝もせぬ夜半に面憎や。明けぬ先にと急ぐ身は。はや北濱の濱つたひ。走りつくく見返れば。あの人音は追手の者。見付けられじと軒傳ひ。道を急いで慕ひ行く。

一四 睦月の春雨

二より人の心は花染の。迷ひ。易きは色の道。一夜一夜に合結びにし戀は浮世の人の花。思ひに思ひ合思はれて。忍びに忍び忍ぶ戀合たび重なればいつの間に合浮名高松。源十郎合おかねと深い合二世の縁。未來かけたる戀仲も。月に叢雲花はまた。咲かぬ睦月の春霞。末の四日

の。紅に。梅の盛りを嵐山。浮世のさがと昔より。世を遁れ来て住む里と。合聞きしに我は引きかへて合憂身の性を合隠さんと。主が情身に餘る。世話をしきみの有難き合北野参りと様を變へ。地人目せき笠頬冠り。憂さ吹き拂ふ煙草。暫し休らひ居たりける。カ、リ遙か跡より仁太郎が心足らはぬ端錢持てば病ひの買喰ひに。千鳥松風村はづれ。ちよつと立寄る合道草に合色フシ憂身の憂さを合忘れ草。せめては道の力草。阿房律儀を取ぞと。思へばふつと心付き。詞コレおかね殿つくく思ひ廻す程。添ふに添はれぬ不義の浮名。おれが事はふつつりと思ひ切り。仁太郎を連れそなたは國へ去んたも。ウレヒ云へばおかねは。涙ぐみ。合そりやマアお前合ほんかいな。今更云ふぢやなければども。思ひ出すも五月の。人目を隠す岩田帯。結ぶ。縁の。合馴初めは。去年の菊月。雛祭り。合つい汲交はす菊の酒。合雌雄雛の箱の内。年中抱かれて寝さんすが。合羨しいと。合おしやんした。その戲言が戀の合種。わしが。黄菊を。合打ちあかし合あづま菊とは。どう書くと。問うたりやお前も合點して。

吾が妻菊と。書くわいのと。云はしやんしたがア、媒介して。合縁は異な物。味な物。何ほ。どのよに思うても合思ふに別れ思はぬに。合嫁入。しやんして。つい嬰兒を。設けさんすもあるものを。合死なば一所とおもひ込む。それに去ねとは胴慾な。合わしや何ほでも。合離りやせぬ。ほんに愛想が盡きたらば。お前の手にかけて殺してと。オトシ縋り口説くぞ道理なり。ウレヒ源十郎も共涙。辨へ知らぬ仁太郎も。戀には心哀れさの。共に涙の目を擦りて。詞あれく錦の天神へ宵宮参りの人群衆。田舎者が女夫喧嘩を。しもつて行くと笑ふぞえ宿へ着いてから云うたがよい。サアお出でと足らぬ胸にも心根を。思ひやりつゝ諫むれど。一人は心せきのほす。耳を突抜く暮の鐘。参り下向の提灯に。紛れて振切る夫の袖。放ちはやらじと取絶る。縋れば拂ひ。退けばまた。出逢ふふしやうも諺の。小橋を跡に三人づれ宿屋。町にぞ著きにける。

一五 與五郎橋本の段 春富士直傳

地甚兵衛は刀こてくと。鞘に納める請合ひの。思案とりぐそれぞとは。知らぬあづまは落付きし。様子を道

に待合はず。放駒へ知らさんと。詞甚兵衛殿々々々。
オ、爰にか。あのこなたは此の様子。長吉殿へ知らして
下され。アイく、畏りましたが。私もちよつとお前様に。
お目にかかりましたかつた。幸ひのよい所と。色近う寄
つて跪き。おとよ大きう成りやつたの。噂はもう三年に
なるかや。ム、こなたそれをどうして知つてぢや。オ、
女房や娘の事。たとへ隔て、居るとても。知らいでかい
の知つて居る。ヤアそんならこなたは。オ、お吉が連合
そなたの親エイ扱はお前は父様かと。色いへど不思議
は晴れぬ顔。オ、合點の行く様にいうて聞かさう。この
甚兵衛は大阪の聚樂町に。破れ家の一軒も持った者ぢや
が。商賣のあら道具。ひよんな物買合はして。思ひも寄
らぬ誤り。所拂ひにそれから散りん。六つの年ぢや覺
えまい。噂は一昨年死ぬる迄。状態に。おとよも今は藤
屋のあづまと云うて。新町で一と云はる、太夫に成つて。
大人しうなつて居ますと。聞くと其の儘飛んで往て。逢
はうとは思つたがの。それから此の態。よう思へば。結
構なべ、著た女郎に。おらが様な雲助が。親ぢやと云う

頼みますく。命にまかけてる中を。思ひ切つてくれ
と云うて。親が頼む心は。まあどんなものであらうと思
ふ。思ひやつての願ひぢや。聞分けてたも。聞分けてと
すゝり上げく。わつとばかりに咽せ返る駕昇が涙は
息杖の。フシ 休む隙なき思ひなる。ウレヒ あづまは涙押拭
ひ。今といふ今迄も。父様ありとは聞きながら。お前を
わしが父様とも知らぬ道筋是非もなや。野邊の送りの親
の輿。子が昇くとこそ聞くものを。いかに知らぬと云ふ
とても。現在親に駕昇かせ。乗つた私が神様や。佛様が
罰當て、なぜに私を逆様に。落して殺して下されぬ。
神や佛が。恨めしい。まだ其の上に與五郎様。退けとお
つしやる御異見も。無理とはさらく、思はねど。よう思
うても見さしやんせ。おてる様といふ輿様の。あるを知
りつ、逢うた客。初めの勤め後の情人。女夫にならとも
去らさうとも。微塵も思やせぬけれど。いやな客から請
出すと。儘ならぬ身は是非なくも。連れて退いたる與五
郎様。輕いお身ならそもないに。逢ひかゝるから今迄も
重なる節句歳の暮。お世話になつた此あづま。あんまり

たら。よい幸ひも落ちようかと。遠慮は無沙汰。よい客
が附過ぎて。與五郎殿をよくもあんなうほくにしをつ
たなア。おのれが事で今も今。親父様達が。すつての事
に切つ張つ。聞いて居たこの甚兵衛。衛ないと氣の
毒など。悲しいと腹の立つと。何ほでも涙が止まいで。
昨日洗うた單物。四文が粥を棒に振つた。こりや誰から
發つた事。長うはいはぬ。あのお主に意見して。思ひ切
めての頼みぢや。聞分けて思ひ切つてくれ。こなたが思
ひ切ると。與次兵衛様も與五郎様も。治部右衛門様も
おてる様も皆えいわい。思ひ切らぬとの。與五郎様の爲
にもならず。與次兵衛様と治部右衛門様は。さつきの通
りえいやつとう。取分けておてる様。あんまりでおいと
しほい。縁といふものはしよこともない。今日牧方で籤
取の錢ざし。長いのに當つたも。思はず親子の縁の綱。
乗せて來た駕の内。あづまと聞いて悔り。ある縁はしよ
ことがない。丁度それと同じ事。今思ひ切つたとて。あ
る縁なら又逢はれる。どうぞ思ひ切つて下されや。コレ

餘まり嬉しうて禮云ひに來たはいな。今又わし故難儀の
お身。任せぬ時に振捨て。どうまあ義理が立つものぞ。
コレ手を合はして拜みます。エなあ申しコレなあと。親
に取付き泣く娘。粹な育ちも涙には。フシ 譯も隔てもな
かりける。

一六 靜三絃の段

春富士出雲直傳

唄 天下。泰平長久の。弓も袋に納まれば。彌猛心の武
士の。敵に後を見せいで戀に。腰を抜かした。地名に負
ふ靜が一舞。祕曲の底を堀川の。御所は酒宴も表座敷。
フシ いつに勝れて賑へり。色詞 靜御前は立出で。この
兄様はなぜ遅いと。カ、リ 氣を揉みあせる後より。北の
方様靜様。わが君の召しますと。腰元姿みすほらしく。
詞 立出で給ふ京の君。靜ははつと恐れ入り。ヌエフシ 涙と
共に御手を取り。詞 定まつた御本妻。京の君様ともあら
う身が。鎌倉の聞えを憚り。信夫が名を假初に。ウレヒ 腰
元姿の勿體なさ。お身の爲とは云ひながら。賤しい靜
が上に立ち。信夫。どうせい斯うせいと。人目を繕ふ主
顔も。只ならぬお身の上。お腹に御座る嬰兒様を。産む

迄の辛抱と、詞堪忍して下さりませ、なう断りに及ぶ事
 かいの。色辨慶の心つれなくば今は世にない我が命。地
 誠をいは、尼法師とも様をかへ。先立ちやつた信夫の跡
 を。ウレヒ 弔ふが道なれども。輪廻きたない女の心。そ
 れ迄は得思ひ諦めぬ。斯うして殿のお傍に置いて下さる
 が。ツナギ 皆の衆の情忘れはせぬ。構へてく遠慮なし
 に。フシ 信夫々と頼むぞや。詞斯くいふ内も人目あり。
 北の方様いざこなたへと。色座を立ち給へば抱きとめ。
 其のお心根が猶おいとしい。上々様に苦はないものと思
 ひしに。こんな災難もあるものか。人の名も多いに信夫
 とは誰が附けて。今では北の方様の。お身を忍ぶ世をし
 のぶ。忌々しい名ではあるわいと。スエフシ 返らぬ事を掻
 口説く。詞 遣戸口に咳拂ひ兄藤彌太が立歸れば。○ 静は
 色目を悟られじと。コリヤ信夫。兄様の今お歸りと。母
 様へお知らせ申せ。色アイと答へて立ち給ふを。△ 詞ア、
 これくく。先づ待つた信夫殿。母への訛言は早うて
 も運うても。否應いはさぬ義經公の取持ち。理窟くさい
 母人も。今度の鼻が手柄を聞いて。四も五も云はず合點

であらう。○イ、エお前やわしが思ふ様に合點なりやよ
 けれども。物事に念の入る母様。たとへ大將のお詞がか、
 らうが。どんな手柄をなされうが。それには乗らぬ日頃
 の氣質。ぬらりくらりの間に合ひ者。心の直つたをとつ
 くりと見届け。其の上の事とおつしやつた。△ハテ小むつ
 かしい。心の直る直らぬは。嗅で知れるか見て知れるか。
 其の片意地に懲り果て、今朝からの神参り。上賀茂下加
 茂祇園の社。母の片意地やめ給へと。祈る程にける程に。
 日足も傾く腹も傾く。幸ひの二軒茶屋。立寄るはなも
 元豆腐屋。田樂串から出世した二本指しの身祝ひ酒。俄
 か武士の尾も見せず。微酔機嫌で立出づれば。おいく
 と跡から呼ぶ。歸つて見れば面目なや。指付けぬ悲しさ。
 とんと刀を忘れて置いた。何もかも殿が下され。此の様
 な侍になつたれども。なうく同じ差す物でも。田樂串
 とは違うて。刀脇差は指しにくい。コレ信夫殿。此の様
 に身の恥を打明けていふ正直男。恥のついでに心の思は
 く。耻かゝさうとかゝすまいと。信夫殿のお返事次第。
 この館へ来てちらりと見るより。首だけ惚れて居まする

と。ほうと抱付き振袖の フシ 肌へ手を入れしなだるれ
 ば。○ 詞 ころや兄様てんがうばかり勿體ないと引放せば。
 △ いやてんがうぢやない眞實惚れた。妹の使ふ腰元。兄
 の惚れるが勿體ないとは。どうして信夫が勿體ない。勿體
 ない譯聞かうと。○ 問 ひ詰められて南無三と。驚きなが
 らさあらぬ風情。エ、とがくしい詞咎め。勿體ないと
 云うたはな。親の勘當願ふ身が。其の訴訟はほつて置い
 て。脇道の小徒ら。親の冥加に盡きさしやろ。勿體ない
 と云うたが誤りでござんすか。母様は奥の間で御所望の
 今様一さし。お装束も出来たやら。笛も鳴る鼓も調べる。
 お前も餘所から拜見して。舞も濟んだ其の上。目出たう
 親子の御對面。わしも信夫も三絃の役人。心もせけばお
 先へとフシ云ひ紛らして急ぎ行く。△ 詞 藤彌太は兩人が詞
 のはしく素振まで。ぐつと呑込む面魂。カ、リ 鎌倉よ
 りの忍びとも。○ 奥には白髪母の舞。聲の細りも今様當
 流。琴三味線の音も戀に。三下り 唄 寝巻の。衣の肌薄し。
 つらいぞ憂いぞ何とせう△ 詞 フウ扱は京の君を信夫に
 して。信夫が首をけうといく。やつちやして來い此の

通り注進せうか。いやくく。まだ暮れ切らぬに御門
 の出入。咎められてはむつかしい。ハア、どうせうな。
 ○ 三下り 唄 深き思ひの。淵となる合。△ 詞 ホウそれよ。せいて
 は事を仕損ずる。この藤彌太を犬とも知らず。うまう参
 つた判官殿。マア奥へ往て勘當のいやくく。妹が今
 の素振。○ 三下り 唄 見るに付け聞くに付け胸に迫りし數々
 の。袖も乾かぬ。沖の石。△ 地 歌の唱歌に引きかへて。一
 筆知らせの硯石。床の料紙を幸ひと。蓋押明けて摺る墨
 より。○ 歪む心をためさんと。三絃たづさへ静御前。空酔
 つくる千鳥足。唄 酔うたとさく。土手の細道危い合點
 ぢや。危い。詞 兄様何を書かんすと。聲かけられて
 △ 悔りしあたふた袖に状おし隠し。そなたは三味の役で
 はないか。爰へ來ては間が缺けう。サアく奥へ。○ イヤ
 大事ござんせぬ。母様の舞も一番濟んで我が君の御機嫌。
 酒一つ飲めも一つ飲めとひら強に強ひられて。三下り 唄 酒
 のあけくに亂る。かたを波あなたへさらり。こなたへさ
 らり。詞 あなたよりはこなたの。三下り 唄 ざらりく。
 ざらくざつと。詞 書かしやんした今の文。隠すは曲者

それ見たい。イヤ其の文とはアノ物よ。隠した譯はかの信夫に思ひりくべく候。○眼いよし御見と書いたるは。ほだしの種か。花すゝま。ほんに誓文。詞戀ぢやあるまい慾と見た。△慾とは妹何を見た。○まだ直らぬ心を見た。人には洩らさぬ兄妹仲。サア有様に云はしやんせ。△オ、云へならば云はう汝も云へ○わしに云へとは何の事。△ヤアとほけまいく。信夫といふは京の君。濡れに事寄せ抱付いて腹帯を確に見た。○それ見付けてどうさしやる。△鎌倉へ注進する。○エイ。フウ扱は勘當の託言とは。△オ、嘘ぢや。梶原と心を合せ。伊勢道から附込んで靜が兄が味方顔。釋迦でも喰はす鹽梅よし。斯うした思案はまた田樂。義經の首を串差しと。駈出すを○引きとめ。エ、曲もない兄様。悪事に興して身が立たうか恐しい工の段々聞いた者は妹ばかり。外へは聞えぬ奥の囃。鼓や唄に紛るゝもお前の仕合せ親の慈悲。ウレヒサア舞の終らぬ内に悪心を翻し。善心になつて下されと。兄を思ひの眞實心。スエ涙は詞に先立てり。△詞ヤア兄が出世に不吉の吹面。ぞつこん必込む此の大望いつかないかな翻さぬ。ばれ出す

マシ心地よくこそ見えにけれ。詞母が心は張弓の。藤彌太が髻片手に掴み。ぐつと引上げ面打守り。コリヤ此の刀を抜けば命がない。息のある内いふ事あり。眼も未だくらまずばこの親が出立を見よ。烏帽子水干男の装束。母と思ふな父親の磯の禪師。エ、おのれ淺ましい。本心に立返らば。父が勘當悔みをろと。母に禪師が名を譲り。待ちに待つた甲斐もなく。悪に悪を積重ね。現世後生を迷はず故。磯の禪師が蘇生して手にかけたを覺えしかと。色烏帽子装束かなぐりく。藤彌太にはたと打付けて。詞是迄は父の役禪師といふ名を力にて。ウレヒ思ひ切るは切つたれども。母が身にもなつて見よ。現在我が子を手にかける。母も因果おのれも因果。憎けれど佛に成りなれと。スエわつと叫び入るを見て。靜も共に泣き崩折れ。いうて返らぬ此の有様。せめては最期に心を直し。親子兄妹むつまじい。詞を交して死んでいのと。スエフシ取付き歎くその聲の。△詞色藤彌太が耳にや入りたりけん。むつくと起きて眼を開き。ハア、誤つたく。親を親とも思はぬ我を。親は我が子と思召し父の名を母に譲り。

からは一時勝負。いで注進と又駈出す。○先に靜が立塞がり。やらぬくどこへもやらぬ。△エ、面倒な女郎めと。ずはと抜いて斬掛くれば。○得たりや紫檀の伸棹にはつしと受け。詞妹を殺さうとは人でなしの猫の皮。不孝の上塗りばち當りと拂ふ刀を。△又付込み。此の世のいとまき取らさんと。太刀筋血筋の遠慮もなく。兄は強力双物業。○妹はかよわき無刀のあしらひ。コハリ三味と白刃の鏢音どうなり。いらつかけ聲二上りに。心もめいる三下り三世の縁の糸筋も。切れて再びかへ老。天じゆいとくらさんさんにマシ亂れ散つて争ひしが。△終には三絃切折られ逃ける靜を藤彌太が。取つて引つ敷く膝の下。詞サア此の兄と一つになるか。いやと云へば突殺すと。色胸に刀を差付くる。○カ、リ物音奥へ聞えてや。母は装束脱ぐ間もなく。走り出で、抜打ちに。兄が肩先すつばと斬る。△うんとつけに反りながら。死損ひの考筆めと。親に双向ふ極悪人。○寝ながら靜が諸足かけば。どうど倒れて立上らんと。動めく藤彌太起しも立てず。胴腹ぐつと刺通す。老女の手並早業に。手足を張つて苦しみしは勘當を救さんとの御恩を無下にするのみか。天の冥罰二親の御手にかゝる不孝者。もと此の館へ入込みしは。梶原と心を合はせ。京の君の實舌を糺し。義經公を科に取つて落さん爲。二つには番場の忠太跡に残し置く間。蹠し合はせて。夜討の手引き大將の首取らば。梶原が取持ちにて。大名にしてやらうと。慾心に親の慈悲を忘れ。御手にかゝりし今この時。一生の非を改め善心に成つたれば。最後にせめて寸志の忠義。コレ靜。今宵鎌倉武士どもが。夜討にせんとの支度あり。必ず御油斷なさる。なと義經公へ申し上げや。カ、リいひ置く事は是迄と。貫く刀に手をかけて。抜けば絶え行く息の往來。マシ生死の道ぞ定めなき。ウレヒエ、しなしたり残念や。その根性をまあ三寸。早う直してなせくれなんだ。詞辨慶殿の娘御。女なれども父の手にかゝつて忠義の死。われも母が手にかゝつてウレヒ死ぬるに二つはなければども。根性の直り様がおそさに。犬猫の死んだ様に。此の死様は何事と。空しき死骸に取付いて。老の線言親と子のマシ別れは盡きぬ歎きなり。ウレヒ靜は涙の隙よりも。詞いうて

返らぬ御悔み。鎌倉勢寄するとあれば。歎きは無用コレ
母様。もう何時でござんせう。今宵も夜中あの太鼓は。
時打つ數とも思はれぬ。ほんに忙しい鉦太鼓どうやら世
上も物騒がしい。地 必定夜討に疑ひない。殿ばら達は
づくにぞ。出合ひ。給へ。我が君にもいざ御知らせと棲
引上げ流石。合騒がぬ静がわざ。けに義經の妾。堀川夜
討のその風情繪馬にも。寫しとゞめける。

一七 道行しの、め鳥

ニエリ戀仲は合墨と硯のふた思ひ。合我は此の世に捨てら
れし。夏の梅田のはかない事を。ナホス 聞いての後に死
なうなら。地 せめては胸を平野屋の徳兵衛が身の味氣な
き。思ひに高し天満屋の。お初[缺]せめて一日。合夫婦
とて。明かし[缺]死に行く身を誓ふれば。合あだしが原
の道の霜。一足つゝに消えて行く。合夢の夢なる夢の世
に照らす馴染の角行燈なさけ商ふ合打影さへ。夕には似
ぬまばゆくて。顔を隠せし。袖屏風。合はかなや昨日今
日までも。合餘所の歎きと見捨てしに合わしもお前もあ
の火屋の。煙にさそふ此の身かと。思へば猶も悲しさの

して。わしや縁切ると云はしやんした。それを聞いたり
やひいやりと。悲しいやら。無念なやら。面目ないやら。
苦しいやら。わたしが胸のこれ爰を思ひやつて下さんせ。
お前さへあの氣ぢやもの。徳兵衛様が私を嫌はしやんす
が無理でなしと。びんと拗ねたる恨み泣き。ヌエテ 袂を
絞るばかりなり。詞 久右衛門も共涙目をすり赤め傍へ寄
り。オ、その事を聞いたら。腹の立つも道理々々。サア
くゝともぐ尋ねんと。カ、立上りたるひよろゝ足。
親の慈悲心徳兵衛が。胸にこたへて柳の枝の繁みに隠れ
て泣く涙。五體震へばはらゝと。落つる涙の露雫顔に
かゝれば オトシ 振仰向き。詞 おきた雨でも降るか。いえ
ゝ星がござります。エ、柳の露でがな拭いてたも。あ
いとおきたは振袖で拭ふは我が子の涙とも。知らぬが闇
夜烏羽玉の。嫁のおきたは手を引いて。梅田堤をまつす
ぐに。行くが此の世の名残とはオクリ 後にぞ思ひ知ら
れたり。カ、リ はや提灯も横をれば。徳兵衛お初は跡見
送り。伏拜みくゝヌエ しばし泣入るばかりなり。詞 徳兵
衛つくゝ思案して。今の伯父様の仰せを聞いては。死

手に手を取りて縋りつき ヌエ暫し涙にくれにける。カ、リ
向ふより來る人影に。見付けられてはいぶせしと。お
初は忍ぶ茶種畑戀の奴はさゝがにの。いと力なく柳の枝
にのほろ痞をおし鎮め。別れて隠るゝ夏の夜の オトシ 露
をかたしく草枕 血筋が。結ぶ恩愛にからみ附けたる不
便さの。久右衛門は徳兵衛を。尋ね迷ふも子政の闇。暗
さを照らす提灯のくさり附いたる二人が事。案じに涙と
ほくゝと。とほつく杖を力にてハツミ道抄どらぬせぐり泣
き。ウレヒ 同じ情を妹と脊の添ひ度いとの身引きかはる。
道を隔て、只ひとり。嫁のおきたはしを合くゝと。終に
ね、せぬつま戀の。鹿の命毛短か夜を。あす迄待たぬ死
覺悟ヲシ梅田つゝみに差しかゝれば。詞 久右衛門が提灯に
思はずはたと行當り。互に顔を透し見て。おきたは驚き
柳蔭隠るゝ袖を久右衛門引きとゞめ。色姿つくゝ打守
り。ヤアおきたではないか。ア、心得ぬ顔の色。何故こ
ゝへはおぢやつたぞ。ウレヒ おきたは涙しやくり上げ。
何故とは曲もなや。宵に雨戸の縁先で。云はしやんした
を覺えてか。わしを在所へ追ひくだし。お初様と夫婦に

んだ跡迄も間男の罪はのがれぬ。爰より先づ去んでたも。
ウレヒ お初は恨み合涙にて合エ、むごらしい。今の父御
のお詞で。おきた様に添ひたうて。わたしを捨て、去な
んすか。わしや何ほでもいなしやせぬ。殿御見殺しすご
くゝと。去ぬる女房が縦へマア。合浦島様ほど生きたと
て合日本國の人さんがよもや人とは思ふまじ。小さい時
から天満屋で。氣兼ねに月日を車の輪めぐる紋日に日を
送り。つらい勤めの其の中に。こんな縁とは露知らず。
合末はどうして斯うしてと。無理な當所に指を折り。合
祈らぬ神もなかりしに。そもまあわしが氏神はどうした
ぐわちな神様ぞ。京の吉田の神帳に。入つた神やら入ら
ぬのか譯も。情も辨へぬ野暮合天神かうつ神か。恨んで
も譏つても。神の力も叶はぬか。ほんにどうした縁ぢや
やら忘るゝ隙はないいな。それに振捨て去なうとは。
よう云はんした出かさんした。どう心得て下んすと。男
の襟にヌエオトシ 縋り付いて泣き居たる。男も共に死神の。
誠にお前もつゝる井筒。二十五歳の厄の年。わしも十九
の厄年と。思ひ合うたる厄祟り。縁の深さのしるしかと。

抱き締めたる顔と顔。心も夏の夜の習ひ。命をはゆる鳥の聲。明けなば憂しや天神の森で死なんと「手を引いて、梅田堤の里鳥。心も空も影暗き。風しんくたる曾根崎の森にぞ辿り著きにける。

一八 忠七 お龜 東風の松が枝 春富士田雲直傳

ニ上リ花は都。合花ながら。合花ならぬ花。合梅が香の難波の湊ねすみ屋の合忠七が身の納まり。合住み所さへなま中に。合容貌が仇か。情がすぐに。合針の先にて。ホス世の營み地頭も初春袋物。人に越したる器用にも戀といふ字の。重荷には。合祭文 肩腰抜けし羽抜け鳥。合立つに甲斐なき仇し名の。合お龜を連れて。死出の旅。合夜半に紛れて。横堀筋。相山北か。合南か冥途の道を。合分け迷うたる。二河白道。末の十日を限りごととほとほ急ぐ。死神に。誘はれ合行く濱づたひ。合長カ、リ小夜ふけすそふ濱風が。右の。合袂や。左の袖に。合通る人目は防けども。合防ぎ兼ねたる涙の時雨。身に差しあたるならば橋。渡り越したる。濱千鳥。友呼ぶ人の聲だにも。若しや追手と氣もそゝろ。疵持つ足に薄氷を。踏所

定めぬ柳糸。オトシ 木陰にしばし忍び寄り。詞此の様にそなたと二人。死に行くのも心から。からき浮世の世渡りより。色からい目の天井守。唐辛の紋所。最期所も鐵眼の。門前に扇を開き。あすの噂は心中よ。色ヤレ心中と人々を。招き寄するや我々が。著る物も此の通り。當世はやる湊鼠。色もこつちり一様に。染込んだ二人が悪縁。死なねばならぬ様になるも前世の業か。此世の罰か。戀は心の外とはいへども。現在女房の姪たる身に。不義をしかけて。剩へ胤まで宿すも因縁かや。女房の思はくのみか。云ひ約束の男へ立たず。かれ是のがれぬ天の網。せめて此の世の言譯には。死耻さらすこの體。百分一の腹愈せとも。よい氣味ともよい様とも。フシ 思うて堪能頼み入る。詞女房もさぞ。喰付くほど。憎う思はう堪へてくれ。ウレヒ まして女は一筋に。愚痴な者ぢやと知りながら。馴染み重ねたこのお龜。云ひ約束の。男へ義理そなたへ義理お龜へ義理。三方四方の義理と義理。途方にくれて今この仕儀。腹が立つとも了簡し。死んだ跡でも一遍の。回向したもコレ女房。頼む合頼むと手を合

せ。傍へ引寄せいふ如く。我を佗び。身をくやみ止め兼ねたる溜涙。しやくり上ぐれば目も春の。草にこぼれてオスンシ露の玉散る間程なく見えにける。口説お龜はいつそ泣き崩折れしばし詞もなかりしが。合今更それは未來の迷ひ。それ程わたしと死にともなか。なぜ。いろ。色の嘘ついて。可愛がらして下さんした。合初めて逢うた其の夜の心。合羞かしいやら怖いやら。嬉しいやらで。一夜過ぎ。又逢ふ夜半の。物案じ。合怖いと思ふ心より。嬉しいといふ合心めが勝つて又。逢ふ夜を。待つ日をば。合數へく逢ふ度に。思ひのまさる男ぶり。物腰。拾とまでが憎い合ほど。合可愛うなつて。何のそのまよ合火水の底までも。行かば一所は戀の常。合本にも書いてある通り。心の太るは色の道と。合讀んだ時には。それ程に。合思はなんだが。こなさんにいつの。頃より合逢ひか。小母様はおろかな事。お釋迦様の連合ひでも。何の大事か。大事のく。合わしばつかりの男ぢやと。思ひ詰めたる一筋に折角宿したお腹のや。むごい事ぢやと思へども。ア、儘よ。可愛い男故ぢやもの。一所に死ぬ

一九 吉三郎道 行

るはわしが念。届いて嬉しいコレ顔見せて下さんせ忠七様と。抱き合うたる命の瀬戸。水も洩らさぬわりなさは。盡きぬ妹背の鳥の聲。泣入る耳を驚かせば。忠七心取直し。詞ヤアはや東雲に程近し。死出の迎ひと泣沈む。お龜を引立てはけみの詞。何ぐどくと時移る。迷ふが故の地獄ぞや。悟らばなどか極樂の。花の臺に二人が體。坐して。合成佛とくくと。手を。引合うて西方の。合彌陀の御國へ歸り足。佛も元は難行苦行。八せんとの衆生のさい土橋も跡になみ木の松。ヲドル 目指す所は悟りの門。合瑞龍寺とて名に高き。尊き法の朝經や。合木魚。太鼓の音も冴えて。聞ゆる教へは南無うみたうふ。果つる。合二十日にあらねども。二十日はいつも果つるの定か。亥中の月の残りさへ。今暫らくの無常の嵐。松吹く嵐「朝あらし。こちか東風々々松が枝に。辭世をのこす連理の枝。健氣の最期と末世まで。其の名も隠れなき命は。是非もなく人ばかりなり。

ニ上リ肌の小袖に吉三と書きし。縫ひの模様を楽しみに。

フシせめて一所に添ふ心。人目立つのもわしや嬉しさに。相合傘のしよんほりと。吉三郎に一対の。おひなが思ひ遣る瀬なき。番ひ離れぬ。濡れさきと合ほんに人目に見らるゝが。わしや嬉しいと。合取縫る。心隔てしなかなかに。たゞ。一本の傘も。相ノ山 日本堤に。合指しかり。弓手のかたを見渡せば。白波走る合二挺立。南は兩國橋の上合行き交う人の提灯は。夏の形見の合螢火かそれかあらぬか。稻妻の。オ、怖やのと抱付けば合吉三はびんと。フシ振放すッレ袂におひなは取付いて。此の程お傍に附添うて。相見る事の嬉しさに。合思ふありたけ云ひたさも。どうか斯うかとお前の心。案じて見ても。合いとしさ増さる思ひ草。いやがらんす程。猶思ひがまして。二世や合三世は合いふが管。ほんにお前の可愛さが。並大抵の事かいな。合それに私が懐に。鬼が住むやら蛇が住むか寄添うても下んせず。合なみく。ならぬいとしさに。お乳母を頼み色々と。云うて見ても。合口説いて見ても。々、キお七殿に義理立て、言號の此のひなに。物さへ。ろくに云はしやんせぬ。その立抜いた

お心をせめてわしにも。百分一。あやからしてくれだがよいと。じつと。合差込む手先には。如何なるフシ戀やこもるらん。[セリフ]オ、其の恨みは皆尤もお七が事を知りながら。愛想も盡かさず其の様に。云うてたもる志。嬉しうは思へども。心解けぬは戀路の義理。●必ず恨みてたもんなど。互に解けぬ胸の内。堤つたひの憂さつらさ。身を知る雨にかき曇る。濡れにぞ合濡る、傘を。戀の輪廻の我からと。くるく、合くるくくるくくるりと振りかたけ。エ、さす甲斐もなき相合の。傘を風に吹き立てられ。轆轤をくぐる雨雫。ヲドルかゝる二人が身の行方。フシ歩み兼ねたる風情なり。

二〇 梶久軒端の比翼

春富士 直傳

二上り明迎り行く今は心も亂れ候。末の松山思ひの種よ。いつの頃より逢ひ馴れそめて。通ふ心を。可愛と思へさりととはく。地互の粹も梅による。難波に其の名隠れなき。梶屋帽子は兩親の。つい懲らしめの勘當に。心も細き亂れ糸。結ほふれたる松山が。附添ひめぐる介抱も。おかもじ様吝もじの。其の上もなきに身を捨て、廓を

出でしみすがらや合派手な模様を人にかへ。下は紅裏上に對。袖よろこびやけらくと。笑うつ泣いつ立ちどまり。詞扱もよい子の。コレくお孔母殿。お名はえ午松様といふわいの。オ、よい名の。イヤ其のお子よりお乳母殿見事々々。レウ。好かんとは不粹々々。賤しい法師とするのく、賤しきに心隔つるものならば。賤が伏屋に月は宿らじ。随分情かけ給へ。其の子もよい子のしるしには。結ぶの神の抓り痕。附きしほもなき往來にオトシ一人相手の物狂ひウレヒ松山は人目せく。ア、うとましい氣に。カハリならんした。お前とわしが逢初めは。合人さん達もよう知つて。十九の。冬から。呼出されじやらくとして。一年の内はをかしい附合ひで。借りにくれども氣はせかず合とは引變へていつとなく。合暫しの内さへどこにぞと。待つ間こがる、合柴舟の合こがる、胸の合火も消えて小暗がりにも悪じやれば合常からのいで繕はぬ。傍で身仕舞ひ相風呂や。眉も引かずに。ヒロヒ鐵漿つけて。おかたなりぢやと心の祝ひ。半太夫フシ九十九髪まで友白髪。ほんの女夫と氏神さんへ幾らの願をか

けしかど。利かぬは。不粹な。憎らしと。神様方へ。合拗ねて見る。まして我が身に大恩の主が。正氣にならんす迄は。帯に一生男の手々、キさへ丸寝の夢うつ。氣を鎮めて下さんせと縫り歎けば。梶久は。松山が顔打眺め。詞ア、太太嗜めやく。その形は何ぢや。内でもさう云ふむさい形はさせぬく。それが嵩じてこんな形になられたは。よい氣味のと。我が身の上を餘所事に。駈出す跡の童を。制し兼ねつ、松山は。控へる袖も千トが。露情の衣は薄けれど。心もあつき埋火の。おこり冷めある。夫の心。松山は心憂く。人目を忍ぶ亂れ髪。云ふに。合云はれぬ有髮の僧。控へる袂。合振切りく。北濱や。曾根崎さして村々や野越え里越え追うて行く。日足も八つに日高川。寺はなけれど十三の渡し場にこそ著きにけり。

二一 お菊 加賀笠誓二王門

二上り明 加賀のお菊は酒屋の娘。顔は白菊紅菊。付けてよい子のく、よい子の娘。嫁入ナホス盛の花見月 卯月頃よりぶらくと。内の子飼の幸介と。譯ある中の戀病

と。しら髪がらの母に誘いざなはれ。保養ほんやうの爲ための京上り。先斗町ほんとうちやうに借座かざ敷母ふは今朝けふあしたから大谷おほたにへ。お墓おほ参りの留守のりの内うち。お菊はひとり縁端えんはなに。憂うれさを見晴みはらす煙草たばこ盆ぼん。詞掃ことば除片手じりに下女しもめのとら。申しお菊様。昨日けふお國元くにもとからお袋様おふくさまへ御状ごじやうのついで。おいま殿とのからわたしへ向け。幸助殿きんすけの文ぶんが入れて参りました。お留守のりの間に上げましたよとオトシ渡して勝手勝手へ入りにける。詞取ことばる手遅てしと封じ目を。解とければ戀こひしき文ぶんの傳つて。一目ひとみ見るより。ヤアそんなら豫よて噂うわさの。佐藤定七様さとうさだしちやうへ。父様ちちさまがわしを遣つからうと返事こたへして。結納むすなひ迄取とらしやんしたか。幸介きんすけの思おもやる手前てまへがわしや悲かなしい。色言いろことば譯わけせうにも旅たびの空そら。ウレヒ鳥とりになりたや。翅つばさが欲しい。顔かほが見度みどい逢あひたいと。及およばぬ空そらを眺ながめやり。文ぶんの宛名あてなを身に添そへて。繰返くりかしたるかこち泣なき。フシ女心めこころぞ遣つかる瀬せなき。苦くるは色いろかゆる。松風しょうふうに三味さんまいの音色ねいろも通とふらし。何なにれの妓女きよめかしら糸いとの。昔戀むかしこひしや唄うたはづかしや。年月としづき重ね。憂うれき勤こめ。ふたり。合軒端あいのちまに。立別たてわかれ。合人目あいにままがきに堰せきさせかれ。一年ひととせぶりの契ちぎりもあるに。合詞あいのことばお菊はふつと振仰ふかちやうき。隣座敷となざしきのあの唄うたも。今いまのこの身に思おもひ

知る。色いろを商あふ勤こめの身みでさへ。戀こひは心の儘ままならず。人目の關せきにせかるゝもの。親おやの目顔めがほを忍しのぶ戀こひ。いつかほんに幸介きんすけと。女夫おんなにならるゝ事ことやら。合唄あいのうたつひにねいせぬ妹いも春伸はるのぶ。合親あいのおやがなつけて斯ごとうした事ことか。草履ぞうり草鞋わらじを。店みせに。合出あいでし共に稼かせぐも二世三世にせさんせい合詞あいのことばオ、二世も三世も添そ添そけうと思おもうて居ゐるわしが心こころ。いつそ母様かみさまに云いはうか。合唄あいのうた結むすぶの神かみの不粹ふそいなか二股竹ふたまたたけに。結むすんだ縁えん合詞あいのことば結納むすなひを戻かへし變改へんかいし。幸介殿きんすけと末長すえながう。ウレヒ添そはせて給たまべと身みをかこち。心こころもそいりしどけなく。前後ぜんご正體せいだい伏ふ沈しんみ。あやも涙なみだに泣な寝ね入りスエ思おもひある身みの習なひなりかみ上方かみかたの風かぜを學まなびし色男いろおとこ。京諸白きやうしよはくの甘口かんこうな。女子おんなたらしの幸介きんすけは。からき古酒こしゆの目めを忍しのび。はるゝ加賀かがの城下じやうげより。君きみが便べんりを菊酒屋きくしゆゐ。都みやこを指さして走はり井いの。蹴上けしあがは戀こひの。みなと入いり合誰あいつしら川がはを。合跡あいつになし。妹いも春はるの縁えんに大橋おほはしの。弓ゆみ手ても馬手うまても色いろの淵ふち。戀こひの中島なかつしま横よこぎれに急いそぐ心こころの先斗町ほんとうちやう。文ぶんで知しらせの目印めじるしは。丸まるに加かの字じか。菊きくの字じか。お菊きくと深い三度笠さんたがさ。河原かはらづたひに爰こゝかしこ。尋たずね當あたたるも縁えんの端はな。詞ことばヤア幸介きんすけかいなう。お菊きくさんかお久ひさしや。拔ひけ

参まゐりにかこ付けて。忍しのんで京きやうへ上ありし故ゆゑ。お袋様おふくさまに見付みづけられぬ様さまにと。わざと裏道うらみちから参まゐりましたと。色いろ云いふにお菊きくは猶なほ嬉うれしく。幸きんひ母様ははさま今いまお留守のり。たつた今文いまぶんが届といて。見て恠おどろりした身の言譯ことばわけ。アこれゝ佐藤定七様さとうさだしちやうといふ。お侍さむらいの奥様おくさまあんまり傍そばへ寄よつて下さくだりますな。此こゝ間まお袋様おふくさまから親且おやぢ那なへ來きた御状ごじやうの中に。三井みやうの注文おんづゑ。上かみは光琳みつりんの槍梅やぶらぎ。裾すそは菊きくに籠かご。ハ、アさつても心の變かつた模様ようばう。春はると秋あきとの氣違きちがひひ染ぞめぢや。この菊きくの籠かごに。いひ交まはしたいひ目が違ちがひ。色いろも香かほもある聲こゑ様さまと寝ねて花はなをややり梅うめ。吸す付き抱かかり帯解おびといて。やんがて小梅こづめが出來ありませう。ハアお目出度めでたうござりますと。馬鹿ばか慇懃いんしんに主しゆうあしらひオトシせて恨にくみの腹はら愈よせなり。ウレヒお菊きくは悲かなしく。縫ぬり付き。コレあんまりぢやむごいぞや。おれに隠かくして父様ちちさまの。極きまめて結納むすなひを取とらしやんした。咄はなは今いまが聞き初はじめ誓文せいもんくつされ。こちや知らぬ。初はじめて逢あうた其そのの日ひより。外ほかの殿御とのみの肌はだ知らず。そなたと寝ねれば心解こころとけ。合肌あいはだ著きの袖そでの。合手あてを抜ひいて。合肌あいはだと肌はだとを合あはさねば。寢ねた様さまにない。わしが氣きを。まだ疑うてたもるかえ。餘所あま

の人に帯解おびといて。ほんに心が濟たむかいの。わしやそんな氣きぢやないわいの。二人ふたりうち解とけ世よを廣ひろう。添そはれぬ事ことが苦くるになつて。朝夕あさゆふわしが膝ひざに置く。深草ふかぐさ燒やきの。手爐てあぐらさへ。だき締しめられて瘦すくせたのと。合ああたりの人が蹺かぶるのも。そなた。故ゆゑぢやと心こころでは。樂たのしみ暮くし明暮あけくれれに。早はやう女夫おんなにしてたべと。しゆやじん様さまへ願ねがかけし。神かみや佛ぶつのお力で末すえは。二人ふたりが中垣なかつかきに小菊こきくを。育そだて樂たのしむと思おもひし甲斐かひも仲人なかつとの。ク、キ口くちべに菊きくに乗のせられて。合人あいにの心こころも白菊しろきくに思おもはぬ方かたへ分わけ根ねとは。聞きくさへつらき秋あきの縁えん。垣根かきねに残のこる。一重ひとへ菊きく。ひとり寢ね伏ふしの床とこの内うち。夢ゆめに見みるのを樂たのしみに。暮くすわいのと。取とり。縫ぬり。スエわけも涙なみだのないじやくり。詞ことば幸介きんすけも疑うひ晴はれ。カ、リ互たがひに心明こころあけがたの。鳥とりにはあらで鐘かねの聲こゑ。お菊きくが耳みみへ入い相あの。音ねに驚おどろく假寢かりねのオトシ。夢ゆめ覺さめてくやしき折柄せがひに。詞ことば表へに尋たずねる飛脚ひやくの聲こゑ。加賀かがのお客きやくの座敷ざしきは爰こゝか。お國元くにもとから狀じやうが來きた。届とけますると放はなり込こむ所ところへ母親はは親おやは立歸たてかへり文取ぶんとり。封ふうおし切きつてとくゝと見るより。母はははにこにこと。コレゝ娘むすめ悦よろこびや。わしが常々つねづね願ねがひの通とほり。親おや

父殿が得心して。定七殿へ縁組を變改して。そなたと幸介を一つにして。家を繼がす相談が極まつて。一門中へも披露した。一時も早う連れて戻つて。婚禮させいと知らせの文と。聞くにお菊は嬉しさの。是も夢かと飛立つ思ひ。ア、嬉しやと勇み立ち。母諸共に打連れて。加賀の國へぞ歸りける。

二二 涙の小萩物語

宮古路豊後直傳

二上り あらいたはしや照手の姫。合かゝる難儀にあふはかの長が寄る邊の水仕事。名をも小萩と變る世の合つき憂身の抱へ帯結ぶ甲斐なき別れにし。戀しき人に逢ひもせず便りなきさの漁士小船。合こがれくし合小夜千鳥。啼いて明かさぬ合夜半もなし。地人の行方と波む水の流れは知らず波む人は小栗に馴染浅からぬ。常陸といひし流れの身。儘な我が身をまゝならぬ世の憂き數は萬屋の。長が水仕下女朋輩。多き其の中に。長地新參の小萩とはいかなる縁かよい仲に。片荷の擔桶をさし擔ひ。つひに手馴れぬ業なれど下職はスエやすき習ひかや。詞八丁あなたの清水より日に二十荷の水よりも。主の心汲み

生るゝ程の御果報で。こんな災難もあるものかと。思へば涙がこぼるゝと。スエフシ聲を忍びて泣きければ。詞常陸殿忝ない。こなたが人並の人ならば此の照手は戀の敵と。妬み憎んで一所に居るを幸ひに。むごうつらふさつしやると何とせう貞女の賢女といふはおろか。ウレヒ生きた佛様かいの。イヤそれも得せまい是も得せまいと。何にもかも引取つて二人前をひとりして。口間を合はせて下さるのみならず合寝ればさすり。起きれば勞はり心を附けての御恩徳。父上母上には稚うて別れ。附添うてはしらねども。親の我が子をいとしみもよも此の上のあるべきか。小栗様の跡を慕ひ館を出で。藤澤寺へ行く道で。かどはかされて爰へ賣られた悲しさを思へばこなたに巡り逢ひ此の介抱に逢ふ筈の因縁でがなありつらう忝いと泣く涙。拭ふ片手に手を合はせスエ伏拜むより外ぞなき。カ、主の長は立出でて。扱は横山の姫君照手様であつたよな。私も譯あつて殿の御恩受けし者。今とても忘れは致しませぬ。今宵ひそかにお館へお供せんと。聞くに二人は勇み立ち。先づく旅の用意せんと奥の。一間に

かねて泣くゝ家路に立歸り。フッ暫し休らひ居たりしが。詞ムウ小萩殿今日の仕舞ひは夜に入つたモウお上にお鎮まりサアこちらも寝まいか。地カ、いざと打敷く人目より。苦しきものは夜なぐの。逢はでこがるゝさむしろや。獨り寝る夜の床の内。合枕に塵の積るなら。世界の塵を今こゝに。山程たかる蚊の泣く音。詞小萩も共に手傳うて。蚊帳の釣手も短か夜もしばしのスエ憂さの忘れ草。詞行燈引寄せ煙草盆。いざと小萩が手を取りて。上座に直せどわなぐとスエ更に震ひは止まざりし。詞申しくお姫様。けしからぬお身の震ひやう。お心でも悪いか。イヤ病ひではない。暮に泊りし侍は。二郎。三郎。二人の家來。自らを尋ね探す推量は違ふまいと。聞いて常陸も仰天せしが。我が身にしつかと抱き締めこれお心をしつかりと持たしやんせ。モいつかなぐお國へも遣るこつちやない。ウレヒとは云ふ。ものゝ痛はしや。昨日までは繪に描くか。人の咄を聞くならで知し召されぬ賤の手業。水を汲んだり火を焚いたりの痛はしや。合先の世の御戒業が目出たうて。合大名のお娘御に

入りにけり。

二三 家路の玉鉢

地千代とゆく合子の日の松に幾春を。大極殿の神かけて。契りし仲もお子之介。傾城はつか諸共に。鮎に追はれよろゝと。合薬綿屑の古里を。跡に見なして傳ひ行く。柘や。合鴨居の町はづれ。カ、リ極樂落し伏拜み。見やるこなたのかけ椀に。入りたる物はさながらに。猫入らずかと恐しく。チュツと飛退き。フシ水壺の陰に暫しと身をひそめ。詞お子之介小聲になり。タ、キ我ゆるそなたもちよろゝと。勤めの内の逃げ走り。鹽引茶と嚙るとき。シツと。追はれて。ちやつと逃げ。鳥もち又は菟蕪珠。嫌ひの物の憂き苦勞。それも前世で神佛。合喰ひあらしたる報いかと。詞おれも六匹のむちゆう暮しに暮せしに。今この壺へ身を投げる。そなたは跡に生残り。寺の盛物糧として。跡弔うてたもいものと。山椒の様な目をこすりスエ鼠泣きにぞ泣き居たる。ウレヒはつかも涙目に持つて。ソリヤ何いはんすそもやそも落雁なめた突出しに。二階の天井の隙間から。チュツと見たのが縁の端。

紋日全盛正月の。合鏡ひく夜の缺餅も。お前と囁らぬこともなく。ほんに浮世が儘ならば。猫も舐もない國で。せめて一日世帯して油附きの燈心も引く手諸共暗がり。女夫と云うて暮すなら。たんきり棚の果てまでも水も。汲みましよ枕も喰はよ。晝はよう寝て夜になりや暴れ歩くが楽しみと。口髭にしがみ付き。前足に抱付けば。男も共にむせ返りフシ道理々々と腹撫でさすり。詞此所に長居して人に捕られて飼鼠。尾を切られては仲間はずれ。揚句の果ては二人とも。太股を附焙り疝病の子の薬食になりやせん。命が物種サアおぢやと。倒けつ。合轉びつ暗がり。はしりの下や當て所なき。憂き身の流れ水抜きへ。はふく逃げて濡れ鼠行きがた知らずなりにけり。

二四 契情遠山染

宮古路豊後直傳

地宮が憂身の合うき思ひ口で云はねば氣につかへ。目に流るゝは百分一。胸に涙の滞り。山三様に骨折るも。男の心の悲しみを。思ひ遣り手と成つたるも。合野良ぞんざいで成られうか。戀が嵩じて遠山が。此のざまに成つ

只の時さへあひの山。聞けば哀れで涙がこぼれる。悲しうてならぬ洞眼に。あた聞きともない通りや。相ノ山野邊より。あなたの。友とては合血脈。一つに珠數一連これが。冥途の友となる。詞ア、したるい手の隙がない通りや。といふ聲に。心に苦のない新造禿。はらはらと走り出で。こちら好きぢや相の山聞いて泣き度いフシ所望々々と立ちかゝる。詞エ、意地の悪い子供ぢや。それ程何が泣きたい事。カ、リやつて去なそと巾着の。紐をといて取出す。錢は一錢二世の縁。切れても切れぬ笠の内泣沈みたる顔見れば。色詞戀し床しの四郎次郎互にア、。ハア、とばかり目くれ心はしみく。と抱付き度うもあたりに禿が目もと小ざかしく。堪へるだけと包めどもむせびスエふくろび泣きめたる。詞ア、去なせましたらよいものか。まちつと哀れな心を唄うて聞かせて下さんせ。あつと涙に摩る籐。胡弓の弦も細き聲。相ノ山定めなき世に。捨てられて合身の寂。滅が知らせたく合文は。書けども便りなし。合ひとり寢覺めの友とては夢に。見た夜の面影が是が。ナホス寢覺めの友となる。詞折しも

たとは知らぬか聞かぬか男めが。合どこに居るやら死んだやら。合なしも磔もうつかりと合煙草のんでも煙管より。合咽喉が通らぬ薄煙。人の見ぬ間に思ふ程スエ泣くを所在かあぢきなや。詞内を首尾して葛城は走つて来るよ。り駈上り。宮殿こゝにか。いかい世話であつたけな。忝いぞや土になつても忘れはしませぬ。おれが心を察したも。ほんに物日なかに瘦せたわいな。色こなたは今は何の苦もなうて樂である。遣手の身は羨しい。山さまは奥にかの。ちよつと逢うて來うぞや。後にくと云捨て、フシ行くを見るにも。ウレヒなほ涙。つらいぞ愛いぞといふ中にも。男を傍へ引寄せては憂きを凌ぐも力がある。此の身には苦もあるまいとや。明暮れ附合ふ人目にさへ樂な様に見えるもの。遠國隔てた男氣に。思ひやりのない事は無理とも云はれずさりとては。せめて有所が聞きたいと聲をスエ立てねばないじやくり。カ、リ氣も沈み入る時しもあれ。心細けな胡弓の聲。哀れ催す相の山。フシ我に涙を添へよとや。相ノ山ゆふべ。朝の。鐘の聲。寂滅。爲樂と響けども聞いて。驚く人もなし。合詞 通りや

二階奥座敷。來いよくと手を叩く。あい、あいと禿ども。ウレヒ 立つ間おそしと走り寄りこれ斯うした事も。あらうかと憂き命をも捨てなんだ。よう顔見せて下んせと。縫れば男も抱き締めスエ涙の外は聲もなし。合なう戀しい。ゆかしいのとは大抵戀路の習ひぞや。それをとんと打越して合主親方にも背きし故。奈良伏見まで賣渡され今この京で遣手となり。花の都も我が身には鬼界が島に住む心。戦しもやけに苦しみても手足の苦勞はなりませう。心を痛めるばかりぢやない力業にも才覺にも。叶はぬものは逢ひたいと。思つてフシ 遣る瀬がなかつたとあまえ口説くぞ不便なる。詞 四郎次郎も盡きせぬ涙。オオ道理々々とほしやたび、文でも云ふ通り。そなたの蔭にて大事の繪を描き譽れを取り。契約たがへず身請けをせうと思ふ間に不慮の事ども。命があると云ふばかり。恩を被た名古屋山三。われら故の浪人。行先も。目出度いといふ字は書き様も忘れて。今は扇團扇の繪。蘆屋釜の下繪に露命をつなぎ。ウレヒ 大津で問へば奈良にといふ難波で聞けば伏見とやら。是は采女雅樂之介ふ

たりの弟子が介抱で、丸四年めに顔を見て嬉しい事はどこへやらおれといふ者ないならば。疾うによい仕合せ前垂がきは下けまいと。親子の事まで思はれて。生きた心はせぬぞとて男泣きに泣きければ。ウレヒ ナウさう打明けて下んすがほんくの御眞實。わしはいつそ親の事思ふ所へ往かなんだ。わしに罰が當らずば當る者はあるまいと。口説き立つれば四郎次郎。二人の弟子も共涙。籠の竹も古への紫竹に染むるばかりなり。

二五 思ひ河戀の白浪

本調子唄 おぬいは涙せきあへぬ。合戀は女子の癪の種。合ほんに今まで世の人の。瘡へくと云ふさへも。色ほどのよな苦を病むものと。羨ましさも身の上に。ナホス積る思ひは人知らじ。地 死ぬると覺悟極めても。契りは鶯鶯の片思ひ。劍羽ならず身を投げて。底の水屑と合なりもせば。未來は暗き迷ひの闇。カハリンシせて此の世の合明りにと燈す手燭の光さへ。涙に分かず立出でて。合座敷つたひに前裁の。オクリ池へと。アさして。合死に行く。地 道は西方十萬の。合あの世の旅の門出や合弘誓

ど戸は明かぬ。空には秋の風立つてはぎもあらはにア吹返す。戀の白浪攀ちのほる。足の爪先板かと。ひらりと越してあ、嬉しと。袂。騎して行先に。爰ぞと池の汀垣物こそ見ゆれ怪しやと暫しイみ居たりけり。

二六 梅川道行あすの噂

忠兵衛 翠帳紅閨に。枕並べし閨の内。馴れし衾の夜すがらも。ニより四つ門の跡夢もなし。さるにても我つまの合秋より先にかならずと。仇し情のナホス世を頼み。地 人を頼みの綱切れて。夜半の中ども引きかへて。人目の關にせかれ行く。昨日のまゝの鬢つきや合髪のかめ合ほつれたを。分けて進じよと櫛を取り。手さへ涙に凍えつき。冷えたる足を。太股へ相合ひ炬燵。合腰の合駕の息杖いきて又。續く命が不思議ぞと合二人が涙こほれ口。タ、キあけぬ間はヨオ、暫しさへ。駕の簾を明けてさへ。膝組みかはず駕の内。せばき勤めのありし夜の。逢瀬に似たは。似たれども。カ、リ 炭の埋火いつしかに。あしたの霜と置きかへて。夜半の嵐によばれては。こたふる野邊の禿松。過ぎしその夜が思はれて。いと、涙の種ならぬ。

の船の渡し呼ぶ合聲は六字の彌陀の劫小浪うねうしき並ぶ。合疊の表青海原。見る目いとへばまして猶。明る襖の合音かくす。手水の水を汲み流し。合敷居の上のちよろく。小川。裾もひたく。袖袂。カ、リ 涙にしほる濡れ縁の。暮れて程なき宵闇は。合月も思ひのあるやらん合顔さし入る。山の襟。戀の重荷を載せて行く。駄賃入らずの合駒下駄も。合足音せじと飛石に。立ちどまりては合又越ゆる一足づの假の宿。命かけてのいや未來まで。蓮の臺も手を引いて合女夫々々の約束すれば色も浮名もあるといな。思ふやうなら頼風様に。女郎花様といふ妻もなく。合兄様とも中ようて。せめて一日女夫ぢやと。いはれて鐵漿つけ顔直し。やゝの一人も産んでから。合死んだら思ひはあるまいに。枕交はすか交さぬ内。義理にせまつて兄様を殺す代りに死ぬる身を。斯うした事と知り給は。せめて心を直してと。我が身の知死期せぐりくる。月の出潮のうす明り走れど合心跡へ引く。地 娑婆と冥途を屏中門。外から締めし貫木も我より先に行く人の。わざとは夢にもしらぬひの。押せどしやくれ

何ぐどくと思ふぞや。これぞ一蓮托生と。慰みつ又慰みに比翼煙管のうす煙。朝出の賤が火を貰ふ野守が見る目はづかすと。駕立てさせて暇をやる。値の露の命さへ惜しからぬ身はア惜しからず。名をも惜しまぬ徒歩裸足。ヌエフン 惜しむは名残と忠兵衛は。詞梅川が顔打眺め。ア、忘れぬは我故に。そなたの親に愛目をかけ。斯う連立つて出てからが。添ひ通さうやら死なうやら。色よしない縁に繋がれてと。フシ跡いひさして伏沈む。女心のあどなくもウレヒコレ忠兵衛さん何ぢやいな。何くよくよと思はんす。結んだ縁の始から。きのえ。ねの日も庚申も。いそに思うて今日までは三日と顔見ぬ事はない。ア、見さしやんせく。深山鳥も白鷺も我がつま鳥は知るものを。お腹が立てばよしやよし。誠をいふなりやそら無理よ。勤めといへば一筋と。思へどたんと譯あつて。いやな殿御をさすつて去なせ。好いた殿御を叩いて置いて。嚙んで去なすも勤めぞや。身仕舞ひ部屋に樂しみに。合めいゝの情夫の紋簪を見るにつけ。合一期添はうと二世かけて。變るまいぞと噂して。年のあく日

を。指にて數へ。三年にあたる其の指を。切つて捨てたい氣になるも。お前に添ひ度い心ぞや何の因果でこれ程に。可愛い事ぢやと身を悶え。スエテ膝に打伏しかこち泣き裾にやつるゝ小笹原。霜に枯野のすゝき原。ほろ／＼さらく／＼と鳴つたは我を尋ぬる追手かと。覆ひ重り影隠し。妻戀ひ鳥の羽音に怖ぢる身となるは。如何なる罪の報いぞと。フシ口説き敷きて行く姿。泣くか笑ふかとんだ林の群鴉。せめて一夜の心なく。咎むる聲の高間山。合あの葛城の神ならで晝の通ひ路つゝましく身を忍ぶ道戀の道我からせばき浮世の道。竹。の。内峠袖濡れて。岩屋越とて石道や。野越え山越え里越えて。行くは戀路の習ひなり。

二七 戀中居三枕

口説きの段

フシ 跡におまきは。うつとりと思案途方に暮れすぎて。はや初夜も打ち。四つも鳴る。合鐘のひびきにいと猶。合涙は落ちてくれなるの。スエテ前垂ひたすばかりなり。やゝあつて顔を上げ。詞新兵衛さんと小女郎さん。わしが身にかへお世話せし。惚れた心のありたけを。新兵衛さんに

いて楽しむ東雲に。去なした鳥のはらく／＼と。啼く音はわしを誹るか。と鳥の手前もはづかしく。去になさつた其の跡は。蒲團かづいて幾。曉か泣いて憂さをば凌ぎしと。人目なければ獨言。スエテかこち涙にくれけるが。詞ア、此のまゝ思ひ死なうより。新兵衛さんを今一目。せめて未來の土産ぞと。しを／＼として表口。格子の先は仄暗き。すかし眺めて立寄りて。涙はらはら。フシ桶伏の竹も紫竹に染めぬらん。行く水に數書くよりもはかなきは。思はぬ客を思ふ振りする。動めの中のまた勤め。小女郎はあひの纏れをば。酔うた振りして忍び出で。勝手覚えし表口。探り廻りてそろ／＼と。詞くる足音におまきははつと。オ、小女郎さんか。様子は定めし聞いてゝある。ひよんな事になりましたと。互に涙先立て、スエテ暫し詞もなかりしが。小女郎は涙押しぬぐひ。詞コレおまき殿。マア新兵衛さんにもちやつと逢はして下さんせ。成程合點と。オトシ手を引き桶のそばへ寄る。フシ折もこそあれ奥よりも。詞おまき／＼と呼立つる。エ、しんきや小女郎さん。萬事は限り打つてから。やがて／＼と。フシ言捨て、

言うて退けうか。イヤ／＼小女郎さんと二人の仲。取持つわしが新さんに。心あつては義理立たず。ア、思ふまい／＼。ふつつりと泣くまいぞ。たとへ泣いた思つたとて。わしが儘にはなりやせまい。ア、何の因果でこの様に。まゝにならぬ新兵衛さんがおいとしい。去年の彌生に小女郎さん。連れて初めて見えた時。合眼カ、可愛らしいとしらしいと思ひそめ。初手は浮氣のあだ惚れに。お二人の仲取持つて。お客の手前親方さんの目を忍び。わしが呑込む働きを合。おまききつとぢや。忝いと。禮を受けるが嬉しさに。起番のあくる日も。合眠むさまされど髪梳いて。小女郎さんに櫛巻を合頼みに往くも。文使ひやら。何やかやねん／＼に。附合ふ事すすほのすゝき。亂れて騒ぐかくれんほ。怪我の振りして。抱締めたれば。ほんの事かと。云はしやんしたその。一言を神さんや。合佛様とも有難う。思へば深い小女郎さん。おまき頼むの一言が。義理と意氣地の關の戸や。立つる屏風の床の内。タ、キお休みなされと口の前。行く振りをして。立戻り。お二人さんの睦言を。わたしが事に引受けて。聞

涙拭うて走り行く。地人音せねば嬉しくも。小女郎は伏せたる桶に取付き。しがみ付き。新さん小女郎ぢやコレわしぢや。物云うて下さんせ。ほんに廊の習ひとて。附合ひ多いお前さん。桶伏にさせます。わたしが心の切なさつらさ推量して下さんせ。難波や京の勤めなら。來る客様に口先で仕様模様もあらうのに。鄙の廓の太夫職。幅のない女郎ぢやとお前さんのお腹立ち。さぞや父御のお恨み。それが悲しい／＼と。女心にくよく／＼と。いや増す涙雪風に。フシ亂れこぼるばかりなり。

二八

仲秋 花嵐廓空蟬 江文坡 加述

二より 空蟬の。身にかへてけり櫻木の合なほ人柄は里馴れし。合姿はいと／＼思ひ川。ナホス。渡りかねたる取りなりの地心は物に狂はねど。妻故迷ふ小車の。めぐり逢ひたさなつかしさ懸けし誓ひを誠ぞと。思ふが直ぐに誠に。妻根に通ふそよオトシ風は訪づる松の立姿。合いとせめて。戀しき時はうば玉の。夜の衣を。スエテかへしてぞ寝る。詞ヤア今のは櫻木が聲ぢやが。コレ櫻木々々。殿さん。ア、／＼／＼とては現なや。地我は我にて我ならぬ

文のかしくは筆の止め。うゝは初手の事。けに名のみ聞く戀の山。隔てぬ中も一昔。逢ひ見る事も跡絶えて猶忘れぬ妹脊川。深き心を汲みて知る。主はいづくと白露の。衣もすすき獨り寝や。枕一つを右左。詞仲秋が思ひ草。茂りくしゆかしさも。いつそ儘よと薫らす。文の煙の消えやらす。派手なる。姿一つまへ櫻木が面影の。あだなる月日を。徒らに。待つがつらいと云ふ事は。フシ云はねど知れた二人が仲。ナゲフシよしや暫しも。便りをせぬば。どうで仇なる男氣の。忘れやすさの浮世こそ。合昨日は今日の飛鳥川。詞何といふ。イヤ何の事ぢや。今の唱歌は聞きどころがある。サアも一度聞かうサア何とフシなんと、問ひかくる。いつしか馴れし里駒の。乗らす乗らさぬ傾城駒め。去ねくく去んでくれ。八聲の鳥は嬉しくも。江戸よその後朝それからは。こちらの夜中や明け七つ。寅の時とは神代より。今に絶えせぬ間夫狂ひいしかれとの定めかや。ウレヒ櫻木涙しやくり上げ。ソリヤ何いはんす仲秋さん。一體お前と馴初めは。並大抵とはまだな事。起請誓紙は合胸に書き。ほんに結

ぶの神さんも合呆れさんしよと。思ふ程深い仲。その戀仲を。引分けて合彌生の花の嵐山。父さんの筆取つて。苦界十年島原へ。流し者ぢやと合おしやんした。合聞いた私はその悲しさ。思ひ出すも癩の種。今更いふは愚痴なれど合過ぎし月見の奥座敷。十種香きいてまはす時。合香爐の灰に香箸で。惚れたと。書いて見せれば合嘘ぢやないかやほんにかと合引寄せながら。手。を。入れて。わたしが爰を憎さうに合繼子抓到に合ふつりと。抓らしやんした其痕が合痛む間は嬉しうて。アレ又ひらな事ばかり。ソレ其深い疑ひに。昨日は合わたしが指を合切るも合ほんに添ひたい心ぞや。わたしやお前のお姿が。夢うつゝにもちらくくと。忘れフシ。ぬはいなと取継り恨みかこつぞ道理なる。共に泣く音や群鳥の。梢葉末の雫の雨合匂ふ草木の影もなく。手にも捕られずちらちらと。花前の蝶の白粉も。そよとばかりの花曇り。振切る袂。夢幻見失ひてぞ立ちにけり。

二九 冬籠閑空蟬

牛太夫節 内と外とに。合引合ひの。二上り 徳兵衛は氣も濟

まぬ。心の駒のまろ手綱ふさが思ひの通ふかや。夢とはなしに現なや。顔を並べて見る様で。抱き付けば小夜蒲團。涙に濡れて合ひやくくと。ナホス懸ほどけて身に觸る。地その夜の心地しみくくと身に引きまとひ寝て見ても。獨りころりはエ、埒がない。合夕、キいつそ明けてものけよかし。ア、くア、。合大幣のこの蒲團。小六も寝つろさよも寝つらん。ふさも寝よう。引く手あまたにどこの誰めと寝くさつた。ぶち度い踏みたい叩きたい踏むな合蒲團に科もない。今は踏んでも叩いても。ふさに逢はれぬ逢はせぬかと。炬燵にとんと腰も抜け。ヌエわけも涙に我が身ながら。フシ男の様にもなかりけり戀の寝ばなの合屋根つゞきいつか思ひは山口屋の。物干傳ひ忍びくる。餘所の戀かと羨ましく。地見れば雨戸の戸袋をそつと踏まへる足元もフシ震ひくくの目もくれて詞ヤア徳兵衛さんか。是はどうぞとばかりにて。炬燵を中に手を取りて泣くより外の事ぞなき。涙の中にも男の顔。じろじろと見て。ウレヒア、いとほや氣を揉まんす故にやら。顔にたとと瘦せが來た其の苦は誰がさするぞい。皆

わし故とそれはく。忘るゝ事もあるにこそさりながら。もう苦にして下んすな。詞斯う云へばどうやら拗ねていふに似たれども。色微塵もさうした心もなし。わしが京の父様。よしない人の請に立ち。明日切りに金立てねば。わしをやるとの判ぢやけな。先へ往ては義理立たず。いつそ死なんと。ウレヒ 剃刀を手には取つたれども。内儀さんに見付けられ。え死にもせず居る内に合こなさんの聲はする向い側から呼びにくる。嬉しや先で何事も談合せんと思ひしが。一目逢へば本望。今更たためいふ事なし。貞女を立つる。おたつ様のさけしみも恥かしい仲ようして下さんせ。互に生れ代つたら。本妻定めぬその先に。早う女夫になりませう。斯うした縁とは露知らず。無理な當所に指を折り。合祈らぬ神もなかりしに。合かく儘ならぬ憂き戀は熊野の神もお留守かえ。貴船や三輪の明神も。神とも覚えぬ神ならばなぜに添はせて下されぬ。恨んでも悔んでも。神の力も叶はぬかと。夫にひしとしがみ付き。聲を立てずのしほり泣き炭火も。消えて凍るらん。

三〇 沖中川戀梯

本間子唄 沖中川はたえぬとも。あだに語らふ言の葉の。ナ
 ホス 一方ならぬ二人づれ。故郷を跡に浮れ行く。遠山
 風磯千鳥 今日のうき身に物凄く。合心はりま路立出で
 て。難波を當てによしあしのオクリ恨み妬みに春秋を思
 ひ重ねて。合お夏は今を旅はじめ。霜踏みしめる藁草履
 引裂き紙で後ぐり。笑ひの種わらんづや。憂きが中に
 も清十郎しよんほりとした旅姿東からけの甲斐性なき。
 そんな形でも五里十里行かるゝものかと。あどなき。案
 じを。互に力付合うて。忍ぶ時には邪魔になる。振袖か
 くす人目の關路。見付けられじとこなたなる木陰に。オト
 シ佇み居たりける。説きしめす。佛の誓ひ跡たえず。
 タ、キ寒き夜道に修行者の法の案内世につれて。はでな
 念佛の聲々に稱名しッしてぞ通りける。今の我が身にし
 みふゝと。無常をしめす鐘の音に。色詞清十郎涙ぐみ。
 夏が手を取り顔打眺め。歩み習はぬ旅の空。よう附いて
 来て下さりました同じ戀とは云ひながら。御主の娘を連
 れてのく是より上の罪もなし。朋輩中の譏りを受け。親

御様のお恨を。思へば胸が苦しいとスエ涙にくれて休ら
 へば。お夏はそばへ寄添ひて。お主とは何事ぞ。お前は
 假の手代分。勿體ながら人目あれば。清十郎どうしや斯
 うしやと。心で拜んで云うて居た。まだ其の様に言葉の
 隔て。父さんや母さんを思へばわしから死なねばならぬ
 そこを振捨て斯うした憂身も。苦にならぬのはどうした
 事ぞ。お医者さんでも神様でも。惚れた病ひは。癒りや
 せぬ。いつもの様に睦まじう。詞をかけて下さんせとッ
 シ口説き歎けば心とけ。互に手に手を取交はし。只何事
 も思ひの餘り。いざ急がんと道ばかりも往來の咎めこりず
 まの。浦なつかしき冬けしき名所々々も心なく。せめ
 て一夜の添伏しに。思ひ。明石も程過ぎて。或は隠れ或
 は走り時雨しぐるゝ袖の海。山又山の果までも。離れじ
 ものに行暮れて兵庫の。町にぞ著きにける。

三一 道行連理の諸羽がひ

話あはれ古へを。思ひ出づればなつかしや。行平の中納
 言三年はナホス。須磨の浦わかみ。地それは昔の言の葉や。
 昨日けふとも白露の。岸の額の根なし草。跡に思ひのか

けろふや。浮世は何と定めなき徒歩も習はぬなかゝに。
 合君と我とは諸羽がひ。變るまいごと言交はし。憂身を
 よしや義員が跡を慕うて。合徒歩はだし。馴れし雲井に
 引きかへて。うき琴鶴は浮き沈み。今は流れの身の上に。
 跡より戀のせめくれればナホス。詮方なきけなき魂のオクリ
 此の世を去りし合戀妻が。その傍が合附添ひて來ると
 も死出の道急ぐ。合草葉の露にしつほりと濡れし。オト
 シ夫の袖ひかへ。ウレヒ。琴鶴涙しやくり上げ。そりや何
 宣ふ胸慾な。今更いふには及ばねど。自らとの縁組は。結
 ぶの神はまだな事。月日のたねのお仲人。有難過ぎた嫁
 入りぢや。嬉しや早うや。儲け。父上様のお笑ひ顔見せ
 ませんと思ひしに。島原とやらいふ里の。戀妻殿に見か
 へられ。仇な枕に夜を明かす。それも拙ない身を悔み諦
 めやうがありませう。そのお姿は何事ぞ皆傾城のなす業
 と。知ろし召さぬか但し又知つてやつぱり可愛いか。慕
 ふ私がうるさうて。このまゝ館へ歸れとは。あんまりむ
 ごい。スエお心とかこち口説くぞ道理なり。地ウレヒ。義員も
 共涙。その言譯はこれ斯うと。カ、リ。既に危き手に縋り。

とめ争ふ花すゝき。穂にあらはれて忙然と。戀妻が立
 姿。二人はふつと見るよりも。ハツアはつと驚くばかり
 なり。詞戀妻しづゝ立寄りて。エ、譯もない何故ぞ。
 お前ばかりが世を去つて。ウレヒ。琴鶴様がどうならう。
 わたしは望む二世の縁。願ひのまゝに手を取りて。三途
 の川や死出の山。合閻魔の廳の一筆に女夫の因果定むれ
 ば。斯ういふ事とは知らぬ身の。逢うて別れてたまさか
 に。合お出での時はとやかうと。案じ過して宵啼きの。
 鳥の聲さへ氣にかゝり。暮れは待侘び夜中には鐘が憎う
 て合いつそ又。明けば嬉しや翌日逢はうと。樂しむ中の
 獨り言。合千草結びや覺算。大雜書の相性も。當てにな
 らぬか偽りか。タ、キ主は劍の金性か。わしが流れの水
 性も泡と消え行くはかなさよ。地花は根に散らす無常の
 仇あらし。惜しや盛りのお身の上。琴鶴様末長う千代や
 八千代と折敷へ。數へつくした其の時は。未來の契り待
 つぞえと。スエいとしみくゝと諫むれば。カ、リ。琴鶴も今
 更に。よしない恨み恥かしや。此の世の縁は薄くとも。
 未來は殿御を譲るぞえ。地ア、勿體ないそれとてもお二

人様の友白髪。契りは千年百年の。その先の世を待つや
弘誓のかち枕。問ふも。語るも。妄執の。雲に隔たり戀
妻がオトシ形は。消えて色失せれば。二人は跡にうつ
とりと。是や煩惱迷ひの絆。かはい〜と啼く鳥。身の
言譚もほの〜と。明けがた鳥友がらす。啼く音につれ
てそこはかと馴れし。都に辿り行く。

三二 不心底闇の鮑

二上り唄 藻に棲まぬ。鮑の貝の人がらと。そめ氣ながら
も逢ふ度に。かはす詞のナホス口がため。地遁れがたな
や七兵衛は。地是非もなけ首のこまりくの。黄泉のくだら
ぬかはしたる。長地 お前とそもや引別れ女房殺して長ら
へあらば。そりや犬猫も同じ事。紋日々々もついしかに。
地 厄介かけず身あがりし。覺えがあるかいやしくも。爪の
先程恩にきせ云ふ氣なけれどよくよと。女心の打ちあ
かす スエフシあはれ切なく。可愛ゆけれ。詞男うなづき。
きよろ〜と死脈とり〜數珠の玉。數へ〜てスエ
逃げ支度。タ、キ若しもそなたが又で死なば。おりや道
心になりひさご。ぬめり〜と朝顔の。頭かき根のう

き姿すがり涙は。くれ〜と。フシ誓ひし事も覚えてか。
ウレヒ 二世の指切りかまさりの。をの様はなせ忘れてと
縋り抱きつき恨み泣き。さすが憎うも風吹く。外山の音
も更けて行く。夜半の流星ちら〜と唄カ、リちらめく
道は。細水の。唄川の瀬も鳴る夜中もなれば。ナホス最早
明け待つ朝あらし。流れも凄くさら〜と唄カ、リちらめく
曇る雨の糸筋もつる。裾。義理と。戀路に結ほれて。
夜は長橋の玉柳ゆらめく茂みに三重著きにける。地かけ
渡す橋も涙にかきくれて。袖のつら〜の重たくも。スエ
ル泣く〜かしこに坐しければ。詞 小富も共に座をしめ
て。申し七兵衛さん此の中文でもこま〜とまた道すが
らも云ふ如く。田舎の客に請けられてい〜としいこなんに
別る。つらさ。常々互に云交はす添はれぬ時は心中と。
思ひ詰めてカ、リ今宵闇。ウレヒ爰がふたりが死に所。一
所に死ぬるは本望と嬉しい半分同じくは。生きて添ひ
たい半分の名残をしの此の一夜と。夫の膝に打伏して。
聲を スエフシばかりに泣きければ。詞男は有様御迷惑。日
頃可愛い、二世三世と云ひ過して引かれぬ義理。フシ不

性無性に涙ぐみ。詞協差ひらりと抜放し。コレ見や小富。

成程見事に相果つる所存で。こゝ迄は來たは來たが。見
やれありやう一腰は疾うに曲けて花代となり。見かけば
かりかいらぎの竹光ちや。モ、れ〜れそでは臙豆腐も切
れはせぬ。身を投げうにも下へは漸う四五尺足らずの假
橋。此の上からは思ふ様には死なれまい。こりやモ肝心
の道具が無うて氣の毒と。スカッ頭を。搔いて逃げ支度。

詞 女子領き涙をとめ。サアイナア。わしも自然お前

の脇差に錆でもあつては仕損じも出來うかと。親方の
匕首をそつと取つて來ましたと。懷の大袱紗卷いたをほ
どけば七兵衛は。是幸ひのむつと顔。何ぢや。あの盗み
物で心中せいか。イヤほんに慮外ながら畏れながら憚り
ながら推參ながら緩急ながら。生れてから此のかたそち
が所に残が。四五十匁あらうか知らず。びたひらなかと
んびせぬ此の男。それに何ぢや。最期の際に働いた物で
死ね。只さへあた外聞わるいに。なき名の上に拘摸の上
塗りにする饅頭の匕首。エ、。エそんな水臭い氣だんとは
知らず。さつぱりとしてよい女性ぢやと。おのが其か

はらけとゑくほにはまつたと。橋どう〜と踏鳴らし

やつちや踏出す腹立ち涙。オトシどうぞ止めたい底心。
ウレヒわつと小富はむせび入り今が此の世の名残となる。
機嫌ようして下んせと匕首投げ又懷。そこは氣遣ひさし
やんすな。詞 匕首がもし切れずばとは見さんせ。剃刀も
二挺までよう磨いで持ちました。是で見事に死にませう。
サアござんせと死を急ぎスエル進む心ぞ。哀れなれ。詞七
兵衛も今はがつくり力を落し。テモ扱もこれかれかれこ
れと貯へのよい女子ぢや。何のその百年目。清水の舞臺
から落ちたと思つて死なうまで。やさりながら肝心の數
珠を内に置いて來た。ちよつと去んで取つて來う。アコ
レ〜何いはんすそれ數珠はお前の耳にかけてある
わいな。アどうやらお前は死にとむなさうなぞえ。ハア
テやくたいもない事はかり。そもじと二人死ぬるに何の
死にとむない事があらう。モ、。、死に度うて〜身
内がぞく〜するわいの。そんなら爰
で早う〜と座を組めば。ア、これ〜どうやらそこは
蛇の出さうな所ぢやまそつとこちらへおぢやいの。そん

なら爰かえ。ア、そこには水が溜つてある。そんなら爰かえ。エ、そこはだくほくがあるぞや。そんなら爰かえ。ア、そこには青蜥蜴が喰出してゐるわいの。あゝどうぢやいな七兵衛さん。待ちやや思へば今日は黒日ぢやわいの。何いはんす。死ぬるに日を見る事かいな。エ、文盲なわろではある。黒日に死ぬれば地獄へ往ても暗うて一足も歩かれぬ。其の上提灯は持つて来ず。地獄へ往ても蠟燭屋はあるまいし。角太夫暗きより暗きに迷ふあさましと。オトシ 何をいふやら埒もなく泣くは死にとむなみだなる。詞小富はせいてア、どうぢやいな明くるに程もなさうなにはやゝと剃刀渡せば。是非なくも受取つて。サアそんなら覺悟はよいかやと。口には云へど氣味悪く。そろりゝと逃行くを。是なうゝと追つかくればヤレ人殺し出合へゝと聲をばかりに喚き立て。カ、あなたへうろゝこなたへ逃げ。情も今はいつしかに仇名を残す不心中。語り傳へて世の人の。笑ひ草とぞなりにけり。

三三 山崎與次兵衛在所駕籠

敷牢。いとしゃ寢てか起きてかと。お菊が見舞ふ駒下駄に飛石つたふ足音の。詞サア是ぢやと飛立つばかり。與州さんぢやないかいな。あるにもあらねずあづまが見舞に來たわいなと。聞くよりお菊はつとして扱も太い傾城めどうする事ぞ試んと。内より壁をなつかしけにほとほと叩けば。ム、聞えたか定めてどこも閉つて入る事もなるまいと。私が心に思ふ事こまゝと此の文にあり。とつくと読んで自筆の返事見ますれば今生の本望と塀越しに投込んだり。ア、誰が拾はうも知らないで女房のある男の座敷遠慮もないと開けば見知つたり。朧月にも見違へぬあづまが筆。エ仔細らしい一つ書。この剃刀は私が磨く心の刃。若しもの折は必ず必ずさもしい者の手にかゝらず清い御最期。時は違ふと日は同じ日最期所は變るとも來世は一つ蓮葉に永き契りを目出度くかし。エ、此の剃刀の入れざまはどうぞお命助けたさ。女房舅が泣きしみ付き父御様とも争ふ程の大事のお命。澤山さうに死ねと書いた此の文に目出度くかしくは何ぢやの。男どもに云付け叩き出してくれうか。イヤゝそれ

「暮れ渡り木圍子。雁の數讀む朧月。泊り鳥の寄るべなき。地藤屋あづまがわくせきの。思ひを乗せて在所駕籠。淀の川水流れの身。行くも山崎歸るも山崎。地霞の内の畔づたひ。そりや打渡す丸木橋。見馴れぬ目には恐ろしく。駕籠をとめて下り立ちて。處體つくるも町風に。わけなき夜半の松の風。裾吹きかへし呼びかはし。戀の山崎そんじよそこと人の教へし家並も。所稀れなる家造りの。裏門塀のかゝり迄。オトシ扱は爰ぞと知られける。詞駕籠の衆こゝか與次兵衛様のお屋敷塀越しに見ゆるがお部屋さうな。いとしゃあれに押込められてこそ。わしやあそこへ行く程にちつと隙が入らうとも必ず待つてや。煙草がなくなれば進ぜうか。つい往て来うと裾軽くスエラシ寄る程堀の高ければ。伸上りゝても燈火の影も通さず隙間なき。用心きびしき内の體。嵐と共に路次の戸を。叩いて吾が胸躍る。耳を壁に押しあてて。聞けどひつそと音もせず。いつ迄斯うして居たとでも誰か知らせの便りもなし。カ、あづまが來たと呼ばうかと才む足は釘氷り身も冷え渡り牙えかへる。カ、ワレヒ炬燵さへなき座

程夫の名が立つ直きに逢うて云うて退けうと路次の戸開きスエラ出づれば。詞ナウ與州様かなつかしやと縋り寄る手をしつかと取り。音に聞いたあづま殿か今の文も見ました。わしや與次兵衛殿の女房菊といふ者。はるゝの所ようござつたの定めて主に逢ひたから。知らしやる通りの難儀でアレあの座敷に押込められてはござれども。おれが逢はせぬア此の菊が逢はせぬ。あづま殿には疾うに逢うて禮いふ筈。色こなた故に大事の家業はよそになり。内は野となれ山となれ夜を日についての里通ひ。詞親御の不機嫌世上の悪口。此の度の難儀それ見たかといよくゝ人の嘲り。我とても女の身腹が立たいであるものか。夫の耻辱さがない女房と云はれまいと嗜んでゐれば。お菊は奇特な愷氣せぬ賢女々と賢女ごかしの拜み倒しに逢うて。あづま殿に睫毛讀まれて居るわいの。こなたは女郎かと思へば鬼か天魔か。この剃刀で人の男に死ねとは。死んでよくばこなた一人死んだがよい。ウレヒ大事の男の肌はあらされ。心の底は見探され。世間に悪う謠はせて。生きる死ぬるの難儀も誰故ぢや。傾城殿そな

た故。アノ生傾城の耻知らずと。積る恨みの高聲に。與次兵衛も障子そつと明け。あちらもこちらも道理づめ。道理のないは我ばかり。二人の心思ひやり。オトシ顔は焚火の冷汗に消えも失せたきばかりなり。調いか程お恨みお叱りもお前に逢うて此のあづまが申上けう詞はない。引く手あまたの身の上さへ悋氣妬みは女の常。お心堅い町育ち誠なき傾城めが騙しての哆しての憎やくは。お道理ながら。與次兵衛様に逢ひましたは女房に成らうとも妾めかけに成らうとも。申し交はした事もなくウレヒ勤めばかりも馴染みだけ。夜を日に増すおいとしさ。女子のなむ風俗よい殿御持たしやんした。奥様お世話はお前おひとり。此の度の騒動も人違ひを頼もしくづくで。お身の難儀もわしから起る相手もやがて死にそなけな。悲しいは我が身一つ知らせて覺悟もフシさせましたく。廓を忍んで此の有様。見付けらるれば見せしめに逢ふも合點相手が死んだら自害させまし。わしもお供と剃刀も用意しました。おぬしのお名も流さず私も情の御恩に。命を捨つる志。お前の御縁は妨げぬたつたま一度お顔を

見せて下さんせ。其の目をすぐに塞ぎます。ナウお慈悲ぞやと懐中の。剃刀咽に押しあて、娑婆の名残りと涙さへオトシ思ひ切つたる哀れさに。ウレヒお菊はやうく胸開け。詞袖引きとめてコレあづま殿。義理にも命捨てうとは偽りにはならぬ事。心底がいとしい主も定めし逢ひたからう。沙汰なしにそつと逢はせましょ。ア有難い了簡深いお菊様。大事の殿御を澤山に抱いて寝ました堪へてや。ハテ取返されはせまいしそれだけこなたの仕合せと。カ、リ 心解けたる路次の戸の。懸金そつと薄氷を踏む足。そいろそろくと。内の様子を窺ひて忍び。忍びて入りにけり。

三四 山崎與次兵衛 壽の門松道行

二上り あづま請出せ山崎與次兵衛。請出せく山崎與次兵衛。いつか思ひのナ下紐解けて。昔思へば憂やつらや忍ぶ昔も憂やつらや。詞情なや誰あらう山崎與次兵衛様とは。人に後れぬ亂れ髪のおづまが顔も見忘れて。現なやと制すれば。木夫 ム、そなたは藤屋のおづまか。オオくくくく唄嬉しやな。あれあれを見や蟲さへも。

番ひ離れぬ揚羽の蝶。我々とても二人づれ。粹な同士のなかく。合春にも育つ花さそふ。菜種は蝶のナホス花知らず。地蝶は菜種の味知らず。地知らず知られぬ中なれば浮かれまいものさりとては。地狂ふまいもの味氣なや。地親の御恩を振捨て。そなたの世話になりふりもオクリ昔には似ぬ男山。今では人もあき篠や。地外山の松にこつと問はん。我身の末の放れ駒おのれと狂ふ秋の葉の。亂れ心か。スエテア、狂ふまい。待つ身になるな親と子の。便りを凌ぐ。山崎の。地妻もさこそは亂れ髪。いうた詞が力ぞや。又四郎節わしが馴染は三重の帯。長い夜すがら引締めて。預るものは半分の地主は忘れて居さんすか。ツレ地 過ぎし月見は井筒屋で底意限なき夜と共に。飲み明かしたる面白さ。今の憂身に比ぶればいととお前がいとしいと。スエ襟に包みし忍び泣き。木夫調おれもそなたを夢にだに。歌念佛忘れぬからに親妻の。諫めはどつとなぎさ山。松の位に登りつめ。冠は著ねど大盡と。ワキ花車がとろく口舌の門。遣手が叩く禿が眠り二人皆夢の夜の境涯と。破ればぐわちもなかりけり。カ、リか

くは知れども柳の糸のおどろを亂す山嵐。ウレヒ 身にしみくくと諫めの詞。忘れまいぞや忘れじと。互に手に手を取交はし。スエ 涙曇るや露の玉。カ、リ 夕陽雲に程もなく。暮るくくるくくくと。月は行けども果てしなき思ひは。目前親の罰當つて碎くる男氣の。おのが姿をわが送る。走れば走るあれ。あれくあれく。留まれば留まる。亂れ心も二思ひ命つれなき流れの身流れ渡りの世の中に。暫しとゞまる賤家の軒を。尋ねて惱みけり。

三五 雙紋刀銘月 七道行

二上り祭文 幾夜々々の。憂き勤め。七枚起請誓文に。日の本の神様を欺した罪か欺された。人の恨みかナホス妬み草。地つひに我が身も廣き世を。藻に棲む虫の我からと。狭き命の只二つ隠しかねたる山かづら。長地怖さ寒さの朝ほらけ見付けられじと軒の端。鼻りある身の雲の足。道抄らぬ女連れ。名を鴨川に流したる水の流れと身の流れ。故郷遠く京橋も。跡になり行く水の泡乗りおくれたる淀堤。ワキテ淀の川水行末はシテいかなる罪にワキテ大

阪のシテ道がどこやらワキ「何里やらシテ身は初雁よ二
人「初霜に寝亂れ姿しのばじとつい引つしごく抱へ帯。
しやんと結んでヌエシ引締めて二人大阪大黒マヒニ上り歩
むとすれどゆき馴れぬ是も何故男山シテ「つくりし罪は
山崎の麓はあれよ哀れけにワキ「年も若木の色盛り今日
は姿を町風に二人「寝すれど隠れなき帯の牧方近く
なるワキ「松原過ぎて川風に見ればあれ「乗合のシテ
「船に女夫が嘯きて思ひなき身の高笑ひ二人「餘所の妻
ごと羨まし「ナホス地「こなたを見やと指さして。雁の
契りの遠つ空ウレヒ。あの鳥さへも女夫々々はあるもの
を。せめて一夜は嘘なしに。ほんの女夫といつ世に。
云はれつ云はん情なやと。抱き締めたる削袖も涙にヌエ
フシひたすばかりなり。シテ詞「半七涙諸共にコレお花。
我は大阪へ下りても明日をも知らぬ憂き命。そなたは是
より駕籠に乗り京へ再び立歸り。親方を頼み兎も角も身
の納りを思つてたも。いとしいそなたを我故に難儀をか
けるが悲しいとヌエシ打萎れつ「云ひければワキ地「お花
は顔を振上げて。うらめしの御事や。ウレヒ地「何とてお前

に引別れ片時生きて居られうか。扱はお前はあすか川
さもしき人の心やと。恨みながらに立上り是迄なりと川
岸へ行かんとするをシテ「引きとめア、扱も短氣な心
やな。斯う云ふもいとしさの。餘りての事さりとては。
地ウレヒそなたより先づ先へと。走り出でんとする所ワキ
「裾に纏る、薦かづらシテ「よれつワキ「纏れつ二人「しが
み付き。ふたり涙の露雫。素顔にこぼれはらく「と落ち
て行く身ぞ哀れなるシテ地「半七暫し涙を押へ。ウレヒ地左
程に思ひ詰めし上は何しに見捨てん様はなしワキ「命あ
りたけシテ「身のありたけ二人三勝フシ「高は死ぬると死出
の山シテ「劍の山もワキ「三途の川もシテ「今行く様にワキ
「手に手を取りて二人「越さう登らうなう嬉しやと笑ふ
も涙ながらの里。鬢の。おくれに夕嵐さらく「とさつ
と吹き来れば。佐太の天神かうくと。守口過ぎて難波
江の。よしあしなにと身の上に。異見を釋迦に京橋のこ
なたの。森にぞ著きにける。

二六 半兵衛紅の毛氈

地「夢現靴を出でて二人づれ。肩にかけたる毛氈を引敷物

よとしやくり上げ涙ぞ落ちて酸漿の玉をオクリ「貫く血
の涙地「名残も夏の薄衣。長地「鶯の巢に育てられ子にな
らぬ杜鵑。地「まこと冥途の鳥ならば地獄の有様。長地「語れ

とも利劍即是の御誓ひ。こゝろ安々極樂へ至り至らんこ
なたへと。互にいさめ勸む身の勸進所にぞ着きにけり。

三七 八百屋お七道行

本調子唄 待たるゝと待つ身になるな蟲の聲。我程つらい
者はなし跡に残りてナホス行水の。地「戀に故障は差合ひ
と。知らで逢ふ夜の數積り。隔たる仲の悲しさは地「戀路
の闇の暗がり到我が振袖の鴉鹿子。地「よしなき事を仕出し
て。親の歎きは。いかばかり這ひ纏はる、薦かづら。繩
目々々はくれなるの涙ぞ落ちて掴み染。小オクリ「こがれ
あこがれ引かれ行く。地「群衆の貴賤こ「かしこ見附々々
に見る人も長地「袖をしほるや柳原野の土筆。戀に隔て
はなきものを。笑は「わらび是非もなし滑薄なる心から
人の口の端つるたでに。地「かゝる憂身は夢なれや。竹の
子故に迷ふ親。みやうがも知らず恩知らず如何に若めと
云へばとて。氣儘に心持ちなして。心の底の悪性は神も
佛もしらまゆみ。三つ葉四つ葉の頃よりも。ウレヒ地「秋
の木の実を待つ様に。嫁が萩をも見たいとは暎もあらは
に彌陀の劫。亂れし髪も。亂れ心もいとねど。我は妻

戀ふ野邊の雉子思ひをくらぶ懐の内より洩るゝ振袖に。溜る涙ぞ哀れなり。ま一度逢はせて下されと幾らの願をかけたやら浅草の観音へ。徒歩や裸足の代参り水菜を浴びてかんでんに。つらゝの劔身を通す。是ぞ劔の山たてや今乗る馬は火の車。口取る馬士は苛責の鞭を追つ立て。追つ立て。廻り廻りて暑き日に。焼きつけらるゝ身の果ては鈴の。森にぞ著きにける。

三八 曾我駒の涙 付けたり新形見送り

播磨節 一無慚なるかな二人の者主なき駒の口を取り。行かんとすれど五月闇。ナホス地涙にくれて道見えす。思ひするがの富士の峯の煙は空に横折れて。隔ての雲となりにけり。裾野の草は露深くまだ秋ならぬ道の邊に螢かすかに飛びつれて。身より思ひの餘りてや。蟲さへ胸をこがすらん。いとゞ涙をせき止めて何と蛙の。オトスツキユリ啼き叫ぶ。地井出の館を目離らん。ハル地駒も心のあればけに。ハル地北風にいばえ行く。けに心なき畜類もツナギフシ馴るれば慕ふ習ひあり。ましてやいはん我々はヒロヒ肩。身に影の。添ふごとく。明くれば鬼王暮るれば又。

オトス團三郎と召されしに地今宵離れて明日よりは、色地祐成とも時致とも誰をか指して申すべき。同じ浮世に生るゝとも。曾我の祐成時致の。カハリセツユリその殿原にてなかりせば斯程に物をばア、思ふまい。地我等ばかりと思へども。昔を慕ひ聞く時は。長地 悉達太子は十九にて王宮を出で給ひ。檀特山のほうれい阿羅々仙人を師と頼み。地御出家なさせ給ひし時。玉の冠に石の帯御衣もろ共に脱捨て金札と書添へ。健眠駒もろ共に。王宮に返し給ひし時。車匿も君の別れを悲しみ。駒も生ある物にこそ。黄なる涙を流せしは。オトシ人間物を知らぬなり。地それは佛濟土にてつひには巡り逢ひ給ふ。地かの祐成や時致に今宵離れて明日よりは。また逢ふべき身ならねば今より後の憂さつらさ。何とやなん悲しやと泣く。泣くハツミンシ曾我へぞ歸らるゝ。

三九 大經師昔曆 中の巻

地結ほれて。なま中つらき亂草の。おさん茂兵衛は夢にだに。長地戀せぬ中の戀となり運れて走りし其の日しも。茂兵衛が肌の紙入に。たつた三步のかねてより。思ひも

あへぬ旅の道。おさんの肌着代なして。白無垢一重絹紡に。裾模様ある蘆に驚。足に任せて奈良塚大津伏見を。うかくと。地夫婦にあらぬ夫婦の様。神佛にも人間にも疎まれ果てし身の上やと。互の心恥かしく。顔打上げて顔と顔。見合す顔を。赧めては。ヌエテ 涙の外に。詞なし。詞なう茂兵衛殿。とてもわし等は今日あつて明日ない身。命を命と思はねどもいとしや玉はどうなりやつたと案ずるは是ばかり。たゞ床しいは父様母様。色何ほ思ひ諦めても。逢ひ度うござるとむせ返り。ヌエテ歩み兼ねて。泣きければ。詞オ、逢ひ度いはお道理。我ともお目かけられしお主筋。お名残り惜しさは同然。爰がかの玉が在所岡崎。あれあの行燈の出た所が則ち伯父の宿。是にたよつてお里の便宜。玉が噂も聞かうと存じ参りしが。内の首尾を聞合はせず。案内するも鹿相なりと。軒に。立寄り。窺へば。詞内には玉が泣く聲の譯も聞えず口説き言。伯父梅龍が聲として。ヤイ玉。此の本はこれ伯父が毎夜講釋する太平記二十一卷目。尊氏將軍の執權。高名の師直といふ大名鹽冶判官といふ是も歴々の武士

の妻に心を懸け。末代まで悪名を残し鹽冶判官もそれ故命を失うたは。もと侍従といふ女が媒介から起つた事。おさん殿と茂兵衛と眞實の間男でないに極まつても。二人づれで駈落ち召さつたは定よ。この二人にいつかたで逢うたりとも。萬一こゝへ尋ねてござつたとも。必ずく物いふな見ぬ顔せい。斯ういへば水臭い様なれどさうでない。間男といふ浮名の立つた二人の中へ。媒介と云はるゝ其方と三人寄つた素振なりとも人に見られては。そりや一つ穴のいたづら狐一所に寄つたは扱こそ玉が媒介で。おさん茂兵衛が不義は極まつたと。言立てられていよく科が重なる。爰をよう合點せい。つれなう當るはお爲だぞ。この事故にそちも繩目の耻にあひ此の如く預けられた。然れば同罪は遁れがたい。首を斬られ手足をものがれ試し物になるとも。主と頼んだ人故に。命惜むな梅龍が姪だぞ。最期を清う死んでくれと。カ、リ聞ゆれば玉が聲。地それは氣遣ひさしやんすな。疾うから覺悟極めてる。伯父ひとり姪ひとりわしが死んだら伯父様のさぞ便りなう思し召そ。茂兵衛殿はどうしてぞ。

いとしいはおさん様。どこにどうして御座るやら。常が
 はかない正直な心を知つたわしなれば。何かに思ひやり
 ますと。スエテ泣入れば。梅籠も。詞オ、そちがいとしい
 はおさん殿。身は下立賣の親御達の。歎きが思ひやらる
 いと。内に伯父姪くどき泣き。外に二人が立聞いて。
 涙をもらす戸の隙間。カ、リ聲なき冬の。オクリきりぎり
 す壁に「縋りて。泣き居たる。血筋が結ぶ親子の契りお
 さんの親道順夫婦。娘の浮名隠れなく。命がつかき老後
 の耻。人に面は會はされず。月出ぬ先の心の闇。黒谷の
 菩提所へ。徒歩の夜道の女夫つれ。小嬢がさけし風呂敷
 や。色包む涙にとほくくと。詞行き過ぐる軒の下二人し
 くく泣く聲の。耳にとまれば立ちどまり。お婆あれ合
 點のいかぬ。何者やらと疎き老眼すかして見る。行燈の
 陰に茂兵衛見付け。あれおさん様。下立賣の親父様。な
 う父様かいのと走り寄り。取付く所をついと退き。ヤイ
 畜生に父様と云はるゝ覚えはないいやと。わつと泣く
 泣く振上げて。打たんともがく杖の下。母はあこがれ灯
 を吹消し。娘を袖に押圍ひ。なう親父殿おさんめは逃げ

ました。もう堪へて下されと。影を隠すは母の慈悲。打つ
 杖は父の慈悲。心かはると子や思ふ。哀れは同じ涙の闇。
 スエテ迷ひの上の。迷ひなり。地道順不覺の涙にくれ。詞
 ハア道順が未來もはや知れた獨り娘の事なれば聲を取つ
 て家を繼がする筈なれど。近年諸國の銀も濟まず。家屋
 敷を人手に預ける逼塞の身。此の跡を娘に渡し苦勞さす
 る可愛さに。一代切りに家を捨て嫁入させた親心。先と
 ても其の合點。道順が娘ならば拵へも入らぬ土産も入ら
 ぬ。育てた親に見込みがある。娘の心が土産ぢやと慕は
 れた根性に。畜生の魂がいつの間に入れ代つた。恨めし
 や情なや。アノ池に棲む鴨や鴛鴦を見よ。軒に巢をくむ
 燕も。雌鳥一羽雄鳥一羽。女夫番ひは生ある物の習ひぞ
 や。父親さまの毛色を産むは犬猫ならでどこにあり
 る。親は犬には産み付けぬ。猫になれとは誰が育てた。
 畜生に對して詞は交はさぬ。地是は身どもが獨り言。と
 ても斯うなるからは山の奥にも身を隠し。遁るゝだけは
 遁れもせず。京近邊をうろたへ。今の間に召捕られ。洛
 中を引渡され。親が大事に産み付けて。撫で育てた體を。

槍で突かれて死に度いか。體に耻がかきたいか。生けう
 が死なうが此の道順は。悲しいとも思はねば。涙一滴こ
 ほれねど。婆の泣きやるが悲しいと。わつとばかりに堪
 へかね。餘所をも恥ぢず大聲上げ。女夫はウレヒ。老の。
 息切れにむせ返りてぞ歎かるゝ。地茂兵衛は平伏して。
 兎かうの詞なくばかり。おさんは母に抱き付き。二人に
 不義の誤りは微塵程もなれども。ほんの因果の廻り合
 ひ。言譯立たぬ品となり。京洛中に畜生の名を流し。罰
 の當つた此の上に。スエテ誓文立てん。やうもなし。地父
 様のお腹立ち母様のお恨みも。わたし可愛い上なれば。
 來世をかけて形見の詞。我々は天の網とても遁れぬ命の
 内。親達に逢ふからは木の空に曝されて。屍を槍で突か
 れても。思ひ置く事ござらぬと。スエテ口説き歎けば。
 色詞まだぬかす。其の槍で突かせまい木の空へ上げまい
 と。思つて胸をこがすはと。スエテ又絶え入つて。泣沈
 む。色地母は涙の勲珠袋。詞襟紗物取出し。これ一步二つ
 白銀も少しある。いとしいやいかう肌薄な路錢に盡きて脱
 ぎやつたの。是を茂兵衛に渡して駕籠に乗つて京の地

を。一足も早う立退いて。必ずく悲しい事聞かせて泣
 かせてたもんなど。スエテ泣くく渡せば押戴き。詞忝
 なうござんする。中に著た淺黄縮緬は奈良の町で賣放し。
 此の上に著た薦に驚。この秋お前の下されて。未來迄も
 母様の形見と申うて著ますれば。寒いとも覺えず。カ、リ
 見附けらるゝをそれぎりの。地命の内は袖乞ひでも。
 頼みないは後生の事。是は其儘とめ置いて。死んでの跡
 の用ひにと。歎けば母もア、悲し。また死用意はつかり
 と。色盡きぬ涙の露霜の。白きを見れば夜も更けて。出
 でたる月は冴えながらオトシ親子の。袖ぞしぐれける。
 詞茂兵衛はかきくれて物をも云はず居たりしが。我ら男
 の面をさけ斯様の業を仕出し。のめく長らへある事も。
 おさん様のお命を何卒と存する故。お宿許へおさん様を
 御同道なされ。お命助け下されば。科を私一人に受け物
 の見事に死にました。御了簡頼み上げますとスエテ手
 を合はせ泣きければ。詞ア、おろかしい事いふ人ぢや。
 我一人生き長らへ言譯が立つ程なれば。二人生きても同
 じこと。取違へようがどうせうが。持春といふ男持ちな

がら。そなたと肌觸れ寝たは定。形は生れ變つても此の悪名は削られぬ。そなたはいかう狼狽へが来たさうなと。耻しめられて茂兵衛も。アツアさうぢや。ヤアあれ三條通りの車の音夜明けと云うて程もない。行先あてどはなけれど。私在所丹波の柏原まで落ちて見るばかり。サア暇乞ひなされませと。いへども親子一生の。生死を争ふ今はの別れ。月出ぬ先は顔見えす。いつそ思ひ切るべきに。見交はず顔は見切られず。なま中月も恨めしく。色母は悶えてこれ親父殿。脈のあがつた死に病も若しやと薬は盛つて見る。天にも地にもたつた獨りの大事の娘。見付けらるゝと殺さるゝ。手放してやらうか。ござれ爺媪附添うて。死なば親子一時にと。スエテ氣も狂亂の口説きごと。詞道順も堪へかねて。それはおしやる迄もない。如何なる大病難病でも薬一味の加減にて助かるもある習ひ。息の絶えた死人でも二十四時は待つて見る。唐天竺日本國の名醫の薬を浴びせても。天下の法を背くといふ大病には叶はぬぞや。たつた一つの頼みには持春の方へ手を入れて心を宥め見るばかり。若し其内召捕られ

ずば最後といふ時は。白髪頭を大地の底へ摺付けて。命乞ひも身替りも。願ふといふは其時よ。なまじい親がかくまふと聞えては先に我が立つて。赦し度うても赦されぬ。親下人にも見放され憂目をするに聞えては。けには先に憐みあり。ヤイおさん畜生よ犬猫よと吐るとて。カ、リ恨むるな。地願ひかけぬ神もなく。祈らすといふ佛もなく。三光天を拜むとて七十になる道順が。朝ごと垢離を取る時は。總身の骨は氷れども。娘が處刑に逢ふならば此の苦しみを百千萬。重ねても物の數かはと。堪へて月日を拜するは。あの月天子の照覽あり。スエテ利生は無下には。詞よもなるまい。茂兵衛頼む煩はずな。これ爰に銀子一貫目家質の利息の足し銀に。黒谷の和尚様より借つたれども。世間張つて何にせん。家を町へ突出し寺へ返す此の銀。やると云うてはやらぬ。貰ふと云うては貰はれまい。道順が涙にくれ狼狽へて落いたぞ。落ちた物は拾ひ徳。罰が當れば落した者。拾うた者に罰はない。色詞お婆おぢや歸らうと。女夫せき上げむせび入り。二足三足立ち去れば。おさん茂兵衛はわつと泣き。

カ、リ銀取上げて額に當て。あんまり深い親の慈悲。却つて冥加が恐ろしい。なう父様母様と。呼返せば。詞振返り色何にもいふな。何にも云ふな。さらば地さらばの。泣別れ父が返れば母が止め。母が返れば父が止め。おさん茂兵衛は歩みかね。名残をしさは立ちどまり。小高き土手に伸上り。二人見送る影法師賤が軒端の物干の。柱二本に月影の。壁にありく映りしは。憂身の果ては捕はれて。オトシ罪科のがれぬ天の告げ。詞母は驚きなう爺様情なやこゝに磷が。悲しやお婆おさん茂兵衛が影法師。天道様の力にも。叶ふまいとの知らせかと。スエツシ又堪へかねて。泣く聲に。詞内より玉は潜り戸あけ。顔差出す其影の同じく壁に映りけり。色あれ又爰に獄門が。浅ましや此首の其名は誰と白露の玉ではないか。おさん様。さらば。さらば。さらばの聲の内。はや黒谷の後夜の鐘。生滅々と響きくる。果ては寂滅爲樂ぞと。名残悲しき二人づれ。

四〇 石川五右衛門繼子の段

針に引かるゝ糸筋や。廊を出で、五右衛門が。妻と定ま

る瀧川が。素人の業を爲習うて。洗濯物の縫括り。忙しき中へ五郎市を。連れて戻つて繼ぎ合はす。親子の中のそぶくは絹の表に晒し裏。フシ肌付き悪く暮し居る。△詞來る人毎に悪者の。三上の百助片田の小雀。遠慮もなくすつと入り。詞エお瀧様縫ひ仕事御精が出ますの。コレハ二人連れでようこそ。主は晝寝。なんぞ用なら言ひ置いて。△詞イヤ用というて商賣づくコレ此の小雀が在所。片田の落雁屋に嫁入りがあつて。確りと土産。躍り込む相談に暮方から金藏所へ寄合ひます。さてと小雀よ。ついでに今のを云はぬか。○われ云へ。△ハテ云ひに来たぢやないか。○そんなら餘のことでもごんせぬお瀧さん昨日この五郎市殿が使に來て。今の母様の當りが怒ろにむごい。詫言してくれて、如才のない云ひ様。十一や二で思ふ様にはあるまいし△コレく雀殿。憎うてむごうしませうかサ、そこもあるてや。あんまり可愛いと。詞慾が交つて繼子憎みになるもの△ハテ異なる事の挨拶。繼子を憎むが天下の法度か。こなた衆の所へ迄。懺悔を云うて行く息子。あんまり可愛うござらぬと一蹴り○蹴ら

れて道理々々。百よ。聞いて見ればお嬢様のが尤もさうな。繼子憎むは世界の大法。兎かく息子が腹からぬが誤り。公事は捌いた来い去のと。カ、リ地差別知らずが燃える火に。オトシッ焚付けかうて立歸る。△地つらき親をば親にして。猶も機嫌をとる端香愛想に汲んで五郎市は。しとやかに立出で。詞甲し嬢様。お氣が盡きようと思ひ茶を入れました。出ばな一つと差出す。はや小雀がいひしを根に持ち。何ぢや茶を入れた。そりや誰が頼んで。そなたが呑んだ。飲み餘り。口塞げに持つて来たか。△アノ勿體ない何の飲み餘りでござりましょ。初穂を汲んで参りました。△、初穂を飲まして。此の母を追出すのか。呑めなら呑まうドレおこしやと。色カ、リもぎ取る拍子に情なや。仕立てし布子にざんぶりと。かゝりや繋がる親子とて。オトシあひ見る茶とぞなりにける。色我誤りも子にぬする。繼母性根をあらはして。詞ヤレ爰な龜相者。代りのない晴着。よう此の様にしたなアと。色取つて引寄せ太股を。指先つよく二つ三つ四つ目の紋の掴み染め△ナウ悲しやと五郎市は逃廻り手を合せ。誤りまし

た今度から。嗜みませう堪忍と。詫びる目元もおろく涙また泣くか。吠えるかと。カ、リ聲はしたなき折からに△詞人の女房の上水を呑みに廻る小鮒の源五郎。門口より差覗き。ハテこりや又。親子喧嘩でえすか。性懲りもない息子殿笑止な和郎と座を占めて。コレお瀧様。繼子の世話を焼かずとも。わしが云ふ様にならんせんかいの。人にばかり思はせて。カ、リオトシ氣強いお人とあてこする。詞また小鮒殿のじやらくと。そんな機嫌ぢやないぞや。あつたら口にお風く。○サア其の風に實が入つて。傍へ寄ると震ひ付く。機嫌直しにちよつと爰をと手を取つて。無理に引込む。太股ふつつり○アイタ、タ。こりや繼子殿の相伴した。扱も手ひどい御馳走と。オトシ顔をしかめて摩り居る。△詞オ、よい氣味の。傍に告手のあるも構はず。好んで痛い目なさるゝと上手ごかしを○コリヤなると。思うて何がな追従に。憎む繼子を取つて引立て。告手とはこの和郎か。めかりのないちよつほり殿。奥へ往て貰はうと色むごいを馳走に蹴飛ばせば△五郎市むつと目に角を。立て甲斐もなき親の前詮

方涙おし隠し。オクッ泣くく。一奥に入りける。

○詞サア見る人もなし聞手なし。主のあるこなさんに。云ひかけるから命づく。首を先へ投出そか。胸から下を受取る氣か。色はづみ切つたお返事をと。しなだれかゝるを△そつとはづし。夫五右衛門幸ひ宿に居らるゝ。其の通り申し聞かせ。きつとお返事致せんと。立上れば○ア、これく。それ云うてたまるものか。よいくさうあるからはこつちも意地づく破れかぶれ。御大切に思し召すお連合ひの芥藻屑。いふ所へ往て申すぢや迄。お暇申すとゆすりかけ立つを△お瀧は引きとめ。ソリヤこなたも同じ仲間○サア其の仲間がいふからは慥な證據。首投出してと申すはこゝ。惚れかゝるとぞつこん火へはまるも構はぬ氣。何と一度か二度の事。おつと云ふ氣はごんせぬか△そんなら一度で大事ないか。○半分でも忝い。幸ひ傍に人はなし。カ、リ表を閉してつい爰でと。抱き付くを△オ、けうと。それく親父の足音。アイく呼ばんすもうそこへ。そりやこそ爰へ出て来るはと威せば。○うろく狼狽へるを。色無理に押出して。晩にく一

寸遁れ。二寸伸びたる鼻毛の小鮒。内儀の五味に酔はされてオトシ跡をも見ずして逃げ歸る。△詞五郎市様子聞きながら。聞かぬ振りして奥より出で。申し母様。父様のお目が覺め。夕飯あがるとおつしやる。わし据ゑましよかと問ふも怖はく。○色詞オそりやおれがませう。其の代りには縫ひ仕事取置いて跡掃いて。日暮になつたら灯を燈し門も締め庭も掃き。使ひ水から風呂の水。言付けずと汲んで置きや。子供使ふもア、世話とオトシ言ひつゝ、奥へ入る影を。打眺めくッ恨み涙にくれけるが。詞思ひ廻せば我が身程。ウレヒ親に縁なき者あらじ。カ、リほんの母様ある時は父様に氣兼ねする。今また父様ほんのなら。母様が隔たりて。よき事しても氣に入らず。外町より来る者迄見侮つて足にかけ。蹴たり踏んだり何事ぞ此の家にうかく暮すなら。まだ此の上にとの様な恐ろしい目に遭はうも知れず。いづくへなりとも逃行かんと。表を指して駈出ですが。ほんの母様の所は覺えず。どこを先途と立戻り。又駈出しては行き先の。當てのないの引かされて。行きては戻り戻りては。巷に迷ふ

エ稚子の途方に。くれて居たりける。色調五右衛門は寄合ひの。時分ならんと立出で。五郎市よ。何してそこにと咎められ。イヤどつこいも往きやませぬ。お前はどこへと問ひ返す。○オ、おれは寄合ひに。隙は入るまい。つい戻ろと言捨てて行く。袂に縋り。もう今夜はどつこへも往かずと内に居て下され。さなくば。わしも連れて往てと。おろく涙の體を見て。思はずも打萎れ。なぜさう云ふぞ仲間事。往かぬと何かと跡の邪魔。ちつとの間ぢや。留守しやと△賺せど猶もしくくとフシ涙に聲もおど震ひ。色父様わしはほんの母様に逢ひ度い。去なして下され去に度いと泣きしをるれば五右衛門も。ウレヒ胸は張裂く思ひにて。フシ暫し涙にくれけるが。詞オ、道理ぢやさうあらう。常から女房めが仕方。如何におのれが子でないとて。朝から晩まで責め遣ひ。ちつとの事も大形に。又してもぶち打擲。むごい奴憎い奴。もう引つ捉へ言はうかと。思へど胸を摩つてゐる。腑甲斐ないと思はうが爰をよう聞け。父はな。悪い商賣してゐる。今止め度う思へども仲間事ゆる止めさせぬ。それをあの

嬢めがよう知つて。驗見ての我儘氣儘。今追出したらやら腹立ち。どんな事を吐かさうやら。殊に彼めが親は悪者。忽ちそちやおれが身に。難儀のかゝるが悲しさに。何事も堪忍する。ウレヒ詞子心にも聞分けて。了簡付けてるてくれい。カ、リ色調ほんの母にも他人が添ひ。今更戻すも戻されず。其の内に思案して憂いつらい目をさせまいぞと。スエ云ひ宥むれば。△カ、リ詞五郎市は。涙を袖で押拭ひ。父様の苦になる事なら。打たれても抓られても堪忍して居ませう。其の代りにはどへござらうと。早う戻つて下されと。言ひつゝ猶もフシしやくり泣く○詞オオ聞分けがよいよ。總別堪忍といふ事が人は肝心。男と生れ堪忍のならぬは女房の間男。扱は人中の類耻。拳一つ當られてもそこは男づく。其の外は皆内證。堪忍が即ち辛抱。ちつとの間の留守。辛抱して待つて居や。つい戻らうと懇ろな意見ながらの言聞かせそれが小耳に留まるとも。知らで五右衛門寄合ひの。オトシフシ時分おそしと出でて行く。△地カ、リ是非も涙に門を締め。内の燈火庭廻り。言付けられたあらましを。片付け廻る折柄に。

○地カ、リお瀧が親の無頼者。三二五郎兵衛しらしにせの。指先動く髭親爺門の戸叩いて詞お瀧くと呼聲す△色五郎市扱は最前の。小鮒が来たと心得て。わざと其の場を知らぬ振り。オトシ聞かぬ振りして奥に入る。○猶も忙しく叩くにれ。△詞お瀧も心ならねども。誰ぢや。誰ぢやと咎め出で○詞おぞちや明けいは親の聲△又用無心か氣の毒と。思へど是非なく内へ入れ。日も暮れたにうとくと。何しにお出でと尋ねれば。何しにとは。娘の所へ親が来るが不思議か。あた面倒なと膝打ちまくり。云ふまいと思へど云はぬが損。聞き中ぢや聞けお瀧。此の中借つた二十兩夕ごみたでころりと仕舞ひ。跡を繋ぐ種が切れた。五右衛門は宿にかまあ十兩か二十兩借る氣で来た云うてくれ。近年見たがはやり出て。ア、胴も合はぬぞいと咄し出せば。ア、△もう其の咄聞きとむない。小判の生る木もある様に又しても無心。主の手前へわしも氣の毒。殊に今夜は留守。マア去んで下さんせ。○イヤ去ぬまい。われこそさう云へ五右衛門は。銀の生る木があるけな。毎晩毎晩味い商賣。元手入らずの掴み取り。ようごろが来ぬ

なア。今夜も働きの留守ならば戻る迄待たう。娘。けんけん云ふなやい。何にも知つてゐるぞいと。色カ、リ底氣味悪き一言に。くわつと胸迄せき逆上し。コレ親父さん。人の事でも大事小事あじやらにも云はぬもの。云うてよければお前もの。京の島原で置土の九郎次を殺し。難儀に及ぶを五右衛門殿の。思案一つで事なうしまひ。親子共に恙なう今日まで暮すは誰が蔭。其の恩を知つてなら。苦口云はんす筈はない。銀借る度に痛か放せ。さう胴慾には云はぬものと恨み歎けば。○やかましい。そりやあつて過ぎた事今でも銀を貸せばよし。いやと云ふと此の村の庄屋へ往て。夜の商賣云うてくる。それとも五右衛門が心底次第。戻るまでべんくと斯うでも居られまい。寢所せい寢て居よう。△そんならどうでも逢ふ氣かえ。○逢はずといつそ庄屋殿へ往こか△サアそれは○何と△ハテ寢て待つ氣なら此の間。寢所して上げましょと。色フシ暗いを防ぐ明り障子引明ければ○詞オ、よい合點。われも五つからおれが手しほ。いつ孝行なこともない。来てちと腰揉め足摩れ。いやと云ふと庄屋殿と。色威し立て

られ△是非なくもハテ撫摩つて濟むことなら。致しませうと伴うて。カ、リ入るも疵持つ足の裏。篠原ならね藪垣の。隔つる思ひに。五郎市は。ヨハリ小鮒と心得奥の戸棚を心ざし探し當りし修羅の一腰。そつと抜取り小脇に搔い込み。おのれ最前蹴た意趣と。父の目をぬく不義者め。たゞ置かうかと忍び寄り。窺ひ聞けばお瀧が聲。△詞申しお前とわしとは因果な縁。切らうと云うても切られぬ。今にも夫が戻られては。意地づくでどうならうも知れず。わし可愛いと思つてなら。まあ去んで下さんせ。○イヤ去なぬ。小言いふと五右衛門を。逆礫にかけさする殺そと生かそとおれ次第と。△色廣言吐くは憎さも憎し。去ぬる所を殺さうか寝てる所を突かうかと。脇差抜いて。子心にオトシとつづ置いつの一思案。○色詞斯くとも知らず五右衛門は。さぞ待兼んとつかはと。歸る表の足音を。△人こそ來れと五郎市は。心せくま、障子越し。ぐつと突いたはお瀧が胸腹わつと魂切る聲に驚き。ヤレ人殺しと三二五郎兵衛。オトシ奥をさして逃入れば○色詞五

右衛門門の戸蹴破つて。見れば女房朱に染み△五郎市は人違へと。うろ付くを取つて引寄せ。○ヤイ悴。恨みあるは道理ながら。母と名が付きや親殺し。辨へ知らぬか白痴者と。叱り付ければ。△聲震ひウレヒ母様を小鮒めが女房にしをる故。小鮒を殺すと思つたら母様でござつた。堪へて下され怪我であつたと。あどなき詞も聞き咎め何といふ。嗚と小鮒と不義したとや其のまた相手は。奥へ逃けて行きました。扱はと目がけ駈行くを。ウレヒ詞ナウこれ待つてと手負は呼びとめ。其逃けたのはわしが親三二五郎兵衛殿。あの子がそれと知らぬも尤も。今日晝小鮒が無體の戀慕。いやと云へば身を捨て。訴人に出ると阿呆の一徹。若しやと思ひ宥めて歸し。今宵忍んで來る約束。思ひも寄らず親父殿が見えまして。又銀の無心。お歸りまで待つとて。一間にわしと差向ひ。小鮒と思ひ違へたは。ウレヒあるまい事ではなけれども。親と名の付く自らを。殺してあの子の身の科が。何とあらうとそれが悲しい。やつぱり不義で見付けられ。自害と沙汰して下されと。フシ思ひ過ぎする○詞心を疑ひ。ヤアしらぐ

しい。左程いたはる五郎市を。是迄むごく責め使ひ。今更悲しい不便などは。追従らしい置けくと。つつけり言出す詞の内。苦しきフシ體を押直り。ウレヒ詞コレ五右衛門殿。今死ぬる身が何の追従。こなたは又五郎市に。何老舗の何商ひ。何さす胸で連れて戻つた。女房にさへ暇の状。まさかの時は他人向きと。常からの言聞かせ。男の子はそれに付き。どう言抜けても。遁れぬぞや。たとへ別儀ないとても。鬼でもならぬ恐しい商賣。こなたはそれを讓る氣か。可愛相に美しう。生れついたあの顔を。撞木の上に曝さうかと。それが悲しさいとしさに。追出す程の無徳心。早う此の家を逃げよかし。母御の方へ去ねかしと。打擲するもこなたこそ。一生其身で果つるとも。せめてあの子は。人にしたさにと。フシわつと泣入る眞實を。△ウレヒ聞いて五郎市泣出し。母様堪へて下さりませ。何にも知らいで恨みました。ひよんな事して斬りましたと悔み歎けば。○フシ五右衛門も至極の涙にむせびながら。詞一寸の蟲にさへ五分の魂あるといへば。まして我とても悴を連れて歸りしより。たとへしつけぬ荷

步行持人の竈を廻つても。ふつつり止めうと善心に。ウレヒ詞もとづく甲斐も情なや。同類あまたに絡まされ止めうと云うて止めさせず。翅鳥にかゝる此からだ追付け刀の鏑屑と。なる身をせめてそなたとなう。ウレヒ代つて死んだら果報ぢやに。科なきそちは先へ立ち罪ある我は引残り。責め詞まれ死ぬるである。疊の上での臨終は。羨ましいと搔口説きヌエ男泣きにぞ泣き居たる。地今はになりて五郎市を引寄せて打眺め。詞いとしやはまだ氣の苦勞。怪我でないとして殺すをば。無理とは更に。フシ思はぬぞや。色其の代りには佛壇に香花切らして下さるな。四十九日は。家の内に。迷ひ居るとの事なれば。直きに手向を受けませう。名残惜しい我夫。苦しいはいのといふ聲も。無常の嵐一吹きに吹き散らされてあへなくも。オトシ此世の縁は切れにけり。△カ、リナウこれ母様々々と縋る我子の歎きより。○堪へ兼ねたる五右衛門が。身を震はしてしやくり泣き取亂したるヌエフシ折柄に。△詞一間の内より三二五郎兵衛。始終を見届け飛んで出で。ヤア遁れぬ所五右衛門。餓鬼めは即ち親殺し。此の旨お上へ言

上と。言捨て既に驅出すを。南無三寶と飛びかゝり。何の苦もなく引つ掴み。有無をいはず氷の刃。ぐつと突込み一刺り。剝る間に。△カ、リ向ふへ提灯。○人こそ來れと。死骸を投捨て。やがて我が子を引立て。是からが身の大事。そちも親を殺すれば。我も舅の命を取り。二人共に親殺し。此の場に居られずサア來いと。肩に引つけ出づる所に。約束時分と小鮎の源五郎のうぐくと小提灯。○明りにそれと見るより。五右衛門はこいつ故と飛びかかり。躍り上つて。まつ二つ直ぐに。立退く八聲の鶏。こつか高野を。あてにして飛ぶが如くに三重へ出て行く。

四一 天河末世鑑

地津の國と和泉河内を引受けて。よその國迄船寄せる。三國一の大港。堺というて人の氣も。賢しき町に痕もなき天河屋の義平とて。金から金を儲けたため。見かけは軽く内證は。重い暮しに重荷をば。手づから見せて締めくくり。大船の船頭。是で丁度七棹。受取りましたと差擔ひ。行くも黄昏亭主はほつと。日和もよしよい出船と云ひつゝ、煙草きせる筒。オトシ吸付けにこそ入りにける。

二人。誰そ頼もう。義平殿はお宿にかと。云ふも潜めく。内からつこと。旦那さんは内になり。我等は人形廻していそがしい。用があらば。這入つたく。調イヤ案内致さぬも無禮。原郷右衛門。大星力彌。ひそかに御意得たいと申しておくりやれ。調何ぢや。腹へり右衛門。大飯。喰ひや。コリヤたまらぬ。アレ旦那さん。大きなけないどが見えましたと。叫べば奥より主の義平。また阿呆めがしやなり聲を。云ひつゝ、出で。エ郷右衛門様。力彌様。サアまあ是へ。御免あれと。座を占めて郷右衛門。段々貴公の御世話ゆる萬事相調ひ。由良之介もお禮に参る筈なれども鎌倉へ出立も今明日。何かと取込み。悴力彌を名代として失禮のお断り。是は是は御念の入つた儀。急に御發足とござりますれば。何か御取込みでござりませうに。成程郷右衛門様の仰せの通り。明早々出立の取込み。自由ながら。私に参り。御禮も申しお頼み申した。跡荷物もいよく今晚で積みしまひか。お尋ね申せと。申し渡しましてござります。成程。お誂への。かの道具一まき。段々大廻しで遣はし。小手脚當。小道具の類長

調家の世嗣は今年四つ。守は十九の丸額。親方よりも我が遊び。サア始まりぢやく。面白い事。泣辨慶の信太妻東西々々。角太夫に哀れをとめしは。此の芳松にとめたり。元より其の身は父ばかり。母は去られて去なれたで。泣辨慶と申すなり。調コリヤ伊五よ。もう人形廻しはいやく。母様を呼んでくれやい。ソレ其の様に無理はいしやると旦那さんに云うて。こなさんも追出す。跡の月からお釜が割れて手代は手代で。鼠の子か何ぞの様に目が明かぬと云うては追出し。飯焚は。大きな欠伸したというては。隙をやり。今ではこなさんと。わしと。旦那さんとばかり。どうでも。此の内を。抜けそするの。かして。ちよこく船へ荷物が行く。駈落するなり。コレ人形箱持つて往こぞや。イヤ人形廻しよりおりやもう寝たい。アレもうおれ迄を喰かす程にの。よござるは。おれが抱いて寝てやる。いやぢや。なぜに。われには乳がないもの。アレ又無理はいしやる。こなたが女子の子なら乳よりもよい物があるけれど。何をいうても相掣同士是も。フシ涙の種ぞかし。カ、リ折ふし表へ侍

持に仕込み。以上七棹。今晚出船を幸ひ船頭へ渡し。残るは忍び提灯鎖巻。是は陸荷で跡より遣はすつもりでござります。郷右衛門様お聞きなされましたか。いかにお世話でござります。其の旨を親どもへ申し聞かして安堵させませう。郷右衛門様お立ちなされませぬか。いかさま出立に心せきます。義平殿お暇申しませう。然らば由良之介様へも。宜しう申し聞かせませう。おさらば。さらばと引別れ。オトシ二人は。旅宿へ立歸る。調義平はほつと。大欠伸。奥へ往て休まうと。オクリ暖簾の二内へぞ入りにける。地月の曇に影隠す。夫と我が子の中に立つ。お園はひとり小提灯。暗き思ひも子故かし。あやなき門を打叩き。調伊五よくと呼ぶ聲が。寝耳にふつと阿呆が駈出で。おれ呼んだは誰ぢや。化生のものか迷ひの者か。調イヤ園ぢや。爰明けてくれ。おつと合點と戸を開き。お家さんかようごんした。獨り歩きをするとナ病ひ犬が嚙むぞえ。オ、犬になりと嚙まれて死んだら今の思ひはあるまい又。おりや去られたはやい。旦那殿は寝てか。イ、エ。留守か。イ、エ。何の事ぢやぞやい。坊は

寝たか。アイ是はよう寝てござんす。旦那殿と寝たか。イ、エ。われと寝たか。イ、エついころりと。なぜ伽して寝さしてくれぬ。それでもわしにも旦那さんにも。乳がないというて。泣いてばかりがほんの事と。わつと泣出す門の口空に知られぬスエ雨の足乾く袂もなかりける詞ヤイく伊五よどこに居ると。呼立て出づる主の義平。詞アイく爰にと駈入る跡。尻目にかけて。白痴めが奥へ失せうと叱りやり内の戸をさすを押さへて。詞コレ旦那殿。云ふ事がある爰明けて。詞イヤ聞く事もなし云ふ事も。内證ひとつの畜生め。穢らはしいそこ退かう。詞イヤ親と一所でない證據。それ見て疑ひ晴れてたべと。戸の透きよりも投込む一通。拾ひ取る間に附込む女房。夫は書物一見見て。コリヤ暇の状を戻してどうするのぢや。どうするとは聞えませぬ。親了竹の悪企。常からよう知つての事。縦へどの様な事あるとても。なぜ隙状を下んした。持つて戻ると嫁らすと。思ひも寄らぬ拵へごと。嬉しい顔して油断させ。鼻紙袋の去状を。盗んでわしは逃げて

来ました。コレお前は芳松可愛うないかいな。去つてあの子を繼母に。かける氣かいの胴慾なと縋り敷けば。詞オ、其の恨みは逆捻ぢ。此の内を去なす折ひ合めたを何と聞いた。様子あつて其方に。暇やるではなし。暫しの内親里へ歸りて居よ。舅了竹はもと九大夫が扶持人。心解けねば仔細は云はれぬ。病氣の體にもてなし。起臥しも自由にすな。櫛も取るなと言付けやつたをなぜ忘れた。散髪で居るものを。嫁に取るとは云はぬはやい。コレ晝は一日。阿呆めが。騙し賺せど夜になると。母様々々と尋ねる。母は追付けもう爰へと。騙して寝させどよう寝入らず。叱つて寝さそと叩き付け怖い顔すりや聲上げず。しくく泣いてをるを見て。身節が碎けて堪へらるゝものぢやない。夕も三度抱上げて。もう連れて往こ抱いて往こと。門口まで往たれども。一夜で堪能するでもなし。五十日暇取るやら。百日隔て、置かうやら明けて云はれぬ胸の闇知れぬ事に馴染ましては。跡の難儀と。五丁。三丁。ゆすぶり歩いて叩き付け。寝さしてはそつと置き。我が肌付ければ現にも乳をさがしてしが

み付き。わづかな間の別れさへ。戀ひこがるゝもの一生を。引分けうとは思はねど。是非に及ばず暇の状了竹へ渡せしを。詞内證にて受取つては。親の許さぬ不義の科。快からず持つて歸れ。是までの縁死んだと思へば事濟むと。切放れよき男氣は。常を知る程猶悲しく。スエとかう涙にむせび居る。カ、リいづくに隠れ居たりけん。郷右衛門力彌もろ共立出で。始終残らず皆聞いた。この度の大望義平殿の御世話ゆる。諸道具一卷調ふ上は。明日は出立。然ればこの事。外より洩れん様もなし。我々兩人改めて御仲人。この金子二百兩。由良之介殿より。御祝言御悦びの樽代。また敵師直へ忍び入るも豫て夜討と存すれば敵中へ入込む時。貴殿の家名の天河屋を。直ぐに夜討の合詞天とかけなば河と答へ。四十餘人の者どもが。天よ。河よと申すなら。貴殿も夜討にお出でも同然。

義平の義の字は義臣の義の字。平は。たひら容易く本望はや。お暇と立出づる。末世に天を山といふ。由良之介が孫吳の術。忠臣蔵とも言ひはやす。娑婆の詞の定めなき別れ。別れに出でて行く。

四二 料理祝言和睦盃

宮古路豊後直傳

詞それ海上に湧き起る物は必ず屍を組板の上に曝す。爰に料理元年八月下旬の事かとよ鯛の將軍金高とて。色魚類の大將ありけるが。然るに將軍金高は。オトシ戸棚が城に立籠り。詞舍弟甘鯛次郎金安を近付け。われ魚類の大將とは申せども。やゝともすれば精進物に隔てられ。無念たぐひはなかりけり。如何にとして討亡ほし臺所を掌に握らんと。フシ思ふはいかにとありければ。詞舍弟組板の上に畏り。我々も左様に存じ候なり。さあらば急ぎ國々へ。カ、リ觸状を廻さんと。家の後見鮭の判官長鮭に申し付け。先づ献立をぞ認めけり。御使には飛魚と洲走に仰付け。一々次第に觸れ廻り。その日限極まれば我もくくと馳せ集り。コハリ先づ一番に山城の住人桂川の左衛門鮎之丞淀鯉太郎鱒房。近江に源五郎鮒家。鰻の判官長介鮎の庄司髭長。鰻の長範毒助海鼠の次郎はり介。あんこの馬鹿介。女武者には姫路名吉むじま女郎。法師武者に蛸の入道談義坊。泥鰌法師髭くひそらし。御前にこそは詰めにける。さて國々の魚類には鯨の大介。鱧の

丈長。阿羅の冠者鱒の魚。丹後に鱒の判官。能登にさし
 鯖。地越後に鱒。紀州に鱸の三郎。松浦瀉には鱒の一黨
 ごまめの介。伊勢の國には江鮒の一族鱒の平介鱒の尉。
 その外大魚ごま雑魚集つてオトシ我も。我もとなみ居た
 る。詞爰に又やさしき貝ども集つて。地我々も加勢に参
 らんと。春は吉野の櫻貝。夏はいづみのすゝみ貝。秋は
 もみぢ赤貝や。冬は時雨のすみと貝。カ、リ、けにや誠に
 矢筈貝。世を厭ひたるあま貝の。人目を隔つる簾貝たま
 たま待つて契る夜は。明け方告ぐる。ア、ア、く、く、
 烏貝。地腰に付けしは法螺の貝。名も恐ろしき鬼貝の。
 をどし懸けたる鎧貝。舟軍には帆立て貝。数にはならね
 ど蜆貝。螺や榮螺子を先として。オクリ我もく、くと、
 しづきける。詞爰に又精進物の大將。濱なの將軍納豆兵
 衛。この由を聞付けて舍弟醬次郎を近付け。聞けば魚類
 の者どもが。謀叛の企むと聞いてあり。扱て此方も勢を
 催せ。用心せよと宣へばカ、リ承り候と。御前近き者と
 もには。畠山の庄司黒豆。小豆の判官年つもつて十八歳。
 青豆の三郎四郎。青畑指して門木戸かため閉づ豆や。や

がて御運は開き豆。鬼をあざむく節分の煎豆を始めとし
 て。虚空をかくる空豆や。大まめ小まめ鈍豆までも召集
 め。先づ豆鐵砲をぞ認めける。家に傳はる郎黨には。西
 山の燕東畑の大根。近江に青菜の三郎その外の人々には。
 豆腐の冠者麩の源内。蒟蒻の深井右衛門。茸の一黨芋一
 族近年御勘氣蒙つて。味噌桶が城になが、浪人せし。
 瓜や茄子の香の物。腕まくりして出でければ。時刻移さ
 じ尤もとて。戸棚が城にラドリ押寄せて関の。聲をぞ上
 げにける。詞城に籠りし魚類ども。豫て期したる事なれ
 ば。われ劣らじと討つて出で。火花を散らし。爰を最後
 と三重に戦ひける。コハリ時に寄手の方よりも。大根の強
 者が。椎茸の鎧を著。茄子の兜を引被つて。栗毛の馬に
 打乗つて。牛蒡名乗つて出でにける。地さて又城の中よ
 りも。眞黒なる馬に乗り鮑の鎧踏ん張つて。蒲鋒をひつ
 提げ。峭の入道かけ合せ。さも尋常に斬散らし。煮物と
 なつてぞフシ引きにける。地時に紀州熊野の住人。鱸の三
 郎一文字に打つて出づれば。山城の住人生薑太郎かけ出
 で、押並べてむんずと組み。押付くれば押返し。暫し勝

負も見えざれば。兩方共にすらくと。刺身となつてぞ
 引きにける。コハリ地さて其後に入れ亂れく。打つ。打
 たれつ手を負ひつ。オトシ火花を散らし煮え返る。詞爰に
 また小廻りの人々には。鹽の四郎兵衛味噌醬油酒之丞。
 一所に集りて聞けば魚類と精進物。臺所に騒ぎつ。取
 合ひすると承る。我々かくてある上は。いざや扱ひ仲直
 さんと評定して。追つ取りく、差入つて。めい、く、家具
 膳内に。それ、く、に居直れば。カ、リ扱こそ勝手は鎮まつ
 たり。この人々の味はひは。喰ふ人吸ふ人おしなべて。
 うまいとも中々申す。ばかりはなかりける。

春富士都錦 終

第六常磬種

(常磬津節正本)



常 磐 種

目 次

- 一 老 松
 - 二 蟻 旅 宿 睦 言 (延享二年六月)
 - 三 道 行 月 見 酒 (延享三年九月)
 - 四 嬌 柳 花 街 曉 (延享四年正月)
 - 五 夢 結 埒 野 蝶 (おふさ徳兵衛) (延享四年二月)
 - 六 行 戀 路 の 友 鳥 (寛延元年七月)
 - 七 三 重 襲 桡 船 (寛延二年十一月)
 - 八 芥 川 紅 葉 柵 (寶曆三年二月)
 - 九 我 衣 手 蓮 曙 (高野心中) (寶曆四年四月)
 - 一〇 清 十 郎 家 名 所 妹 背 笠 紐 (寶曆五年春)
 - 一一 床 盃 响 水 仙 (寶曆六年十一月)
 - 一二 妹 脊 塚 松 櫻 (二人浅間) (寶曆七年三月)
 - 一三 松 似 候 男 姿 (松風) (寶曆七年十一月)
 - 一四 男 江 口 花 吹 雪 富 士 菅 笠 (富 士 太 郎) (寶 曆 八 年 春)
 - 一五 垣 衣 草 千 鳥 紋 日 (寶曆十二年春)
-
- 一六 留 袖 浅 間 嶽 (明和元年四月)
 - 一七 蜘蛛 絲 梓 弦 (仙臺淨瑠璃) (明和二年十一月)
 - 一八 杜 鵑 花 空 解 (甲斐なくおちよ) (明和七年七月)
 - 一九 雪 風 卵 花 籠 (古忠信) (安永六年四月)
 - 二〇 色 映 紅 葉 章 (布袋) (安永九年十一月)
 - 二一 媚 千 種 錦 繪 (道成寺道行) (天明三年八月)
 - 二二 積 戀 雪 關 扉 (關の戸) (天明四年十一月)
 - 二三 四 天 王 大 江 山 入 (古山姥) (天明五年十一月)
 - 二四 兩 顔 月 姿 繪 (慈寶) (天明八年春)
 - 二五 辰 鷺 色 相 肩 (辰鷺) (天明八年十一月)
 - 二六 百 千 鳥 子 日 初 戀 (小松引) (寛政三年正月)
 - 二七 信 田 妻 容 影 中 富 (葛の葉) (寛政五年十一月)
 - 二八 帶 文 桂 川 水 (お半長右衛門) (寛政八年正月)
 - 二九 初 櫻 浅 間 嶽 (遠山) (寛政九年三月)
 - 三〇 夜 の 鶴 雪 艶 (子わかれ) (寛政十年十一月)
 - 三一 禿 紋 日 雛 形 (文化四年五月)
 - 三二 倭 假 名 色 七 文 字 (源太) (文化五年十一月)
 - 三三 千 種 花 色 世 盛 (大和團子) (文化七年八月)

- 三四 其常磬津仇兼吉(三勝半七) (文化九年正月)
- 三五 富が岡屏風八景(小いな半兵衛) (文化十一年九月)
- 三六 壽靱猿 (文化十二年七月)
- 三七 浮名たつ身(小絲佐七) (文化十四年正月)
- 三八 松色 操高砂(太神樂) (文化十四年正月)
- 三九 深山櫻及兼樹振(玉藻前) (文政元年三月)
- 四〇 再夕暮雨の鉢木(雨の鉢木) (文政二年六月)
- 四一 大和文字戀の歌(薄雪) (文政二年七月)
- 四二 一樹蔭雪儘(山鳥) (文政三年十一月)
- 四三 玉匣二葉栴 (文政四年三月)
- 四四 花三升楓 盛 (文政五年九月)
- 四五 思ひ指扇 盃 (文政五年十一月)
- 四六 寄良娼 釣髭(釣狐) (文政八年正月)
- 四七 汐見鴻松常磬津 (文政八年四月)
- 四八 和事色 世話(新高尾) (文政八年六月)
- 四九 鴛鴦容姿の正夢(をし鳥) (文政十一年正月)
- 五〇 拙筆力七以呂波 (文政十一年三月)

- 五一 恩愛 贖關守(宗清) (文政十一年十一月)
- 五二 道成寺戀曲者 (文政十二年十一月)
- 五三 片大和路關關扉(宗盛) (天保元年十一月)
- 五四 願絲縁 苧環(おみわ) (天保四年七月)
- 五五 忍夜戀 曲者(將門) (天保七年三月)
- (後改、忍寄孝事寄)
- 五六 花舞臺霞猿曳(新うつほ) (天保九年十一月)
- 五七 邯鄲 (弘化三年七月)
- 五八 笑門 俄七福(とてつる拳) (弘化四年正月)
- 五九 薪負雪間の市川(新山姥) (嘉永元年十一月)
- 六〇 乗合船惠方萬歳(乗合船)

常磬種

一老 松

常磬津文字太夫直傳

「抑松のめでたきこと萬木にすぐれ十八公のよそほひ千秋のみどりをなして古今の色をみす。カ、リ秦の始皇の御狩のとき引天俄にかきくもり大雨しきりにふりしかば。帝ッ雨を凌がんと小松の ウキニ蔭に寄り給ふ此の松。たちまち、セツ大木となり。ウ枝をたれ葉を重ね木の間すき間をふさぎて。其雨をもらさざりしかば帝太夫といふ爵を。おくり下し給ひてより松を太夫と申すとかや。かやうに目出度き松が枝に。巢をくふ田鶴の齡をば。君にさへけて御子孫は カンクル上龜の萬ごうふる川の流れたへせぬ金銀珠玉どうく。どう。と御藏のうちおさまる家こそめでたけれ。

二 蟾 旅宿睦言

二人江戸ガ、リ「ほととぎす。なきつるかたを。ウながむギンれば。中地たへぬ思ひは有明の。ハルつきのみやこの。くものうへ。長地あつものおもひ人そのふのまへの。ウ身

の行ふ。カンクリ水のながれを。スカシせきとむるハル地ぬまづの。宿に日を送り。仇に暮行くゆふざれの。カンヒロそ入らに。ねをなく鳥のこへ。ウエ、うらやましの。つばさ。やな。下めいどの鳥ときくからに引タ、キさきだちたもふ。わがつまに。あいたい入見たい。なつかしと。なみだのあめのさつきやみ。よひくは。ほしのあゆみもち入らくと人の音なひさびしくて。物うきなかに。かねのこゑ。ニ上り行愈フシ 夜中よねぶつそりやたがためにナ合しらでわかれしちゝのためなまいだ。合くくくなまいだ。タ、キけにさんがいのみほとけも。合生死のくもの。はれやらす。ねはんいらせたもふ。なり。合ましてや。ほんぶの身なりとも。ねがはゝなどか。たのもしきたれかちかいかのあみにもれなん。●おくより女立出てこれこれしゆぎやう者おもしろい哀なところをしよもふくとのぞまれて▲かねうちならしひやうしとり。さるほどに。平家の一門さいかい四かいのなみのうへ。おきにただよふ友。ち鳥、アッいたわしやあつもの公。いちもんのふねにのりおくれ。くまがへが手にかゝり。ついにはか

なくなりたもふ御身の。うへごあはれなる。■二人ウレヒカン
 きくにつけてもおいとしゃ。あつもり様のかほばせに。見
 まがふまでのあのしゆぎやうじや。▲イロ詞うつらふもの
 は世の中の人のこゝろのはなにぞありけれ。ウはななら
 ばなどかあだにはツキエリちりもせで引。すがたのはなの
 やなぎがみ。かぜあらば。なびかんいろのみへけるぞ。
 ざんげにつみもきゑぬべしかたりたまへとありければ
 舞しゆぎやうじやにつことうちわらひ。われはいやしき
 木のはしの。見へた通りのしゆぎやうのみち。おいとま
 もふすと立のけば●そでひきとめてこれまたんせ。しゆ
 つけにやはぬ。ウ黒かみのそのうつくしいかよほよば
 なうらおもてある人ごゝろそれでもしゆぎやうの道かい
 ナ。▲オ、夫こそはゆい一心すがたが世をばいとおふか
 こゝろのうちこそ佛なり●詞「その佛あればこそしゆじ
 やう有といはぬかへ。ほんのふすなほほだいのはじめ。
 ▲ほだいもとうる木にあらず。「さといれば佛●まよへばゆ
 めクリ上むみやうのやみの晴渡る。廣きちかいぞ有がた
 き。

三 京土産みちつきみさげ 常磐津文字太夫直傳
名所井筒道行月見酒

二上り歌つゝるづ、井筒の水は。にこらねどあたはこよひ
 の雨ぐもり。中地のちの月見の名をおしむ。長地カ、リはれ
 まをいざやゑひさましうかれあるきに二つ齒の。下駄の
 合はなをのもし手綱。合くもるにかけれときのまも。重三
 がこしのきんちやくに。三味の勘九がたばこ盆さけてぶ
 らくゝとまわり。ごくらの。月のかほ。カ、リ地そこへそ
 れくゝこきんさん。おそい過怠の約束は。西の風俗八文
 字見たいくゝとなけかける。聲もかわらのさよ風に。ナ
 グラシはぎやすゝきの。つゆもみぢ。エイカン 牡鹿めじかの
 ありさまは。もやうさながら秋の夜の。かけに出あふた
 やまと橋。びんとすねたる。ふせうがほ癡話もくぜつも
 門中は。なわてもてんと口あひに。なるのくせとこれ
 がよい。これはとつたとなめすゝき。すひ物はこぶふり
 袖が。合しやうじにうつるさはぎ歌。木調子歌きやくがほ
 んの公平ならば女郎にあふてふらるゝはづはなつけんけ
 れども。女郎にあふてふらるゝからは。女郎がほんのき
 んびら。したりやくゝゑいさつさ。公平。舞ハア、うた

ふはくゝこりやたまらぬ。サア勘九弾かけい。「まかせて
 おけろちやんとんてん。歌女郎にあふてふらるゝはづは
 なつけんけれど。女郎にあふてふらるゝからは。女郎
 がほんの公平。したりやくゝゑいさつさきんびら。ハヤガ
 カリ地かほのあかいはまへだれの。うつりにてらすほたる
 茶屋。めやみの地さうよそみして丸やの行燈人形見せ。
 四條どをりのやぐらまくや。が。て。「難波のあやつりを。

こゝにうつして大伴の。眞鳥ときけば竹本がトふし残
 すかとりひめ。ハヤマサハリ「ちぎりを二世と兼道のふた子
 のうはさ三笠村。よめのおさくがうすひき歌。詞是此芝
 居でおじやらしめるナンヨへ。ウスキ歌 京の中るは花
 ざくろ。見かけにはなりそふで。ならぬきのどく。ナン
 ヨへ。カ、リ地だきつかふにもさするにもよごれた足のう
 らめしき。木履のへエどろやと打わらふ。おどけじやら
 じやら露しぐれ。爰に嵐が名を上しあづま與次兵衛が道
 行はオ、くゝくゝ嬉しやナあれあれをみやむしさへ
 もつがひはなれぬあけはの蝶われくゝとてもふたりづ
 れ。こちは四人ゑふたどし横にあるいてかにつじ。假

ばしこへて見あぐれば。ひゑのお山へだんだ走の雲のあ
 し。降てくるはと袖笠合ひぢがさみかさもまさるあひる
 川。むらくゝばつとむら雨しよていくづるゝぬれすがた
 かしこの。やどりに「はしりつく。

四 嬌柳花街曉

「忍ぶれど中地いろにうつろふ花の雨。空にしられぬ雪な
 らで。となりもまねく笠の音。ふりみふらずみ時ならぬ。
 紅葉にてりてあかねさす晝と。よるとの。江戸カ、リ通ひぢ
 もいくたび。匂ふ花川戸。水の行衛の瀬にかはり。淵に
 も替る濡すがた戀の並木の右左。人めまばゆき助六が。
 我身の姿。其まゝに。かたて人形のかけるふの。とんほ
 うむすびにはち巻は。あけをもうばふ紫に。染てゑがい
 てふりもよきうらつけ帯を。引しめて。長地妻とさだめし
 あけ巻をこがれてかよおもひねの。こひとあだとはふ
 たりがなかに。長地かはすきしやうはたがひのむねにひ
 とつ印籠ひとつまへ。ほころぶ袖に手をこめてつかふ人
 形しほらしき詞ヤア、是はみな様お揃被成御せんせい
 とみへ。お顔の色もおめでたや。ア、どこやらの人さま

はおひよりが續きましておめでたや。どこもかしこもおめでたやと。しりめにきつとふくませて恨のいろを揚巻は「ム、あぢな事はんすのコレヤちつと聞所。コレ人形そなたもあのやうな事き、やつてはだまつてはいやるまい。又すねさんすか。そりやおまへあんまりなみ、こすり。これにはたんとい、わけありサアござんせと取つく袂を「ふりはなしア、コレ」ひけばやぶる、つかめば跡にしはす浪人。むかしはやりがむかいに出る。今はやう／＼なぎなたの。藤屋の伊左が夕霧もおなじやうな此すがた。一中ちゑもきりやうもしんだいも皆淡雪ときへうせて。かはせし事の替るのも。詞腕久と松山のむかしがたりも今身の上。誠にひよつとい、かわし。一日あはねば百日に「かつたかやもほろぶとや」ア、もふおいて下んせへそれはふるい口舌事みんなわたしが聞てい。我身のつらをくみわけす深い恨のはねつるべ。ぴんとさんしたそのふりはわたしに死ねとの事かいなお前とわしが深い中くるわでしらぬものもない。親のゆるしてそへといふ男をきろふて此里の。勤するのたれ故ぞ皆。

してあんまりないぢりやう。夜ごとに替るうき枕。ほれた顔してすかぬ容すかぬ顔してすいた客。あるが勤のこの海。サイモン 水くさい氣を見せまいと。客のかぢとるあまを舟さほな車とせはしなくヒロヒメ。ぐる。紋目をあけづめの。しこなしぶりにせびらかし。のまれぬ酒にむねいたみ泪の雨もふりだして。浮をたすくる袖のむめ。長地カ、リ すいな客衆をあやなせば。指をきれ。かみをきれ。つめをはなしてくれよとて。それは／＼色々のむりとぎりとにぬげにくい。ちゑのわ出して。まにあはず是程つらい身の上に。深ふおまへのほりつめ戀のなかなる戀をして。お顔を見るをたのしみにまつていたかひもなく。むごやつらやどうよくやともちたる人形なけつけて。ひぢにくいつきしがみつき恨なけくぞ道理なる。助六ぐんにやりと。手足もなへてちからなく。五段歸りの人形の水かねぬけしごとくにて。詞オ、尤々それ程誠の心なら何しにうたがひ有べきぞ。恨はないとゆふ露の。打てかへたる顔色にほどけてむすぶあけ巻は。猶もおもひはますほの薄。しなだれかゝる袖袂。「またのえに

こなさんがいとしさの。あまりてにくいひぢりやうそのやうにむごい程。なんほうにもわしや思ひ切られぬ因果さは見れば見る程人のすく。その風俗をてばなしてしばしもあはねば氣にかゝり。顔みぬ内の氣ぐるふさもし又外にじやうくらのあだつき事はできまいかと是。ほんにほんにそれはいくせの物案じ。おもひやつて下さんせと泪ながらによりそへば。「つきたをし。詞ア、コレ」そのいひわけもふるい／＼。ア、そのてのなみだにたられは是まで大分おなぐさみ。被成。たは。な。此頃聞けば。ひら様とやらべら様とやらが。のほりつめ。天の岩戸のかみごもりくらがりがおすきじやけなハチタ、キ「こちのおもひはくにもたす。あちへ根びきのだんごうし行たい顔がちらくと。みへすくみへすくほんに見へすくびんか々み。わけのほつれをつい結び。く／＼枕もけなりかろ。のでも山でもうそつくやつにはきれたがよい。ナナ一言もござんすまい「わしやさう思ふていらいなさふだんべい／＼。詞イヤモほんにあきれて物がいはれぬわいな。エ、面白さふになんじやいな。人の心もしらす

しとふりきりて「行をやらじと」「追風「野風」さら／＼さつと。せうじふすまをあげまつ夜半の友がらすかはいかはいと戀のやみ「はる、あふ瀬のたまくらに「かねもなれ「とりもなけ「のかぬ妹脊のやまかづらながくもつる、やくそくはいく夜の春をやりぎららん。

五 もゝさくら かさねるづ 夢結蟻の蝶

むつごとく心に心のたけをいひのこし。中地又の逢瀬の待遠くかぞふるゆびをむすびしは。君におくりしつめほども誠の戀があるならば。見すつる人はよもあらじ。あだとうそを勤わけ。アミドフシ人の氣を汲むるづ、やに。水のつやよき川竹のしんくの絲とほめられし。ツナク地おふさはつまの徳兵衛に見捨られじと手にすがる。長地思ひをきりし帯のはし残る恨とすてもせで。こがれて出る蝶一つ。花に寄べの水くさき。監男のこゝろしら浪の。池のこほりも打とけた。中をさき行く。江戸ガ、リ風の音柳の髪をすき通す。櫛にはあらで香に匂ふ。詞小袖にはあとウレと地心づき見れば見るほどつまの紋。我身の袖とひきくらべ。詞ヤア此小袖は主とわしとがおもひ染。おもは

くの裏模様。疑もなき徳兵衛さん扱は此池へ。はア、かなしやのふと打ふしてしばし涙にせきのほる。合話心亂れてしどけなく。調小袖をとつてハ、／＼ほんにぬしさん合はこゝにじやもの。コレ徳さんかよふこそ爰へござんした。わしがいふ事聞んせや 三下り「こゝはもとより九重の。マヒ地みやこのまちにきてみればいたるけしたるものこそあれ。合はりこの顔やんぬりちごしゆくしやむすびに笹結び。やましな結びに風車。ヤアひやうたんにやどる山がらくるみにふける友鳥。合虎まだらのゑのころおきやがりこほしふり鼓手まりやおどらんはりこゆみ筒まもり。守る妹脊の神さんも見捨て、爰の池水の。底いもしらでしなんしたいといひゆかしいなつかしと。とへど答へも口なしのいひがひもなきべにがのこ「小袖なけすて身をもだへ石を袂にひろい入れ。身をしづめんとかけよるを「徳兵衛走り出でコリヤはやまるなと抱とむる「エエトおどろく顔と顔。ヤア、徳さんか嬉しやと。其ま、袖に取付いてそゝろ涙にむせびる「徳兵衛もなみだぐみ。其しんていを見とめてけてそなたをころすがいとしさ

に。したわれし帯をきり水くさいていを見せ我ばかり此いけへ身を沈めたと思はせば。そなたの心にあいそがつき今迄の戀もさめ思ひ切つてたもらふとわざとかうした作り事。我は元より主の爲死ねばならぬうき命。そなたはながらへわがなき跡をとふてたも詞さらばと袂を振きつて行をやらじと引とめめ カンツレトハア、それはおまへどふよくな。是ほどこがれてきたものをほんにいふのがうそかいな。長地つとめはなれた眞實はお前の心に覺へがあらふ。どこへなりともにけさんせ。たとへならくの底までも。合いき代り。合しにかはり。おまへのゆかんとさき／＼へ。どこまでなりともついて行く。それがいやなら其やうにうまれつかぬがよいわいな。とても此身はどのやうなくなるしいつらい情ない。淺ましい身となるとてもおまへと一緒にそひ通し。ふたりならんで世帯して桃と柳の雛あそび。かはいらしいや、うんでだいて。合ね、してさゝめごと。たのしみふかうと思ひしにおまへに色々くろふさせ。此池に身をしづめ死なしやんしたと思ひつめ。死なふと覺悟きはめしをまだ。うたがふて

のあてこすりむごい男とすがりつき。叩いつ泣いつくどきたて落る涙は戀の淵深き恨ぞ誠なる「オ、道理々々あやまつた。その心のしんじつがあだにならふか此上は。さいごをきよふと手をとりに 二上り「びんのほつれをなでつけるゆつのつまぐしかみかけて「のかじ「はなれじ」かはらじと 合、キフシ「袖と袖とのうき名ごり「わしもおまへの顔つきを「わすれぬやうにいつまでも「おれもそなたの姿をも「こんどの／＼すつとこんどのまたそのさきの。さきの世迄も。合はなればせじとナホルすがりより 地カ、リイザもろともと打とけてわきざしするりとぬきはなし。さやをさいわいさかづきとなく／＼池の水をくみみらいもながく夫婦のかため。呑みむすびあふ鯉口や戀とぬれとのいもせどりおしやうき世を 引、リ「すて、行くかふよと見へしが夢をくだくや山おろしこすへ木の葉もばらばらばつと黒かみのちりてみだる、元結もく／＼りまくらとひとつ夜着さめてはれゆく庭の面。

六 戀路の友鳥

常磐津文字太夫直傳

三下り「かけてよいのは小竿に小袖。上掛て悪いはギンツ薄。

情。中濃いと薄いはそめて知る。合秋の錦の草の花。ギン迪る心はからクル衣きつ、馴にし里を出で。中地妹脊の中の星合も。ハル世のうき。雲に上ギンさへられて。合曇る月夜の二つ鴈。ハル地 比翼と人や羨やみし長地情ざかりの諸翹しどけギンユリ形振つまもる。ハル萩や桔梗の色好みスキャン名も驚長と唄はれて唯す鼓の調べより引。合しめつゆるめつ逢瀬を叩つ。合ゆふべ計か今川が。ウ勤はなれて眞實にヌエ男思ひの徒はだし。上此世の契りはあさじふの小野の篠原のふとも。心定めし二人づれ手に手をとりに行迷ふ戀のよるべぞ哀なる。セリフ「是長さん。わたしや未來の程が思ひやられて悲しうござんす。セリフ「エ、又ぐちな事はかり。したが女房と云事はしらいで色に迷ふて心中したと。世間の口に言はれうかとこれ計りが思へば／＼口惜いナア「今川わつと。聲をあけ。其。お詞を聞くに付け。猶悲しさが増わいなと。夫の膝に抱き付きヌエンシ聲も惜まぬ咽び泣き。袂もしめるきり時雨。カ、リ地平塚村の夜風を。あとに追手とうたがひの。二人が命捨小舟足をツキユリ早めて道芝の。露より脆き浮身ぞと。無常を

告ぐるごやの聲。 中音ギン 鐘の 地 數さへ折りかぬる指に
 こほる、袖の雨。 合カン 古事迄も思ひ出しこぞの花見を
 かこつけて、「くるわ遊びの夕けしき」「二階さしきの賑は
 しさ」「よそのさわぎを笑ひしも」「思ひいだせば早や昔ほ
 んに。二人が馴そめは、おまへのもやうのお小袖を借た
 が縁のにい枕。わたしがきやらの一たきをか入はい入ら
 すとコレ。ソレ響さんした其きぬぐの。嬉しさは。ウ又
 のあふせを松蟲といはしやんしたが身にしてみて。のわき
 の末に カン 鳴明す鶉。うつらと思ひ寐は。 ウ 地 ギン 蟬のも
 ぬけのうつかりと二階の縁に立盡し 詞 そなたの空が ヒロヒ
 主。さ。ん。のどふ思ふていさんしよと案じてばかり。
カハリ 合いたわいな、今は身にそふ中なれど死なねばなら
 ぬ此命。未來の縁を樂みと女心の繰言にしやくりあけて
 ぞ泣きいたる。 詞 「ア、歸らぬ事をぐどぐど」と今死る身に
 さりとては。嗜みやいと叱られて。カ、リ今川涙おさへ
 兼ねエ、しんきな事を何んじやいな。縁がなければ恨も
 ない。ぐちがほれたかほれたがぐちか、ウひくて數多には
 り強き勤の弓の川竹の。 長地 つらい中でもこなさんにあ

ひた入かつたとしがみ付き。落つる涙は洗ひ髮露を オトシ
 しほるが如くなり。 地カハリ 夜も更け過る松風の。色音を
 人かと氣もそゞろ。見付けられじと袖を引き木蔭に オクリ
 「忍ぶかり枕。 二上り 夢の夢。ウ夢の浮世にうき事を。 カン 我
 身にか入こつうたかたの ナガシ 水の行衛の置所。 ハルカン お
 菊も同じ思ひ妻。そはれぬ中と諦めて。死る覺悟は三つせ
 ヒロヒ川。わ。た。る。つ。ら。さ。 ナガシ は白フシなみの 引。 ウ 泡と思
 へばいと ギン ハリ 猶心合細道歩み オトシ 兼ね涙に暗く行惱
 む。 ほろい ウ 跡にさがりて與茂三郎。愚心のべらぐ
 と。しどろもどろの 詞 つき不承らしくも尖り口 長十郎 エ、
 菊とした事がめつたに先へいておれは迷子にならふと
 した。 若五郎 是そんな事言ず共南無阿彌陀佛と唱へたがよ
 いわいな 長 ヤもふなむあみだ佛か。此のまあ死ると云事
 がいづの世から始まつた事やらさりとわるい物好き
 じやぞ。どふぞ死なずにそはれぬかと繰事いふぞ哀なる
 下 ル お菊は夫に打向ひソレ其やうに。あどない事はし
 やん入すのが猶いと。愚なお前を世の人に笑はずまい
 と明暮に。 長地 思はぬ カハリ 嘘も夕月の陰や日向へ立廻り。

七 三重襲船

ウお前入のそふした心にてわしを女房とかはいがり。わ
 きひら見ずの眞實は。世界の男にや有まいと。わたしが。
 心で自慢して樂しむかひもない。悪モツ縁ぞや。お前も覺
 ていさしやんしよ。外の女子に物いわんしよが。ふつつり
 りんきせまいぞと嗜んでいても。 ウ 情なや外見さんすり
 や。腹が立つ。此まあ女子には何がなる。なぜ。殿御には。
 生れ替つてこなんだと。 ウ ぐちな ア ハ フ シ 女子の心。よりあ
 どなふ入なるもお前ゆへ死なねばならぬ義理になり。必
 ず死んで下んせと諫めすかせば詮方なく。 ギン 「迎りぐ
 し 合 詞 後より カン 是も戀路の死神のついて來りし身の因果
 「こなたも夫婦「あなたも女夫「中を距つる絲薄」をの
 とはいはじ 中 コ ハ リ 蟻螂の。愚に向ふ車の輪。めぐり入ぐ
 て我しらず。四人目と目を見合せて。ふつと吹消す提灯
 の共に隠るる 引 月の雲くらきやみじを幸に。互の姿忍
 ぶ草合そろりぐと歩めども。足音響く木の葉の「塵。拂
 へばそよぎ。」「慕へばのき」「そちよ」「こちよ」と「迷ふ間に。
 はや横雲の山かづら合クリ上階を。出づる友鳥かわいぐ
 の戀の道わりなき仲とぞ成りにける。

二上り「たどり行く合今は心も亂れ候末の松山思ひの種よ。
 一つの頃より逢ひ馴染て。千種の色に通ひ路の。 中地 露も
 梢にのほりつめ。うき名身にしむ秋風に萩もすきも吹
 きさそふ 長地 鐘さへ月に音をふくみ無常をつぐる十徳
 の。姿にかへし椀久は合なれし 文 七難波の足どりも。しど
 け。なり。ふり。くるひいで 中地 をちこち人の言の葉に。
 乗せてうかれて淀舟の。棹の雫とまき散らす花も揚屋の
 夢枕。 中地 いまは現のかねの罰。人めのまがき空どけの朝
 なぐのみだれ草おのれとうかれ出る日に。しほむ姿の
 とりなりや。ねずに妻こふさを鹿の聲もしをる、計りな
 り。松山跡にしたひくるすがたかよわきねざめ鳥合泣て
 明せし手枕は親に不孝と思へども。好た男と添通す心の
 誠引しめて帯もゆるまぬうきつとめ。廻る紋日もぬしひ
 とりまかせまいらせ候べくの。文の數々錦木の。あづま
 へ下るふたりづれ。もつれてとまる秋の蝶。 コ レ 申 し 椀
 久さん氣を取り直して下さんせ。爰は大阪ではないぞへ
 いんまも今道行く人にとふたれば爰はもふあづまじやと

いなどふぞ氣を付けて下さんせいナア「何んじや氣を付けてい。とふから付いてるわいの。しかも茨木屋の幸八といふ揚屋迄が付いてるアレ〜たいこ末社も打つれてコレハ〜〜〜夥しい。然も麻上下で何んじやおみだう参りハテおきやいの。佛様事より女郎様事がよから。何じや女郎買ひじや。麻上下で女郎買ひヤコリヤ又氣が替つておも白かろヤ何。女郎買ひやない茶の湯じや。幸ひおれも十徳はきてるどふもいへまい〜ホ、オお手前見事いやア御亭主流儀は何でえすエ。何。ハテわるいていしゆぶりかな。おればつかりに口をきかしてドリヤ一つぶく下されうか。お茶の口切りたぎらす目元ハ、いかいたわけ「コレ譯もない何いはんす道行く人も笑ふぞへ笑ふても譏つても恥かしくはないかいなエ、うらめしい心ない主の姿のみだれしがそれ程におかしいかあのしどけなふならんした心の亂れは誰ゆへぞ皆わし故じや松山じやコレ顔見せて下んせと目に浮く涙すりよする襟まきのもみぢのこき薄きこのもの露しぐれ歎く袂をふり切つて「また狂亂の心付きけしき替つて聲高

くはち〜。ノウ物給べのふハア、浮世じやナアハ、ハコリヤコリヤ〜五百貫目入れて揚屋で習ふた投節をたつた一文で唄ふて聞かすがナア一文もない事かやい。サテモきつい物じやぞ一文さへくれかぬる。一門一家に見かざられたよりなき身のこの姿を。わらふは〜わらは〜笑へちつともそつとも大事もない。藪から棒さのさき鈴。石はらやくわん。かべに耳みみさるの繪馬。月夜に釜。鯉こいひようたん。挑灯につり鐘背に腹。ゑように餅のかわとんびが鷹たかからすが鵜うのまね合ノ手ハ、ハア又それ〜そのやうにしどけない事いはんすがわしや悲しい。其お姿を見るに付け迎もうきめを見ようより。いつその事に死にたいと川邊へ寄るを「どつこい〜ハア、粹じやな〜粹じやによつて水へはまるかすいと申すも水みづの事。水と申すもすいすいの事。粹と水とはよみ一つ。傳へ聞く李太白は江に望み。水の月を撈かきんとて淵へはまつてうき草の。身を投ぶしとナゲシなげしさても命は詞有るものか此うき命も何んのその。役に立つかいの。立つかたゝぬか蘆あしべの波の。笠歌あなたへざらりこなたへざ

らり〜〜ざら〜と泣いてしまふた。「ア、正體なや情なやどふぞ〜ろを取直し氣をしづめて下さんせ。やいの。やいのと。もつれ寄る。「イヤ袖をばづして後へ廻り。泣け〜きなきけ狂ひ泣けわけなきことをタがらす翼かはせし仇人の身の果何と淺ましやと。芝をしとねにふしけるはよその見るめもあはれなり。「松山傍に立寄つてそれ〜其やうに狂はんしたら一倍お氣がのほらふぞへ。どふぞちつとの内でも氣を鎮めて下さんせ。此川を向ふへ渡れば人里もありそふなどふぞむかふへ渡りオ、幸ひ〜あそこに船がある。ホライ〜「名にてらし中地高ききこへはいにしへの。五湖に棹さすものゝふを。移して爰に世をのがれうき世を渡る柴船の。中地炷たきぬさきより身をこがす。暮の蚊やりの隅田川とまおし明け「たれじやく〜あすでなければ舟は出されませぬぞ「イエイナアわたしたつた二人どふぞむかふへ渡して下さんせ。「ハア女中の聲で二人連れとはヘエ、聞えた。コリヤ江戸へ奉公に出て旦那の内うちで夫をこしらへ。故郷の小松川へ歸る杯といふ様な人かこさやうならば逆井の船

へお乗り候へ。ち〜くつたむくひにて候ほどに。此舟にはかなひ候まじ「イエイナアそんな者じやないわいな。わたしや大阪もの。つれそふ夫は氣が違ふて何をいふてもたわいなし。それでわたしや氣が顛轉してゐるはいな。「ム、何といはつしやる。つれあひは氣が違ふたとサテ〜それはいとしい事。それなら乗せてやりませふ船賃も取るまいは。氣違ならば船賃のかかりにこ面白う狂ふて御見せ候へ。さもなくば此舟には乗せ申すまじ候「エ、おかんせきけば爰は五百羅漢の渡しではないかいナア「いかにも「人を助くるが菩薩の業。如渡得船ともお説なされた。五百羅漢の渡しならこつちから望ますともらん舞でもして見せさんしそんな物を。望まぬからはと〜船に御乗せ候へ。「ハテどふいへばかふいと扱口がうしやなる女中かな。ドリヤ〜顔を見よふハア、實に〜これは理なり。見れば喜代三と龜藏によく似た人を渡し守。乗せて下さんすか「乗せいで何としませふぞいの「オ、それはマア忝うござんす「サア〜氣違殿はわしが手を引ませふこなたも靜にのらつしや

れ「ハア、嬉しうござんす」ア、コレ／＼女中下にゆるりと居さつしやれサア船を出しますぞ悔りせまいぞやそりや出たは「オ、こはやのふ」ア、じつとしてゐさつしやい／＼どふでござんす「ハツアまたよい景色では有るぞイヤ申しお船頭へアレ向ふなアリヤ何じやいなア「ハアドレ／＼ム、あの流れるのかへ「あいナア「ハア、ありや古い下駄の 蓋ながれるにて候「イ、エイナアそんな物ではないいなア白いやうな嘴と足との赤いやうな物はアリヤ何じやいなア「ム、白いやうな赤いやうなエ、あれを知らずかへありや 蓋西瓜の皮の流れるにて候「オオしんきアノ鳥の事じやわいなア「ム、鳥の事かへ。ありや沖のかもめでおんすわいなア女「ナニチ千鳥とも云ひ鷗ともいひ所に住む人ならば都鳥ともいはんしそふな物じやにナア「實に／＼是は誤つたり。名所にすめど心なく。 蓋都鳥とはいはずして女沖の鷗といはんすは昔にかへる業平の 男塚は芝原船の形女「行きき遠きアノ寺は男「エ、あの寺かあれは五の橋宇左衛門寺「われもまたいざこととはん都鳥。有りやなしやの妻戀は故郷に残す物

思ひ。それに引かへて我々は思ひ合つたる女夫間。ひよく重ねし褌と袖俱に纏れて吾妻路の「此うき波に船競堀江の川とよみ置しそれも昔の艶男「いまの此身は難波津の「堀江に近き新町に「松の位の八文字その道中の名につれて「思へば／＼かぎりなく遠くもきぬるいもせ鳥さり迎はノウ椀久さん正氣に成つて下んせと縋り歎くぞいぢらしき「サア／＼船が着きますぞム、／＼ソレソレソレ當るぞ／＼靜かにあがらつしやれ／＼「ハア、かたじけなふござんす御禮の申しやうもござんせぬ。いかいお世話に成りました。なんの禮に及びませふぞヤコレコレ女中尋ねたい事があるわいの「エ何でござんすいなア「マさいぜんから開けば大坂のものじやといはつしやる。その上あの氣違殿を椀久さん／＼と介抱さつしやる。近頃卒爾な事ながらこなさんは若し大坂新町の女郎松山殿とはいひませぬか「オ、あなたわいなよふ御存じじやがわたしを松山といはんすおまへは「ム、扱は松やま殿か「アイナア「そんなら何を隠さふなごや山三基春がなれる果じやわいなウ「エ、そんならお前は姉さんの

「いかにも小野のおづうがおもわくじや「ム、そんなら申し姉さまお通さんは「ナントした「しなしやんしたわいのふ「ヤヤア何お通は死んだ「アイナア「それはドド／＼ドドどふして「殺されて「其物語はいつの頃「去年八月中のころ「殺したやつは「伴左衛門「殺した所は「ところもやつぱりひがし山「そなたの父は「小野の道隆「それから後は文もこず「便りのない筈いなア「かへり討にあふたかハ、ハ、ハット計りにどうと伏し前後不覺に泣きしづむ「オ、／＼始てお聞きなされておなげきなさるるも道理さりながら。椀久さんもはつとおもはしやんした其時よりあのやうにお氣が違ひました。おまへもハット思ふて氣を違へて下さんすなへ。オ、よふいふてたもつたしかしおれはめつたに氣を違へる事ではない。エ道理こそ初めからおづうが顔によふ似たと思ふたがドレドレモ一度顔見せてたもハア／＼まぢや／＼あんまりお通によふ似たがもしそなたがおづうが幽霊ではないかや。「オ、コハあのさんはわつけもない。わしややつぱり松山じやわいなア「何んじや松山じやどつこい／＼油断はい

たさぬアかふも有ふかい。日頃おれがお通が事を戀しゆかしいと思ふ其心虚にのつて。コリヤ横田入の夫婦狐がおれをたぶらかしにきおつたナア。ヘエ、めつたに化する、事じやない。幸爰に青松葉是をくすべて狐の正體顯はそふ。もし又おづうが幽霊ならば時に取つての反魂香。これぞ女房淺間が嶽。もしや心のかはりやせんとかはす起請に誠を見せてすへの約束かための誓詞なぜに煙となし給ふあらうらめしや「椀久むつくと起上り二人が中へすつくと立つ。松山おかしく申し／＼山三さまわしやおまへに無心が有る「むしんとは何んじや何んじや「おまへわたしが客になつて下さんせ「エ、此人はつがもない。客になれとは又どふした譯じや「さればいなわたしが廓に勤めた時田舎から來た武士の客がござんしてその客を椀久さんがそれはたんとせつかしやんしてな。またしては口舌の種今又お前とわたしが傍へ寄つて咄したをどふやら物の有るやうに二人が中を分けさんしたはなんほ氣が違ふても悋氣の心でござんせう「オ、やきもち／＼「サアそれでおまへを客にしてしつほりとあふやうにして見

せたらば主の心にエ、サテモ憎いやつじやと思はんした
らひよつと本性にならしやんすまいものでもないコレお
がみますどふぞ客に成つて下さんせ「ハアム、聞へた聞
へた二人の爲に成る事なら客に成つてやりませふ「ア、
忝うござんすと椀久が十徳を假のはをりと打着せてオ、
どふもいへぬ羽織きさんしたら中々立派な人がらじや。
「どふじやくよいかく「オ、よいはよいかんじんの
大小がないはいな。「ヤアほんに大小まちやく有るぞ
有るぞ土産にせうと思ふたがコリヤ此たうもろこし。し
かも長いと短い二本迄有るは「オ、コレテ大小とはホ
オ、出来たく「何んとく思ひ付きの大小と一つに取
つて腰にさし。松山が客じやぞそこのけく身は武士じ
やぞ。しかも侍じやぞ、武士じや。侍だとほうやまつ
て申す。抑是は桓武天皇むたいの後胤。舞ッうんつく
太子のまうし子にて稚き時はあんだら丸。そつちは粹の
骨長狐。こつちはふられる合點で例の大小揃さし合ノル調
みがく鎌髭物がたく。女郎に逢つてはしただる床急ぎ
する酒きけん。其取形のいやらしさ。むりに抱付く顔と

かほ。調どこまでも身があひとけて見せう「そこをわた
しがふるわいなア合ふかい浅いのへだてなくつとめは同
じ事なれど。すかぬ客にははり強くむりとは知つて義理
を捨て。涙のうきめふるなでもいひぬけられぬ床の闇。
ねむる禿に囁てヒロヒタ。ば。この有るをないにして。
呼んでだまして文か、せ。間夫へしらせのいそがしき廊
下の音のせぬやうに。手くだを隠すうさつらさ合雨戸明
けても夜はあけず。合月をうらみて日を招く罰も。報ひ
も。みらいの罪も。只うか、くとしらぬひの作り病のう
きつとめ皆男の爲ばかりコレ聞かんせと椀久が。袖引よ
すれば「ふりかへり「ム、ハ、夫れがかうじた物狂ひと
ても濡たる身なれども。一村雨をいとほじと立寄る軒の
釣簾とはすしらす尋ず世をいとふ。法師々々は木の端
と。思ふはやほよ、キ渡守「川にたゆたふ船さへも「あ
ゆみがあれば渡らる、「戀の願ひもあみだ笠「うき名流
る、おなぎ澤吾妻の森のこなた迄狂人狂へば不狂人とも
につれ立つ嬌れ歌 三下り「じたい某はく大阪のもので合
ちつとしそこなふてくこんな形に返シ「なられたく合

あんまけんびきくさりとほひきんぐ捻ろぞへ合ざつと
の坊く東をさしてつん下らば形見に琵琶宮ひつちよつ
て。戀しき時にはべれつくくひつびいてはかん慰むべ
い合座頭の坊昔をしのぶむらさきの頭巾いたく竹の
杖。此十徳も過し頃ゆかりの人の其形見戀しいわいのと
投捨る。「松山涙とめかかね「中スエルいとしやお前も戀ゆ
へにちるも器量もしんだいも。皆あはざからはるぐと。
連れてやつれて戀ごろもきつくなれにし初嵐「夜寒を凌
ぐ此頭巾此船長が頂戴々々「正體もなき椀久はアレく
アレくくるはく。合沖の帆陰のしら波に羽たき狂
ふ友千鳥。ともにくるひてあなたへかけむかふへめぐれ
ば「風に散る尾花にさつと吹きむすぶ。松の木の葉のば
らくくばつと。おもひみだる、草の花露をはらふてふし
まろぶ。てんねんりんじゆのしやらくにて。花わけごろ
もひやうたんの羅かほる十とくもいまはむかしになり平
の塚のこなたにやすらひぬ。

し蝶一つ。合カン女夫そ入るへば蝶々入なれどウギン三つの
街でわかれて。つれて合下つれて別入れて涙入の露を。こ
ほしそへたるうき名草引。ナホル思ひの種の名所入カハリか
や。合ノル地鳥亂れて聲すくく玉のうてなも空にノル器具
風すさまじき夕闇も引ッ百夜入通ひしこわたの里 長曲契り
もいと深草入の少將が身のなだたるや。合ウうきをかこ
ちて打詫て。ウ戀の重荷にハシル肩入をかし引。しつかと背
に大内を。夜半に紛れて上ギン忍び。出そこはかとハツミン
シなくたどりつ。めあての星の合中オンきらくくと下月は
此身をギン捨舟のウなみくならぬ惟仁のカハリ、キ其御行
衛を奪ねわび。とへどうき世の偽に雲がくれぞと夕し
ぐれ我も煙となら柴の。もゆる思ひを押へつ、み合ウは
なれぬ中の二人づれ。ほやの薄の穂に出ていでそよ。合
そよぐ三下り小松原 木調ナナホル引トル小石交りの砂川やぬら
さじも入のと。手を引ば早瀬にすだく鯛さへ合ウ我身をな
くとふりツナギフシかへり見返りかへるつまセツユリ袂袖はひ
ろせと思へども。カ、リ戀の久世戸のあらみさき引ウ神の
とがめもおそろしとクリ上カ、リわれと我身にみをつくし中

八 芥川紅葉柵

作者藤越二三治

二上りオンチカイ「夢にさへ花にざれたるウ蝶一つ。下風に狂ひ

オトシこゝも便と立留り ▲コレ申し少將さんもつたいな
いおまへのおせなかにおはれたり又は此やうに手をひか
れたりして二人ながらうき苦勞するも何故じやどふぞ惟
仁さまにお目にかゝり

たいと折角此芥川迄來
れども其甲斐もなふ惟
仁さまは崩御じやとい
のふ ●「さればくぜ
ひもない世の有様惟仁
君先達て崩御なれば生
きてゐてかひなき命い
まもいふ通りいつそ死
んでしまはふかいのふ

▲「もとより此身は覺
悟のまへおまへさへ合點ならわたしやしぬ心なれどよし
ない自らが誤りゆへおまへ迄殺すといふは ●「ハテ又愚
癡をいやる合點の上で死ぬからは何んのいとひがあらふ
もふ夜明けに間もあるまい人目にかゝりやわるいマア



かふおじやと手を引て オクリ薄のこかけに忍びるる 謹三
出端中オン「風渡る 中空に比翼の女夫星。ハル身過は同じ荷
ひ賣。ウかよひなれにしヒロヒ昌道そよ。そよ送るそばの

二人が中のはなだ帯
解初めにし謎の橋。
ウ渡りかねたる世の
中に。わしら女夫は
いそがしく。夜すが
ら終日荷ひ茶やノル
雨にも合雪にも肩せ
い〜まつかせまか
せ八幡山。ゆみや八幡男は氣で持てどつこい〜。ひら
にひらかた山崎千間寶寺。橋本腰元がてんか〜がてん
じや〜かたせい〜めしませ〜カハリオトシふうみよし
の、花まさり。●「サア〜大和茶を上りませい言葉のは

ながもしやんとしたほまれは花の若ざかり廿の人の木と
書て茶といふ文字になるといなかほりは深き都の巽流れ
流れしその流れ宇治の名物初昔唐土にては建溪を茶の名
物と稱するなり ▲「ヤイ〜こりや女房夫を差置き茶の
つらねかいかにか夫がそば切賣じやといふてエ、聞へたコ
リヤ我におれがそば切の伸くさつてゐると思ふてみそを
あけるのか抑蕎麥の因縁は ●「なんとじやへ ▲「サアる
んゑんは ●「どふじやへ ▲「ほ〜うやまつて申す ●「こ
りやおかしい何の事じやへ ▲「又こいつが夫を尻に敷き
をるかそれ本草綱目にはくそばは氣を下しわたをゆる
くしひやくたいたいかせつりに用ゆこんなちんぶんかん
しんの早いが賞翫ぶつかげがたつた八文々々そこで坂東
彦三です ●「何をいはんすやらじやらく〜した事を ▲「い
よく〜そふいふ所のほつとりとした風は瀬川の〜 ●
「コレこちの人坂東彦三といふ者はそんなうはきなも
じやないぞへ ▲「サアそふ堅いは親父の時代さ今は和ら
かですはのふ ●「イヤもうあんまり氣の輕いのも女房の
身にしてはア世話のやける物じやてい ▲「氣がかるけれ

ばヤイ女房我が世話になるか ●「オ、世話になる此頃の
そぶりはわしが胸にはすきと合ぬでござんすそふ思ふて
下さんせエ〜〜〜エ、あの顔はいの ▲「イヤ
こいつが〜いはせて置けばてい主をばかにしをるモ
一言いふて見よゆるさぬぞ〜 ●「イヤいはふかいの ▲
「エ、めんどうな爰はなせ ●「イヤ〜放さぬ〜 ▲「放
せといふに ●「コレ待つた ●「詞ふり切る袂を ●「しつ
かと取り。これ爰な人口舌所か色所か 色カ、リいとしかは
い、眞實を引今更いふもぐちなれど、ウつゐした女夫
と思ふてか。それにおまへはにくらしい。ちよつとのじ
やれに。つめらしやんすもコレ此やうにしぬるもかまは
ぬどうよくはいつそ入し入ねとの事かいなウおまへゆへな
らいとはねど。ひよつとわたしがしんだらば。上色ます
花をいけ。かへてひとり眺めてるよふでのそりや。成り
ませぬならぬぞへならぬ〜こんりんさい。ウ假初の口
癖に。もはやいやじやのあいたのとどれ。ど〜〜
ど〜どの口で此口でか。よふいはんしたでかさんした。
合そりや。あんまりじやウ〜どうよくなとぴんとすね

たるはとりなりは。一輪咲し水仙の 中オトシ梅とならびし
 如くなり。▲イヤこいつがく／＼なましたるいるけんき
 きたふないぞ。●聞たふなふてもいはにやならぬ外の女
 子とじやらつかせる事はならぬアイぬの字じやわいなぬ
 もく／＼縫箔屋の大きなぬの字じやわいなア ▲「イヤ夫を
 仕置だて置てくれよいはせておけばと拐おつ取りふり上
 る。●オ、たゝかんせしたゝかんせサアたゝかんせとむし
 やぶり付を ▲小町少將押しへだて ●コレ二人ながら短
 氣せまいさいぜんから薄の蔭で聞てゐたコリヤ思ふ中の
 小さいかひか隣の御亭主どふですく／＼コレ／＼小町仲直
 りをさせてやりやいのふ ▲「お前もむりいはんす道の端
 に酒はなししやう模様もないわいな ●「ハアいかさまハ
 ヤそばや茶ではどふもなるまいし。でも此分ではすまざ
 れまい一トさしやつてすてふか ▲「エ、お前もたしなま
 んせたつた今死ぬる身を持つてゐながら ●「サ、そこぢ
 やによつて形見におれが舞ふのじやわいのなんと是で御
 夫婦きけんなをして下さるまいかへ ▲「イヤ是はよから
 ふ女房共機嫌直してこちらむきや ●「おまへさへきけん

うと中 ▲「こりや女房共ちよつと御意得よふ ●「あらたま
 つた何じやいな ▲「最前から見るにふたりが形かたち合
 點のゆかぬ物じや慥にきやつは此芥川のこん／＼ではな
 いかいの ●「エ、▲「まて／＼しよふが有るヤイばけ物め
 化の皮を顯はせよといふに ●「少將心付なる程そつちの
 推量の通りいかにもきつじやく／＼詞オ、それ。／＼／＼
 それいかにもわれらは狐の見いれ。イロしゆしやかの野
 邊のひとかまへに隠れも嵐の音に聞 詞おとはといへる契
 情の。古狐の骨長に。戀の良にかけられて。むすほほれ
 たる身なれども。いまはいたちの道きれて。きちきつち
 くろ／＼。なゝをりねすみ。納戸のかきがねはずが大事。
 おやのかね箱。あくろが大事。ギン過し彌生のみるく下とや
 ウ君が道中ッ小づまをしやんと。ウすあしイロスユリの雪や
 ふりかくる引。ナゲフシかぎり合しられぬ我思ひ引、エ、おか
 んせとむなぐら取つてひきすへて色どこやらあぢないひ
 がかり。ウ詞のはりの水くさき カンスエル フシ心の内をと忍び
 泣き。二人はふたりをきよろ／＼みてコリヤきつひ物。
 めうとも女夫すんどのしよてから始めから。色じやの色

がなをりやこちにいひぶないわいの ▲「そんなら女房
 ども ●「こちの人 ■「さらば見物いたさうか ●「さらば一ト
 さしやりかけふか ■「二上り歌「萩の枝折にちじ入かゝ啼は。
 ウあすはギンかならず時入雨する。雨さへしんきな事はい
 のふギンア、どふなりと。なるぞいな。「逢ふは別れとか
 ね入てはきけど。ウゑゝ悟ら ギンぬは入ごころたゝさへ
 しんきな月の顔ギンア、どふなりと。なるぞいな。こいで
 こいでと待夜にこいでウ待たぬ夜にギンきて門に立つたゝ
 さへしんきな暗きよに ギンア、どふなりと。なるぞいな
 そをれえそれ／＼そふじやいな。合下「めでた／＼の秋つ
 すや下めでたのウ／＼秋津洲や上ギンこがね柁にてよ入ぬ
 はかるよね計るあづまの踊はおもしろやウおもしろや
 下松のはごしの月みれば下葉ごしの／＼月みれば上ギンし
 ばしくもりてま入たさゆる又さゆる都のおどりは面白や
 ウ／＼下いとしとのごが見ゆるやら上ギンいぬがなきそろ
 四入辻に四ツつじに下きやらのかほりときだんとは下かほ
 りと／＼きだんとは上ギンいく夜とめても入留あかぬとめ
 あかぬなにはの踊は面白やウ／＼いもせナホルかはらぬめ

じやのしかもくぜつの花ざかり。その咄が聞たい聞た
 い。■「これは一大事のことを御尋候ものかな。■「始終
 をかたれば長い事ちよつとつまんで咄さふか。所望じや
 ／＼そおれ。花の種は地に埋もつて。ウ千林の梢にのほ
 り。月の影は天にかゝつて萬水の。底にしづむ。浮も沈
 も二人がまよひ。互に登る戀の山合わるういふのがしよ
 ての色。見。て。みぬふりが初ての戀。いつかみそのに
 咲匂ふ花の蕊がほを手折そめ。解てもつれて又結ぶえに
 しはオクリ「つるの事ならず。合ナホルたとへ此身は此川のせ
 げにうき名は流すとも。花に命は塵あくた川三つ瀬へち
 かきこのスエル野べや身のはかなさと有りければ。そふ思
 ふてなら今さらに。ウくいの八千度百夜まで。通ふたわ
 らはがうるさいのか。長地いなせのないはふつ／＼かな身
 に。なぞらへてむりな入らずとかごとばかりにさそふ水
 い中なんすオトシけしきもあらばこそ詞サアそこが大事の
 しあん所。イロ萬葉集の悪名を糺して死なねば後の世ま
 で合まよひの種の花の色朽ち行くのを、ちじよくぞや。
 ウこれより館へ立歸り。おほろけならぬ垂乳男の心をや

すめ給はれとさまカンスエルくいさめ給ひける。「小町は涙もろ共に。ウほんに思へばゆめかよ。つぎくしきの色みへて人の心のはすはさをそれぞとして有明の月夜に行はくらすからずまよひのやみのうす入ぐもり。思ひつもりし雪のよはこへし。袂を打拂ひく身をしる入雨入のよはの酒。しやくにさはればなにくれと。恨みて泣いて曉は鳥もよしなけ鐘もなれ。カンスル又ひとり寐のみだれがみ誰とりあけてゆふだすき。ウ岨のかけはしとけしなさ合あゆめばもどる小車の榻のスカシはしがきはしたなく引ウのせられたまされたらされたがわしや。腹が立つ悔しいと。いとどなみだのせき守はとどめヌエかね中オトシてぞ見へにける。●「そふ思ひつめた事なら今さらとどめやう道理もない小町覺悟はよいか。▲「一刻もはやう惟仁さまに追つき御供申すが此上の願ひ「すでに。かうよと見へしとき。中をへだつる「しづの男「賤の女けしきかはつてゐるぎ正しく▲「合點の行ぬ兩人小町と少將が死をとどむるはやうすが有てか何とじや。●「よきかなよきかな兩人の者これひと親王の御命を助けまいらせんとの

ころ盡し天の冥慮に叶ひたりされども一たん横難をのがれ給ふころぶくあり ▲小町は陰陽の和歌を詠じ天道にかなふ詠吟たらばたちまち雨はふるべきぞよ ●「少將が未來記 ▲小町が未來記 ●兩人がまよひを晴させんところは參州善通寺曼荼羅るんに安置なせし ▲佛法守護の四天と名づけし ●持國天 ▲增長天これ迄あらはれ出たるなりカ、リ二天の聲と聞へしは引岨ふき送る松の音二人ははつとおどろきてしたへばきゆる水の泡くさ。ばうらうたる。ばかりなり。能々物を案ずるに夢にゆめ見る世の喩眞如實相第一ぎくう生死の去來大虚の如し清淨けんごのみやう體をたゞ。ぢんらうの境界におかさせまじきおしゑぞと。悟ればむねのあくた川花ちる花のはな野の花さきくるひたるものがたり。のりのもしの花篋後のちかひに残すらん。

九 我衣手蓮曙 (高野心中)

常磐津文字太夫直傳 作者塚越二三治述之

■我が胸に花あればこそわが胸の。中地てふのかよひぢ

風さそふ。長地きへて。吹かれて顯はれて得失由來夢入裡の世を。ウけにころろみにとをつ國。ウかんたんの里ならずして。ウこは所も高野山オトシ三國。不雙の名山たり 詞「爰に四の黨の旗頭熊谷の次郎直實は敦盛公を討しよりうき世のすがたあぢきなく。色戰場より出家して蓮生法師と改名し。地カ、リ此高野山にいまそがる「その一睡の鬢髻と。ハル今みる如き一の谷昔に返るウ波の音宇治しゆらのちまたと聞へしは常きく法の松の風。ウ一朝の夢と破れしかば。ふつと目さましあたりを スエルフシ見てばうぜんとしてるたりしが 詞「はれふしぎな事やなわれ弓矢を捨てはや昔過つる一の谷の戦に無官の太夫敦盛公をうつたるを世にいたましく思ひそれより出家して蓮生法師と名を改め晝夜をわかつた念佛一ツさんまいにゑかうをなす所に今とろくくと睡る内はれかはつた夢を見たなア縦夢にもせようつゝにもせよ凡俗のむかし思ひ出すもけがらはしやア、少しも早うわが草庵へ歸りませふ。平家「蹴蹴踏座して昔を思ひ迷の雲も下はづかしと。下露しほくくと立あがり。ウ地さあらば我が家へ歸らんと。ウ

通ひおほへし道のべも心に辿り立歸り。ウ跡の名所もくりそゆる。其先々の ッナギフシ玉ほこや杖取直ししばしとも。我身は是も旅よそほひの。ウたれたづぬるにあらねども心に思ふ御山コハを。明暮おがむ有難さそもく、此ウみ山の形といつば八葉にひらけ。八ッの峯寺は都卒の内院をウ表し四十ギン九院はいらかを並べ下けにも佛法不退轉そのれい場の。掲焉くあゆみを運ぶも理ぞや。ウけにとことはの衣手も。スエル又こん事もたま玉川に外記アシおもかけうつす水鏡有縁の。我等なればこそけふしもこへ來りしと地カ、リかいやりすてし丸ぐけの。中オンしめてほどけて薄や萱の。三谷あま野の土手つたひ雨ふらばふれ西入の空龍臥の洞のおりくは苔ゆく露のあさむすび。コハつまづくあしもところくくともねより。をとす。たきの白絲さらりさらくさつとすがたながる、引取川淀やしかももとの水ならで清き流を汲みて知る合ウとくくの水わらんづの紐入は裳にとけかり。中まへでむすんでうスしろにむすぶ藤の花中夕むらさきの色々は上彌陀の御國のしるしぞと感涙にしむ紫竹の杖。花扱

の茶屋こへ行けば入日まばゆき合群鴉あひぐら中そのかたさまの
うはさにや。まつにかひなき三鈷さんこの松。合あくればがた。
さむきたびのきぬわれにもひとへかした村はや。ぬか
星をふきいだす木の芽峠の夕あらし。はらはらはつとふ
き落てヲドルまことをはこぶ道芝を踏み見ん身とは思へど
も引心の迷はれ難き。上こ己身の彌陀や唯心の淨土をたづ
ね諸共に一つはつ連に法の師と尋るみちをしるべにて。クリ
上われもウ思ひのおき所しばしは是もやどりごととオクリかた傍
にこそは休らひぬ。三下り「高野かみそり一挺かふて入たも
れのさウふたり輪廻の黒かみそりて。ウこの世からして
下れんけにのりて。ウ彌陀の御國みくにでよめおとごとへ合ふき
そゆるギン風にうき名も高たかの山出長地若葉ウあを葉の道茂り
合ひ。ウギン隠れ忍ぶによけれども。ア、顔が見にくの。
朧かけ。カン春の名残の花下のゑんウ蕾の花をちらしゆく
ウタガ、リ 姿愛らししどけなく。レイゼイまよひ出たるたそがれ黄昏
に合ほのくかほる白無垢につるぬぎかゑてウ衆之助。お
入むめも共に下ほうかぶり。中地たれにならひし合妹ウ春
事。ハルウき世のウセフウちウぎり。かなはねばウながき未來

をギンねがはんと腰にしきみをさいたづまわかくさより
もウッキエウ草むすび。上つまぐるじゆすの玉の緒もたへな
ば合たへよとウ忍びあひ。ウけふはしんみの女夫づれ今見
はじめの見おさめと。おもふにつけて父母のさぞ未來に
てウわれくを。にくいやつともおほされん。そのお吐
をうけん中オトシとて冥土へいそぐ二人連詞これお梅どの
ふしぎな縁から今のうき身。とに付けかくにつけ此衆之
助は死なねばならぬこの身そなたは女子の事じやによつ
て人も見ゆるしそふなもの何んと思ひ直して死なずにし
まふて下されまいかや 詞何を水くさい事いはんすやら
長い未來で女夫にならふと二人言合せての死出のみち
お前一人死なんしてわたしに跡にのこれとはそりやあん
まりどうよくじやそんなむごい事いふて下んすないなア
三下りウ歌わしはお前の。前髪を長き未來もウわしが此合ウッな
をさぬひたいそ入のまに見入たり見入せたり六道のタ、キ
の辻の街ちまたは多くとも。ウはぐれまいぞとゆふべのそらに
中とぎれくの戀のウッキエウ橋。渡りおほせし入氣苦勞は舟
にも車にも合ウつまるだけはと御墓の石を。一重 合ウつ

んでは親のため合二ウ重ウつんでは身にかへて夫のためと
より添へば。「エ、ぐちらしいなんぞいの。何ウかと思
ふ何かは歎く。長地たウ入世の中はこぎゆく舟ウツナギあと
しら波のうき名川ウゆききの人のカン回向にも是こそ。
お梅や。衆之助。ウなきしるしぞと口々に高野へ入のほ
る折りからのウ譏入をウ残すをせめてもの。かたみと思ふて
死んでたもふとした縁が。悪縁の互にやいばを身にウ
けて。ウいく重の罪を三ッ瀬川えにしも浅き身の上と。
くやみなけきてウレヒカ、リ 伏沈む。●お梅は涙目にもち
て。ウわしをぐちじやと言はしやんすお前がみんなぐち
じやぞへ。死ぬるはもとギンよりよろこびといひかはし
たはうそかい。なアぬる夜の首尾に。おほぞらを通ふま
ほろしあひもせ。ぬ合長地カ、リうき身のつらさかなしさ
は合相圖の袂うでひく時にぴんとさんしたにくらしさにくい
も合元はかはゆさの。ウあまへてお前にくひ付いた合紫匂
ふふかい中あふた上ギンウツキエウ契は片岡のもりの下紐とく
るより。長くもがなと願ひしも夢や現に見なして。●
「同じ姿で▲「同じ日に●「死ぬ計りが▲「まことごと

「人目なければ抱きつきカンスウエルくどき歎くぞ道理なる。
詞「ぐちといふそなたもぐち 詞「しからんすお前もぐち
二下り「愚癡あればこそ入誠があると世々の教へのかね事
やタ、キ七墓めぐる修業者の。合夜なくわくる草の露合
はらへどつみを置そふる。世を助け人ヲホル世捨人。詞蓮生
法師立出給へばそれと見るより二人も便りこれ申し御出
家さま詞「なんぞす詞心ざしの手の内とさんやかか
さんのため詞「ホオ、どれくヤレくしほらしいても
扱もやさしい心ざしじやのふオ、ゑかうしてやりませふ
なむあみだくくくく 詞どふぞふたりが 詞「エなん
と詞「サアあふたりが親たちの回向をして下さりませ
い 詞「ム、ハテかはつた事をいふ衆じやわいのた今も
とさんやかさまの回向といはつしやるゆへ回向をし
てしんぜるにまたどふぞふたりがヤアトいふたりやどふ
ぞふたりがおやたちハテいかい事親たちがあるのオハア
ア合點がゆかぬわいの 詞「なせにへ 詞「ハアテかふ見た所
がふたりながら賤しうもない衆じやがそれにまあ供をも
つれずたつた二人此高野の山奥へハア、きこへたわいの

「さてはふたりの子どもしゆは。戀のいろはか角もじか。りんきか癡話かいきはりか。ふたりつれだちそろりくとウ高野の山を。これにもかまへてさいてくりよ。合さいてくりよ合さいてくりよと思ふて詞「エ、いやらしいなんじやいな契情ではあるまいし合「それは野女郎やすき女郎の事なるべし三界をはしりめぐる此坊主はあなたのかたではしつちよちよしちよちよ。こなたのかたではでん。でん。でづるでんづでんとうちめぐりて炭のおれか。詞木の端かといふやうなこの法師。回向をなして参らせんと。しさいらしけに合掌しそれ揚屋の體をながむれば合太夫ひきふね弘誓の舟合中ウながら聖じゆ來迎の落日のまへ巾着合▲「總花のふる大じんを取りとめんとて大一座。●隣へハハ、やらじと臺の物。□中「すせん蓮花の上に坐し八功德池の水遊び。▲「たがいに▲「くひあひ●「そしり合ひいきぢやははりや▲「佛も▲「みだも●「元より衆生さいどの爲さあらばおいとま申さんと。今を最期ときも付かず。我が心さず敦盛の●ハツミ「御墓の方へぞ行過る 詞「ヤアお梅どの人目にか、ればわるい覺悟は

よいか 詞がつてんでござんす南無阿彌陀佛々々々々々々カ「かひなき命。ながらへて入何かおしまんいざもろ共と。最期をいそぐ折しあれ合かねる紙屋の礎のひき山に明け行く鐘の音見付けられてはよしなしと。カン袖と袖とをしほり合ふ涙につれて雨はる、上名残の露やおきそふる。しづ枝敷そふ残んの櫻さちりふち入り行く命のきづな。心中。諸願。しつ地成就のウおしへは爰ぞと脇差を。珠敷にもちそへぬきはなし。互に御名を唱ふれば折からきらめく峯頭は月。コハリ銀々ととりわたり樵歌半斷愁情をクリ上催す夜半の松の風よその哀を吹そへて四方に其名を残りけり。

一〇 おなついへめいしよいもせのかきむ。清十郎家名所妹脊笠紐

常磐津文字太夫直傳

三下り長崎ヲシ「戀といふ字を。金絲で縫せ。ウギンすそに清十郎と寐た入所。ウ入く。ナホル中地覺ても元の夢の世や。我名はまだきウ絲櫻。ハル地夜半には。合おしやひるならで。ウ人はそれともし入らすけの。合いハシルたゞく笠はギン輕けれど。おもきは父のかたみごと。長地笠に浮名のもる

る香は 色カン花のさかりの入もろ姿サハリ上袖にふ入くめる戀風は。中地 濡のはじめの梅の雨露も外へはもらさじと隠す合假屋を教ゆるもハル戀ウ故くらき迷入ひのやみも。ウてらす手しよくを案内にてざしきカハリハツミ傳ひに合入忍び路や引 此所出 戀の白波ギン入深かかれと。長地カ、リいだきも入つる、柳がみ。濡てもねんとかね。言の引合ひひかはしたる妻ならでおもきがうへの入さよ更てウ中オンユリ聲もつゝむと。コハするがオトシなる。中地 狩場の假屋此軒も。立ならびスエルフシたるはじめぞや 富十郎セリ「是申し時致さまおまへも清十郎と名をかへて世をお忍びなさる、も大望のある故。もふ爰が狩場の入口でござんす随分きをつけて見さしやんせ合點かへ 八百懸セリ「扱もくそなたは深切な人じやなう今迄は假屋の案内を知らん爲わざと假のたはむれ事其心底を見るにつけ今更面目もござらぬ去ながら五月下旬首尾よう祐經を討ならばどふで此身も死ぬ覺悟生ひ先長いこなたの事二つには又親への孝行是からはおれが事をふつつりと思ひきつて下されやはおなつどのへんじをさつしやれいそおなつどのどふじや

ぞいのふ 番ル「おなつはそばによりそひてどれ顔見せて下さんせ入人にはつかり思はせてギン憎い モツしようじやないかいな 長地わたしやお前に身を捨て、ウウき名いとはぬ心根を。ウほんにかはいと思ひもせいで合中オン外に逢ふ瀬のさそふ水いなんと思ふうき草の。むごい任方じや胴慾入ないやがらんすを知りながら。常にお前のその笠をきて出さんすが目について。ウ花見遊山のさきくもゆききの人の其中にも。扱もよふ似たお前じやないかすけ笠がよふ似た 下風と下オンこがれくしウオン明け暮れも。ウ思ひ亂る、わしじやもの入つれない心じやどうよくなと。袖にすがりてくどき泣き カンスル 聲も立てねばいと猶思ひくらべて清十郎ハア、うれしの人の心やな。長地 兼てこなたの知る通りハリガハリ深き願の有るなれば。ウ末のかたのため成り難し。本意を遂げた其の上は情の恩は忘れまじ。ちぎりは深きえにしぞと手を取りじつとしめる手を ヒロヒし。め。か。へしたるふところの。ひよんな心とつめられて。色づく肌の紫もギンゆかり尋ぬる奥座敷 ウ忍びオクリ「く

てひそめ行く引道 二より人めなれば 入ウタカ、リいとほ
ぬスギン戀に下姿いとへば音隠す。上てうづの水を汲みな
がし明うる合カルクヒロフふ。す。まも濡れて行く。中ひ下オン
へたる足をつい キンわりなくも二人が中の。宵やみは
ナホシ月も思ひの有りてかと引ウいさむにかへて程もなく
雲。はれ出づるうしろ山引下紐とけぬ恨貌うらみかほ。それには
しも長廊下引道庭の千草も濡れて中ぬる夜露をいとふウ
袖スハシルの笠タ、キそなたの露に濡れがみの亂れ果てじ
と取りすがりかうなるからは二世三世うさもつらさも語
り合ひ中オン替るまいぞや替らじと互にカハリツキユリつまと
みちのくの忍ぶにもるる。風のとが引ウ棲ももすそもほ
ら〜と卯の花まがふ雪のあし。ウ又おしへ行く小柴垣
夜半に紛れし道草や引道其引下木の間〜の品さだめ合カン
今見るやうに思はれて過ぎにし頃の花の宴 長地カ、リその
夕暮に。ヒロヒ結。び。そめぬる夜の床に引しめし。その
色緑のねもさへて 三下り歌 「宵は待わび。カン 夜中は恨
み。ほんに夢にとうた、ね枕中鐘にせかる、憂き思ひ合
おきさんせきたわいなさいなおまへも思へば無理ばかり

り。どふなりとへあはぬはづならカン 夜毎の夢も、ほん
になま中見えぬがよいに 申うつ〜うか。〜ひぢ枕合お
きさんせきたわいなさいなおまへも思へば無理ばかり
どふなりとへ淵は瀬となるカン 男の心ほんに指折り數
へりや夢よ中あはぬ昔がましぢやものあはぬ昔がナホルツキ
ユリましじや物カン 薄きちぎりと。白絲のむすほれとけし
寐巻帯スエルフシあだになり行くあぢきなや。ハリマサハリ今
の手引は。あしたのオツ露の 和韻死出の旅路の道引きと
手を取りかはし行さきの合シアルあし入も進まぬ。飛石傳
ひウ妻とあゆめばかたからぬ中を引取吹ちる引道其花ふゞき
風がもてる鐘の音も下しの〜めしらす横霞白一文字
コハリたな引きし小もんむらがう群鳥あけぬさきにとおし
ゆれど合ウオンまくの定紋おほりなきなごやの。笠に濡る
とも。討つと定めしその假屋爰にあり〜有明の上月に
星こそ忍ぶ夜の。戀のあだかや身の仇とカンツリ上尋ねた
づぬるちぎりかもいく世の春をやかぞふらん。

一一 床とこ響水とこ仙とこ 作者 據越二三治 並木良輔

「轉寐の枕にたてるまほろしや。ハルそれにうつゝの
合カハリかけろへば寐て見ぬ合夢の身にしてみて。ハル胸ヒロヒ
レイセイイカケろへば寐て見ぬ合夢の身にしてみて。ハル胸ヒロヒ
おどろかす夜嵐も。中オトシ我にもとふコハこだまかち
ぢに心を。お。き。ま入どふ。上霜のやいばにきへて行
く。カンはだへの雪の死顔も 長地えんにひかる、黒髪のみ
だれて物や合思ふらん〜。上雲にさへぎる三井寺の鐘
かう〜と。告げ渡る 詞 矢橋はふつと目を覺しかしこ
を見れば我子の死骸思ひ寄らねばびつくりと氣も狂亂の
身をあせり立寄らんとは思へども我身に誓ひし戒しめを
破られもせず捨られず心にわだかまるりやうの玉
のたまの緒もきゆるカンスエル計りにふし沈みふびんの者
の有様やな中オンま、敷中と死ぬまでも。詞 我れを恨みて
此世をさり。嘸ぞ。かなしかろ。口惜しかろ。ウ母が心の
悲しさを推量してたも推してたも。いとしの子やとかき
オスくどき聲も惜しまず歎きしがやう〜と顔を上げ。
詞 これ里松必ず必ず邪慳な母じやと思ふてくれるなよそ
なたの爲には眞實の母じやハイヤかふ計りいふては合點
が行くまい。何をかくさふ自らは。する海底の龍宮城に

宮仕へせし女なるが或夜の月のあきらかなるに龍の都を
うかれ出で爰よかしことさまよふ内なんせんぶじう大日
本山城の國おたぎの郡みぞろが池の辻堂へ立寄るともな
くうつゝ共なく一人の殿御に逢馴れてもふけたやゝはそ
なたじやわいのふ。えんも月夜の月の光は鞍馬の山へ入
るさのやみ。戀の闇路にうか〜と龍宮城へ歸りしに。
生をへだてし人間とついたらかりのまさな事。龍王へ聞
へ罪せられ位を奪はれうき苦勞。ある時龍王勅を下し其
方元の官を望まば粟散邊土近江の國瀬田のあたりに住居
する秀郷が妻となり。彼が所持なす夜光の珠を奪ひ取つ
て立歸らば、其功勞にめんじつゝ位を返し與へんといと
も畏き勅を受け。再び此地へ浮み出で。傳につてして此
家へ入込み。あら嬉しやと思ふ内。思ひがけなくそなた
に爰でめぐり合ひ。飛立つやうに思へ共大願には代へま
じとわざと見知らぬ他人むき。かはいそふにしほらしい
事いやつても。叱つたりつめつたり幼心に此母を。むご
いものじやと思ふて死んだ心の内。思へば〜あぢきな
やウ堪忍してたも。こらへてたも。おしやいとしゃ可愛

やと。癩とつかへに氣ものほり。たゞうつとりと。詞ハハ、ハ、「いとし我子を肩にのせ。てうちくあわ。かぶりくや。ありやどこ参り石山参り。あづまからけや。おしよほからけの。あいよは上手ころぶはお下手。おさな遊びの大道廻り。こめぐり。お月様いくつ十三七つ。まだ年や若いな姿見せずにくるりとめぐくるり。くるりくるりくくくかざ車。めぐる因果の。車の輪。聲もかれ野に。引捨てし。ハネハツミ薄が招く。合菊がうなづく其中に。恨みの葛のありく」と。氣も狂亂のぐどく」と。思ひはカハツキユリやまと撫子の花サハッへ實さへ猶更に合同じ種とて人間の。から紅に咲く物を薄くも濃くもはな衣。ウ情なふも秀郷が手に掛けられてこのていと。うらみつかこち身をあせり。とやせん角やと思へ共。さすが恩愛。淺ましく心に込めし言の葉をはつたと忘れ。ヤア思ひ出して氣を取直しハア、そふじやなニ上りとても我子に今一度逢見ん事もかなはねば。詞未來を照らす夜光の珠。菩提の爲や身の望み叶へてたべとコハリ觀念し血汐のけがれに近づく手足もわなくく。

ふるひ。わなき。合したひよる。念力かたき石山の。觀音さつたの力を合せ、てたび給へとて。我と逆立つ鱗の利劍下コハリ所は湖水の上が瀬や下オン星か螢かはらくはら。みづに流る、せきりうの村雨過ぐる花ふき。こかいをかけるかう龍の。勢するどくとはけしく。合ヲドル波をけたつる和田の原。はたひろ餘りの大蛇の姿。障子に寫り怒りの顔色。我子をかき込み立寄りしはおそろし。キノヒ三重、かりける有様なり。一セイしら波に嵐の音のはけしきは名にし粟津の松原を。ともに誘ふて寄せぬらん。出端抑是は。田原藤太藤原の秀郷とは我事なり。われ勅せんにゑらばれて。平家出立つ其日の裝束には世々忠臣を立烏帽子。合花緞子のこきくれなる。鎧を取つてざつくとマヒン着なし。紫いとや練貫の合ニ重小袖や太刀むかばき合ギン長絹の袖さはやかに。弓と矢携へ。あたりをはらひ。威風りんく、だうくたり「山頭には夜孤輪の月をいたゞき。洞口にはあした一べんの雲をばく。物さはがしき我家の體。太刀わきばさみ。物の具堅め。立出で見れば女房の矢橋よな。けしきばふたる

其有様。様子を言へ何んとく。エ、恨めしいナア。ム夫に向ひ何が恨めしい。サアその恨。と。いはんとせしが胸おし静め。脇へ取なす目に涙。おそふ來ながら憎らしい。思はせぶりか。何んじやいな。すいた男とめき、して。いもせ結ぶの神さんの。お世話たのます馴れ初めの。女夫の中じやないかいな。何疑ふて何聞いて。當にかはりしお姿はわけがあらふ言はしやんせ。サア言はしやんせくと言ひくろめたる取りなりは。雪に柳のたよくくと。さはらば消ん風情なり。秀郷。里松を引つ抱へつ、立上り。コリヤ矢橋。わが恨めしいといふは是かと。死骸を見すれば。矢橋は詰め寄り。恨めしうなふて何とせう。何が「來よふが「ヤア、「サア來よふが遅かつたによつて「ム、夫で恨んだのか「アイ。何じややら人にばかり氣をもせて「ム、待兼てか。かねに待夜も八聲に別れ。さくらに見初め螢火に。こがれ、て心にかゝる秋の月。冬の閨の戸ひきしめて。はね打かはす小夜千鳥。ねざめく、に愜氣して。分けの有たけ眞實の。お内儀さんの有るけれど。こちの心は。わきめを

ふらす。女子同士の。あいそくに吸付け多葉粉の付けざしも。心で詫して吞むわいな。是きかんせとよれつ。もつれつはひまつはる、蕩かづら。寄れば「突のけ引はなし詞秀郷詞をあらためて。汝よく合點せよ。假りの親子の慈悲をたち。某が手にかけしは。誠の親の將門が。朝敵のとがめのがさんと。そちへ對して寸志の誠。あらく「ヌエルン語り聞かすべし。イデ其頃は天慶二年冬の空。朝敵退治の官符を給はり。下總の國さる島郡に押よする。敵の城には兵具をつらね。くれないの旗錦のはた。紅葉かやく時雨の雲。らんぐいさかもぎ備へを立て。待掛けたり。其時秀郷。駿馬に鞭うち。手綱かいぐりゆらりと乗り。士卒を下知して味方をいさめ。江戸サハリたとへば將門魚鱗にかゝり。後に猛勢屯をなさば。鶴翼自在に合かけ合ちらすべし。純友大手をつよく防がば。味方の勢をまきほぐし。手痛く攻打ち。うち寄せく。オ、くくく、くく、く、おうぎはぐんじゆつさせいのじゆつ。爰にあらわれかしこに隠れし幼子の。死の縁すなはち法の道。煩惱有れば菩薩の縁。身の願ひ

とは乳の下の夜光の珠を取得たらば龍宮へ立歸れ。知らずや汝八歳の龍女も。南方むくの成道を得たりとや是れ。經論合のふかしぎなり。望のたんぬ其上に。何に心の引かるゝぞや何故とは曲もなや。雪折れ柳のみどり子は。秋より後に散行く秋の。もとあらざりし身なれども。かりの色かの夫に別れ。我子に別るゝしんるのほむら。みやう火の羽風ッ仇なる人につきまとひ。上恨をなさで置くべきかと。ッ念力するどき心の刃。心の劍をふり立て。ふり立てたち向へば。あなたへくゞり。こなたへはづせど合獅執着の立さらで。かけるふ稻妻合水の月かや姿の花か。ちらりちらり引取上ひとみをめぐるせうめいの 蕭見上れば雲の波煙の波。ッぜんくゝとして。かいまんくゝみなみの海の八千里や。北のなぎさのいを淵も。かりの我子へ追善に教へはじんだつざいふくさう。へんぜうを十方みめうじやうほつしんぐさう。合御法も深きみづうみや中カントメ代々にたへせぬ秀郷が。田原の系圖。龍女のほまれ誓ひは。永き瀬田の橋今の。世までも言傳ふ。

一一一 妹脊塚松櫻(八つはし又は二人淺間)

作者塚越二三治

歌ガ、リ「春の湊は。何々送る。合花をからけて。いかだへのせて。合うはきな波の追風まちて。戀の重荷を地つみならべ。あだといふ字の帆をかけそめて。情の磯の船まちは。沖にこがるゝ。姿かや。色詞けいゑん燈くらふして。心いよくせきれうたる。曾我の十郎祐成が義理もなさけも。一重帯。めぐるゑにしの仇心こがるゝ胸の埋み火や。ひさけの水のわく火鉢けに春ながら雨ひへの。そのせうかうの露は又。そはんの竹を染なして「戀したふ身は渡り川。是ぞぎやくしやうそくほうを悟りもやらすうかくと。迷ひ初たるうかれ妻。八つはしが立姿合^{平家}。二人ならびし。かけるふの。命掛けたる眞實に煙ゆかしき多葉こ盆。胸のほむらのしるしぞと。小棲衣紋の。しなやかに。花ふり。レイゼイかゝる。八文字。地風にまたくともし火の。きへぬ内にと。したひ來る。松にこがるゝ執着の。中地 櫻に引るゝ魂魄も。戀と恨のいかまへ。男なりけり又女子とも。見れば見かはす顔と顔。

それがあらぬか。雪。と花。つもる思ひと散る思ひ。けだつの衣の。袖袂。うらみの山の道づれに。是まで参りさふらふぞや。二上。「恨めしや」うらむ二人は娑婆の人。「われはめいどの」ふたりづれ。實と嘘とは紙一重。合隣屋敷のくぜつさへやほな浮世と笑ひしに。今は我身に立おをふ死出の山風はつと江戸ガ、リ吹いては。吹きちらす。是も心のみだれ髪。とけてほどけてぬし様の。胸の内をと。立よれば詞「祐成は氣もつかず。ム、八つ橋か。いかふ來よふが遅かつたが。もふ此祐成に倦が來て。なんぞ外に面白い事が出來たもしれますまい」のふ恨めしいのお言葉や地「外にもしやとうたがひの男心の。憎らしや。抱て寐た夜は我ならで。地よそのうは氣は。せまいといふて。だまされたのが腹が立つ。合ア、いやらしい。なんぞいな。お前は悪性したらいで。實な。わたしが心根を。お前はうそと思はんするサア。言しやんせそれきかふ。イヤ。いわしやんせと立つ居つ。顔も姿も其まゝに。いづれ菖蒲と杜若。色を。あらそふ風情なり。詞祐成はぎよつとして。コリヤどふじや。こちらも八つ橋そ

ちらも八つ橋。顔形なら衣裳なら寸分替らぬ二人の八つ橋。はてめいよふな。どれがどふ共いひかけよふ詞がない。「ござんすまい。尤しよてはわたしがあやまり。虎さんといふ眞實の深い中をさいたわたしがとがなれど。そこが迷ひせふ事がないわいな「ござんすまい。尤初手はわたしがあやまり。虎さんといふ眞實の深い中をさいたわたしがとがなれど。そこが迷ひせふ事がないわいな「ヤア。深い中をさいたはわしが科なれど。そこが迷ひせう事がないわいなまでが同じ事じや。コレ八つはし「爰にゐるわいな「ヤはんの八つ橋「何じやへ「イヤサ誠の八つ橋「オ、こわ「こわ。いやそつちよりおれがまあきみがわるい。ム、聞へたく。コリヤどちらぞは偽物で。おれに意趣でもある物でがなあらふ。ハテめいよふな「コレそこな偽者「コレそこなにせもの「大事の祐成さんに。用が有つて咄にきた物を。そなたは何の意趣が有つて咄のじやまをしやる「大事の祐成さんに。用が有つて咄にきたものを。そなたは何んの意趣が有つて咄しの邪魔をしやる。「それそふいやるのがじやまじやといふ事いの

ふ「く」エ、ほんに「エ、ほんに」なんのこつちやいな「ア、二人共におだまりく」。ほんの八つ橋にはたしかな證據がある。曲輪ではやる早言を教へて置たが。おれが口に付て。つい言た者はほんの八つはし。言はれぬ者は偽者。サアそれがいはれるか「サアそりや何とへ」天王寺のとうこのめうこの法印坊とおいやる「そんなら我等もかきくけこにまみむめも。たちつてとにさしすせそ棚なお敷に箸百ぜん。津の國のく、鼓が瀧をきて見れば。うへにはたたん太鼓のよつつくくには置たかおかぬか。ちんなべちぎりき。下戸も上戸も。うんのめさわいでな。たはむれ遊べる。たはむれ遊べよいやさ。踊はありやく」。はつあよいやさ「イヤ是でもしれぬ。ハテ口惜い。一ト思案せずばなるまい。ム、ハア、有るく。有ぞく。ほんの八つ橋なら覺が有ふ。おれが作つたうたに振を付けて教へて置た。サアそれが踊られふか「サア夫は「なんと三下り歌「櫻ぞめきの。朝がへり。合見初めて今は。合淵となる。そりやほんかいな。合ほんに浮世に川がな二つ。思ひ切瀬ときらぬ瀬と。合逢な

れし夜は。五月雨の水も洩さぬ。なかくは。そりやほんかいな。合ほんにわたしが。心は二つ。逢ぬつらさと戀しさと。合思ひ積りし文月の星の契りは聞くもうしそりやほんかいな。ほんに勤めと誠と二つ日本堤と名に立て。身は朝顔の。露ときへ野邊に。妻こふ蟲の聲。そりやほんかいな。霜夜ぞすだきりくす。鳴音や袖に。こふるらん。詞「是でもしれぬ。幸ひく。奥に櫻姫様がござる。どちらがどふか見分けてもらわふ。櫻姫さま。く」といふを聞くより一人の八つ橋。すつくと立ち。我はこれ清立が亡魂なり。櫻姫は奥にとや。どれ。「迷ひの雲に引れくし幽魂の。櫻にまとふ風のおや。付まひ行く執着の姫をめぐけて三重「祐成跡を見送つて。コレ八つはし。く。「祐さん八つ橋は爰に在るわいな。なぜにお前は。其やうによそくしいぞいな。今更いふも。ぐちなれど。虎さんといふ眞實の。ふたり深いを合點して。逢たはみんな。わたしが邪のはて。悪いと知つてまसान事。長地 心もすまやすみやらず。明していふもはづかしく。松のりちぎは氣に入らずさくら浮氣は散りや

すく。うつろひやすき人心。みらいかけてをほごにして起請をやいて恪氣させ。面白そふな其顔が。腹が。た、いで。なんとせふ。但は無理と思はんすかと。理に理を押し戀のわな結びめ。かたき恪氣なり。「祐成とかふのいらへなく。恨は道理去ながら。ふつと逢馴れ。なれ染の女夫の縁を水にして。二世の契りを思ふてたも。願ひ有る身を察してとびんとそむけば「すがりつく「はらへば「したふ村雨の。「去つて歸らぬ合「水の音峯の嵐のさらさらく。ろくしゆ俄に鳴動し。合梅も櫻も散りくばつと。髪にもつる、柳の緑の。きれてはかなき祐成はかつばと。たをれ伏まろぶ「八つ橋側へとあせれ共此世あの世とへだつる山「まうしうの雲立覆ひ。しゆらの太鼓と諸共に。それと知らる、かしくやくの責。煩惱業苦の娑婆の現象今爰に。目前見するぞ。淺ましき。合けんずい地獄のくるしみは。きうちうにて身を切る事。千断して血はらうぜきの。ばん死はん生果しなく。劔じゆ地獄の苦しきは手に。双を取り。指を切り。髪を切つたる空誓文合せきくわつ地獄の有様は合。紋日物日の客のかす。

ゑんと。誠に。かけ引の。切れ文血文ふりかゝり合嘘の涙や床の内。口舌はたちまち焔と成り。見せの火鉢はせうねつ地獄。ゑんくともへ上れば。合堪兼ねもだへ木蔭へよれば。合梢は合。劔の。雨霞とふりか、れば合「あけに染りて立迷へば。くろがねの牙ある犬我をめぐけて責めくる聲。のがれ難さにせん方なく。打てども合。打てども煩惱の。江戸サハリ 我とわが影じや淫の罪。左右に立ちたる酒の波。人を焼たるほむらは又みやう火と成つて。打かけく。逆捲けば。合仇に誓ひしせいしの烏合「く。ろ。が。ね。のはしをならし兩眼めがけて立まふ姿。爰にまぬがれかしこにあらはれ。コハル地 無間ようちんあび大ぐれんの氷にとぢられ。ふるひわなき苦しむ受るも身の罪と。天に叫び地につくいき。つち風。山風。さあく。さつく。さつと吹くるはやち風。吹立られてくるくく合。あら堪難やといふ聲ばかり。残るはこだま松の風姿は。消えて失にけり。地カ、リ「夫とはしらで祐成は。戀と情の迷ひの雲晴ぬ。思ひのいやましに。「床しなつかし戀しやと。跡をしたひて三重 驕 夫れ娑婆

電光のさかひには。恨むべき人もなく。悲しむべき。道もなし。地有し昔の身にしさへ。名も墨染の顔かたち合不思議や。合一ト間の陰よりも。合_合道具屋邪淫に沈みし式部卿。清玄が怨念の。よろほひ出しおもかけは。あはれにもまた。恐ろしく。合_合タキ姫の顔はせ打ながめ地水火風は。かへれ共和尊かへらぬものは妄執の。ゑんぶの塵に。さそはれて。たへず流るゝ血のなみだ。手ふりく泣居たる「夢ともわかず櫻姫。むつくと起てあやしげに。胸おどろきて聲をかけ。詞のふおそろしや。そこに居るは誰じやいのふ。誰じや。誰じや。永開「誰とは。つらやどうよくや。君ゆる沈む破戒の罪。うかみもやらぬ」清玄が。魂魄此土に止りて。「来たわいな。くは是来たわいな去とては恨は君よ情なや」あたまの丸いはおきらいか二上り「丸に山嵐と詠めば。まるに嵐を付させたがりやりますわいの。付させたがりやりますわいの。丸に嵐を。つけさせたがりやりますわいがへ。付させたがりやりますわいの。コレ。コレくく。抱てねくして下されと又さめくくと泣居たる詞「エ、情ない清玄様。輪廻をは

なれて浮んで下さんせ。南無阿彌陀佛。々々々々々詞「エ、聞たふもない。念佛とは穢らはしい。コレ。姉さん。いや。おしやつたりな。どふして思ひ切られふぞ。コレ君。きみと寐る夜はまくらも入らぬ。二上り「たがひちんく違ひの。おて打違ひの。お手枕。じつ。どふじやへ。ヤトトンくくや。ハ。ヤア、月はさえても心はやみよナホル「くらき迷ひを照すは君よ。晴ぬ思ひはほすかたも。よるべ定めもなきがらの。「あなたへはよろく。こなたへはよろく。よろく。よろく。よろく。よろめきなから執着の糸をたぐりて玉の緒の。姫が方へと立寄れば「姫は心も。きえくぐにのふ悲しやと振はなす詞清玄。大きに腹を立て。ハテ。あて事もない。何がそれ程こはいぞへ。こはいものなら。コレくくく。二上り「狸どの。狸どの。お家の。鼓はどふぞいの。たつほ。く。はり上て打たんせの。それでは合。おなかもたままるまい。尤じや。く。狸舞を見さいな。く「エ、恨めしいな「とても叶はぬ戀のやみ。共に奈落へ連行んと。つかくと立寄ば。「櫻姫は心付き。友切丸を投付れば「清玄おそ

れてよろほひのき「放れてすがる戀のかげ。「あだにせかれし涙か雨か「命は則ち水の泡「風にしたがひ廻るが如し「魂は是籠中の鳥「開くを「待つて去る事はやし「思ひは家路に立歸る。輪廻も今はうかみそふ。池の蓮の絲長き法の。誓ひぞ頼もしき。

一三 松似候男姿（松風） 作者 塚越二三治

鼓歌「残る世のしるし見せたる。浦の名や長地カ、リ「須磨も都のわけ里に。中地かはらぬ色の松一木。ゆかりの。合葛は帯になり。綾と錦に染あけて。互にとけぬ別れ路の。あふ夜を。夢といつ迄か。カハリセイ海人の鹽木にこりもせで。かゝる思ひに袖ぬらす。野分。汐風。むら時雨。凌けば凌ぐとりなりも。昔忘れぬ風俗は。いでや都へ行平の。かたみの烏帽子。狩衣も仇にさへられ。とゞめられ。中地忘れ兼たる面影を。夫と見せたる鹽ぐもり。悄然と。立寄れば「松風姿を見るよりも。詞ヤア行平さんじやないかいな。お前は都へ歸らしやんしたと思ふたりや。ド、どふして爰へござんした。わしやすつきり合點が行かぬわいな「何んじや。おれが爰へ来たが合點がゆ

かぬ。ホウコリヤき、所、どふやら物の有る一言。色位詞越鳥南枝に巢をついばみ胡馬北風にいなくかずや「エ、嘘らしい問ふにや落ちいで語るとやら。ソリヤ故郷を慕ふからうたで。何んの爰の事である。わしや聞たふないわいな「ム、スリヤ。おれがいふ事聞度うないやうになつたか。ほれるも早いがあきるも早い。ア、そふいふ事とは露知らず三下り「哀れいにしへを。思ひ出ればなつかしや。ナホル地カ、リ互に見そめあこがれて。傳と便りで行逢ふて「夫から末が縁となり。おかしい事やつらい事詞「ハア言んすなそりや。モ皆んな此方から言ふこつちやわいな「重い軽いも厭はずに汐汲む業の。合其ひまも戀の奴に肩をかし。合雪と花とはよふにた貌で合雪に迷へば消えもせめ「花にほれてはうつろひやすく合雪がましか合花がましか合どうせふかと「互の心打とけて。あかしあふたる女夫中。文セみとせは爰に須磨の浦。合都へ登り給ひしに。此程の形見とて。合御立烏帽子狩衣の其お姿を見るにつけ猶いや増の思ひ草葉末に結ぶ露の間も忘るゝひまも。ないわいな。あぢきなや。形見こそ今

はあだなれ是なくば「忘るゝ隙も、あらふとは。夫こそ戀のうはの空。どふ忘れられ悟られふと。かつばとまろび。恨泣き思ひはいとゞ汐煙り。ほむら。あらそふ風情なり。」行平卿はしら／＼しく。詞そりやこつちも合點じや。過つる春の事かよ「彼常磐津氏が金毘羅参り。渡海の舟で語つた淨瑠璃その文句を其儘に行平をかけるのか。中絶」いつもの口舌にたらされて男の方から誤つては嘘にはまりし濱づたひ歌はんま千鳥の。友よぶ聲は。ちりやちり／＼ちり。ちり／＼やちり／＼とちりとんだ。合きしやうの灰のちりやすき。うは氣同士の戀の淵。心そゝろに。雲はしる。合夕べ／＼の仇枕。都と。ひなと二筋の。帯とく夜半は夢にして。別れの鐘のやほらしや。エ、。面倒なと振切る中へ「ひよつくりひよつと庄屋三左。時に取つての奴の松内合、君は歸るかおいらも行くべし合、八聲の鶏がそりやこそな。こつかこつ目が覺た江戸サハリ「夫は老木よ。是は又。うつす若木のやつこの／＼。此ひざのふし。松のふし」是ぞ。千年の下枝と。すつと出せし片足は。慮外千萬千貫松 詞ノム やつこの／＼／＼

小奴が。またから富士山見え申す。三國一とびんとする。詞ム、變つた事を言はんすの。慮外と咎めさんせすと。お前はお公家わしや賤の女。心言葉も及びない。もしほ汲むなる。蟹の身の縁なればこそ肌ふれて。だいつしめつのわりない事。鹽焼衣やきかけて悋氣であかし合泣あかし。とまる瀬もなき浦千鳥、くよ。合くよ思ひ夜を晝と。かぞへ餘りて戀草の露も思ひも。亂れ咲き。我ならなくに笑ふのに。人のそしりもあざけりもちつともそつとも大事ないわいなあ「ハ、ハ、ハ、コレ／＼松風、ア、正體ない。コリヤどふでも氣が違ふたの。ム、コリヤ氣違じやな。ハア。きちがひよく／＼「ハア氣違よく／＼嵐に波の驚物狂ひ。それ／＼／＼「風に櫻の物狂ひ。ちんりちり／＼ちり／＼ばつと。うはきを鹽の。波枕。けたて、そして。合歸るのか。何を聞てもしら波と「須磨のあまりの行すぎは腹が立いで何とせふ。合つれない。合つらい。合情ない。心になつて下んしたと。かなたの松に。取付けば。詞庄屋の三左は氣の毒がり。コレおむす。あれは松にてこそ候へ。行平殿は謔取楯の方にて候詞、何

いはんす。あの松こそは行平さん。たとへ暫しは別るゝとも歌待たば來んとの言ひかはしイコ、二世とつれそふ主さんの。歌顔を忘れて詞よい物か 江戸サハリ 實なふ忘れて侍ふぞや「ハア心待てゑすか詞そふじやわいな。何んと無理かへ。此松は行平さん。松も昔の女夫仲。松より外に音信もなし。ハア、ハ、松が主か主が松か「松が主か主が松か／＼／＼コリヤいつ迄いふても同じ事じや「サア松程ゆかしい物はない。行平さんはどこへ行んした。申し行平さん。ハア行平さんじやと思ふたりや萬歳じや。ハアそんなら此松は飾松か。ヤア正月じや／＼。てもはや萬歳が來た事かな「エ何。萬歳。ヤコリヤ中々見立のよい氣違じや。此磯馴松を松飾にして。主が烏帽子装束を其儘の萬歳とはよい思付。そんならさし詰行平先生は萬歳。松風は才若。此庄屋は亭主役。ハア、目出たい／＼。サア／＼二人共に相替らず目出度祝ふて貰ひませふぞ合二上「徳若に御萬歳と。年立歸るあしたには。りせう公が玉の冠をかうべにめし。ゆづり葉を口にくはへ五葉の松。ゆかしい松を手にて賣の君の行平様の。お

迎を合まつとし聞ば松が根の。かたきちぎりのせいもんは。誠に目出度侍ひける。合濱松風のそよとの風も。迎ひのこしが。さゞんざ。才若などは常住不斷。まつちやうこや／＼合松の名所はさまざま有れど。曾根や尾上や。かねかけ松や。舞子の濱やたけくまや。三保の松には一つ松歌待つはつらいと皆おしやんすけれどもな。忍び待夜はたのしみに。しめて。ね松と。二ばの松の。中に小松と思ひしに。ソレ／＼ソレ／＼そふじやいな合戀し／＼と皆。おしやんすけれ共な。男心を待宵に。こぬ夜積りて。便りもなけりや。いとしく／＼もにくふなる。ソレ／＼／＼／＼そふじやいな詞ハア出來た／＼。松盡しの萬歳どふもいへた物ではない「サイナまつ／＼といふ甲斐有つて。なつかしいと思ふ所へ。コリヤ松都さんよふござんしたの。「何んじや。松都じや。コリヤおれを座頭にしたな。是は迷惑「何んの迷惑な事がある。座頭に松は附物で。伊勢海道に名も高き。錢かけ松のいはれを知つてか「へエ何。錢かけ松の由來とは。はや物語の座頭の座頭の事か。「アイナ「吞込んだ。／＼。幸ひ爰に。

頭巾もあり。コリヤかふかぶつた所は何んと座頭かゝ
 「ハア座頭じやく」。ざつとの坊く。合ル歌「夕べ座頭の
 坊が。くびわばこせたら負ふてあけや町をそつた。
 つれも三味とばち二挺さいたよふさいた。三下り「ツンく
 ツンつんのけさ。ソレくそれくく」。犬が吠へ付く。
 わんつくうんつく。つくくには曲手毬。十日とをると
 よくの。廿日とをる長野。ながのよすがら。く。あん
 まけんびき。くひねつた所がひねり文。合ひらいて見
 たらおかしかる。ひらけぬ胸の。我が。思ひ。ナホルカハ
 ル地「引る、戀のたまよばひ。又の逢ふ瀬とふり切て。立
 歸りたる浦波や。跡へくとうしろ髪。もつればつる、
 あけ卷の。松に吹くる。風も狂じて。くるりく」と。立ま
 ふ袖の。合須磨の高浪夜半の音。夫れも人めの關の戸や。
 ほのく吹れほの見えそめ。松によそへし身の袖の。ゆ
 かりをはらひ。思ひを捨て。とむる袂をふり切て姿は。
 見えすなりにけり。「松風あるにあらればこそこのふなつか
 しの行平様。是のふ暫し我夫と。あなたへ尋ねこなたへ
 めぐり。目も血ばしりていきまきし「戀しいと思ふ行平

さん。たとへいづくへ行かんしよが。夫こそ女の一念力
 「鯨よるうら虎伏す野邊。立波。合あら波。合磯打波の。
 合悪魚の餌食にほうむられとられ身はわだつみの水屑と
 なる共。合身體髪膚は波の花。うづまく海のみをつくし
 朽て。碎けて流れて寄せて。陸に屍をさらさばさらせ。
 合夫を慕ふ。執着執心。我魂は。都の空。はなれじ去ら
 じと心を堅め。「東はいたみ尼ヶ崎「西は家島急じまが崎
 南は貝塚きしのわだ「北は長岡佐野岩瀧「人間の通はぬ
 所「千里の瀬戸「萬里の灘合「いで追付かんと松風が。
 淺瀬つたふる船引よせ「ゆらりとかしこへ飛移り。合漕
 出さんと身をもめど。艀糧も折から風吹く波にみぎはへ
 ゆられつ。エ、口惜やと帆道具の。綱を血筋のちから
 草。蟹のたく繩綱手綱。たぐり寄せて引纏ひ。ともづな
 とかんとする所へ。合福兵衛「此兵衛ゆるぎ出で。松風
 やらぬ「エ、面倒な。そこはなさんせ「どつこい「思ひ
 は。重きほうふ石。ひれふる山の昔を爰に。「ぬけつくぐ
 りつ「ふり切はらひ「押出さんと氣をもめど「ノル調二人
 はがまん力づよ。舟のとも綱しつかと取り。はなさじ

やらじと取止むる「松風得たりとかしこの綱。懐劍抜持
 ちふつとされば。「風を持たる眞帆片帆。うんをひらき
 の乗心三つ羽の。そやか空とぶ鳥。ほんせんかりやうの
 追風や飛ぶが。如くにしたひ行く。

一四 男江口花吹雪富士菅笠 (富士太郎)

常磐津文字太夫直傳
 作者 塚越二三治

三下り「富士の姿をねて見る夢は 合實。日の本のギン響か
 や支那唐土にうらやむはウさりととはく無理ならず。
 中ハルうら山しさの中々は。クル色で合まろめし入戀の山。
 ウ巖は峨々とそびゆれど。下ギン 角のない木のまるた舟
 カリ花のハル 筏とかはし行姿ちらりと三ヶ月の中ハル影
 ほの暗くうつなく合富士に入しられぬ雪ならで櫻ほの上
 ほのツキユリ吹落る合ふききは花の一つまへハルきりとし
 めし雲の帯。下思中ウひ重ねししら雲の ギン西へ行衛のし
 なやかに。合なびく柳の立姿。氣も浮島に休らひぬ 富士郎
 出上見上れば 中フッ鹿子まだらに雪消えて。長地 松の緑も
 うら若き合入富士をはたちと。合名に高きたとへに引もウ

ギンツキユリことほりや 中三保の松原清見瀧田子の浦邊や浮
 島の 合四季の詠めはめかれせぬ。けに春風の肌寒くうは
 着の塵を打拂ひ心の垢を清めんと。旅の姿の笠の内しば
 しスエルフシ 見とれて居たりしが。平家蘭省花の時うら入
 かに錦の幌昔にて上爰は廬中山の雨の夜やハル軒の 合宇も
 とくく」と長地 傳ふ算の苔清水掬ひ捨たるウ柴の戸の コハ
 奥スエルフシ 見とれて居たりしが。平家蘭省花の時うら入
 るを櫻花いかにちれとて風の吹らんハア面白い景色じや
 な。富士の姿は言ふも更なり。いづれの工が削りなしたる
 四方の山々海の風情ア、どふもいへた物ではない。見る
 にあかぬと思ふ内にホ、コリヤ日がくれてきたハアなん
 としたもので有ふなヤアむかふを見れば風雅な庵の候。
 これに便つて一夜を明かそふと思ひ候「とき知らぬ下ギン
 雪は積入りてウ名に高き 詞「裾野の原の草の庵富士太郎國
 次は。世をすて人の假住居 富士郎「いかに此家の内へ御案
 内申ませふ 誰じやく「風枯木を吹く三保の松。月平
 砂を照す浮島が。はらはぬ草の露を分て尋ねべき人もな
 き此庵思ひも寄らぬ案内とは富士「成程御不審は御尤でござ

ざんすがわたしや一處不住の身の上富士の景色の面白さ
思はず知らず日をくらし麓へ行かれぬ旅の疲れこよひ一
夜お留めなされて下されませい 龜藏「ム、何といはつし
やる旅の修行者が富士の景色に心も見とれ里へおりの方
角を忘れ今宵は爰へ留てくれいとお頼か 富士「アイ龜藏
「アイサア其アイといふ。物ごしの涼しさ。顔はとくと見
へねども、只人ならぬしやれ者と聞いたがおれが思案違
ひか違はぬかマアそれへ参つてお近づきに成りませふか
「ひなの カ、リハル姿かしらね共ッ顔もしよていものば
しと。燭を携へ切戸口下そろくしとく、スしづやかに
内よりてらすッ明りにて互に見合す顔と顔「思はず「し
らす「びつくりし 合かゝる山家にひな男「扱修行者にや
さ女「あきれて スカスハツミンシ」とかふの挨拶なくしばし詞
もなかりしが 龜藏「ハア、いやく、某凡俗の身なれ共大
切な願ひの有る身妨げんとの天魔の業かム、ヤコリヤつ
れなふいふて返すがよいわいのイヤ修業者 富士「アイ
アイなんでござんすへ 龜藏「行暮たによつて 此家へ一夜
泊りたいとの事聞届は致したが一人旅をとめるは所のき

つい法度殊に若い女中のあもとも知らいでオ、そ
れくそのあもともふもとの下の町によいとまりが有る程
に麓へ十町計りおりさつしやれい留る事はなりませぬぞ
富士「スリヤなんとおつしやります世を捨てたわたくしでも
おとめなざる、事はならぬとかへ 龜藏「オ、サ夜の更ぬ
内にはやう里へおりさつしやれい 富士「テモお顔に似合
ぬつれない事を言はしやんすなア世の中をいとう迄こそ
かたからめ假の宿りをおしむ君かな 龜藏「シタリはて面
白い早速の秀歌世の中をいとふ迄こそかたからめかりの
舍りを惜む君かなと世を恨ての秀逸ならぶべきにはあら
ね共かふもあらふか 富士「なんとへ 龜藏「世をいとふ人とし
聞けば假の宿に心とむなと思ふばかりぞ 富士「世を厭ふ
人とし聞けばかりのやどに心留むなと思ふばかりぞア
やといはれぬ御返歌にふたゝびいはふ言の葉もない是非
にも及ばぬさらば麓へ参りませふおさらばでござんすぞ
へ 龜藏「ハア、よくく、物を案ずるに一夜を借ぬ其恨と
も思はず歌を詠じて立歸る其心さしの殊勝さたとへ身に
願ひが有ればとて無下に麓へもやられまいこれく、修業

者富士「アイ龜藏「やどを借しませふこちへはいらつしやれ
い 富士「ヤレく、それはまあ忝ふござんすても扱もきれ
いなお住居かないかさま心有けな風情此様に浮世を離れ
てお出なさるゝからは大抵の粹さんではないわいなまあ
お前のお名は何と申ます 龜藏「ハア、お尋に預つて名乗
らぬも如何しい拙者事は兼てお聞及びもござらふ富士太
郎國次と申す者親富士左京之進を淺間次郎といふ者に討
れ其行衛を尋んと所々方々を經廻り親の敵に廻りあはん
と世を忍ぶ浪人者暫く此富士の根方に草庵を構へ敵のあ
りかを尋ねます其許様は諸國を廣う御修業の御身の上
もし御心當りもござらふならばお知らせなされて下され
い 富士「ハア、お話を承ればおいとしい事でござります
るな親御様への御孝行其讐敵を討たいと思召すは御尤去
りながら此やうな片田舎では旅人さへも足を留めぬ所爰
にうかく、おいでなさるのもどふやらもどかしいやうな
物はより遙か東の方に江戸といふ都には此よしはらを寫
したるそれはく、にぎはしいくるわがござんすそれこそ
大勢の入込む所夫れへなんとお越なされて敵のよすがを

お聞きなされたら早速知れさうな物じやござんせぬかへ
龜藏「成る程思召し忝ないがそのよし原といふ里はまあ
どの様な所でござるな 富士「そりやもふ上方でいはいふな
ら六條三筋町にちつ共違はずまだそれよりは賑はしい里
じやわいな 龜藏「いかさま夫も耳よりじやがされども里
のならわせや女郎のいきはり不案内ではきついやほじや
と見立てられるも残念サア爰がお頼じや其吉原の遊びや
うあらまし様子が承りたいなんとおきかせなされて下さ
れまいか 富士「こよひお宿の嬉しさにあられぬ事を言出
して出家に似合ぬうは氣咄どふやら語るもはづかし、龜
藏「サアそこが狂言綺語も讚佛乗の縁ではないか 富士「サア
夫は、法師々々は木の端と。サアその木の端も若葉して
穂に出でそむる戀咄。ウしかたでお目にかけんとてこな
たのオクリ妻戸に身を隠し 此所賢アリ上、上着をぬけば、クル裏
模様合山吹つゝじいつのまに、キ亂れて常の柳髪。しよ
てい繕ふ裾袂、あへる風情なり。カ、リ「いざさらば地
身は墨染の其昔、クルギン在し廓の物語。恥か入しながら。
語るべし。扱はよりも東に武州入間の郡金龍山より乾に

當りオクリ北を受けたる一廓あり唐土の阿房に勝り三千人の遊女を集め。酒を以てオン池となし前には八中町の繩手入をかまへ。日本堤とコハ世に廣き流水の漲りは泗水引取を捨るノル流れ地せはしき川竹の。實と仇との色競べはりといきぢを一つまへ。詞コレ此褌をかふ取つて。外八文字のくり出し歩み。かふゆりかけて。詞イヨくくコレハたまらぬが。何んと其。道中とやら。旅立とやらには。日傘をさし掛る物じやないかいの「オ、ほんにそふじやわいな」そふであるく待給へく幸ひ爰にコリヤ此傘をかふ持て。かふさし掛て。合ナゲッ戀をさせたや鐘つく人に合ハヤメル地翌の別を思ひやる「サアく是からお前が客にならんせにやならぬぞへ「何おれに客になれかハテ扱々忙がしい事かなイヤモ盆も正月も一つじや。そんならかふかと置頭巾。きせる取る手も大やうに。カ、リ地煙くゆらす春霞ッ初會の客にしこなしは引禿が先へたばこ盆。しやんと直して置く露上の萩の追風ウかほりくる梅の姿を合すんとしてカ、リさはらぬ體の床柱顔を背けて見ぬふりに好た男と隙の。上、手くだにはまる情川ふかう

成る程やほになり「別の鷄を「恨みて入見たり長地「こぬ夜積れば大門に付けてユリ見出ギンして連て来て。羽織隠して知らぬふり「イヤモ客のしこなしどふもいへた物ではないしたがこれから肝心關門口舌の段ム、その口舌とはしてくどふじや「コレ富士さんお前覺えてるさしやんしよ。初手にあふ夜のきぬく入に外の浮氣はせまいぞと。起請誓紙は胸に書き粹と。粹との實くらベウ情くらべの其中をわしに隠して仇心憎やと袖にヒロヒ手。を。い。れ。て。ふつりつめられ。アイタくく。オ、いたやの扱吉原といふ所はムウ痛い所では有るぞイヤモかふつめられては。モ、どつこもかしこもオ、痛やのたまる物ではない。そふしてまあべつちやくちやくと扱もよふ口を利くぞコレそこな嘘つき。イヤ嘘つきさま殿めカハリハアいつやらで有つたかいオ、それくく忘れもせぬ友達共に誘はれて花見ぞめきの歸りがけ。あんまりおれも顔が見たさに。離迄ちよつと寄つたれば。其時そなたはなんといふたエイヤ其時そなたは何んといふたヨハテ忘れはくくせまいはサ彌生の節句は取分

て。雛の遊びの。いもせ事。かはい、男を呼ぶ物じや必ず忘れて下んすなへとコレこの口でいふたのを。ヤコリヤ有難いなど、いかいたわけな其詞を誠と思ふて。親父や母の目顔を忍んで駕で飛せて来て見ればへエ、中の町にもゐる事かイ禿共も見えなんだ。其日はへエ、どこにおしけりへエ、なされてござなされましエ、く腹の立つ。誠に女郎買の先生達の御託宣に。ギンッ女郎の誠と卵の角が下ギン有れば。晦日にッ月が出るわいのヲ。イヤノチくナ。聞へたかア、ア御全盛の太夫さまと咄して居ては問が合はぬドリヤドリヤ「歸りましよくおさらばく「袖口取つて引すへてまあ待つて下さんせお前はあぢな事いはんすのソリヤまあ何の事じやいな「長地つらい勤の其中入に惚たが。それ程憎いかへッほんに結ぶの。神さんかけてエ、何んの如才が。あろぞいな。中ッどふした縁でわしや。嬉しいお前は。どふやらいやそふな。おもひ合ふたる中々は枕の外に知る人も泣て明せし床の海一夜逢ッねばなつかしく寐るもねられぬ氣儘酒ツキニリほんに浮世の遺瀨なや。孤雲明月迷ひを覺し。「悟

の胸も開初。「花よ紅葉入よ「月よ雪よと合ッ紋日々々の遊びの數々「いきぢも所譯も「あ、らよしなや思入へば假の宿。オン思へば假の宿に合心とウむなと人をだに下諫し我なりウ是迄なりやさらばぞと「行んとするを富士太郎袂を控へ今しばし「仔細有りけな悟りのお言葉姿をかへ詞を改め某を悟らしめ給ふそもマア御身は何人成るぞ「何様不審に思ふは理り我こそ其方守護の者我が姿は白雲に打乗りて隠る、共其方が難義をば陰身にそふて救ふべし世を忍ぶ身はかくれがさ此笠の縁に引かれ富士太郎といふ本名をおしつ、むむねのくもりも清らかに清十郎と名を改め武州江戸へ下りなば心願成就疑ひなし「眞如の月入も明らけくもりもはれし法の聲「合ッ衆生を照らす御姿はオトス霞に紛れし朧影「羅綾のたもと「手にもとられず「そこよ「爰よと御跡をクリ上慕ふ行衛もしら雲の後の奇瑞を顯はせり。

一五 傀儡師京人形垣衣草千鳥紋日

作者 金井三笑

妻こひて花の野末になく雉子 長地鴛鴦ひとりいねすとや

眞薦がくれの仇し夜に夢もむすばぬ思ひ羽のぬれてかも
ねん友鳥や合會我十郎祐成は虎が身の上あんじわび江戸も
しもや長き別れともなりもやせんと。忍びかねよしやた
れにか淡路島かよふ衛を關守の合寐覺もやらぬ忍びぢは
ふうじのかみや守るらん榻のはしがきかきつめて残りし
雪をさそふ風うらみがちなる狭夜衣合おしよほ。からけ
に頬かぶり。合觀すれば實に誠。紋日物日の夜すがらは
逢せと首尾を合待合の辻吹風とくらべこし。かはらぬ中
のふかみどりしたふて爰にきさらぎや朧月夜に影厭ふ中
地館も里の名にしおふまがきにしばし彳亍 詞内のやうす
をうか々へど便もとめん傳もなし。音せば人の怪しまん。
如何はせんとあんじわび立迷ふてぞるたりける。折ふし
向ふの人かけに見付けられじとこなたなる小陰に合身を
寄せ忍びる。三升出うき世を渡る諺の數々多き其中に。

國々修行の傀儡師またさえかへる春雨に樂屋をかぶる風
呂敷もふかき思ひを。こめて打なる箱鼓夜半の合軒端に
立寄りて合小倉の野邊の合一もとすきいつか穗に出て
尾花とならば露がねたまん戀草や合おらが女房を讚るじ

おなじみじやナなんとお慰に人形廻しと出かけませうか
イ「なる程く廊なじみの六兵衛殿そんなら人形廻しを
見やんせふかいな「心得ましたとうざいく「二上」すい
てうゑいちやアくすいはいくすいはいみんちやおて
ぎやんそうはらぎやんそハア花が見度くば芳野へござれ
今はよし野の花ざかり花見てもどろく合おちやめのと
が肩に打のせ都の名所。まはれく風車はりこ鞆鼓や振
鼓手にもてあそべさ「ふたり折もよい首尾とつもの思ひ
を引きしめて互のうさをわすれ草「六兵衛ちらと見るよ
りもエ、いやらしいしたゝるいせつかく人形廻させてそ
れをば見ずに何んじややらあた鈍くさいごう腹なとむし
やうに傍を踏ちらす「虎は遺に氣の毒さオ、コリヤわし
らが悪かつた機嫌直してとても事に鳥刺つかふて見せ
さんせオ、こわそんな顔せずと早ふつかふて見せさんせ
いなア「何とおつしやります鳥刺をつかへかへエ、ごう
腹な心得ました「とりをさいいた見さいなく「一つ鶴
「二つ梟「三つ木兎エ、腹の立つモウ人形も入らぬ。
これから自身にやつてくりよ「四つよ程のお好と見へて

やないが。物もよくぬふ機も織り候綾や錦や金襴どんす
折々毎のむつごと三下餅の生る樹と酒湧く。井戸と金
の生る樹がわしやほしいヨイヨカヨイハ、、、カ、リお
とづれがちのあやもなきオトシフシ 垣根にたゝすみうか
へば。ウタガ、リ「うきが中にもつま戸もる。月の朧に浮れ
うた。虎はあやしみそろく。と。枝折戸近くさし寄れば。
ふつと見あはす顔とかほ「ヤアすけ成さん」とらそこに
か「よふきて下さんしたなつかしかつたはいなア「アコ
リヤく聲が高い人がきくはいのあれくあれは誰じや
と氣を付れば「虎はあたりを見廻してヤアお前は京の次
郎さん「ア、イヤ何さ私はけふの御遊にめされました傀
儡師めつたな事おつしやりまするなと「いふに祐成聞き
とがめハテ合點のゆかぬ正しくこなたは八幡之助殿日外
箱根に於て近江の小藤太を手にかけれし折から曾我に
所縁の有る人と見受しが扱は兄じや人でござりまするか
ア、イヤコレくなんにも存じませぬぞいかにも曾我最
負をして工藤の館をたゝき出された山猫廻しでくろく六
兵衛といふ者でござりまする廊へは折々参りたらさまとは

あちらの隅ではこそく爰のすみではこそくとさ、や
きはなしをちよつと這ておつとつた。じやまをさいた見
さいなく。じやまがられるは何鳥ぞ。やこそゑの鶏に明
鳥じやまがらこがら四十雀詞その中に。鶯はホ、合ホ
ホ、ヨイほけきよアホ、ほつとも囀つた。じやまを
さいた見さいなく「エ、うまいなうまいなそつちのう
まさに此くわいらいしをほんの人形に遣ふのかないかに
おらづれだとしてアそふはせぬものでおんすはいの十郎是
はめいわくさつきにから人形をよふ見て居ましたがア、
おもしろかつたのふとら「アイナ面白いやら嬉しいやら
思ひもよらぬよい首尾でと又寄りそへば「ア、ソレく
ソレ又いやらしいそんな悪い事をする者は山猫に嚙ませ
「オ、怖やとにげさまに祐成に抱つく「アリアくく
アリア又さりとてはくとはいふ物の我等も獸の内なれ
ば畜生仲間と見て取つた人形廻しの値には酒さへ賜るも
のならば何の邪魔猫廻しましよにやんと虎さんふるまふ
氣はないかへどうでござんすどっじやいのと口も心も通り
もの猫撫聲とぞ知られける「虎は心得銚子持添へてサア

サアコレノ、さつきにからの骨折に是でひとつ飲ましや
 んせ「ホ、コレハ、有難いシヤア命長柄のお銚子は傀
 儡師には過ぎ物じやがへ、お辭儀なしにとひつかへ呑
 たびごとに舌鼓ひとり娛み居たりけり「虎は人目も辨へ
 ず祐成にすがりつきよふ顔見せて下さんしたがお前はマ
 アどうしてこゝへござんしたぞいなア「ヤなんとはいつ
 しやるどうしてござんしたぞうしてござんしたとは虎聞
 へぬぞやそなたが此御所へとらはれたと聞いた故あるに
 もあられず折角忍んで来て見れば範頼公の御寢所がお氣
 に入つたかしてエよい御機嫌でゑんすの「コレ祐さんあ
 じな事を言はしやんすお前故にかけ落してあら嬉しやと
 思ひしに又囚れと成りし身を知つて居ながら憎らしいわ
 たしが心を知らぬかなんどのやうにそりやあんまり胸愆
 じやあんまりくゝあんまりくゝ「ア、コレくゝくゝ
 コレコレハ、コレハあつたら涙をへエ、澤山にこぼし
 たものでござんすのア、どう見ても女郎衆といふものは嘘
 と涙を澤山につかひ捨るものコレ涙の恩は送られませぬ
 ぞへ此やうに澤山にこぼさつしやるからはエ、お前のう

ちには涙の掘抜でもござりまするかエいかさま井戸もあら
 ふし人をだましてうそはやま山もあらふし井戸もあらふ
 シアよい下屋敷を持たしやりましたはいさあ、早く早
 う奥へおいでなされかんじんの範頼様の御機嫌がそこね
 てはつまりますまいがのう、くゝくゝくゝに居るも
 もつたないイヤおいとま申すと行んとするを「引留め
 コレ祐成さん、キ虎は涙のひまよりもコレ。また。無理
 いふてなかつのかつとめと。こひのふた道はたんとわけ
 ある事じやいな、長地ましてやつらい此御所の鞆のひま
 もる朝日より合、馴し曲輪の居つ、けに廊下へ移る雪明
 たりわりなき中もいつしかに。ひきわけられしかた羽が
 ひとこお。し。からざりし命のうち。お顔が見たさ戀し
 さに。今迄待ちし甲斐もなく。なさけないぞやつらいぞ
 と。袖にすがりてなく。なみだちさとのほかに流らん、
 「六兵衛見兼ね傍へよりコリヤどうも見ぬ顔しても居ら
 れまいコレそちらの色男さまコリヤわしが悪かつたとお
 定りをやらしやりませ「じやといふて今更どうも「ム、

いはれぬといふ事があることゑんすくゝ悪いと知つて
 もてきめにあやまらせるが手柄のやうで面白い物お前方
 の時分は其最中無理とは思はぬといふてハヤ睨めくらも
 させにくいコレ幸ひこゝに褥も在り屏風もあり人の來ぬ
 間にちやつとくゝ「人目を忍ぶ屏風山いく。えの。戀や
 こへぬらん。

○下の巻

雷轟出心通へば姿も通ふ草の葉すへに置く露の陽炎もゆる
 つらき身を合、長地しのぶの亂れかぎりなくおほろくゝとそ
 のゆかしさの女心をたれしら雪の消えし跡こそみちとな
 る戀路のせきの關の戸やもしその人のおはせんかと。色
 詞窺ひ見れば屏風のそとも詞怪しの男うらとはんと歌しの
 ぶいらんせんかいにやアかはんせんかいにやア「わしが
 在所は京の田舎のかたほとり。八瀬や大原の芹生の里。
 世を忍ぶゆゑ合、姫ごぜの身の棲からけしのぶいらんせん
 かにやアかはんせんかいな世を忍ぶ「しのぶ草とはほん
 にさりとはかあいらし戀に忍ぶは人目の關合しのぶの里
 に我忍びづま床しさに垣衣いらんせんかいにやアかはん

せんかいにやア○「にやアにやアといふたはハアハア、
 聞へた。今のにやあは汝じやなサア正體を顯せ正體を顯
 はシヤアシタリさつても見事してそさまは何人にて渡ら
 せ給ふぞ△「オ、京都しのぶ賣でござんすはいにやア○
 「ム、どうでもにやアじやなイヤくゝなんほうつつい女
 でも。商人は晝來るものまして女の夜あるきは△「サアそ
 れじやによつてしのぶ賣じやはいにやア○「アレくゝま
 だにやアじやへ、なんほ其やうにいやつても。卑しい商
 人御所へ通す事。弓矢。八幡ならぬぞくゝ△「ム、そふ
 いはんすお前はどなたさんじやへ○「エドナタサンジャ
 ヤどなたさんじやへ。事もおろかやわい、天王にむた
 いの後胤。猫またの中將みけなりが嫡にやん。山猫廻
 しのでくろく六兵衛と、いふものにて候△「オ、それ見
 さんせお前も修業者わたしもあきびと。内裏へも簀着て
 入りぬあやめ賣といふ。發句もあるじやないかいにやア、
 御所を拜みに都よりはるく、下つた葱うり。何が憎うて
 其やうに隔ての扉打明けて嘶せふではないかいなアと馴
 々しさに○「顔打ながめ。ヤア今の發句で此男を。一番見

浮沈と成るべき此矢の根再び我手に入る事もいまだ武運に盡ざる所かハアハア有難や嬉しやと天に捧げ地を拜し悦ぶ事ぞ限りなし「白菊つくく」打守りソレ其悦ばしやんすお顔を見やう計に艱難苦勞したはいな矢の根のうせしも私ゆゑ命にかけて取戻したる甲斐あつて今日といふ今日お前に渡せば私が本望エうらやましいはアノ虎さんアよい中じやなアとうらめしけなる目のうちに涙をうかめうつとりと顔を見とれて居たりしが△「コレ申し祐成さんざりとは愚痴な女子じやと。叱らんせうかは知らねども言ひ度い事のあればこそ。さま／＼心つく／＼し筆のたよりもかなはねばこがれ慕ふて。来たわいな私が心もしら露のノ美しい虎さんとふたりぬる夜のたまくらに。わりなき中をうらやみて 長地わがひとりねのそでの海ちぎりも波のすてをぶね水に。かすかくうき思ひ。推量してとかこちなき。みだれのしのぶの草の露すへの涙と知られる「オ、尤もじやく／＼さりながらアノ虎とは子までなしたる中なれば「アイ存じて居りますそのお子のある虎さんの中を知りつゝほれたも因果とし月お前

を戀ひ慕ひいつかはお目にかゝらんと待にひさしく過しころ箱根のみやの神かけておなさけのお言葉がわたしや身に染み／＼と忘るゝ隙はないはいな此世は僅か假りの宿二人中よふ添はしやんしてせめて未來は祐成さん私と添ふて下さんせ未來は私を女房じやとたつた一言いふて聞せて下さんせいふて下さんせいなア「サア／＼／＼サア尤は尤じやが何をいふにも爰は範頼公の御館じや人目にかゝれば悪い程にサアマア歸つて下されサア／＼サア／＼マア歸らつしやれいのふ「オ、行はいなせわしない假令るよとおつしやつてもこれがどふして居られうぞもはや此世の別れかとヒロヒロ。に。う。く涙はらはらと。袖に玉ちる白菊はしほれて出る後影見しは現かその人のかたちは消えて一つの心火しん／＼と立のほり屏風の中へ落ると見へしがふしぎや臥たる傀儡師すつくと立つたるその形相怪しくもまた覺束な「虎は驚き「祐成が左右の袖にとりついてあら心得ぬ祐としさま此有様は申しお心を付けられませい祐俊様 鼓歌「およそ輪廻はをぐるまの合飛花落葉の世の習ひ合きのふの花はけふの夢合驚

かぬこそ「浮世なれ」申し／＼コレ申し祐成さん。わしや白菊で。ござんすはいなア。□「及ばぬわしが戀路ゆへ セツキヤウ詞○「御身の難と成り果てたる驗の矢の根を取返さんと。思ふにかひなく口惜しや詞祐兼が手にかゝり。鼓アリ箱根の山の露霜とこの世をはかなく。成し身の合カン 詞靈魂中有に浮みもやらず。しるしの矢の根を取戻しおまへにわたさん其ために。假りに姿を顯はして詞おめにかゝるもわたしがねんりき。祐俊さまの容に舍り。はかなき最期を明しまするはいなア祐成さま。ム、扱は此祐成が難儀と成つたる驗の矢の根取返さん爲伊豆の次郎が手にかゝりそなたは空しう成たるとやハテ是非もない有さまじやなア「虎も涙に手を合せ其靈魂しるしの矢の根をあたへんとまみへ給ふもしらぬ身のおうらみ申せし勿體なや未來成佛なされませいや「すけ俊殿の五體を去り成佛めされよ白菊どのソレ。そのうつくしい殿御をば残してなんのうかもぞへ。□ハヤメル「いつし見そめて染て色なく其仇人に。見かへられたる野分のあらし○「亂れ髪 口長地誰取り上げて岩橋の夜の寐覺に 文七その俤の

「通ひあみ笠夜も日も分ぬ」さまにあふせの○△「いたづららしいにだまされた○「松はこふじとねたといふ□こふじは松と寐ぬといふ○「アレ。あのうそはいな□「ねたりやこそ合○「わしをみやまに起臥の。ハヤメル 長地花に仇なはくれのかね戀に仇なは明の鐘。鳥にうらみの數まさり。ほんに／＼鐘にへだても恨もあるかあゝらよしなや。はづかしや□「コハ煩惱業苦に身をこがす劍樹地獄もアレアレ／＼／＼／＼まのあたりあゝらくるしや。あら苦し早や明け方の修羅の責鼓 合名残はつきじいざさらばさらば／＼も夜あらしの。音もはけしくさら／＼／＼庭のいさ。ご。の。ばら／＼／＼はらふ合ころのやなぎがみ。つゆのしらたまちりつばきありし姿もいつしかにはるかぜばかりやのこるらん。

一六 河津衛名香よめ 風折蝶名香留袖淺間嶽 作者並木良輔

△「茂りあふ草入もウ梢も ギン合心なき 中地情をしるき人倫も。ウギンいづれあははれはのがるべき。下かくは思ひ知りながら 長地ある時は色にそみ引ハル地貪着の下思ひ淺からずウまたあるクル入時は聲をウ聞き下愛執の心下いと深き引ウ

心に思ひ口にいふ實にスエハルフシ世の中のうさつらさ
 色詞「宇佐美くすみを領したる川津の三郎祐安は。遺恨の
 矢の根ウツシカ、リ鋭くも上ハシル赤澤山のモツ露とき入えてだ
 に中地消ぬ輪廻にウ引かされてコハスエル在りし姿の悄然下た
 り平家いく春か詠みやこに年をフシカ、リハシル重ね着の引蝶
 とウオスフシ千鳥のひよく紋ふたりが中のかねごとをかは
 すまいもの新枕引長地じつとウ仇とをしらべあひツナギくぜ
 つにこがすウむねの火を引ウいまも提たるハシル煙草盆けぶ
 りカハリスエルフシくらべん我思ひ上カシ富士と浅間下の山風
 に吹きときかねて八重霞引まよひのウ雲にコハスエルへだつ
 れど耳にはクル近き戀慕の舒引上修羅の太鼓の現にも逢ひ
 たい。合見たい合ツツメル戀しいとヒロヒな。み。だ。の玉の
 魂よばひ。さくや初音にしたひ來る上風折がウコハ立姿引▲
 詞「名残をもおしまでいそぐ心こそ別れに勝るつらさな
 りけり●詞「ハツア今の歌は。一とせ風折に別れし時。又
 逢ふ迄と送りしがハテ合點の行ぬヤア風折か。そなたは
 爰へどふして來やつたぞいのふ▲戀しさに「二より」さりし
 御ウけんの夜入の雨引中殿御待つ間の墨算あふ夜あ入はぬ

ふてモツ文かきさして下筆の鞘焚て待つ夜の。ス蚊やりぐ
 さ。下粹な男の癖として思はせぶりが合憎らしい上悪性入
 さんすを長地附けて見出してふつつりと。上つめりしあと
 がこれ爰にクルむらさき匂ふ深い中●詞「ア、コレコレコ
 レまちやく。そのやうな舞が有るものか。ソリヤマア。
 何といふ舞じやぞいのふ。▲コレカエ。コレハ女の曲舞
 とて。性の悪い男に意見の舞でござんすはいなア●上へ
 エそりやお珍らしい舞でござんすの▲「オ、何んじやいな
 また人をきよくらんす。そしてマア堅くろしい。色帯はお
 解きなされずとも。詞榜はかふと江戸とけかゝる引上春の
 氷の氷面鏡中地羽織に防ぐ戀風や引詞頭巾はかふと立烏帽
 子上舞フシ大臣烏帽子をしやんと着て上烏帽子なをしの舞
 の袖引そでから袖へ手を入れてじつと引。上しめたる入肌
 と肌やゝと。入もすればウス口癖にかけろほしごと疑ひは
 お入前の入無理と思へども合こちの心に偽りはなし打烏帽
 子小結して譯もない事い入ひ募りモツ氣を揉みゑ入し恨
 みわび引▲ウ泣て居る●」のを覗いて見たり唄ふて見たり
 カハリツキユル弾く撥のあたれとこそは思はねど夜毎にウ立

夜入恨みては。ウギンほかに悪性はせいもんと仇し男のあ
 だごゝろ下上ナホル二世のかための蝶千鳥これをめいど
 の下みち。草引やウ力草なる其種を下なせにけむりとなし
 給ふうらめしやカ、リうらむそなたは娑婆を去り引上われ
 も冥途の二人連。ヒロヒふ。た。りつれたも名ばかりに。
 ウ憎や劔の山鳥の尾上へだて、上寐る中を思はず爰へ面
 影の。ゆえかしたつかしうれしやと飛立つ心をスエル押靜
 め●詞「コレ風折。ア思ひ出せば馴染も。中ハヤメル地きのふ
 よ京都すぎゆきし引詞そのつれづれの戀ごろも。吾妻そ
 だちの角とれぬ。はつにそなたにあひしとき。御身いか
 なる女性ぞと。堅く出かけてとふたれば。▲わたしも衣
 紋締ふて。詠コレハ都のかたはらに住む。風折と申す平詞
 白拍子でござんすと言たれば。●詞「ム、何じや風折とい
 ふ白拍子。ヤコリヤ面白い。幸ひの風折烏帽子。コレ。
 是をきて。面白う舞をかなで候へや▲詞「あらうれしや涯
 分まひをまはんとて。ギン烏帽子ウ狩衣かりにきて。ウギン
 すでに拍子を江戸すゝめけり引。上はなのほかに松ばか
 り／＼下引松は千年と壽けど上殿御まつ身はつらふてなが

てし誓文は。千も二千も三千世界を尋ねても下こんな男
 が有ふかとツナギたのしむ中の手枕も●「かひなくスエル立
 し山かづら憎ふて。ならぬ。鶏の聲。なんの鳥か意地わ
 るで。啼くじやなければどきぬ。くゝの往せともない心か
 ら。よしなき鳥を入恨みしも。ウ夢と消行くはかなさよ合
 ▲申し殿さん●「なんぞ▲酒をばふつつりやめさんせ●
 「ソリヤなぜに▲色遊びもおかしやんせ●「ム、また異
 見かそんならおれは往ぬるぞや▲「ソリヤどこへ●「吾妻
 へ▲「其あづまとはどふ書くへモツギン「わがつまとかく文
 の下つて「とるま焦るゝ。お心は入皆入奥さんへの心中か
 へわしや腹が立つ憎いぞへ。とめねばならぬとつとつと寄
 り袖に縫れば「かいくゝり「又取付けば下振放すはづ
 みの拍子に合ふはとこけ▲「風折ひらりとおきなをりオ
 オコリヤむごらしい河津がけにさんしたの●「ヤなんと
 いふ河津掛けの事どふしてそちは知つてゐる▲「ハ、
 ハお前都にござんす時ノル太夫天神端かこい。白人舞子
 中居迄。お前は戀の手取とていろにはまつて懸られしを。
 詞「河津掛けといふはいなア。東へおかへりなさんしても

奥野の狩の歸るさはどふした遊びか知らね共侯野さんといふお方をかはづがけに遊したと都に隠れないはいなふ●ノル「へ、さすがは女、それは角力の物語。侯野の五郎景久は伊豆相摸の若殿原を拾ひに投し其中へ▲「河津の三郎祐安は手綱二筋たぐつて締めしんづくと立出る●「侯野は角力の上手なり▲ノル「お前は戀の。手だれ者引ノル土俵の数は十六七娘としまの嫌ひなく。色と角力の物語これを入れて見よ花のへ「いきぢを。みかく女入には、下ふすて。負投腕そりアリヤリヤ〜よいやさ「張の強いはこちらからも下やぐら四つがい膝櫓アリヤリヤ〜よいやさ上「人目を忍ぶ初戀は捻り爪取り大ごしや上カン「ひよくの契りかはすには鴨の入首こし車入鳴のウ羽返し向ふ附けかくれば拂ひ合入れば餘さず仇ほれや桃花の節會鶏合せ下四十八手はなを足らで。百手を盡すはれ勝負引ノル河津いつまでごすべきと。片手を放つて場中へ二ばん。▲ノル「どうど打つたるお手柄を。聞いた時のうれしさは●ノル詞シツメル「サア其悦びに。カンウレヒひきかへて直に相撲の歸るさを。まぢまふけたる詞赤澤山。近江

八幡が矢さきにかゝり。無念の最期を遂しごと。上かたるも▲きくも亡人のウタわたしやお前をこがれ死ハル地みつ瀬の川もいまここに引長地花の鏡の。スカス顔と顔。カ、リ地あはせて見てもあはされぬ引はやまうしうの雲コハリきりに引上たちへだ、りしなかくも下はな入れがたなき煩惱のねむりをさます明の鐘かう。かう。とつけ渡る引空もあけゆくさとりのみち。うてなの入花やさきにはふ歌舞のほさつのまひのそでらりやうのたもとひら〜松ふく風も法の聲隨縁真如のウ波のつゞみのどう〜どう。さら〜。音楽のこゑ諸共に。下二人のすがた忽ちに。ウ文殊普賢の入二菩薩と引取あらはれ給ふぞ「ありがたき。上御法の聲のたうとくも。獅子白象にウうち乗りて西の方へ入り給ふ西の方へぞ入り給ふ。

一七 蜘蛛絲梓弦(仙臺淨瑠璃)作者金井三笑

●鼓歌「人知れぬ心は重き小夜ぎぬの。うらみん方もなき袖を片敷く詫びるお夜詰の碁打扁突十炷香の夕べの色香引きかへて今宵は髭の直宿者。嚴物作りの兩雄士君を守護なす有様は實にたゞならぬ多田の御所。武將

源の頼光公御心地例ならず。醫禱百計たゆみなく「とりどりさま〜御枕に御簾もる風の音信もいと物凄き折こそあれ「コレ。貞光。コレ。〜。貞みつ「ムンムン〜「ハテ扱々々。大切な直宿をしながら。扱もよふねるぞ「ヤコレ。公時。人の一寸は見ゆれど我身の一尺とやら。あんまりそなたが。こくり〜寐るからおれも移つてやつた物よ「ヤ口賢い事をいふしたが。今宵にかぎつて此やうにねむいといふはノヲ貞光「オ、サこんな時にはべと〜するやうな茶を。一服呑みたい物だノヲ「サレバサ咽のひり〜ひりつくやうな濃茶をおれも呑みたいドリヤ。目覺しに一ぶくと煙管の火ざら煙々とたばこの煙。ウタヒ。ふけ渡る夜も烏羽玉のきり禿都そだちか京人形。ちよこ〜歩くうしろ紐。お茶の通ひのこ〜とががつてん〜鹽の目。かぶりふるふるふらぬ間に合つんで置けとは。梅の尾山の。春の若草茶の木のことよ。ちや茶に浮してやつこの此々この目をさましてやる。この此このお茶まいれとさし出す「なんだ茶だヤコリヤよい所へ持つて來たドレと取らん

とせしがム、ついに見なれぬ小僧だが。ワリヤどこから來たへ「アイわたしは。お茶の間に居りまするものでござりまする。それを知らぬとおつしやるは。きついうそや「公時ムハ、あざわらひ。なんだお茶の間に居る。お茶の間に居るものを我々が知らぬといふ事はないが。茶道頭の名は何といふ。ワリヤ知つて居るか「アイゆうこく齋と申しまする「ム、ナンダ幽谷だ。そしてゆうこくさいといふ字は何と書く「幽の谷と書きまする。彼の商山の四皓を取つて付けられたと見へます「ム、はて形に似ぬこしやくな事をいふな。そしてワリヤたが子だ「アイわたしは。「イヤサ何物の悴だよ「サアそれは「どふだどとひかけられてすつくと立ち江戸月のすむ軒端にかゝる合蜘蛛の絲有るかなきかの身はいかにせん有るかなきかの合上小童をいたくもとはせ給ふなにとつとゑみたる有様を。詞心付かねば兩人は。扱も奇體の童やと顔をながめて居たりしが。睡た覺しと貞光が。扱一ツぶしんまいらふか。我神國の神の心は●「すなほに寫る鏡のかけ。「イデ公時が問ひかけん。兒童が胸にも明鏡有りや

●「有ればこそ合カン真如の月も空にあり」其月の數覺へてか ●「さればいなアお月様いくつ十三七つ雲がかゝらば「風をもつて是を拂ふ」大千世界は扱いかにおゝ、そこそはいかり風きよくすめるにだまかれて延ばせばおびる絲筋のたなびき昇つて天と成る「切れて落つれば ●「地となりぬ」又かくれんほの始まりはどつと神代のその昔天の岩戸に隠れんほ今に傳へて神國の子供遊びと成りにけり「雛の祭は ●「嫁入の手習ひ」のりかぶと「幟甲」や菖蒲打。しやうぶ刀はイカニく。それは武藝の始なり駒の手綱はコレ。コレ。コレくくくかふ取つて。やよややんちやや真紅手綱のこぶさ小綱をこがらまいた。サア合赤貝馬のしやんくくしやんと乗つては手綱かいぐりしつしいどうくくどんどドツコイサド伊勢の鈴鹿で朝の出がけにやこむろぶしでがけにやあさの朝の出がけに合小室節合くつわの鈴がりんくくがらくくりんがらく。りんくくがらくくりんがらく。はいどうくくはいくくく合あつばれお馬の上手と上手が乗つたか乗つたぞしとくしと。それ。それく。それくくと化生は其儘ちんじん頼光の寢所を

目懸け入らんとす「コハ心得すと公時貞光支へ止むる袖袂●「かいくくくくこに現はれかしこに失せ。業通自在の其動舉」ヤア正しく變化ござんなれと。一度に刀抜きかざし「はらへば ●「うしろに有明のつきとめんにも居もためずねらひもためず。●「切禿の形は消えて失せにけり。●「兩人目と目を見合せ今の小僧は「サア今の小僧ハテ残念やナ」打もらしたか口惜しやと腕を摩つて居たりしが「コレくく公時心をつきやれ「オ、サ眼をくばれ貞光。餘りねむいくくと思ふ其心の虚に乗つて。何か目にさへぎると見へる。なんと目を覺す仕様は有るまいかへ「貞光傍を見廻はしホテ有るぞく。究竟の此基盤。夜の明けするまでうち明かそ「ヤアコリヤよからふサアこいと黑白二つの石を分け互にあらそふ先後手りたるばほくれんくたるかんかうしてうにかゝる盤上の切つておさへて刃ねかけてわき目もふらぬ折こそあれ。夢ともわかず現とも影の如くに忽然と座頭一人現れ出で「オオ、じたい某は奥州者で三味も弾きます諸藝も上手よいくくよいくくアリヤリヤコリヤリヤハ何んでもせ

い「オ、、杖をちからに都の町をめぐりくくてうかれ座頭の坊。チツ、、コレサ申しコ、サ社頭でばしおんじやり申すか。内陣へつくばいつても苦しくなくばサア。ちくとんばい拜ませてもくりやり申さないか「何だ社頭だこゝはそんな所じやないは。忝けなくも天下の武將の御座なさるゝ御所だは「オヤそぶぎやアればみん共サアもせんねんは羨さ通り申した。お待ちなさる。ハア、すねかけ五年だア申し「ハア、奥州座頭か。幸ひのねむた覺し國ぶしの淨瑠璃面白所。サアく聞きたいく「コリヤくお坊く頼むはく「ハアなんとぎやアる。ぞうるりを語れ。ソリヤハる物だアが。古くおもしやるべいからハよしになさるく「イヤ古くても大事ない。聞及んだ仙臺淨瑠璃一段所望だく「ハア是さお坊勿體つけずとも早く語つて聞かせろ。サアくどふだく「イヤハア。そふせちにきやあらば歸りがけの駄賃だハ心得たりと背なに負ふたる三味線の撥もしどろに弾き鳴らし詞是は扱置きこゝに漢の高祖の臣。樊噲といふ兵一人おほしますと。おほしめせ引上主君の歸還を

迎ひのため。下ッ鑑兜に。身をかため鬼面の盾。上大とうれん。下小どうれん。二振の劔。金だかな銀だかな上あたり八間タアタハびかりくくと光り渡るを十文字に指すまゝに。風吹には風負けすべいとオヤくくくくくあぶない事だアもさ引扱鐵門に下つきしかば。ふんばたがつてどさ聲上げ。詞主君の迎に樊噲が出ばつたア。でば。上門の開け下門のひらけと呼ははつたり引内には官人大きにたまけオヤホ、くくくくでかばちないあばれ者。それ通すなど。扉。へさへて下ひかゆれば引なじかは以てたアまるべき棟。梁下くわんぬき上ゆさくくくどろどろくく下めきくくと押破れば水もたまらず官人ノル共壓に打たれて目玉サ飛出首は胴へへし込んで。臍のあたりでくわばらくくくアとぞ唱へける。上かの樊噲が力の程ゆゝしかりとも中々申す。ばかりはなかりけり。「ハ、、ヤコリヤ面白かつたくはへ。コレくお坊是ばかりの藝じや有るまい。何ぞ珍らしい踊歌でもないか迎もの事にサアく所望だく「チャ扱々それさま達アあこぎだアエア、迎もぬれた袖だ。おらア國さおんどり

歌を。さらばぶんまけ申すべし歌「おらが在所にやナア合
めんくめいしよがござる戀にやだてなる 碑かきやれ
たより松島錦木立ていかなる雪にも雨にも忍文字摺色じ
やへいろにまよふてナア合安達が原の鬼になるまで見捨
てられたる胸はほんにくむねはもやつくむやくの關
ほんに萩の折はし杖がなふてはならぬぞへ。二人も聞入
り餘念なく前後忘れし折柄に。怪しや今迄座頭と見へし
は忽ちに兩眼見開き頼光のひとまを目懸けて窺ひ寄る。
公時貞光シヤ扱はこいつも變化よな手取にせんと大手を
ひろけ。爰の隅々かしこの詰まりかけろふ稻妻石の火か
消えて姿はなかりけり「二人はあきれ顔見合せ最前の小
僧といひ「今又稀有なる座頭の有さま狐狸きつねの所爲なる
か何にもせよ油断する所でなし御寢所こそ氣遣はし公時
おいきやれ實に尤もと貞光諸共打連れだち奥の間へか
けりゆく。

○ 下の 卷

「浮きたる雲の行衛をば風のこゝろに任すなるその言の
葉も白らぎぬやハハサハリ千早振袖そでふる鈴の鳴るかな

じや腥坊主といふ事かハア、ちつとも大事ごんせぬ忝な
くもゑんのうばそくの流れを汲み女房は愚かなまぐさも
のはおゆるしでごんすはいのこなんも又天のうずめの命
より傳はつて八百萬の神いさめドリヤ先づ天の岩戸を開
かんといだきつくを「オ、きやうとお前もよつほどいた
づら者じやはいなあわたしや大切な御祈禱の内なれば心
まで清淨に持たねばならぬオ、うるさそつちへのかんせ
のかんせお前に掛つて大事の役目を忘れてのけたさらば
すゞしめに掛らふか○「さらば見物いたさふか カン「やん
もしろや荒神のお前を見れば松植てこがねの井戸に合水
も湧出で松諸共に内ぞ御繁昌。すゑ繁昌の千代の御神樂
○詞「ム、ハ、夫そのやうなヘエなまぬるいすゞしめで
は悪鬼惡魔のしやうけは扱置き。揚錢花代茶屋舟宿。催
促生靈はなれねばそこをわれらが口車コリヤ此錫杖文を
合ふり立て抑勘定しあけたてまつる合はらひはさつぱり
福徳圓明約束縁日七夜待ち廿六夜のあいきやうをヒロヒ守
りほごんは一代男昇詰めたるこけの行 △詞「ア、もつ
たいないソレ山さん今の祭文聞くにつけ。お前もお山に

らぬかなりそな色音ならぬみさほのいとすゞにそのゆみ
はりのあづさ巫女築地はるかにあゆみ來る。合跡に身な
りはほらくくの貝繕はぬしよんほからけの。御ほうらい
はらひきよめタン。タン。タンくくくたてまつる神は
梵天てんのくお天の一尺錫杖ふりたて巫女のあとから
月待ち日まち合前からお顔をちよつと巳待の辨財天かや
うつくしやアあら美しや合大日代僧代まいり。難行苦行
のすたく坊主すたく言てぞ休らひぬ「ア、コレく
申しく最前から跡に成り先になりかふつれ立つも他生
の縁コレあねさんお前はどこからの御出じや「オ、見れ
ばお前も御修行の御身そふながわたしも見さんす通りの
梓巫女此度頼光様の御病氣につきお召によつて此所へ來
たはいナア「ハ、アコレハく幸ひく我等も御召しに
よつて御祈禱に参りがけそんなら一緒にこれかふと手を
引しむれば「オ、此山伏さんとした事がコリヤマア何を
さんすぞいなアエ、いやらしいとふりはなす「ハア堅い
なく、「堅い段かいなアお前のやうな腥はんだばさらん
だじやないはいな「ハアなまぐさばんだばさらハア口合

ふししけき。お山伏と見ゆるぞへ「ハハ、コリヤ。コ
リヤ。コリヤくくく宣ふな。そもじも。元は川竹の合
浮きふししけき梓の弓の引手数多にはり強き流れの果と
口によせとふに違ひはござんすまい「扱つても見通しや
まぶさん。やんもしろや身の上ばなし「わらひ清め戀嘶
しいつしか色に蘇民角太△「われもむかしは戀知りの戀
の世界に住みなれて朱雀の野邊の花すき穂に穂合みだ
れてうつゝなく合長地こちも浮氣に檜柴のいぶり言葉も
親方の合つらい憂目を忍び馴れにし夜半の風○「虫身に
しむ逢瀬末かけて長地かはらじ中とちかひてし戀の榮耀
にかせ掛けて合△タ、キ「くぜつ仕かけてはりあふて別れ
し翌の氣懸りに下長地文はかけどもほれ意地の筆の運びも
びんとする○「すねたところを。こちからもそんなら今
宵は行まいと合長地おもひ詰めてもうつり香の下ウタうは
氣の。風にさそはれてつい中なをる床のうち△「にくひ
男とむなづくし合鶏のなくまでうらみつ泣いつ果はわり
なき中々を思ひ出づれば昔にていまはふたりが身の上も
巫女山伏のなり形。過しゑにしこのし方と互に笑ひを催

せり「ホ、最前からのしかた嘶しイヤモたいいの
粹さんじやないいなそしてお前のお名は何といふぞい
な「わつちが名はどうらく山どう樂院どうらく修行の本
寺でござんすはいの「道理こそ尊い寺は門からとやら其お
心懸けでは御祈禱も利やんしよサア」その尊い祈りが
見たいはいなア三下り「おつと心得たんせいぬきんで 諸祈
るに驗なからんやと數珠さら」とおしもんで合當分爰
へござんせ女房なんほうぐんにやり花車風流合さいはう
色事ようほう天女ほつばうほつとりやさ女房合中央大日
大事のふうぞくさんけくぞつこんあいきやうなむ振り
ふり袖女房ふりそで女房生臭ばんだ。はさらだ合左のお
寐間に三日三夜右のお床に三日三夜、合せて六日に 文七
一日足して。合七日の御祈ねん御祈禱成就はほどくどく
になんのこつちやくくくエ合あの子よい子じやほれて
くほれぬいたアレく文をやるにも讀んだり書いたり
面倒なソレくいつそいもりの黒焼お薬なんぞをふりか
けたヤこれも私が思ひつきサアサよい子じやよい子じや
エがてんかくうんたらたかんま。ちやうか拙僧ひとり

で氣をもみぢがしんじや即時になびきやれ眞言祕密でせ
めかけく額に大汗玉のじゆず。すり立てく立舞ふ體
に人の心を盪す化生 詞「梓の女は一心不亂目たきもせ
ずためらへば。〇「化生は一間へ立掛る「得たりと女は梓
弓本もつててうく」と打つてかれば。〇「不思議
やな驗者と見へしは忽に。八臂異形の姿をあらはしはつ
たと睨んで立つたるは恐ろしくも亦羨じし女は弓と矢小
脇にかひ込みつつ立上りヤ自らを誰とか思ふらん楚王に
仕へし楊由基が娘拵花女なるはヤイ今唐土に父が弓矢を
うけつぐべき良將なし汝日の本に走せ行き武將頼光に謁
して此雷上動の弓水破兵破二筋の鎗矢譲り參らせよと父
楊由基が教にまかせわざく此土に來る折から館の騒動
頼光の不例變化の所爲と見受し故。慙と親しくもてなせ
しぞ。かゝる奇瑞の梓弓引きは返さじ惡蟲の障碍をかた
れ何んとく」と詰めかくる。〇「我がせが來べき。宵な
りさゝがにのくものふるまひかねてやは知る。我はコレ。
葛城山に年を経る土蜘蛛の精魂なり大日本を押領し。魔
界になさんと思ふより。鬼童丸が亡念かひし合體なし。

頼光を惱せしに。みやう罰目前梓弓。殊更枕に立て置き
し。源氏重寶。膝丸の威徳に恐れ。立寄る事も叶はぬか
エ、口惜しやナア汝障けなさば立所に引裂き捨てんとお
めいてかれば。△「ひるまぬ女が弓取のべ。すそをはら
へば合ひらりと飛び。△「妻手を打てば。〇「弓手へ開き△
「うしろ。を、雑けば。〇「まへに立ち合公時」貞光兩
方より切つてかれば。〇「化生はおほろ雲間の月のしん
しんと虹の 棧 長廊下花壇合つき山植込の。山は鐵城。
水は清劍たはむ枝々絲繰り掛け惡風吹かけ炎の煙の。影
に隠れて失せにけり合かゝる稀代の惡蟲もついに劍の
威徳によつて。退治まします源氏の威光感ぜぬ。者こそ
なかりけれ。

一八 杜鵑花空解 (甲斐なくおちよ)

作者中村重助

「衣桁にやどる翡翠の薄物肩にかけ香も合戀のおも荷に
おもやせて影をすゝきの一筋に 中地 大内山をうかれ出で
うつゝのちりの芥川在りし姿を寫繪の萩の白露おきまど
ふ夢に夢見る假枕浮世を花の空解もとけて流れて行く水

をとめてしがらむ心かや 詞「秋はなほ夕まぐれこそ只な
らね萩の上風薄の下露ハテ面白のがめじやなア「おも
しろく」とすむ月の影をくまばやひとしづくレイセイしほ
る千草合を敷島のみちもやさしき戀のたねほんに殿御を
あらし山紅葉の錦ふき寄する風さへ追てくる人と胸のな
るかみとどろかすおとも幽にうつきぬた 詞「ア面白う打
つは打つは「何をへ「アレくあのかア思ひ出たりオ、
夫れよ「彼長安の月の夜にりんじんゆるく、急にして合
風吹きつたふ四方の秋はたもの立て、賤の女が合織りと
る業も秋の野のきはたりくしつていちやうくきり
はたり合はた織合まつ蟲合きりくすつづりさせよとなく
蟲の千ぐさのいと細布をおりからひとひら初時雨合裾
も小づまもはらりはらく、コハ調くれないの 合野守の鏡顔
見るもはや見納めと秋雨に下引取木蔭をもとめて 歌「かさ
で駕籠かく駕籠かくはなの合そこがみやこの武藏ばら。
雲途つゞく二千里を 詞「裸でとんでおとこべし月は澄めど
もにぎりざけ 詞「一杯機嫌の細道 合畦道エイサツサ。さ
つと松かぜこへてくる 詞「ヤア棒組見たか美しいもので

はないか「ヤアマちやれよ此野末に合點のゆかぬ二人連
 「ハアこふ見た所がこちらは天人」あちらは又鹿島の先生
 事觸でおじやりや申すではあるまいかの「アイヤくそ
 んなものではないはいの「ハア、聞へたコリヤどこぞの
 祭のねりこでもなし「きつか「たぬきか正體をいであら
 はさんと息杖振上げ立かゝる「ア、これいなア一樹の蔭
 も他生の縁人に情はなきものかつれなの心とありければ
 「したりてんとひくらしいたまらぬノうまいざかりのび
 らしやらめ 合おいらを狸がはらませてそこでお臍がほて
 れんく合ほてれんふくろの緒をしめて眞實しんくのい
 としさも眞實やあではなけれども人目せきのと繁ければ
 やです。やです。手くだでしみくわしややです油断は
 ならぬと眉に唾 詞「ア、コリヤく其様に怪まるゝ者で
 はない女夫づれでこへ來たは「サア何しに來たのじや
 よ「サアそれは「ハアくおどくするは其身つまらぬ
 事あつてコリヤ心中と出かけたな「アコリヤくくそ
 のやうな者ではない斯う二人出たのは「出たのは「是は
 なにさオ、夫れよ角力じやくく「エなに角力。女と角力

ハ、、、、「そしてマア見やれなうつとふしい烏帽子装
 束あのなりで角力がとられるものかワハ、ワハ、、、
 「ハア、そちたちはコリヤ角力のわけを知らぬそふな。
 既に大内にて惟高惟仁親王御位争ひ。角力の勝負に定め
 らる。「ハテコリヤ何か面白そふな嘶だはへとても事に
 其角力の「故事來歴が二人「ア聞き度いなア、然らば角力
 の濫觴を二入さらば聽聞致そふか、詞、抑角力の初りは往
 昔靈鷲山にして十六羅漢の丸裸。是をなぞらへ土俵の數
 が十六俵。四本の柱は四天に合ひやうし。やつと手合が
 即ち華嚴阿吽の呼吸がほうどふ般若合ころぶねはんのか
 たやには。かつ色みせて今爰に、詞、開く法花のはな角力ニ
 上り「又日の本の其初め大和の國に當麻の蹴速野見の宿
 禰は八雲だつ出雲に名にし負ふ關の垣を小結前頭合立合
 ふはれの相撲ぐさふつてふり込む土俵入 三下り「西都の春
 の花く東吾妻の秋の月く手合揃へてイザござれおつ
 とまかせてよいやさ四ツ手つまどりむかふづけ合、鳴の
 羽がへし 詞、腰ぐるま合はねて付入アリヤくくく「コ
 リヤくくくどつこい「殘つたくく合なつかけて合木末

に残る遅櫻 合菊に宿かる後の月ナホさす手ひく手にひき
 返し 合鴨の入首かいなぞりアリヤくくくくしつかと
 せい「おかしやんせ「コリヤどぶじやその取組は月花の
 合結びあふたるかねごととは合ちらすまいぞやくもらじと
 はなれぬ仲の河津がけせんれば誠に見ごとへそれく
 それ見ごとへ月と花とのやさ角力 地カ、リ「二人は物に事
 よせて逃げんとするを。引止めコリヤ。行かうとは曲も
 ない。浮べる雲の。我等もくすんど戀知り情知り 合惚
 れたほの字の帆を 詞、揚て。月諸共にいでしほの。ふねに
 もまさるはや駕籠のすだれひきあけ抱乗せ「合點か棒組
 「合點じやがてんでつぺんかけ聲もほぞんかけたのと
 どりに。はやほの白らむ横雲に姿は紛れて失せにけり。

○下の卷

江戸「消て行く合物かと聲の入あやね不如歸と鳴いて下又
 もとの長魂に歸るや短夜の名残も夏の薄下衣死出のたを
 さの辻堂にまどろむ夢の袖まくら「甲斐なく覺めてほの
 入ぐらく合上坎くもる卯月の青葉山合かなたこなたに合ち
 らくくとシヅメル 白く咲けるは何の花 合引ッレヒ「そもわれ

入われは何故に斯る憂目に逢事ぞ ▲「淺まし身の身の入果
 やとツナギ肩にかけたる毛氈の引、色に出でたる岩つじ
 カハリオトシ言はで思ふぞ思ひなり「コレお千代今のは夢で
 あつたか「さればいな夢の中の二人が姿お前は秋の野の
 狩衣めして「オ、ソレそなたもめなれぬ五つ衣「半兵衛
 さん「ハテ、變つた夢であつたのふアレく杜鵑の聲
 聞けば不如歸となく唐土人故郷をおしみ靈魂鳥と化して
 不如歸となくそんなら親御の御心ざしおれもそなたも可
 愛と思召し生きながらへよとの御知らせかいのふ「エな
 んのいな未來へ導く鳥の聲あの初音を聞くにつけ早う未
 來へ行き度いわいなア「いかさまなふ冥土の鳥の聲につ
 れて。死出の旅路へ急がふが。そなたの親御平右衛門殿
 は。目かいの見えぬお人といひ。殊にかよはき老の身の。
 「二人が跡を泣きしたひ尋ね給はんおいとしゃ。去りな
 がらウとても此身は義理といひ死なねばならぬうき命。
 ▲「ソなたは是より立歸り。合親御の介抱二つにはその。
 胎内の嬰兒にせて日めを見させてたも「頼むと計り
 いひさして袖に降來る卯の花のオトシ雪にはあらぬ雨催ひ

手も合若草をわけつゝ行けばあさる雉子のばつと立つては合ほろゝけんゝほろゝ打つツツナハルなれば子故に身をこがすわれは戀路に迷ふ身の長地カ、リわきて筐の。鼓のかはいゝゝの睦言を。人にはつゝむふくさもそのれをたよりにつく杖もこゝろほそのゝみご草履。うきになれざるかゝへ帯中四郎いたづらに送る月日は多けれど花見てくらす春ならで落人の身のあださくらいつか都に歸り咲き心の春に逢ふならばいまのうきねは昔語り我君さまのお跡を慕うて忠信殿を力に遙々ひろう此旅路アそれはそうと此忠信殿はなぜに遅い事じやぞいの幸四郎ふ出地「おくればせなる旅立姿背中に背なに風呂敷せたらおふてせおふて合野道あぜ道すべり合ゝゝゝすべてまつのかくいであいたしこ合軽いとりなりいそ。いそと谷峯。しどろに越え行けば合青葉若葉の葉がくれに合見えつかくれつきたりけり幸四郎ヤレゝゝはやいおみあしかなやうやうと追つきました幸「オ、今かしの忠信殿みちすがらの心遣ひさぞつかれさんしたであらふして我君さまのましますは吉野の奥と聞いたばかりたしかにそれと御隠

家おちこち人に問ふて下さんせいなア幸「いかにもく我君の御忍びあるはお二人の盡ぬえにしの妹脊川さして行衛ははるたつといふばかりにやみ吉野の幸「山もかすみて今朝は見ゆらん「見渡せば青葉のそらへこがれゆくいはでつゝじの盛りもよしや春山合いも山合あいたての中を流るゝよし野川水は心に従ふけれど其戀しさとあひたさに。下々、キ水も氷ればうらおもてとけぬ思ひは青柳中オトシ枝をつらぬる契りなり幸「ア、道々も申しまする通り麓の里へ御供いたし御對面致させませふこれこそは又逢ふまでの御筐とあつてつかはされました此初音の鼓我君と思召され旅のうさをお晴らし遊ばしませい幸「ナニ我君義經さまサ此よふにいつかお目にかゝりつもの恨がいひたいはいのふ幸「御對面なさゝるまでは此つづみを我君と思召されませい幸「又逢ふまでのお筐と給はりし初音の鼓サ此鼓を見るにつけ「たゞ忘れぬは忍ぶ夜にまくらも。なんのいらばこそ。こちらの此手を殿御の枕だきしめ合ひきしめ胸と顔と顔とのほづかしく合心に思ふ。ありたけを口に言はぬかはんじ物。結ぶの神

のとき初めてまゝに逢ふ夜のまゝならずほんにせいしのととりさへもかはいゝゝとなく物を。こひしゆかしの我夫や。あらなつかしの我夫とユエツンかこち給ふぞ道理なる幸「オ、御尤じやゝゝ其やうにきなゝゝと思召さぬがよふござりまする忠信附添ひ居るからはお氣遣ひなされまするな蘆原峠も越しましたれば麓の里へはもう僅かアレゝゝ御らうじませ梢々の春の色都の花の八重一重イヤ又こうした景色を御覽なさるゝも御氣晴らしで御座りませふがな幸「花は都に變らねど變り果てたる浮世の中賤が軒端に假寐して夜毎々々の襖さへ定めぬ旅のうさつらさ幸「あるが中にも賤の女がこれのざい所でつくよねの幸「杵の拍子もとりゝゝに三下り「人もわらやの合そだちには。合春は羽子つく手鞠つく過しむつみの殿御づきぬしと。こなんと二人連合かまくら風の詞しやんとした中地みやこに稀な殿御ぶり。しかも夜見世の格子先見かはす見交す顔と顔誠に嬉しうさふらひける幸「これ忠信殿幸「エ幸「なんとさんしたぞいのふ幸「サこれは幸「サそれは「誠に日出度うさふらひけるほうろく頭巾をかうべに

召し合夜毎にお通ひなさるゝならば君も榮えます。サアその愛嬌ありけるなれそめはゆづりはを口にくはへ吸付煙草の。合煙る中にも合其面影を忘るゝひまはないいな「サアゝゝゝそのうそなみだにやほだされて中地かよふ編笠袖扇。ヤそれさまのうちかけななごのこづまもつちやしやなら。しやなら。ゝゝゝとひらりめいたところなどは中々に出すぎだゝゝゝ出過ぎだハ、是も旅路のうさ晴し「イヤモウゝ見かけに似合ぬ氣の軽い忠信殿今のこなさんのたはむれ事で旅のうさをはらしましたはいのふ幸「是はゝゝ有難う御座りまする我君の御隠家もモウ僅か必ずゝきなゝゝ思召さずとへんしも早うお急ぎなされませい中地「いざさせ給へとすゝむればいつかうしろに以前の軍藏大勢引き具しおつとりまき「ヤア見付たゝゝ義經の思ひ者靜御前今一人は佐藤忠信靜が所持せし初音の鼓又義經の御きせながこつちへ渡せ「渡せゝゝとのゝしつたり合「へへム、ハ、ハ、愚かゝゝ合君より賜はる此二品。やはかうぬらに渡そふか。ならば手柄に取つて見ろ合「ヤ口

がふぜふなる毛二才めと左右方一度に打て掛れば「ヤ心得たりと忠信は静をかこふて花のもと合君が爲には仇櫻顔に緋櫻虎の尾を合み。だ。さぬ内に犬櫻合雲井櫻の名に高き合あさぎ櫻の七重八重こゝに初音の初櫻。合さそふ風にひらくくく合ひらき扇子の三つ四つ五つ舞六つ田を越へて遠からぬ野路の春風吹拂ふ雲と見まがふみよし野のキホヒ三重麓をさしてぞかけり行く。

二〇 色映紅葉章(布袋) 作者 河竹新七

上錦着て。中地わけつへ行けばもみぢ葉の。詠めも合よしや。世の中の人。心は。天地と。ともにひらけし戀の道。たれかにくしと。合夕がほのほのく白き花の顔色に染なす御姿はむかし男と知られけり田ハシル其風俗も。江戸ガ、リ名に高き在五中將業平の。初冠を。今こゝにうつすも合さぞなすきびたい長地ほんにいとしい殿さんを合大事に思ふ合此胸は。筆にも愚か。車にも。長地光源氏の。浮舟にも積まれふ物か。さりとはアレまだそんな空事とはらふ袂の。風のつて「あつたら夢の。花ちりてむつくと起きたる赤ッつら合から唐土の焚噺が。若衆盛りもか

柳櫻をこきまぜて都ぞ春の。錦とよみしは花の春。今はそれには引かへて。頃は小春の紅葉の賀。此程某思はずも。彼のいにしへ業平の。初冠の昔に習ひ。天上にての元服は父清盛御ひかり。此身のほまれ其上名に負ふ熊野御前を心の儘に召仕ふといふは。嬉しいといはふか。此様な悦ばしい事は無いといふ。「アノまあ我君さまの御意遊ばす事はいいの。わたし等風情のいやしい女子に。とやかふと今の様におつしやつては。却つて罰が當りまするわいなア「上總の介は手をつかへモウ是が北嵯峨の御別殿イザ御よりとくく」と心きいたる景清が詞すゝめに任せ御大將。やがて車を下り立給ひ。サアく熊野御前紅葉見ながら酒にしやうではあるまいか。「ヤ夫れは宜しう御座りませうとはいふもの、かんじんの酒を忘れて参りました。「是はしたり酒が無うてすむ物か。早ふ酒をとつて来い早うく「ハア畏つたと景清がそともへ出るを「衛士の鶴平ア、イヤく申しくと押しめエ酒の御用なら此方に貯がござりまする「ム、見れば賤しい仕丁だが。わりやいつの間に爰へ来て何をして居た「ヘエ私は

くばかり。さりとはやさがた久方の。ごけんのはしか。詞焼餅か。此あかふんどはきらい物。おらが流儀は四方の瀧すいたどふしの中わんで。のんだるだるまは夜も合ひるも合あかいくと夕紅葉合「アレ見しやしやんせあのよふに雲の上なる。御方も。色のしよわけはありそ海。深い深のありたけがモ、はらが立たいで何としやう。ハテいな事を。夕つけの。鳥じやなければはるくくと。へだつ。あづまの。合文づかい合よそのもちつき。よそにみるわれらは女なしの一本木。根引の。心はないかいな「そふいはしやんす主さんが。眞實しんからほんくの誠の心があるならば合外には中村詞秀鶴さん。エ、なんのこつちにいつはりのなき世なりけり時雨月。春は春でもどこやらが合日あしせわしき。小春の空。たゞ何事も。詞久しぶりめでたふ岩井に杜若さんしめましょか。しやんく。も一つせ。しやんく。祝ふて三度しやんと出で立つとりなりは池田に生ふる箒木の。文もて急ぐ二人づれ手に手を取りて柴の戸の外もにこそは来りけり詞宗盛公は悠然と。車の御簾を掲げ給ひ。見渡せば。

鶴平と申す者今日は我君宗盛公。初冠のみぢの賀せめて御庭なりとも清めませうと存じ。此處に控へ居りまして御座りまする「ム、夫れは近頃奇特な者。そして今いふた酒はあるか「エイ酒もさけ上諸白。紅葉の枝を切くべてかんもはつたり加減よし。苦しうなくば上げませうか。「ヤ夫れは幸ひ早く持つて来い「サアく女中女中。其銚子盃これへ持つてござい「景清見咎めム、われ一人かと思つたりやアノ女アリヤなんだ「イヤちつとも氣遣な者では御座りませぬ。宗盛様へお便に参つた者。幸ひ此女に酌をさせたらどうで御座りませふな「ヤコリヤどうもいへぬはよかろく「サアくコレくお女中アレナアノ宗盛公のお側へいて酌をするのじや合點か「ヘエ、嬉しいござんす。是といふもお前のおかけ有難う御座んすと懐中より文箱取出し銚子盃持添へてアイそんならおゆるしなさんせへ「いざくこれへと手を取りて。すゝめにやすらふ逢坂の關の。戸ざしも心して。そろく歩むなりふりも合はづかしいやらこはいやら二人は。顔を見合せて。つきやる袂ひかふる袖。ゑしやく

こほるゝ風情なり。宗盛はつくくゝと見給ひテモ見事。ム、そちはマア何者の娘名は何と云ふ者じや「アイわたくしはといゝかねて面はゆけなる。とりなりを」側から鶴平もみ手して。ハ、眞平御免下されませう。憚ながら其譯は拙者めが申上ませう。此娘は熊野御前さまの御國。遠江池田の宿の長がもとに居ります朝顔と申す女子でござりまする。ム、朝顔シテそふいふ其方は何者じや「ヘエ、拙者めは此度。當御殿へ歸り新參衛士の鶴平と申す下郎でござりまする。ム、時に朝顔は何用あつて來りしぞ「アイわたくしは。熊野御前様の母御様より態々御使に参りましてござんすはいな「アイヤ、お女中さん熊野といふは則ちわたくし故郷の朝顔は田舎そだちのふつゝか者。それに引かへこなさんはつまはづれのじんぜうさどうもわたくしや合點が行かぬわいなサア母様よりのお文ならドレ見せさんせ「イエ、此お文は殿様へ直にあけいと母御さまのおつしやり付け「イ、ヤ其文どふでも「イエ、そふはなりませぬとせり合ふ二人を押静め「ハテ扱何を争ふ事があるマア下に居やいの「ア

イそんなら御勝手になされませ「イヤ朝顔とやら其文これへ「アイと差出す文箱をはなしもやらすかほと顔。よそ目づかひはオ、しん氣宗盛文を押開きム、何々甘泉殿の。春の夜の。夢ばかりなる初戀は「夢ばかりなる初戀ヤコレハ。サそれはウレヒ過ぎさざらぎ。清水の。花にもまさるお姿を見そめ合參らせそれよりは。くち木櫻と。身はなりて。雲井を慕ふ鶯の涙に合くらし泣きあかし。合ねてもさめてもさめても寐ても合候べく候のなけやりに。忘れとふても。忘れぬほんに女子の大膽な。人目厭はず我とわが。使に來たのもどふぞマア。せめて合お顔の見まほしく。うそのありたけかきつくし。しとのとめもあとやさき。娘心のつきつめし。筆のあやこそわりなけれ「是は熊野御前のはしたない。たとへどのよふな事いふ迎も。こつちに覺へのない女。その上にマダ朝顔といふ名を偽り。池田の宿より使といふて來りしも不思議の一つ。どふも合點が行かぬはいの「景清も不審顔成程御意の通り紛はしい女め。しかも紅葉の眞盛り。御先祖惟茂公の昔を思へば。戸隠山のこれゝだも知れ

ないマア其女め引くゝして。正體を現はすべいかと立懸るを「鶴平すかさず押隔てア、コレゝゝめつたな事をなされませるな。今時の世界に紅葉狩の場所へ鬼が出てつまる物でござりまするか。誠をいへば此娘は。五條あたりの白拍子。朝顔といふ舞子でござりまする「宗盛は聞き給ひム、スリヤ聞及んだ白拍子の朝顔か「恥かしながら過しきさらぎ清水詣遊ばせし折柄見初め參らせ今一度。どふぞお顔が見たいと姿をやつして参りましたはいな「成程こなたに覺へあり、車の内よりほの見し時。五條あたりの朝顔と聞くより一首の短冊を送りし事が縁となり慕ふて來りし心ざし。何にもせよ其短冊は「アイコレ爰にと指出す短冊とりあけて「オいかにも是こそ身が手跡▲「文ならねどもかくとだに。思ひこがるゝ心から合はでにやさしき。シツメ音羽の櫻。峯の梢の一本に色ある花と。みそ一文字の。筆にいはするやまとがな。言の葉草を慕ひくる。其名もゆかし。朝顔とめさるゝ袖もしどけなき仰せなまめく下紅葉霜にや色もまさるらん「景清鶴平兩人は。目引き袖引きコリヤどふじや扱も手早

い旦那殿せめておらゝもチ、ノゝちつと。あやかり玉子の君故ならば。つらい廓の勤もまゝよ合眞實命は浮に浮立つ鶴平が。申しノゝ景清さま。お前ちよつと女郎に成り給へさらば我等は色里で諸事譯しりの大通客。面白かるではあるまいか「ウ。ウウ、ノゝのみこんだ。そんならさしづめ馴染の女郎。思ふがなかの大口舌「こちの客衆のにくらしいよふもだました。ぜうなしめ合しみゝ腹が詞エ立つはいの。わたしが心はコレ。コレゝコレ。たとへ火の中水の底。劔の。山でもなんのそのお前故なら厭いはせぬ。エ、あんまりじや胴慾じや。むごい客めと詞すがり付きたゝきくいつき。むしりつく「はづみに互の口と口「ワハエ、きたない何をしあがる「宗盛公は打笑み給ひホヲ兩人が思付出來たゝさり乍ら最前より心を付けるに。衛士の鶴平とは借りの名誠汝は永井の齋當「何がなんと「イヤサながいはおそれ早歸れ。きつゝ、馴れたる錦の直垂。心ばかりの寸志ぞや「ハハハハ、有難い景清殿。よきに御禮おとりなし「アイヤ、口先ばかりの御禮ちやすむまい。何ぞ目出度う扇のひと

さし。とても事に朝顔と諸共にナ旦那、オ、よかろく、
 「サア、所望じやく、ハア幸ひ君より頂戴の此直垂。
 かうかけたるとりなりは其儘の八まん大名、そんならわ
 たしは此長柄もみぢの傘を幸ひに時に取つての太郎冠者
 「御代萬歳の壽を祝ひに祝ふ紅葉の賀、ワキ狂言を今爰に
 とりも直さず末廣がり「めでたふこそは「さふらひける
 三下り「御代もゆたかに千代八千代末の松山波こへて合ま
 づ。春の壽に。春鶯囀の合しらべには春風と諸共に花を
 合ちらしてどふとうつさて。又あきの。夕暮に合つれそ
 ふまひのかへす手は。秋風をさそひ來て波を合ひ、かし
 どふとうつ。萬歳樂は合よろづうつ。■「サア、これ
 からは太郎冠者。そなた一人でひとさしまや。所望じや
 所望ぢや。▲「イ、エイナアお大名様を差置いてマアどふ
 してわたしが。舞はれましやうぞいなア。●「ム、どふで
 も舞はぬかエそんなら勝手にしやれよ▲「ホ、アノマア
 不機嫌なお顔はいの。あの御機嫌を直すにはハテどふせ
 ふなオ、それそれ。幸ひのはやし物。ありあふ傘をこふ
 さして■傘をさそなら。春日山合、これも合神のちかいとて

吾人が傘をさすなら合我も。傘をさそふよ合實にもそふよ
 のやよけにもそふよの合「いかにやいかに太郎冠者。ぜ
 ふのこはいは憎けれど。はやし物が面白い。こつちへ寄
 つてさしかけい■「けにもそふよのやよけにもそふよの
 合「これも。袖のちかいとて合人が傘をさすなら合我も。
 傘をさそふよ合■「いかにや如何に太郎冠者。どぜうのす
 しをホウほうばつて諸白を呑めやれ■「けにもそふよの
 やよ實にもそふよの合「實に末廣きうたひ物我々ばかり
 うかれ來て君の御機嫌如何ぞと。二人は立寄り三人を。
 無理に手を取りひつ立て。ついの袂のとりぐに三上ッ
 歌、雨の其夜はな。相合傘でしのばんせ合濡れてもつれて
 うちあけて合いふた情にわけふたつ。こがれまつ身と合
 またる、人とじつと合誠が合行合ふならば。いつかあふ
 せの初枕。さりとはく、ほんにる合雪の其夜はな。つも
 らぬ先に合忍ばんせ合つもりく、て打とけて合とふた思ひ
 のわけふたつ。宵の口舌と合わかれの袖と。鳥と合鐘と
 を合恨むものちの。後の御けんの縁のはし、さりとはく、
 ほんにへ「返す袂のふりもよし「ア、ヤレ、くたびれ

たく、「ヤこいつらに浮かされて。此景清をとんだ目に
 合はせおつた「宗盛につこと笑はせ給ひ某が紅葉の賀に。
 鶴平が千代の袖。かへして祝ふ末廣の。榮え壽ぐ二人の
 者オ、でかしたなア幸ひそれなる朝顔も。是より直に伴
 はんが。父清盛への憚りあり萬事は鶴平頼み置く。某歸
 館なしたる上迎の人をこすべきぞ「エ、お情ないわが君
 さま今更お別申しては「ハテさて其別れも暫しのうち又
 の逢ふ瀬は衛士の鶴平朝顔を伴ひて。西八條の館へ來れ。
 其時こそは宗盛が父清盛へ推舉なし。其直垂の錦の榮え。
 二度武門の花房を都にさかす割符の直垂「へエ、重ね
 重ね有難き御惠。御歸館の沙汰あらば朝顔殿を伴はんま
 づそれまでは「イヤもふしじやといふてこれがまア「コ
 リヤ朝顔さりとと思ひこがる、もみぢ葉の「ちらぬ名
 残の今の別れぢおさらばサアござりませう「いさめく、
 て諸共に只此儘においとまと花を見捨るかりがねのそれ
 は越路我はまた。そでに名残のひとしぐれ。泣別れてぞ
 いそぎ行く。

○下の巻

今更に。中思ひぞ出づる音羽山詞ふかき情の春過て合此
 身に秋の北嵯峨やさかな心は詞聞へぬ熊野が袂の村しぐ
 れ降るは涙か散る紅葉 詞「それとは知れど景清がわざと
 わきへまぎらしてサア旦那々々。酒にでもなされませぬ
 か「それはよからふ熊野御前。コレサは又どうじやぞ
 いの。テモうかぬ顔ではあるぞ「もうし胴慾な我君様
 昨日にかはる今日の雨 合うつろふ色は。もみぢ葉の
 更け行く秋の夜もすがら。かはるまいとの。せいしのか
 らす。かはい合かはいとあけ方の。そらだのめなきお心
 がぐちな女子の癪の種あづま育ちの不束も君が情に。は
 ぢぬ氣はわたしが無理か胴慾な。お情なやとすがり付き。
 恨み涙にくれ居たる「是はしたりわけもない。われを慕
 ふて來た女。情の言葉かけたれ共。そなたを見捨てよい
 物かいのふ「イエ、なんほ其様におつしやつても。つ
 い移り氣なお方故どうも心がすみませぬ「景清も氣の毒
 さ是はしたり何のかのとおつしやれすと。御機嫌なをさ
 れ。奥御殿へ「いかさま彼がいふ如く。機嫌直して熊野
 奥へ「先おいらなされませふと。すゝむる折しも遙かに

「月はほどなく入しほのくけぶり」みち來る小松原いそぐとすれど「振袖にひらり帽子のふわく」と顔にまたたく風のとが仲監出しどけ。なりふり。ア、はづかしや鐘の供養に物すきまいりあじな娘と。人毎に笑はゞ笑へ。濱ちどり。君と寝る夜のきぬくをおもへばにくや世の中の鐘もくだけよしゆもくもおれよ。さりとはく戀を知らざる鐘つきの情ないぞや合にくらしい。わするるひまは涙川戀の氷にとぢられて身をきりくだくうき思ひうきねのおしの小夜衣世をも人をもうらむまじ三下り「戀をする身は合濱邊の千鳥合夜毎々々に合そでしほるしよんがへ合「君にあふ夜はあわざのからす合かはい可愛とひきしめてしよんがへ「かはす枕のかねごと門に松立つあしたには梅が香かほる窓の内櫻も散りて早苗時螢のゆふべ。さみだれや蚊遣りふすほる軒のつま秋風そよと音づれて田の面におつる鴈の聲けに月ならば十三夜菊の霜月ぬれそめてわかればかなき鳥のこゑたゞわれをのみおひくるかと咎なき鐘をうらみしもこのつみとがのかすくを。よむともつきじまさごにもひかりてり

せる草も木も。春に知られぬ花ぞ咲きける。何と關兵衛どふもいはれぬ景色ではないか仲監成る程左様で御座ります。此雪をさかなに一つたべたらよふござりませふと話の内に菊之丞「小町姫關の外面に立休らひ。申しちと御案内申ませふ門「あれ關の戸に誰やら案内があるぞや仲「なに案内とは何者じやと關兵衛が關の戸明けて、ア、貴様は女じやな。此夕暮に供をも連れず唯一人此關へはなぜ來たのじや菊「アイわたしや三井寺へ參詣の者。關を通して下さんせ仲「成程通りたくば通してもやらふが。手形は有るか菊「其ような物はござんせぬはいなア仲手形がなくば通す事はならんく門「コレ其様に言はずとも此大雪に嘸難儀で有ふ了簡して通してやりやいのふ仲「そふおつしやれば通してもやりませふが。これ女中せんならおれが尋ねる事が有るが。それを一々答へるか菊「成程私が覺へて居る事なら何なりと答へませうはいなア仲「先づ第一合點がいかぬ菊「そりやマア何がへ仲「サア其わけは●「一たいそさまの風俗は。花にもまさるなりかたち■「かつらのまゆすみ青ふして。又と有るまい

そふ寺の名も金かく寺にぞつきにけりく。

二二 積戀雪關扉 (關の戸)

劇神仙著

●「待得て今ぞ時にあふく關路をさしていそがん■「むかしく昔ばなしの其さまに。長地しばく似たる柴刈も關やもる身の合かた手わざ。柴をたばねてかいやりすて。五尺いよこの手拭。五尺手拭。中そめたしよんがへ「木こりの歌も世を厭ふ。身につまされてしのオンばしくわする心に。取敢へず引。手なれし琴をギンしらべける「うらめしやわが縁合ガハテしほらしいしらべの音色じやな■「かゝる山路の關の戸にさしもたへなる爪音を。きくにつけてもカン身の上を。ギン思ひ出せば錦のとばり。入玉の臺に人となり。ハシル翡翠のかんざしたをやかかある人は合。初花の●「雨にほころぶけはひと合女子をのほすかけ詞▶カン「今は夫には引換へて。草の衣の袖せばき姿をかくす簞笠や■「杖を力にたどくと。關の戸近く歩み寄る。門之助宗貞琴をしづめ給ひ雪ふれば冬ごもり

●「お姿をお公家様がたお屋敷さん多くの中で見初めたら。只是通さぬ管なれどそこを其儘捨置くは■「きやほうすどんぜうなくしを見るやうに合わるじやれいふたり大つうしうちも有るまいが合どついで理屈か合氣が知れぬ。くいやとよ我は戀衣。はや脱捨て烏羽玉の。墨の袂もたらちねの。後の世願ふ菩提心。かつしきの身にてさふらふぞや▲「ホウ詞は殊勝に聞ゆれど。菩提の道に入りながらなぜ。黒髪を剃らぬのじや菊之丞「姿は世をもいとほこそ心で厭ふて居るはいな▲「シテ煩惱とは▶「菩提なり▲「だいはが悪も▶「觀音の慈悲●「又はんどくがぐちも▶「文殊の智慧●「智慧も器量も取りなりも■「たぐひなき身を百歳のうばになる迄一人寝は。惜しい事では●「ないかないなお目にかゝるも初深雪。凌ぐこかけもいとしやと關のとほそを押開き●「こちへ■「こちへと通しける菊「小町は見るよりヤアお前は宗貞様おなつかしやヌと取付いてしばし涙にくれ居たる門「これはマア思ひもよらぬ此處へはどふしてござつたぞ菊「さればいなア。いつぞやふるの御寺にてお別れ申した

其後。王子様の横戀慕是非に人内と有りし故館を出て此様に。身を忍んで居りますはいなア 門「それはさぞうきかんなんをさつしやれたで有ふのふ。それがしとても同じ身の上。コレ此の所は先帝の御陵故。うつし置いたる御愛樹のあの櫻。非情の物とはいひ乍ら。崩御を悲しむあまりにや薄墨色に咲たるを。そなたの歌の徳によつて。盛の色を増したれば小町櫻と言ひ傳ふ其名にめで、少將も。一本の本に侘住居。思へばはかないるにしじやなア 仲「始終を聞いて關守はそんならあなたが小町様でござりましたか。コレハコレハ少將様にも嘸お悦びでござりませふ。これからはうちくつろいで、そのなれそめの戀咄し。お聞かせなされて下さりませぬか 菊「イヤもふ此身になつて今さら語るもおもてぶせ 門「さはいへ迷の雲霧を懺悔に晴すもさとの道 菊「そんなら戀の世話を 仲「早ふ聞たい所望じやく」▲「其初戀は去年の秋大内山の月の宴。其折柄に垣間見て。思ひに堪へ兼ね一筆とかきそめしより明暮れの文玉章のかずくは。何と覺へが有ふかの ●「其水莖にこまぐといつはりならぬ眞實

を。聞くうれしさもおしつゝみ。戀こが入れても母さんに一旦誓を立てし身の。色に心は引れじと思ひ返していなせをもいはぬはいふにますほのすゝき ▲「小野とはいはじ戀草に。百夜通ふて誠を見せて。忍び車の榻に行。やつし姿の夜の道いつか思ひは山城の。木幡の里に馬は有れ共 ●「さつても實じや眞實じや。一里あまりをわくせきとそんならかごにものらずにか ▲「君を思へばかちはだし「月にも行▲やみにも行「さて雨の夜に行く思ひきりふゝすは我戀を思ひ切れとの辻占も祝ひ直して合●行く夜の數も九十九夜入今は一夜ぞうれしやと。まつ日になれば。先帝の崩御ときくに身の上の ▲カニ戀も無常と立かはる。君の菩提を弔はんと。位を辭していそのかみふるの御寺によもすがら。御經讀誦の折もおり「わたしも其時母上のカンの後の世祈る心ざし。一夜ごもりに思はずもお顔を見るよりぞつとして合身にこたへ。後生菩提も。どこへやらすて、合カン二人が一つ夜着枕ならべて寝たれども。アイヤくく立し誓は破られずとい其儘のうきわかれ思へばはかなきえにしぞと。かこつ涙

のながれては關のオトシ清水もまさるらん 仲「關守そばからア、かなしいはお道理く、何もかもこれからは。此關兵衛がのみ込んで居ります 菊「そんならお前頼むぞへ 仲「サアそれできまつたといふものだ仲人は此關兵衛。四海浪靜かにでもあるまい。ハテどふした物で有ふなア。オ、それく此關守には毎年七夕祭が有るが。其祭になぞらへてあなたは牽牛。お前は織女 門「オ、それく秋と冬とはかはれども。年に一夜の天の川 菊「とわたる星になぞらへて 仲「七夕祭にかゝらふか ■「けに織姫のかざしの袖。秋の錦を織はたの合中に想の字をあらはしきぬたの上に合ゑんれつこの合しきりにひまなきはたの音合きりはたりてふ合く「しづが手業やことわざの内に關兵衛懐中より落せし割符を小町姫手早くとれば 仲「ヤそれは門「それくくくくそつこでせい ▲三より「戀じや有るものなわたらでおこか合渡らば合そふして合こふしてと。めつますきまをなに白川の。はしをわたるか船にしよか。橋と船とは合戀の仲立ほんにへ 三下り「中々にはじめより合なれずは合物も思はじ合わすれば草の名にあ

れど忍ぶは合人のおもかけく、ナホルハヤメ「たまにあふせの七夕も引せめて一ト夜は有る物を。一期そはれぬうき戀は。つれない此身とばかりにて流涕こがれ泣給ふ ●「アこれく、コリヤマアどふでござります。其お歎を見まいため。今宵しつほり。露霜に色づく紅葉の橋わたし。しよせん仲人はよいの程。我等は奥で酒のかん。長居はおそれとはしり行く「おりしも西の雲間より。眞一字に白尾の鷹合かしこの石にとまりしを 門「宗貞見るよ。ヤアあれはまさしくせいらいの鷹。足に何やら付いたるはハテあやしやと立寄り見れば片袖に血汐を以てじしじやうしうと記せしは古へ衛の公子壽が兄に代つて死したる唐歌扱は弟安貞は 菊「お前に代つてお果てなされましたといなア 門「不便の者の身のはてとヌエカ、リ歎きの内に片袖を石上に取落せば。血汐のけがれに鶏の聲宗貞耳をそば立て。ハテ合點の行かぬ鶏の聲仔細ぞあらんと見廻して。石押退くれば思はずも見れば土中にあやし鏡 菊「小町はかけ寄り手に取上げ。コレ此鏡の裏に生けるが如き鶏の形。血汐のけがれに聲を上げしはまが

ふかたなき大友家の重寶。八聲の名鏡。篋様よりおわたし有りし此割符と。最前關守が落せし割符。これかふ合せて見る時は、門「鏡山といふ文字何んにもせよ合點の行かぬはあの關守。跡に残りてなをも様子をうかゞはん。そなたはこれより立返り。烽火を相圖に關の四方をかこまれよと篋へ傳へてたも、菊「そんならわたしは、門「小町殿、宗貞様、カ、リ、片時も早ふと宗貞の。詞にまかせ小町姫。戀しき人に別れても又逢ふさかの山づたひ雪踏みわけて三重いそぎ行く。

○ 下の巻

■太夫「今宵も引下既に。ッふりしきる地雪のつばさの羽風をも。長地音しづかにやふけて行く。まさに先帝御な入き跡を、イロ詞とい奉る後夜の讀經合ワサンなをも回向を忘れもやらすじゆするも弟。安貞とスエ心ばかりの手向草、宗貞袖を取出し、ア、去ながら。血汐にそみし此片袖。身に添へ持たば先帝への恐れあり。如何はせんとあたりを見廻し。オ、夫よくと件の片袖琴の下ひへ、ハッおしかくす。其間に奥の一間より、眞其屋一杯機嫌で關守はてう

る此櫻を切つてごま木となし。はんぞく太子の塚の神をまつる時は。大願成就心のまゝ。此斧を持つて立所にどれ、かしこの石に斧の刃を押當て押當てとぎ立る合音は、そうくとうくと。暗をハリオン照らせる金色は玉ちる計り物凄き、此の斧の刃を試むるは。幸ひなる此琴と。つつ立上つてノル斧振上げ。二つに切ればコハいかに。内より出る血汐の片袖手に取上ぐれば懷中に。深く秘め置く勘合の。印綬はおのれと飛去りて鳴動、するぞ不思議なるハテ心得ぬ此片袖を手に取らば我懷中の勘合の印櫻の梢に飛去りしは。彌怪しき此櫻木。何にもせよと立かかり切らんとすれば目もくらみ。覺へすあとへたぢくと、たぢ合しはしは心もきえくと斧にすがりて。茫然たり、■カンギン「まほろしか。深雪に積る櫻かけ。實にあしたには雲となり引。夕には又雨となる。巫山の昔目のあたり墨染が立ち姿、二より「あだし仇なる。名にこそ立つれ。花の蕾のいとけなき禿立から曲輪の里へねこじて植ゑて春毎に盛りの。色を山風が来てはねよとのかねごと。とまり定めぬうたかたの水に散りしく流れの身。■關守は心

し盃携へて。足もひよろく歩み出で。エイ世の中に酒程のたのしみはないはいの。ヤアお前はまだ寝ないか。エイヤなぜ寝なさらぬよ。シテ此花嫁御はどこへいつた。ハア、きやつ床急ぎだな。エ、急ぐやつさ。コレお前もいつて寝なよ。寝ぬは損だばさるんだ。あれはさのゑい。これはさのゑいやと戀の淵。もしもはまるまで四つ紅葉引、門「成程わしいいつて寝よふが。そなたはきつい酔よふじやア、あぶないくと言ひさま入れる懷の手先を押へて。ア、コリヤ何をするへおれが懷へ手を入れてド、どふするのだ、門「サア是は。イヤどふするのだよエ聞へた。紙が無いと言ふ事か。神も末社も打連れて。めでたの若松様よ枝も榮へて葉も繁るお目出度や千代の子おめでたや千秋萬歳。ばんせい、ばんせい、萬々歳ハア、ア、「いざさせ給へと押しやられ、し、うを胸に宗貞は心残して奥へ入る。跡は手酌の一人酒ア嘸今頃はしけれ松山。エイアゑいきみだぞコリヤ命をかきむしるはへどれもふ一杯酒にうつらふ星の影、此杯中に。ちんぜいのきらめく影は寅の一天。今宵今宵三百年に餘

付き。ヤア。いづくともなく見馴れぬ女。この山かけの關の戸へはいつの間にとこから來たのだ、菊「アイわたしやアノ鐘木町から來やんした、仲「ム、何しに來た、菊「あひたさに、仲「ソリヤ誰に、菊「こなさんに、仲「ナニおれに。そりやなぜ、菊「色になつて下さんせ、仲「エ何がどふしたと、菊「サア恥しい事ながら。私しや見ぬ戀にあこがれて。雪をも厭はずはるくと爰迄來た程にどふぞ色よい返事をして下さんせ、仲「コリヤ有難いといひ度いが。どふも合點がいかに、菊「アお前もマア疑ひ深いそが歌にもいへる。櫻さく。櫻の山の櫻花、仲「さく櫻あり。散る櫻あり、菊「思ひくの人心じやはいなア、仲「そふ聞けば有そふな事。何にもせい今日の、下した二人となし器量なら風俗なら。ろかういはれぬ鐘木町の太夫しよくが。色ではふとはコリヤ大きに仕合せが直つて來たはへ。そんならいよく、これからは、菊「いつ迄もかはいがつて秀鶴の千代八千代もろ白髪まで添遂けて下さんせ、仲「それは近頃忝い。時に太夫さん。お前のお名はへ、菊「墨染と云ひやんす、仲「なに墨染。あの櫻の名も元は墨染、菊「エ、仲「ハ

テゑいお名でござりますの夫はともあれ。ついにおれは
マア女郎買をした事がないが。曲輪のかけ引き 菊「馴染
のしこなし聞夫ぐるひ。實と仲うそとの菊、手くだのし

よわけ 仲「うら茶屋ば
いりのこんたん迄 菊

「そんなら爰ではなそ
かへ ■ナゲ「行くも返る
も。忍ぶのみだれ。限

り知られぬ我思ひ「月
夜も。闇も此里へギン

忍び頭巾で格子先合●
「行きつ戻りつ立つく

す ■「向ふへてらす挑
燈の紋は菊てふ丁度よ

い。首尾と思へどやり手が見る目 ●「待つたぞや 菊「オ
よふ来なんした逢たかつたも目で。知らせのれんくやり
て入る跡を ●「残り惜しけにさし覗き扱またせるぞく
と一人つぶやく程もなく ■「まがきの内より小手まねき。



江戸ふわと着せたる打かけのニムすそにかくれて長廊下。
毒蛇の口を遁れし心地。はつと一息。つく鐘も引四つ過
て床の上 ●「やまだ此あたたまりのさめぬのは。さつき

に還つた客でもよも
や有るまいが。コリ

ヤ外に出来たはへ。
どこのどいつか知ら

ねども。お年が若ふ
てよい男でお金もた

んと御所持なされた
色男さまと。しつほ

りと御ちぎり。なさ
れたでござりませう

ホ、コリヤおかしい覺へもない事言かけて。口舌の種
にさんすのかへ。エにくらしいとふつつりつめれば ●
「アイタくくくアいたいわいアこんな所に居よふより
アかへりましよくく ▲「これいなア ■三下り「身はいろく

の合なりかたち「あしなかをつま立てちよこく合ちよ
こく合足をつまだて、●「ハアこれはしたり。たばこ入
れを忘れて置いた。ア儘よなんとせう。アイヤくくく
うかくくとしてまつけでもよまれては。オこはい事く
どれとは思へどもアどうせふなア。イヤくくく思ひ切
つてどふでもかへらふ ▲「これ「いのやれ我故郷へかへ
ろやれ ハシル立舞ふ内に落たる袖。これはと墨染とりあ
けて。だきしめつ身にそへつ引床しき夫の形見やと人目
もはぢすスル泣きければ 仲「コレそなたは何を泣のじや
菊「サアこれは。オ、それく此片袖は。よその女中さ
んから書てよこさしやんした。起請じやの 仲「イヤそり
や片袖だ 菊「イエく起請でござんせふ 仲「オ、なる程
起請じや 菊「エ、お前はなア ●「これ此やうにはじめか
ら起請誓紙を取りかはし。ふかいお方が有りながら隠し
て置いて又わしに。長地いろであふとはよふもよふ騙さ
んしたがにくらしい ▲「そふとも知らず。したひ来て。
見ればはかなや片袖のカン血汐の文字はハヤメなき跡の形
見と思へばいと々なを「コレなつかしい悲しいと詞に

色は含めども心のつるぎほにあらはれ立寄る女をはつ
たとねめ付け最前より此片袖に。心をかくる怪しき女。
様子をあかせ何とく 菊「オ、此片袖は夫の血汐。それ
のみならず最前我業通にて手に入れし。勘合の印を所持
なすからは。様子があらふ本名あかせ何とじや 仲「かく
成る上は何をかつ、まん我こそは。中納言家持が嫡孫天
下を望む大伴の黒主とはおれが事だはい 菊「扱こそ 仲
「我に恨みをなさんとする。そもまづ汝は何者じやツマミ歌
「のふ去りしうらみの有ればこそ。抑人間のぎやう受け
て女子とは見すれども小町櫻の精魂なり 菊「我は非情の
櫻木も。人界の生を受れば。七つのぜうも備つて五位之
助安貞殿に契りし事も情なや「不慮の矢疵に玉の緒もた
ゆる計りの折も折。御兄君の身に代り。敢へなく此世を
去り給ふ。夫の形見の片袖に。引かれよる身はかけらふ
姿 ●「我本性の櫻木を邪慳の斧にかゝりしぞや報ひの程
を思ひ知れと有りあふ櫻を苛責のしもとはつたとにらむ
有様を ▲「ヤア小癩なと無二無三 ■「斧とり直して打か
くれど引。凡人ならぬ精霊の業通自在の身も軽くひらり

ひらりくく合飛こふ姿は吹雪の櫻。霞がくれや朧夜の。水の月かけ手にも取られず合見えみ見えすみ又あらはれて今ぞ則ち人界の。輪廻を離れ根に還るしるしを見よと言ふ聲ばかり形は消えて櫻木に。春もかくやと歸り花雪を踏わけ踏しだき水に戻れば墨染の引小町櫻と世に廣き。普く筆に書残す。

一二三 四天王大江山入 (古山姥)

常磐津文字太夫直傳 作者 瀬川 如阜

■歌「あふて立名がナ立名の内かあはでこがれて立名こそ實たつ名のうちなれやア、そふじやへ合■「うたもせうがにうつり行く。又來る春に大江山いくのの里の道遠くまだ文も見ぬ谷傳ひ浅い瀬川に洗濯の衣の手さきも白妙の。脛やあらはに見へわかぬ。血汐の文字のうす紅葉見とる、人も世を牛の背にやどりたる旅衣。合い入づくをさして行水の音をしたふて谷かけにふつと見初し振袖に水も花田の帯のはし行きなやみたる風情なり 門之助「行きなり牛を下り給ひ。山里は物さびしき事こそあれ世のうきよりは谷かけに。若い女中の只一人。奥ゆかしい水仕

に。今日の旦那の行先を尋ねてこゝへ雪道の。吹雪を防ぐ酒機嫌。酔ふたとさく。天も花によふたとさ。右も。合左も。合人の山。道は二筋三つ四つ ギンもみぢ。かはいとたれもい綿を。も一つかへして重扇に抱柏 雪に花さく 詞こくほたんカ、リつなぎすてしはあやしやと引■「竹笠てらしてよく見ればハテ心得ぬエイついぞ見なれぬ谷の一つ家たしか女と男の姿。シタリ。ハア、聞えたくそんならこゝがエ、地獄谷だな。何んでも様子正さんとかけ出しがイヤ待て暫し我心。「それと知つても白雪のとけた姿の亂れ足。よろく歩みて來りけり■松助「エ、申しちとお頼み申ませふ 菊「アイアイ何ぞ御用でござんすかへこちへお這入りなされませい ■松「アイひへものでござりますちつとお邪魔になりませふか 門「ヤそふいふ聲は牛飼殿やれく待兼たく■松「なに待兼たとは旦那。お前どふもすまないによ。おれが大事の此牛につてめつたむしやうに先へ來ておれをばあとへ捨小舟。ゆられてく北山しぐれ。とよろめきかれば門ア、是々あぶないく■松「何あぶない。あぶ

の業血汐にそみたるひとへの衣。洗ひそぐは何んと。様子ばし有つての事か。語り給へとありければ 菊之丞「成程御尤のお尋ねいづれへお越し遊ばすお方かは存じませぬが鄙の住居のあらましをそんならお咄し申ませふ ■「しばしは宿り給はれとあいそこほる、つたかづら竹にかしづく如くなりさすがは岩木にあらざればつい折れ易き男のくせ 門「そんならお世話になりませふか 菊「ゆるりとお咄しなされませい ■カ、リ「いふも他生のえんと縁引。假のやどりもエ假初の衣をたらいに取收めしよていつくろふしとやかさしづにはあらぬ取なりに心引る、片手綱牛をかたへにつなぎすて草鞋とくく内へ入り 門「扱かふ見はらした雪の景色はどふもいはれぬはいのふとてももの事に休息が致し度い近頃御無心ながら枕をお貸しなされぬか 菊「それは何より御安い御用深山風でお寒ふござりませふお裾へ何ぞおきませふか ■詞「何をがなもてなしぶりの煙草盆心は深き埋火の木のはにつむ眞實はおくそこもなき賤が家の心ばかりぞやさしけれ ■「かゝる所へ向ふより。道に後れし牛飼は。谷の足跡目印

ないとはお前の事さ。此山中の一つ家に。美しい娘とさし向ひにたつた二人。是があぶなくなつてどふする物だ 菊「アモシくめつたな事をいふて下さんすな。アノわたしには。■松「おつとみなまでいふまい。云號でも有るといふ事か 菊「サアそれは 文七「いふにいはれぬもつれ髪結びし縁も名ばかりに。合まッだときそめぬ雪の梅にほひをつむ袖の香の。カンふりのたもともすへとめてさいて亂れてちるころ迄も。契り盡させぬ仲なりと。あふ事有りやいもせ鳥合むごやつ入らくもさけられて此身一つは何としよと。心にねたむ悋氣の角をりもよし野のかへり花 ■松「ハア、いはれを聞ばもつともだのふ旦那 門「成る程成る程。シテ其男は云號ばかりで一度も合ぬ其内に ■松「邪魔な風や雲めが出たか 菊「サア ■表具「其雲井より捨てられて。上かゝる山家に。やもめ住たあき入らめて浮世をかこち。誰を憎み誰に恨みを「いふぎりのはる、ギン間もなき胸の内。あはれともふびんとも汲分けてたべお二人と。悔み歎くぞ道理なり 門「行成そばへ寄添ひて。さればこそ。はじめより初音の姫とさとれども。それとは

「雪やこんく。あられやこんく。足のつめたいに草履買うてたもれオ、さむこさむ。さるのべ、買つて着しよ。合こ、迄ござれ甘酒しんじよ。こ、へくと招く。手に。合根笹かや原くりにくい道をくりにくくつて。松の木蔭でかくれんほ。か、さまうまく、下されと手そ、ふりしてきけん顔。●菊之丞「オ、よふおとなしう遊んでおじやつたなふ。門之助「コレか、さん。おとなしう遊んだ程に。うまく、買うて下されや。●菊「オ、やりませう。けふは取分けなをおとなしかつた其おとなしい褒美に此間からあつかのべ、織つて着せうと思ふてな。此母が山路めぐらぬ其隙には。いほはた立つる窓の内。●二上「枝の鶯。合絲くり。合下編くりおきて着せたる母のほんそ子。合里へさがれば里の土産は。合でんく、太鼓にふりつゝみ。合うつや空蟬のから衣。合千聲萬聲のきぬたに合はす鼓の拍子。面白や我子愛する母親の共に浮る、一トふしに合。●三下「ひなには住ど鶯の。合初音を。合そよと聞く時は。窓にうつかり。合うづらは鳴かふと思ひもつかず。合手活けの菊と見る時は床のほた

んは。合折れよとまよ。合しわざ手業のうたてやつらや引。下霜にとふ出て。合ウしぐれに歸る。合ハシル袖の落葉のばらくとかき寄せ。合下澤の丸木橋を渡ろとすれば。ふみかへされて袂をぬらす。ぬれてもさま故君ゆゑと。思へばいとふも。●つめたふもない。●カ、リ「山姥親子はいつとなく。くるとも白髪の手右衛門。●オ、お袋こ、に居られたか。小僧も機嫌がよいそふな。●門「オ、ぢいさんか。待つて居たいつものやうに相撲事して遊ばふか。●十郎「オ、遊ばふ。時にお袋いつぞは聞くべい聞くべいと思つて居たが其方の身の上。親子連で此深山へ引こもつて居るには何ぞ様子があらふ何んと咄しては聞かせまいか。●是は思ひもよらぬお尋ねわしら二人が身の上は。お話申すも面目ない。●ハテそこが木の實を喰ひ合ふ中じやないか。隠さずとも咄さつせい。●「そんなら何もかも打あけて咄ませふかいのふ。●オオよかろく。●「はづかしながらわしも元は都九條の里の。流れの身でござんしたはいのふ。●ハテのふ。●「又此怪童がて、ごといふは北面の武士。坂田の藏人時行殿と

いふて。何が互ひに若氣の花盛。夜毎々々に通ひ路の。うれしい事は口にはいはれず心では。思ふありたけ枕にいはせ。かはるまいぞやかはらじと眞實ほれた。オ、オ。アイヤもふ此跡はよしにしませふわいの。●ハテ扱是からがかんじんの所昔の色事故事來歴。くるわの咄しがり聞き度い。●門「コレぢいさんくるわとは何の事だ。●「くるわとは。オ、何さオ、それ。つよい軍の事だ。コレお袋。小僧が合點の行くやうに。客と女郎をいくさにたとへて。●「そんならどふでも。●門「コレか、さんはやく咄しない。く、な。●「サア、く、仕方咄して所望だ所望だ。●「なれしくるわの。うき勤。紋日のはりに物日のいきぢ。●「のスキのとうろや。二どの入月菊の節句のだて軍。客にうしろを。見せまじとうそを。合誠に。合手くだのてれん上まぶを夜軍に忍ばせて。ねまきの鎧きなしつ。●「二世を三世とみだれ合。合長地其夜はわかれて矢文に日文又の御けんに夜軍せんと下障子屏風を合ギンこだてにかまへ今やくと合。待かけたなり。●ノル「こつちもそれと詞油断なく見たてぬちりやくと黒皮絨頭巾ま

ぶかに身をかため。合。●ハル通ひなれたる朱雀野の。合露ふみしだくしゆんそくはふたへばなをのまへわたり。●コハ「大門口を忍び入り。相圖のしはぶき二つ三つ。●「エヘン。これ來たぞや來たはいのふといふても何のいらへなく。●江戸「すねて見せても。詞あいたさの胸には有れどそしらぬ顔。●カ、リ「さすがにつきもなき所へ禿が氣轉の小盃。●「ヤ何んじや盃かオ、できた。コレ必ずおいらんの眞似をしやんなよ。此頃聞けば。どこやらの人は。狂歌師とやら連歌師とやらと。深草の少將じやけな。ノウ其色男を上句にして。我等をば下の句でぐつとつき出さふとは。エおいてくれ。おいてくれやい。コレ。知るまいと思ふか此中も中の町でおたのしみ。すいなぶすいな初會から帯とく客のゑいざめに。など。エ、。有難いの。さぞ。其男が待つてゝ有らふ。サア。早ふお出。さらば我等は。歸りませうコレ。またしやんせ。●ハヤメ「そりや何言はんすよそ外に。またる、人が有らふとはコレ。どの顔でなくて口。逢ひ度いといふ眞實はお前は覺へて居さんせう。長地人目のびて逢坂の關

より。カンつらい世のならひ ▲「引手になび合くあだし野の合草の葉末の露消えて今は野澤のひとつ水合すまぬ心の中にもしばしすむは由縁の月のかけ ●ハシル「お顔を見れば氣にかゝり。人のそしりもあだ口もぬしのうはさがうれしうて忘るゝ隙はないわいな。これ程思ふてゐるものをあいそづかしの捨。詞はさりとは聞へぬ男氣と。ずんど立つて胸づくし「取手もたゆく身もかろく■「はらふ袂に取すがるを「怪童見るより泣出す ●「母はかけより 詞アコレく泣くな泣くな。あれは仕方咄しじやはいのふ。サアく。是からは機嫌を直して。我身のすきの馬事して遊ばふのふ ▶門「そんならぢいさんも立て馬事をするか ▲團圓「オ、おれも相手に成つて遊ばふく ●「サアく母がはやしてやりませふサアよいかや。との様お馬●團圓「行列そろへてはいくく ●「年より智慧も竹馬は。合斧に手綱のり、しげに ▶門「山の主おれひとりお馬がまいる ▲團圓「さきのけく先のけろ。 ●「殿様いくつ ▶門「十三七つ ●菊「お供はいくつ ▲「八十八つ ●「ほんにそりや若いな 合團圓「振出す白髪の大鳥毛。 詞さし

出す腕にしわもよつたり。年もよつたり 上八人前のお供先き。合百里二百里またにかけて乗かけ馬の膝くり毛。合ッ夜さの泊りは丹波の在所。山家踊は ▲詞「何といふた ●菊「サアそれは ■三上「「おらが在所はなア奥山ので、打の合でんぐりく栗の木の合木の根を枕に 合ッざれ抱てころびねこな小女郎は戀する山家の品者で。帯といて合ッざれだいてころびね ■「在所祭にだて染手染うき名を流す市川。瀬川にすみるる鯉の瀧登花びし矢はず鶴の丸すいたお方へつなぎ馬乗て来るよの有るならばいと計り抱柏。 合文のかずく四つ紅葉いつか便を菊蝶の羽がいかさぬる色は見事へ ▲團圓「ア、くたびれたく。此やうに他人のおれさへ可愛がる此小僧お袋はさぞ此子が可愛からふのふ ●菊「オ、かはゆふなふて何とせう。ほんに此子が顔を見るにつけても ハシル「すぎ行き給ひし夫の事武門の家に有りながら。柔弱非力の生れ付き。一生これを無念の最期。其時。おなかに宿りし子を。 長垣 何とぞ勇士にそだてあけ名將見立て奉公させ 菊「「天下に名をあけさせよと ●「母が身持を大事に

て。育て上げよと夫の遺言。ウそれより直に身をかくし足柄山に調わけ入つて ●「山神に誓をかけ 菊夫の思ひを立ん物と ●ウレヒ「心をつけてそだてしをかぞへて見ればはや七とせ 菊 笑はゞ笑へ此子が爲 ■よし足曳の山住居髪はギンおどろを戴きて。合我身も共に力業。或時は山がつの樵路に通ふ。花のかけ。合休む重荷に。合調肩をかし。合月もろ共に山を出で。里まで送る折もあり又ある時は山めぐり。合上法性の峯に登りては上求ほだいの道に出で引 ●「無明谷深く下りては ■下コハ「下化しゆじやうを表して金輪ざいにいたれりウたまくと逢し賤の女は ●菊「たゞ。鬼女とのみ恐るれど ■上人を助くる事をのみこれ上山姥が ●菊「わざなれや ■三下り「四季おりおりのたはむれは合上春は梢に咲そめし花をたづねて山めぐり。合下秋はさやけき月にうかれて夜すがら。合明す山めぐり ナホル「ういてんべんも上樂みも邪正一 如と見る時は ●菊「柳はみどり 菊「花は紅の ●「春にはあへど。なきつまに。又あふ事もなく涙。聲をあけろの山姥がめぐる因果の物語。あはれといふもおろかなり ▲團圓「オ、母

が丹誠驚き入つた。其貞女の一心にてそだてあけたる忤が勇力。力の程が見度いくく ▶門「オ、わしが力を見せやう程に。相手になつて下されや ▲團圓「オ、相手に成つてやらふ。力だめしに何をがな。オ、夫れよ ■「ひるまぬ心に身づくろい。かたへに生ふる老木の松。ぐつと引抜きにつことわらひ。オッ仁王立に立たるは人も恐るゝ計りなり ▲團圓「サアこい怪童。▶門「がつてんだ ■勝負々々と打ちかゝるをすかさぬごうぎの力瘤。幹より腕のふしくれて。しつかとつかむ老木と若木いづれ劣らぬ金剛力。ゑいや上くとねぢ合しが。中よりふつととねぢ切つて。左右へわかれて立つたりしはめざまし。かりける次第なり ▲團圓「オ、できたく。其勇力を見る上は。頼光公へすいしんさせ。父藏人が家名をつぎ。坂田の金時と名のらせん。悦べく ●「ア、有難や忝なや。頼光公へかしんませば武門の道も立ち草葉のかげの父上も嘸や悦びましまさん。アかへすくも有難やなア。母が願ひも叶ふ上は ●「いとま申して歸る山の ■上峯も梢も上白妙は 長垣源氏の榮へつきしなき。上守る神垣は妄執の雲の。下コハち

りつもつて山姥となれり。中鬼女が有様見るや〜とカン
峯にかけり。谷にひびきて今迄こゝに有るよと見えしが。
山又山に山めぐり山又山に山めぐりして行衛も知れずな
りにけり。

二四 兩顔月姿繪(慈賣)

常磐津政太夫直傳
増補 木村 圓夫

「名にし負ふ月の武藏にかけきよく霞を流す隅田川岸を
わくれば下總と昔はいふて今もなをよしある人のこと問
はゞありのまに〜在原のまめな心を都鳥むれつゝよす
る白波はせ々にせかれてはつとしてだてなうき世を渡守
常世出川淀にうつす姿もおのづから色あるつゆの水馴棹
さす手も遠きもろこしの五湖の景色はいざ知らずしるべ
を松の名にめでてゑにしもふかきふたば草はしがくれ
の二人連來るを遅しと待居たる常世待乳山夕こへ來れば
五百崎の隅田河原に獨りかもねんとすさみしもことほり
や見ぬもろこしの八景はいざ知らずはて面白き景色じや
ナアそれはそふと夫軍助殿の知せ故此所へお出なさるゝ
松若様をさつきにからお待申して居るがどふして此様に

遅い事じややらほんに待るゝとも待身になるなどはよふ
いふた物じやナア「暫し案じてイメリ 市松之介戀には身を
もやつせといふたいふた〜よふいふたその言の葉を忍
ぶにまかせかちやはだして人目の關を惹々と賣歩くしの
ぶうる身はかふも有るかと小づまをしゃんと川千鳥千鳥
鷗の名所なる隅田川原に着にけり夫と見るより船より出
で常「ヤアあなたは松若様でござりまするか大抵や大方
お待申した事じやござりませぬ 市「ヤアお賤かいの嬉し
や〜早速ながら聞てたも軍助か詞に任せ二人とも此様
に慈賣と姿をかへこゝ迄は來れ共道々も恐ろしい事のあ
る條コレあの壽姫は人手にかゝつて死にやつたはいの
「聞いておしづも悔りし 常「そんならアノ姫様にはあ
へない御最期でござりましたかいなほんにならはぬ旅路
もお許嫁の松若様に逢たい添たいと思ひこがれてお出遊
ばした物なんの未來も成佛なされませふほんにはかない
御縁でござりましたなナア」と涙の中に松若丸懷中より
ふくさを出し 市「是を見てたも又とだに思はぬ中のわか
れぢを言葉のこりて名をやうらみんおさない時の別れさ

へ許嫁の此松若へ形見に送りし此一首も今は未來のおき
みやけとなつたかいの 民「此世の御縁は薄くとも御本妻
と定るからは未來は添ふて下さりませ假の此世の殿御を
ばわたしがお預り申ましてござんすぞへ「形見こそ今は
仇なる其ふくさせめては妄執もはるゝ様煙となさば未來
の門火 民「それ〜どふぞ未來は成佛なされて下さりま
せ 三人「南無阿彌陀佛々々々々と傍なるきしねに焼
る蘆の火へ形見のふくさを打入るれば「又もしんるの立
昇る煙隠れに怪しの心火現はれ出ると見えけるがため
らふひまも中々におしづをはじめ松若おくみたゞ茫然と
伏しにける「白波の雲かあらぬか煩惱の墮落に失せし法
界坊姫が魂魄さそひ來て姿は一つ二面恨をこゝにあり
ありと同じ出立のやさ姿 團圓出わしが在所は京の田舎の
かたほとり八瀬や小原や芹生の里世をしのぶ故姫御前の
身で棲からけ惹いらんせんかいはんせんかいにや世
をしのぶしのぶのみだれ限りなき恨みの双に情なや浮み
もやらで其人のつれそふ事の恨めしくうつら〜と迷ひ
來て小舟間近く立寄れば松若ふつと心付き 市「ヤアそな

たはお組じやないかいの 團「アイ組じやはいな」といふに
心もはれやらすこなたの二人を呼び生て 市「ヤア其方は
お組心が付いたかいの 民「ヤア松若様又恐ろしい事で
ござんしたわいな」と詞になをもこはけ立ちおしづ〜
と呼び生けて 市「コレおしづ氣が付いたかいの常「オ、お
二人様でござりまするか 市「コレおしづお組がいつの間
にやら二人に成つたはいの 常「何をおしづやりますやら
どふしてお組さんが二人あつてよい物でござりまする
「と言ひつゝこたなを見て悔り暫し言葉も出ざりしがや
う〜に胸をすへ常「モシお前の名は何と申しますへ「ア
イわたしやくみといふはいな」と聞て此方へ立戻り 團「シ
テお前の名は 民「アイわたしやくみと云ふはいな 常「ほん
にマアこちらにもお組さんこちらにもお組さん「こりや
まあどふじやと驚けば 民「エ、何のこつちやいなわたし
をのけて外にお組が有てよい物かいな 團「エ、何のこつ
ちやいな私をのけて外にお組が有てよい物かいな 常「イ
ヤもどふぢらがお組様じややらとんと合點がゆかぬはい
なイヤ申しお組様あなたはいつぞや柳橋の大黒屋で踊ぞ

めの有つた時のふり事わたしやよふ覺へておりますが
 そちらなお組様お前もよふふりを覺へておいでなさんす
 かへ「それを忘れてよい物かいな」常「そんならこゝで見
 よふかいな」サア其振事は 民「其振事は」はづかし
 ながら一寸小褌をかふ取つて「尾花招けばうなづく小萩
 何をくねるぞ女郎花わしやかはゆふてならぬのに扱もゑ
 にしが朝顔ならば廓の女郎衆は見やせまい開くをく々
 が開いたを見やせまいサイナくそふじやといな人をし
 のぶの草隠れおしづもほつと持あぐみ「いやもふ不思議
 といはふか」と合點が行かぬはいなオ、それくそ
 んなら此上は松若様が幸吉と名をかへてお組さんの所へ
 行かした其馴れ初めの睦言はお前ならでは知つた
 者はござんせぬサアそのはなしが聞き度はいないな」サ
 ア其睦言の話はな 民「はづかしながらよふ覺へてゐるは
 いな」ハテマアこちらなお組様から聞かふはいないな 民「それ
 それ夫を聞ふはいの」サアそれは「過にし梅の花見月目
 見え初めと手をついてふつと見合す顔と顔いとしらしう
 てやさがたで「ほんに思へば徒な人の前髪何のその嗜ん

で見ても忘れず目先にふだん業牛さんも及びやせまい
 殿ふりと惚れて心で響てゐてついた譯に成つたのが積
 りくいていつしかに桃と櫻の色競べ「雛遊びのさゝごと
 にはづかしながら盃をさしたわたしが心いきべにが付
 いたといふたればそこらのんで下さんした其嬉しさ
 に盃を二世のかためと抱しめてつい手枕のそ、けがみ
 なをしてあぎよとかんざしにお前の紋のさしこみは癪と
 いふ物初めて知つた外に殿御の肌しらす思ひこがる、
 私じやもの何んの心がかはらふとあなたへ引けばこなた
 へももつれもつるいと柳風にもまる、風情なり「おし
 づは夫と見るよりも中を隔て、結柴のこちらもく々
 花」若木のかほりゆかしさに見とれてゐるさんす其中へ「内
 のこがひの長太めがあほうのくせにいやらしい稚遊びに
 かこ付けてめんない衛はんま衛ちりてはしたふ磯隠れ
 しどうをおしづが止めても止め兼ねたる妹脊中結び柏や
 ぶり袖のかきねにまとふつたかづらはなれがたなき風情
 なり「たれ逆も思ひは同じあすか川瀬とかはり行くきの
 ふけふ修羅のくけんのはれやらす名乗らで知れや我思ひ

じつと見る目の物すくく」松若様おくみ殿「恨めしの
 心や人のうらみのふかくして双にかゝりし身の因果生き
 て此世に在るならばいと殿御とそひもせふ」ア、可愛
 い女とねんものをなま中出家をとけし身はくけんになさへ
 られ法心中立を忘れしも皆誰故ぞお組故「わたしが迷
 ひは松若様稚なじみの許嫁末をたのみの甲斐もなく思は
 ぬうき目三つ瀬川「胸にみなきる思ひの淵、あさいはるに
 し」ふかいはうらみ「恨みは人をも世をも思ひ思はず唯其
 人こそ」にくし「つらし」なさないぞとかこ泣「かつ
 ばと伏して泣き居たるおしづは夫と氣は付けどなほも様
 子を見届けんと二人がそばへ立寄つて 常「成程聞けばき
 く程合點の行ぬ二人のお組様此上の思案にはそれく去
 年の神田祭に稽古した踊の振わたしらも相手に成つてサ
 ア其振が見度はいないな 民「サア其踊のふりはな 常市「そ
 れ」それ「それくく」そつこでせい花がたのわたし
 に色のあやせ川姿みのわとうき名は受け人がいほ崎心
 の關屋天神様の御世話ならかたはの蘆じやないかないなそ
 れくく誓文そふかいな花川戸戀をまつちに三めぐり

やあはにや牛島わしの森縁の橋場もうれしの森よ白髭様
 のお世話なら吾妻橋じやないかないなそれくくせいも
 んそふかいな離れぬ中の縁じや物揃ふ姿の品形おしづも
 今はもどかしく懐中の尊像取出し 常「此上は夫軍助殿諸
 共日頃より信心なす淺草の觀世音此尊像の功力を以て化
 生の姿を現はし給へ南無淺草觀世音」と一心こつて差
 付けば今迄見紛ふ顔ばせもふるひわなき忽然と「あゝ
 ら恐ろしや苦しやなア娑婆の業因深き故「思はぬ此身に
 くけんの受け俱に奈落の底途も引立行んとせしかども觀
 音薩埵の誓におそれ我と我身を責にせめくる冥土の使か
 けもよしなやはづかしのもりてよそにや白露の見えつ隠
 れつ佛の有とは見えて春風に姿は消えて失にけり「人々
 奇異の思ひをなしけに觀音の御功力と奇瑞を感じる折こ
 そあれ間近く聞ゆる貝がね太鼓おしづはきつと心をつけ
 常「あれくあの太鼓はたしかに常陸の大掾百連より討
 手の者目にかゝつてはお爲にならずイザく」と俱にさ
 さやきつきがねのこかけへ忍ばす間もなく百連が手の者
 共我先にとはせ來り「たしかに見付けし松若丸又一人は

壽姫注進あつて聞しより擲取らんと來りしが影も形も見えざるはにけかくれたに極つたりありやうに白狀なせ何とく「とひしめけば脇へかはしてさあらぬてい 常「オオけうとわたしは今こゝへ参りました者其様なお方は存じませぬはいな 華「それでも今の知らせは此吊鐘ちよつと様子を改めん」と立かゝるをお賤ははつと押隔て 是は又疑ひ深い何じやぞいな 左「イ、ヤ見せともながるが猶怪しい 常「それでも爰にじやないはいな 大五「夫が定なら誓言を立て見せろ 常「何とへ 華「神や佛を誓にかけ 大五「偽りならぬ 華「誓言を四人見よふは 常「サアそれは「敬まつて拂ひ清め奉るかみは梵天せいもんどふしてこゝにござんしよ明王「なんほうすんがりきしや明王愛敬に大威徳ほつとりこんりんやさ女房大日大事の神かけてなまくさはんだばさらにも詞はすいに誓ける 華「ム、ハ、ハ、間に合のそら誓文文「どうでも様子が 左「有明の大五「つきがねこそ「すはくうごぞいのれたゞそれ者どもと下知のしたイデ承ると大勢が走りかゝつてつきがねを程なく梢に引上れば二人にあらで化たる姿 華「そもまづうぬ

は 四人「何やつだやい「凡そ輪廻は小車の六趣四生を出でやらず「人間不定ばせうばの哀れはかなき身の果をとふ人さへも情なや修羅の巻に迷ふらんおしづは以前の尊像を成佛有れやと差付れば謹請東方青龍清淨謹請西方白體白龍一大三千大千世界の恒砂の龍王哀憐納受哀憐頻の砌なればいづくに大蛇の有るべきぞと祈り祈られ又立向ふ其勢ひ猶も恨みは盡せじと木蔭に忍ぶ兩人へとびかゝらんとする處へ松浦五郎則光はそれと見るより馳せ來り 四「ハテ怪しや今松浦五郎が來て見れば天地にうづまく 黒雲雷電心得ずとよく見れば稀有なる女の立姿たとへ如何なる惡靈なりとも此則光が降魔の利劍立去れエ、「とさしも鋭き勇士の太刀風おしづは始終一心不亂「觀音薩埵の妙智力に怨靈忽ち遠ざかり波間へとんでぞ入にけるかの怨靈の舊跡も日高にあらぬ隅田川鐘が淵とぞ今の世に傳へて其名を残しける。

二五 辰駕色相肩(辰駕)

作者 櫻田治助

■「あら玉の。としの三とせを。まちわびて長地またる、上かほに。まつ上顔を。あはせカシ鏡のふとんさへ。色で

もてるかよつでか合 二上「花が人よぶうはきの花が月に。合うかるうはきな月に。うきにうかる、合ヤレ月はなに。おれこみじや 三「がつてんじや 四「かた山じや 五「がつてんじや 六「けこはさか手ではぎの花 七「のみこんだ合 八「さまは「なる口こちや色上戸もみぢも。風にやつし事拍子とり合どりきたりけり 九「エエン罷出たる者はあづまの與四郎と申す駕籠昇にて候 十「エエン。罷出でたるものはなにはの次郎作と申す偉い駕籠昇にて候 幸「アこれくなんほおぬしが難波々々といつても。江戸のよふなむらさきはあるまいが 仲「イヤ何ほこなんがそふいはんしても江戸に又大阪のやふな揚屋はござんすまい 幸「ア仲の町の燈籠が見せ度いはい 仲「そんならまた住吉天満高津の祭。あのよふな俄はござんすまい 幸「事も愚かや御殿山に飛鳥山上野のやうな櫻があるか 仲「アでんほう院の鶴が見せ度いはい 幸「そんならまた江戸のよふな結構なお屋敷があるか 仲「サアそれは 幸「しやつともいつて見ろ 仲「ヤこいつはあやまつた 幸「ちつとそふも 三「おぬるまい。ハア、なんの役にも立たぬ事をいかるたわ

けな。時に棒組あのやまくの景色を見やれ 仲「どれどれ。なる程アよい景色だ。あれを眺めてさらば一服致さうか。鷹は鐘山に生じて。雄心自ら局すとや 三「ふりさけ見れば雪ならで合。おのが羽こほす白鳩やくもか合。地たばこの薄煙。輪になる梅に鶯も。まださなきの。すりびうち。石よりかたい棒組にかどの。とれたる息杖は五枚いてうに三ついてう。よい相肩の辰駕籠 幸「なんと次郎作。おいらが乗せて來た振袖はマアなんであろうな 仲「あれは島原の傾城小車大夫の禿さ 幸「そんならこゝへ呼出して。島原の廓の話聞かうじやあるまいか 仲「これはよかるふサアく、あねさんこゝへお出く「谷の戸あけて鶯のまだ里なれぬ風情にておもはゆけなるそのそぶり 三「もふしこゝはマアなんといふ所でござんすへ「こゝは紫野といふ所さ。時に姉さん。何と島原の曲輪のはなしを話して聞かせる氣はないか「サアそれは「コレその代りにおれも江戸の吉原の色事をあとで話して聞かせるはコレ棒組。お主も新町の話をする氣はないか。どうだく「そふいへばおれもまた新町では花をや

つたものよ此駕昇に引換へて。絨日物日の出立はこしまき羽織をひとつまへよしや男の丹前姿ゆりかけゆりかけ寛 濁出立ア見せ度いはい「そふであらふよとてもの事に其話が聞き度いはいなく」「成程話して聞かさうがかんじんの大少が無い「おつとそこらは合點と息杖とつて差出せば「これもあたらし風俗と其儘取つてつかみざし」又いにしへに「たちかへり合」振つて振出す花ふりき合ふり出すふり出す花の雪よの合こしまさばをり。くもの帯 ▲「上の町」●「どのつこい合 ▲「下の町」●「どのつこい合」■「中の町の」中の町。三下りさまにこがれてしばぶねの。ハシルかほりゆかしきひとつまへ。どつとほめて。とふした。さ



すがあづまのおとこ山 ●「コイヨ ▲「ネイ ■「三下り」おらはぐわんらいつかはれ者よ今度此度めされた。合きてんきかせて智慧のわ出して。合やるぞしらかみ。ふみばこちぞう。ナホル衆生濟度にいろがある合晩にござらば窓からござれ。窓は。廣かれ身は細かれ忍び來る夜のその風俗は。戀の奴の。通り者「サアこれからは相方の女郎がなければ話されぬ「コレこの子が禿でなくばなア「そんならわたしが禿ゆるその相手にはならぬかへオ、しんき「かむろかむろとたくさんそくに。いふておくれな譯見習ふてやがてあくしよを島原の。合ませよりそむるあいはな。合そとでなぶられ。合うちではせかれほんに身も

世もあられふるあめの柳の出ぐちまで幾度通ふ小夜千鳥なくがしよざいかあじきなや(上巻下巻)「やんややんやどふもいへぬ。これでマア京大阪の話はすんだといふものだ。サアサア是から江戸の吉原ばなしを與四郎頼むは頼むは「まづおれが色事



ふがにやア ●「地まはりぶしに聲絞る。つい手拭の頬被り ▲「月まち日まちだいまちや田町にござる法印さんの守りお札やうらやさんよくあひ性も木性と火性。ウ吸付煙草の火ざらさへ。てつほう見世の氣さんじは。

といふは。江戸町でなし二丁目でなし角町京町小見世でなし河岸でなし「そしてどこじや「はづかしながらふぐじるよ「ハア、てつほうか「あやまるの「サアそのはなしが聞き度いく」とはれていふもはづかしいが廣袖であらうが細帯であらうがあひ度いといふ日にやアやみくもよ。雷門にも柳橋にも猪牙も四つ手も多けれどやつを思へば日和下駄帯をしめなをしてすつとかけ出すせ

合短き夜半をきりくす枕も床も上草履。浮氣同士のあだくらべ 合まはらばまはれ女氣の。口舌せぬ日も茶碗酒コハ。馬鹿らしいじやないかいな「アなる程きつものだ。イヤ又新町の揚屋といふは別な物よ。太夫てんじんひきふねかこひ。かぎりの太鼓を打つまではそれはくぎやかな事何と咄して聞かそうか「こりや面白かう。サアく「所望じやく」まづ。揚屋の數は十二軒十二因縁

を表したり。九品の浄土の。九軒町合瓢箪町の名にうがむ。合みだの西口つきぶしの。合うた三味線の。音楽に。合虚空に花をふらせつ。歌舞の菩薩の。合揚屋入り。合「戀の山口。名も高島屋。ハシル色の世界に住吉や合かよひなれたる新町の井筒にかけしやまと歌。ゆかりのはしの兼好が。酒にそこなき盃もすぐには。うけぬ横町の。どうじと聞けばいばらきや。手もとみやことねぢぢやうごあれ。あかつきの明星が。西のあふぎや東にもちらり。ちらりくくくとちどりあし。きやほうすどんじやうなし手なしの癖として悪じやれいふたり大通しうちはあるまいか。合どういふ理窟か合氣が知れぬ。ト太夫が心をひいたれば。そこできやつめもむつとしてコレ。このむなづくしをこのように。とつたほうから涙ぐみそりやマア。何の事じやいな。わたしやお前にうちこんで。身をつくしたるなにはがた。梅よりするな殿ぶりに。だまされて咲く。合室のやみ晝も屏風の冬籠り抱いてねじめの三味線もいとし男をよそへ歌合カンやがてあづまへ。行く身じやものと。たもとにつゆを置炬燵。布圍のうち

のわるじやれがこの。むらさきの江戸自慢。ハマつめらしやんしよが。たかんしよがとてもじやけんな氣にほれた。女子心の。一筋はコレ。この癪と手を取りて。引寄せいるふところの「うちより取出す千鳥の香爐こなたに出る連判帳それをどつこい。三下り」にしき織るてふ木々の色ぬれて合ぬる夜の色見草。合カン時雨にそむるきぬくは。かはいらしいじや合ないかいなアかはいらし合「水に住むてふ浮寝鳥さまとぬる夜のぬくめ鳥わかれもおしの思ひ羽はかはいらしいじや。ないかいなアかはいらし。かはいらしさと夕日ばえ。」「たよりはものなれ事なれてきせるをとき盃と二人が中へ差出せば互にわれからわれからと早くも心とけあふて。上目元を含むるみの眉。開くや花の顔見世はたのもしかりける次第なり。

二六 百千鳥子日初戀 (小松引)

作者 増山 金八

「初春の。長地初子のけふの姫小松ちよの。合例と引つれば。一もと毎に千代こめて。長地幾萬代もつきせじと。壽

き祝ひ打連れて出立色ある小松引出。二上りひけやひけひけ子の日の小松。のべの男松をかはひと引ば。合ほんに女松が。合うらもぞへ。花の姿の一樣にしどけなりふり合。ナホルうらわかみ地ねよけに見ゆる若草や。若菜つむなる手元もたゆく。姫御前の身のつまからけ。あづまからけに合きりゝとしやんと。情盛りや。戀ざかり。さそひ連たる佐保姫の。長地ころも春風こちふく風にかほり床しく咲梅の。色をも香をも知る人に。見せばや戀のよすがにと。初子の松を引つれて。此春野邊に來りける「何と皆様。春といふものは賑はしいよい景色ではないかいな「ほんにどこも彼處も若々と殊に今日は。此花が谷で。政子御前様が小松引や若菜摘の手業を御覽遊ばされんと有つて。私等がやうな賤しいものをお召なされて。今日の御遊じやけにごさんすはいな「成程上つ方といふものは。かはつたお物好があつた物じやないかいな「ヤアアレ皆さん見やしやんせ向ふへ何か面白そうな商人が來るぞへ「どれほんになア。三下り「めせやく懸想文めさいな。めでたい事の數々を書集めたる文のあや。くど

き上手に。合ほれ上手。あるは相惚長文の。思ひりくべく候のめでたくし梅が枝に。ゑにしのはしを結び文戀を立文切封今の浮世は野も山も色の世界と。ふりかたけ。そぐはぬなりのかけ烏帽子日も長閑なる。長ばかまをふみしきたる道のべも。春のものとして懸想文。文をかはんせ。かはしやませ。と賣り來る「罷出たるものは。春毎に懸想文を賣りあるく商人にて候。頼ふだ方のお召によつてはるく此所へ參つて候。とマアコウ堅くやりかけた物じやがなんと女性たち。此懸想文を買ふて樂しむ氣はごんせぬかどふでござんす。」「ほんに氣の輕さうな商人さん其文を買ふて見れば戀の願も叶ふかへ「ハテ知れし御事この文に心のたけを書いて思ふお方へ送る物ならばどの様な戀でも叶はぬといふ事はごんせぬはいのふ「そふ言はんしても合點が行ぬ。懸想文といふ其譯を「いふて聞せて下さんせいなア「抑懸想文といふ事は思ひをかくと書く文字にて。」「男女の中を睦くむつまし月のねぎ事や。及ばぬ戀の雲井の花も。」「枝高きとて折ば折る又女郎藝子か。八百。若後家生娘いかな面屋の箱入

か ●「しづ山がつに至る迄。たつた一筆八百コレ〜」
 コレ〜コレ〜此文に ●「いよし御けん書たるを取
 つて八百開いて合」ながめてよんで思ひのたけを露程も
 八百しろしめしたらかへり事 ●「ナホ」きみたちとぞほ
 のめかす「アレ聞しやんしたか。此文賣さんも大抵な粹
 さんじやないはいな「夫れいな此様に女ばかり居る所へ
 文を賣つてござんすからは性わるさんに見えるはいな
 「アこれ〜其様にさみし給ふな私などはへんくつ者で
 一度可愛いと思ふた女子なら此世は愚か二世も三世も心
 中立る男でござんすはいのふ此大勢の女中方にも物堅いき
 つとしたお侍を好く女中も有らふし又町人は物和かでこ
 ちや商人がよいイエ〜私は職人私は百姓と皆夫々に千
 差萬別其商賣がらを見立てはれる男もあるでござんしや
 うがな「そりや知れた事いな「まづさしづめそちらの姉
 さんお前は武士か町人か「サア私は大小しやんときつと
 してどこやらに可愛らしい處のあるお侍さんが好きじや
 はいな「コリヤ話せるはへシテこちらの女中様は「アイ
 私しや律義一ぺんの百姓がよいはいな「わたしらは氣輕

なあつさりとした職人がよふござんすはいな「私しや矢
 張り商人がよいはいな「時に皆さんが其様に士農工商を
 わけて男を持度いとたまふが其手業を知つて居やんす
 か「それを知らないで男に持たる、物かいな「コリヤ面白
 い然らば相手になつて皆夫々の手業を見るぞやまづ第一
 は武士の道「其殿さんにはお前をして「オ、幸ひお前の
 持つてござんした此梅が枝を刀にして「何じやおれを殿
 様にする。シテそもじ二人は「對のお供に「きり〜としや
 んと「武士の風流「花やかに ●「南枝花初めて開く」窓
 の梅。雪の中より咲初めて。花かいらぎの。大小しやん
 と ●「つかみざし」あづま丹前。合こしまき羽織よしや風、
 袖なりゆかし。君ゆかし八百、コイヨ ●「ネイ」おらが旦那
 は〜おきがつかれてお心よしで。合見えた通りのおい
 たいけかのの君さまへお文のお使 ●「おつと心得たんた
 ん」たんほゝの花や葦草「咲いたら摘まふ。摘まふと雨
 にも合雪にもすん。すんすとのばした御切米 合「正ッ」や
 ろか信濃の雪國へ。朝の出がけにや「つめたふてならぬ。
 つめたふてならぬてもそふかいな合「おらがか、しゆは

左が過ぎて。夜さり〜に「のまふといやる。のまふと
 いやるてもそふかいな。機嫌上戸でホ、ホト笑はゞホ、
 ほけきやうと囁るはわやく驚百千鳥春は來ぬらんあら
 玉のとしある御代の秋かけてとるや早苗をとりどりに
 合植ゑい〜早乙女笠買ふてきしよによ合笠買ふてたも
 るならなをも御用を。植ふよ合みとしろ小田にしめ引は
 へて。神の宮人けふも又。名乗りて過る時鳥 ●「啼く頃植
 ゑし田をかりて稻こく 合」扱ひく合くるり打つ賤の手業
 のせわしなや合「サアこれから御藏の柱立」飛驒の内匠
 や竹田の番匠てふの初の故實といつば。合さて又神社佛
 閣の。基礎の四維には。須彌の四天をかたどつて合中央
 の柱には合本佛本化をしつかとする 菊之丞 右に金色 牛四郎
 「左に赤色」二本柱は妹脊に表し。此さしがねは逆鉾や ●
 「おのころ島は。墨壺の。いとしかはいの始りは手のある
 てふのにたらされて合」あすの晩にもかんならずへ來て
 釘貫と約束もけづり機嫌に合のみ込んで譯を立てまへ棟
 上ひの紋日物日も行程に ▲「鏝の齒と通ひつめ末の面倒
 三つめぎりかな槌の柄の長かれと合」内にすへたる大黒

柱福壽圓滿延命小袋打出の小槌を振上げて。天長地久と
 打納め合治る御代のしるしとて。春のあしたの商ふすは
 いのかす〜合手毬合羽子板合大判小判かふておけらの
 「歸りは廻れ〜合五條の橋を渡る物とて。渡らぬもの
 とて古今こつきりにこじやくしこもつてこいよのこい
 よの。惠方参りの家づとに士農工商それ〜の春の興を
 ぞ催せり「ア、くたびれた〜。扱々器用な女性達じや
 のオ「もし〜おとりさんあの文賣さんは祐成さんによ
 ふ似さんしたじやないかいな「サイナ私もさつきにから
 知つては居れど。皆さんがござんすゆへ。はづかしうて
 戀と物も言はぬはいな「そんなら私等はおかり家へいて
 こふ程に。跡でしつほりナ。合點かへサア〜皆さん。
 何ときを通しておかり家へいて休ふじや有るまいかほん
 にそれがよふござんせふ。サアござんせいな「戀にかし
 こき三人はかり家へこそは急ぎ行く「祐成あとを打なが
 め此松原の春景色どふもいへぬはヤアあの琴歌は奥御殿
 ア面白い事では有ぞどりやく〜わしもおかりやへでもい
 て休ふか「コレ待たしやんせ「エ何ぞ御用かサアそれは

ナ。オ、はづかし三上「思ふより合いつしかぬる、袂さへ合涙や戀のしるべとは音響」我身上と白梅に宿かりそむるにほひ鳥合▲梅が殿子か驚の。ほれたほの字を色香になくはわがつま鳥かなんじややら▶「はすはな物とい、綿の合ほどかすとかずむすほふれ▲あふて顔見りや。はづかしのもりの下露▲ぬ▶れ音」たさの「おもはせせぶりのやぶつばき」アレあの歌を聞かしやんしたかへ。思はせぶりの藪椿。と思はせぶりの祐成さん「此祐成より。そなたがほんのやほつばき」そんならこゝで「互に子の日のめうと松わりなき中へうちつれて。おどる拍子のうかれ歌」戀の淵瀬に。何々流すうき名仇名に思ひ草合■
 「なげの情のヤレ袖の露色にやつれてハテ「なんとせふ
 ■二上り「小松引日にナアちんちり残る松に張ある心ならほんにせいもんまたれはせねど合「もしや誠がつゆ程あらば女心はそふじや合ないはいな。わしやとふから知つて居るハテそふか合■若菜摘む日にナアきんきえ残る雪のつめたい心ならほんにせいもん待ればせねど合もしや誠が露程あらば男心はそふじや合ないはいな。わしや

とふから知つてゐるハテそふかへ思ひそめたが縁じやものカ、リ「御遊の時も過行けばいとま申して賤の女は君の千歳を壽ぎて家路をさしてかへりける「折しも入來る四人のとり手祐成をおつとりまき。ヤア動くな「コリヤなんとするのじや「なんとするとは範頼公の御注進あつて大磯の虎にくらい込んで居る祐成。繩かけて御前で思ひ切らせる「ヤアレうじせまいぞ「エ、面倒なと立かゝればいつかうしろへふたりの女祐成をとりかこふ「ヤアコリヤ小磯のけいこおとりおてうだな「われは今日獅子頭の神事の役人「邪魔ひろくと兩人ともうき目を見せるぞ「なにわたしらを搦めんとや「わたしも御遊の小松引じやまささんしたら爲にならぬぞ「やかましい獅子の神事ですつちめるは「そのし、がしらの神事をも「われわれつとめてきうなんをのがれぬ所觀念「どつこい「神をいさめの神樂獅子打てや囃せや牡丹のそのに戯れ遊ぶ其けしき花に狂ひて枝にふし男獅子女獅子があなたへひらりこなたへひらりこれや相生獅子の曲花のうね、見えつ合かくれつく、りく、つて牡丹に狂ふ蝶小蝶見かへ

り獅子の妻よぶ顔にしたひしたふてしほらしや合「獅子の神事の舞樂の砌たいきん。りきんの獅子頭牡丹の英らんまんと櫻の吹雪こほれ梅こてふのれいりんかりやうびん雪をめぐらす一曲はやさしかりける次第やと春の興にぞ入にける。

二七 矢車的はたがしのたづまきあたりのなかとみ
 はぬ趣向の古狐信田妻容影中富(葛の葉)

作者 櫻田 治助

「官も位も、おのづから。合鳥居が。筆に及びなき。ハルみたけに杉の。稻荷山 合如月早き矢車に慶子がすがたみつのみね上はづかしと。上顔にてり葉の紅絹の紐合花ぬりがさに帽子さへ。若紫の中。どしま合安部の童子が。合たらちめ。と合白露。むすぶ。合うしろ帯。杖つき野道。草のはに合足つま立て。合ちよこくく合。ちよこくくちよこと爪だてて。すがた。合みだる、萩すきわが狐火に。むね。ひ。合や。す。合水に下北斗のかげ。見ればぞつとそけ立つ。霜ばしら。うづらの床も残りねの草の枕や狭蕪にしはし。やすらふ其風情「かゝる所へ向ふより「對のかんばん詞おしきせも。合上今日をはれぎの花

紅葉。合枝にすいづい。合く、しつけ。合うちかたけたる二人の又平。やつこの此々此頃は。石ごき酒のぐいぐい香。新酒も色にのほり詰。氣もおもしろくなりひさご。合日も夕顔の。上花道を。うきにうかれて。來りける「二人は顔を見合せて 勸彌「お身さまは天津の又平じやないか。高懸殿、お身さまは浮世又平。これはしたり 勸時にお主はどふいふ事。此淺茅が原へ來たのだ。こま「此又平が此處へ來たのは。お旦那勝元様の御用で來たのだ。「此又平「此又平も。お旦那宗全様の御用で來たが。そんならお主も狐を尋ねに來たのか 勸「それ。粟田口で奪取れし。赤松満祐がどくろを詮議に來たのだ。こま、おれも其白骨を尋ねに來た勸、そんなら一緒に尋よふかこま「こりやよからふサア、これから橋場のわたしを渡つて寺島の方から五百崎の方を尋ねよふではないか「成程どりや連立てと行く先に立塞がりし女郎花。こほれかゝりし愛嬌に勸、なんと見やれ。とんだ美しい者ではないか。時にあいつをちよつとあて、はどふであるふなこま「ヤこいつはよい思ひ付だ勸、もし女郎ならかきこらばしこま「しろふとな

らばだまくらかしなんでも當つて見るがよい。モシ姉さんお前はどこから來なさりやしたへ。言「アイわたしや遠い田舎の者でござんすが。人を尋ねにきやんしたはいないア。こま「ハア扱は色事だな言「オ、はづかし」「どふしたわけの色事か。其咄しが聞き度いどふだく。言「サア夫は「野こへ山こへ谷峯こへて。來るは誰ゆる。そさまゆへ「あづまの森は吾が妻よ。身をあこがれて木枯の。森の下露うちとけて。長堀岩手の森と思へども。合はづかしの森ギン杉の森しのび信田のもりこへて。カン「いつかあふせの新枕はつねの森の縁あらばうれしの森じやないかいな「にくや。うたてやからす森誓紙にかきし神並のもりてなみだのそでたもとほりかねたる藤の森裏紫の色やらんこま「イヤ森づくしの仕方咄しどふもいへぬ。何でもお前はけいせいと見えるはへ。言「イ、エわたしや一夜流れの浮れづま定まらぬ枕をかはず心はないはいないア「そんなら藝者か言「イ、エ勤「なんとこゝでうさはらしに。わし等とつき合て見る氣はないか。こま「おいらが色事のはなしをおきかせ申すは言「こりやよふござんせう

はいないア。こま「サアく、これから色事を仕方はなしでお目にかけてよふか。まづ地廻りの心がけは。見世の出よふといふはなをねらひすまして鼻の先こま「つい手拭の頬被り。おはぐろほりへ月かけをひやかす宵のまへわたり。せいてきてはのろく見へこゝが。ぢらしの幕の内。清次が所で香かけて。足もしどろの越後節言「酔ふたくく五勺の酒に。一合。のんだら。さまなぢよである合「せとせのせ。せつせのせ。やとさのさ。一さく昨日御手紙の。御返事どですか如何です。きかまほしやと寄添へば言「うけたる酒を香はして。置く盃も膝の上もたれかゝるやびんのかみ。長堀思ひそめしは俄の夜。戀に人目の鬨とりは。轉ばぬはづの藝者の身心でまけて合「角力草。合コレ。此胸で地どりして名のりをあけて相ほれと。カン「思はれたさの物ずきは苦勞性ではないかいな。こちよらんせと手を取りてじつと引寄せ抱きつく。言「ほんに面白い事ござんしたはいないアこま「サアく、これからお前の色事ばなしを承らうか言「イ、エわたしや。なんにも知らぬはいないア。勤「それでも花咲爺の話ぐらゐるは。なりそふなものだ

「それく。むかしくは知つてあらうが。「サアく、それをせんだくして。勤「ざつと洗つて赤本の仕方ばなしが聞度いく言「そんならどうでも所望じやく。「小づまからけてこしかがめなくななきそわこたちのそへ乳する夜の親心枕のときにオ、それよ言「むかしくあつたとさ「ぢさまは山へ柴刈りに合、上ばさまは川へ洗濯に。たらい抱へて。合「つらをり合谷川はやき水の音。合上ゆたのたゆたにひよつくりひよ合、ひよつくりひよと合、桃一つ淺瀬ながれて。きよあらい合、孫におまじよか。合ぢさまにやるか言「ア其ぢ様とのなれそめを。思ひ出せば。アむかし戀しやなア「戀しくくと。あけくれに。思ひ思ふて忘るゝひまは一日へんしもないはいないアホ、ヲはづかし合「わしも若い時やな合上文や玉づさつけられたが。今は年よりましたでく、り枕で。合「詞うつころぶ合雪か吹雪か合。さらくさら。合さつと散り來る花の露。「をりこそよけれとはねわなが。かくれ持たるひどろの筒先ねらいはそれじと二つ玉音に驚き忽に草がくれして失せにけり「二人驚きあたりを眺め勤「ヤア見やれ女が獵人には

けて來た油断しやんな合「五郎、ム、わいらはおれを狐だと思ふか。はねわなの大太といふ獵人だは。今の狐めが。栗田口で紛失なしたる満祐が白骨を所持なす故。譯有つて。我ふところに秘め置く。夜明珠の名玉を急ばにしてこれ送釣寄せた。一うちと思ひしが。つんがしてエ、いまくしい草をわかつて狩出さんどりや。トかけゆく足もとたぢくく眼くらんで茫然たり。二上「露の身をおきわかれたる女郎花姿ばかりは葛の葉の。合「枯野に残るうき思ひ。二人はふつと心付き。以前の女と抜きかける「手さきをとらへて「こりやなんとさんすのじや勤「こりやオ、それよ。けふはほたけまつりじやによつて。眞崎の方へつれて行かうと思つて言「それで今のよふに「ただ一打に言「うつとはへこま「サアうつといつたはオ、それそれ鍛冶屋の事さ。かぢやは稻荷を勸請して。火をきよめ刀でも。さしぞへでも。ふいごにかゝつてうつ。ものよ言「成程。其うつ時の火といふては。なつめとくわと柳をもつて火を清むるではないかいな。勤「そんなら刀のはじまりは「人皇四十二代の帝文武天皇の御時。あまく

にといふ刀鍛冶。刃のものはを二つに分け。そりをつけ
て打はじめ。刀と名づけそめけるより。今に刀といふは
いなア「女に似合ぬ刀の故實。おいら二人が相手になつ
て此場の様子湯加減も。なんにも白刃のかなとこおろ
し」のがれあら身の合つちをちよつとふいごに寫かけ
まくも。とうなんだんのうへにありがこまうつべきじせ
つは勤こくうに知れり。寫たのめやくこまたひとう
ち「どつこひこまひみつの槌を打時は天のはきり十握
の御劔かの草薙の寶劔にもいかでか劣る事あらじ」そも
や刀にうちつけて。合身の事は。殿達の。ほんに姿を
目利して。合されともなさの女子氣は。色にもろ双じや。
合ないかいな。合「文の槌には神明佛陀をおどろかし。又
武の槌には壽福をいだし。合仁の地がね義のきたい。合「教
の槌をはつたと打てば勤てうとうつてうくはたく
「和合の相槌合。うつや拍子もとりく」に合三下り「戀すて
ふ。女子心はすぐやき又。合さまにあふ夜はさしおもて合
さしうらみ事むながさね。上それくそれ合見事へ合そ
れも見事の色のでき「観念ひろげとはねわなが。打てか

縁の浅瀬か水かれて。も今はなきつくし。男心をかこ
つにぞ。ほんに思へば昨日今日。ちいさい時から。合お前
に抱かれ手習せいと言はしやんして。御手本書いて貰ふ
たる。色のいろはお師匠さん合それから思ひそめゆか
た合。伊勢のもどりに相宿の石部とやらの木枕が。かた
いお前と新枕。添寐の夢をさませとや。其馬士ぶしにお
こされて上り「笠はてるく」紅の紐戀を鈴鹿に袖くもる。
雨の土山ぬれてぬるナアエ。合心のたけをむすほれて七
條村にぞ行惱む。八百「コレお半道々もいふ通り此長右衛
門は大切なる刀を失ひそののみならず大恩受けし幸之進
様の御息幸左衛門殿を手にかけたればおれこそ死ねば
ならぬ身の上そなたはあとにながらへてわがなきあとを
とふてたも「頼むとばかりいひさしてあとは涕に聲うる
む「聞いておはんは。さしうつむいて。なんにもいはす
振袖の「袂かざしてかほのぞき。これいナア合長右衛門さ
ん。としもゆかいではづかしい。此腹帯はどふせふへと
のご持たいでや、生んでながらへ居よとはそりやどうよ
くなわたしや死んでもお前よりいとしいものがあるかい

るを寫かいくり。夜明の名玉奪ひ取り「エ、忝い名玉
手に入る上からは。満祐公の此白骨。いざくお渡し申
しませふ。今は何をかつむべき。われはコレ此五百崎
に年をふる小女郎狐でござりまする。なを此上は勝元公
の御武運長く守るべしかへすくもうれしやなア「いな
ふやれ。わが栖む森へかへろやれ合かへれど跡に名はの
こる。小女郎狐が通力に得たる夜光の玉姫いなり。神の
おうごは著く橋場に。宮居ぞ榮へける。

二八 長右衛門半帯文桂川水

常磐津文字太夫直傳
作者 櫻田 治助

「月の桂の川水に合。うき名を流すうたかたの合。あはと
命を信濃屋の。お半を背に長右衛門。御池どをりもかけ
すごき柳の馬場をよこに見て。いそげば名残おしこ
ぢ。つまにもわかれかねのねも涙含みて。雨ぞ降るほり
川過てやうくと。せなを下せば取なりもまだ振袖の
ほらくとあとやさきなる。おくれがみ。櫛笥はそこ
よ王生村を西へ向へば長福寺。のちの世てらしたまはれ
と。ねがひをかけてやみを行く梅津の小ばし渡れども

な。惚れたが因果堪忍して。一緒に殺して下さんせとつ
ゆの命をませがきの消えも入り度き風情なり「お半がな
けきいぢらしく長右衛門も胸せまり。其心根のふびんさ
に涙の淵にそこるなく。共に沈まんいさなたへと互
に手に手を取かはし。行かんとすれば人影のもし。追手
かと身をしのびしはしかしこに隠れ居るのしほ田「そう
かくくとゆふけせう。剰水ほどの流の身ごさをかへて
ねどこがかはるつとめがつらいと。しよんがへ「さまは
さんやの三日月さまよ宵にちらりと手拭にべにのついた
を見たばかり。はづかしい事岩ばしのよるのちぎりも
仇まくら。あくるわびしき商賣はわれらも似たかよた
かそばやみがうれしうて月夜がにくいテモ。よいこなに
ひかされて松原すぢを通り者のびて跡から生齋麥賣打
つれ立ちてたはれるのしほ「何と今夜は寒いじやないか
いなア「産三郎「こふ寒くなければにうめんやそばは賣れま
せぬおぬし達もこんな所に立て居たら嘸寒かろうのしほ
「寒いもつらいもつとめでござんすはいのふ産なるほど
しかしつとめといふ内にも島原のけいせいとは違ふて文

を書ふでもなし三味線を弾ふでもなしほんに氣樂な身の上でござんすのうのしほ「イエイエそのよふにもないものじやはいなア」産「それでもどのよふなものにでも身を任せるがおぬし達の商賣でござんせぬか蕎麥より安いしろ物一膳振舞ふ氣はないか」のしほ「アレまだいなアそりやマアなんの事じやいなうらみな事を言はしやんす野かせぎの身も立君といへば歌にもよむはいな夜たかといへば錦繪に歌麿さんの筆の文いろに逢ふ夜は戀のやみ夜風身にしむ。つとめのまこと女の情はある物をあそばしやんせと寄添ふて引張る袖をもぎはなし。「イヤ其手では參るまい。此蕎麥賣の商人をぶつかかけのめして食はふでの。いろも鳴そばないものを。御神樂そばではやしかけ一八そばの坂東を。あじな心にしなのそば。手もりをくはぬ其内に思ひそばきりこんばんは。なんばんうどんにうめんや總兵衛手ばやくうりだめに。紐かは付けて荷ひ行くよね「米市と名はたち花のゆかりとて昔の袖も香に匂ふ」あんまけんびきく捻りひねりかけ。夜は何時かうはのそら。四ツづかすぎて九つと東寺の塔も。水やくし。

仲人。夫婦になつたらおのれやれ按摩ならうて肩ももみけんびきすへてやりもしやう。手ひきにもなりさかやきもくちがかみそりおながや。のかみさんたちのあいそに吸付煙草の付けざしも心でわびしてのむはいな。エ、じれつたいによ。まだ私をばつとめする身と思はんすか。ほんの女房じやないかいなと泣くふりしても目は見えず。涙はうその川ばたで手拭ぬらすばかりなり。米市わつと泣出しエ、それ程迄に眞實なそなたに腹が立たれうか堪忍しやと。手でさぐりく。拍子とりく機嫌とる三下り「じたいそれがしは左女牛座頭杖を月夜もころのやみよ色にあを迎桂のさとをそつたさまが琵琶だんべいならべれつくくひつびいてもかんなぐさむべい座頭の坊。ハ、ハ、笑ひに心とけあふて手を取るところを杖ひつぱりつゆのふとんに草枕夜たかのねぐらやもとめゆく折こそよしとこかけより二人は立出で身づくろひ焉長右衛門さん八百お半「もはや夜明けになるかねも二人が上の。無常おん覺悟はよいかと長右衛門お半も共に手にさはる。石を拾うて袖たもと思ひに沈む牛が瀬や。

石にけつまづいてがつくりこそつくりこ。大道つづく杖のかづ千本通りを恵方ともあき手の方とも知らふが佛酒に目の無き浮かれ座頭の坊うかくなはてを通りける「おそではそれと見るよりもヤア米市さんじやないかいな。逢ひ度かつたとばかりにて。抱付けば突放し。エ、寄るまいぞくイヤ置いてくんな。イヤおきやあんがんなさいよ。此頃聞けばアノ夜蕎麥賣の總兵衛とやらに足をつけるけなの。エ、腹の立つ。ア、いつぞやであつたはい。此米市にあいたいとて。煩ふて居たではないか。それ其時は此米市が夕霧もどきで療治してナそれ。針と按摩でやうやうと。エ、それ程に迄思ふて居たではないか。そんな水くさい奴にかゝつて居ようよりさらば我等は歸りましよくと行かんとすれば杖引留め矢庭に胸ぐら引つかみ振廻されて米市はオヤくくどぶするのじや「どぶするとは米市さん其様にひざりなさんす事はござんせんわたしが心を知らぬか何ぞの様にそりやマア何の事じやいな初に逢ふたは六月の巳待の晩の蚊に喰はれ。こなんのひざへつものとの。べんてんさんが。お

こほりが淵にきえのこらうき名ばかりを命ぞと歌舞伎のたねとやなりぬらん。

二九 初櫻淺間嶽 (遠山)

常磐津文字太夫直傳 作者 増山 金八

「あはれいにしゑをおもひ出づれば「なつかしや。いく年月に關あれば花に。あらしの關守は。かたくも岩に離れをし狩野の四郎次郎上もとのぶはなごり牡鹿の命けも、上はかなくきへしなきつまのむねの思ひのけむりと。香のかをりにひかれくるたまはむかしの一つまへ。ありしくるわのそのまゝに。遠山がたちすがた三上りうらみも戀も残りねのもしや心のかはりやせんと。合思ふうたがひはらさんための誓紙をばなせにけむりとなし給ふうらめしや。うらみながらもいとしき中の。はやくもかはる飛鳥川。合カンきのふの誠けふのうそなけの情ぞうらみなる八百齋元信はほうぜんとあたりを見廻し心付き。ヤアそなたは遠山じやないか。どうしてこゝへはおじやつたぞのしほ「サアわたしやお前にあいたふて。わざわざこゝまで來たわいなア 八百「ハテがてんのゆかぬ歌

之助が噂にはそなたは此世を去つたとやら。ヤアどふし
ておじやつたぞ。わたくしやお前に恨みがいひたさに
八百成程恨みもあるふ。エ、お前はなア。あのます
花に見かへる心でござんすの。八百サアそれは長地あさ
い心と白いとの染めて仇なる戀衣むかし忘れぬ。とりな
りは。風に柳の吹くまゝにまかせる筈の勤めじや迎も。
いやな客にも。阿波の鳴戸の沖こへて思ふ男と。ながし
めに。合 ぐぜつした夜のかみじや迎。みだれて居るが目
に立つか。立つか立たぬか。村千鳥。合 羽音ばかりをふ
わく。と羽織かくして留た時。中カン恩にさせるの跡の月
末の五日の梅が香はたれとねて来たうつりがと。合し
らべの絲のもつれやい。とけぬ口舌にふつつりと。つめ
りし跡がこれこゝに。紫匂ふ深い中おがむく。と曉の
かねてそふとは知りながら。別れ思へばなま中にいつ
そ。姿を見ぬが花知らぬがむかしと思ふて見ても閨の障
子に面影見へてあじなさしきの戀咄し聞けばうらやむ
氣になりてこがれ参らせ候べくの文を私がやつた時。
いかふく。とだまして置いて。だまされた身は何がな

る。よひはまぎれてくらしもせふが。更けて待夜の疊算
あへばうれし、あはねばほんにほれた殿御に二世かけて
かはるまいぞやかはらじと。筆にちかひの神かけて起
請誓紙の度々に。くま野の山で三羽づゝ鳥が死ぬるじや
ないかいな。墨と硯のこい中のわかれたたてしせいもん
は千も二千も三千も世界に一人の男じやと楽しむ中を村
くものにくや思はぬ疑にあかぬわかれも今更になごりも
おしの劔羽にかゝるうきみのかなしやとなけ、ば俱に涙
ぐみやがて此身もくさの露消えて行く身ぞ二世かけて誓
ひし起請はこれ此むねに有明の月はくもらぬ西の空尊い
國でそおふぞやまつていや、と手を取れば恨みははれて
もはれやらぬ妄執の雲煩惱の霧はけむりかせうねつの炎
のせめともろ共に奈落の底の底迄もはなれはせじと付き
まといくるりくるく。追廻す輪廻のきづなむすびと、
めよしたがいのつまよく。と呼かはす聲も亂る、臙影見
へつ見へすみ幻の姿は消へてかけるふの手にもとられず
ちらく。花壇のてふのおしろいも羽に残してくさが
くれ。

三〇 夜の鶴雪壁 (子別れ)

常磐津兼太夫直傳 作者 福森 久助

つみ歌「實に世の中はあだ浪のよるべはいづく雲水の身
のはていかで知らざりし 半四郎出」御いたはしや吳羽の前
一念すでに亂るればめいごさんがい出やらぬ名残もおし
のつま戀しこひし子故にとほく。と心のやみに迷ふなる
なみだ身をしるあめやさめつもりつもりてふる雪の消え
てはかなき玉の緒も柳の絲のつながれて爰にも夜の鶴な
らでいとあはれなる立姿 半四郎「申し、ハテがてん
のゆかぬいま申し」と呼んだるは 半「アイわたしでご
さんすはいなアどうぞ此子を抱いて下さんせ。みの「まて
人里遠き此山中雪間をわけて来る女狐狸妖怪の類ひなる
か 半「イヤまつたくわらは、其様なものならず熊野八庄
司の其一入戸野の兵衛が娘吳羽の前じやはいのふみ」ヤ
何と其吳羽の前様は大塔の宮様に思はれ給ひたゞならぬ
御身の上と承はつたがてんの行かぬ今の一言 半「すな
はち抱き参らせしは其若宮様。みの「スリヤそれが若宮様
となして又あなたが此あづま路へお出なされし其仔細は

半「サアそれは宮様にお目にかゝるをたのしみに海山越
えてはるく」と「たづね木會路のたび枕はやふお顔の都
をば霞と共に立出ていつか近江や美濃果もどふ信濃なる
浅間しや戀のとうけも確氷とは縁のことぢやと氣にかゝ
りおもひはとけぬ上毛をこせば吾妻のあふせさへ月の
武藏のうかれぶし「鳥がなが夜があきよがてんとさん
出ぬうちやかへしやせぬとひくさみせんといとしさもば
ちか報ひかしのび路をあだなる人にへだてられお姿さへ
も道芝の焼野のきゝすつま戀てなくなかなしき身の上と
かこち給ふぞ道理なる。みの「だんくの御歎きお道理で
ござりますさだめて御聞も及ばれんわたくしは小山田太
郎高家と申すもの宮様の御行衛も存じ居れば御供致す
ござりませふ何に致せ若宮様御尊顔の拜せんと抱き取れ
ばおあぐり泣さへいと愛らしく「ねんねこせい、ね
んねがもりはどこへいた山をこへてさとへいたさとのみ
やけに何もろたでんく。太鼓にふりつゝみおきやがりこ
ほしくるりくるく。肩車あぶないがてんじ
やく。花見に行こなひがし山や西山みんなみなみにきた

山の鄙のおどりは對の手拭しやんときておどるふりのお
 もしろや「あれをみやこの花の山子であるかるゝめうと
 ともいはれんものを情なやつれなやにくやその人の太刀
 にとゞまるおもかけのたまよぶ子鳥遠近もおほつかなけ
 に見へにけり みの「がてんまいらぬその御なけき仔細つ
 つまずおあかしなされて下さりませ半」サアそれはみの「な
 んと「今は何をか包むべき自らこそ人手にかゝつて此世
 を去り娑婆になき身のはかなくも宙有に迷ひ來りしは此
 子を頼まんためばかり みの「スリヤ人手にかゝつてお果
 なされしとなして又敵は何者なるや 半「其敵こそ長崎次
 郎高繁が邪慳の刃にかゝれども神の御末の若宮様御運つ
 よく御命もつつがなふ疵口より御誕生何とぞ此若宮をお
 供なし父宮様に御渡し申し行末頼むは小山田太郎力にな
 つてたもいのふみの「スリヤ敵は高繁とな半」サア彼こそは
 自らが所持なせし錦の御旗奪ひとり肌身はなさず所持な
 せば取戻さぬ其内はおそれ有り みの「ハ、悪事かさな
 る長崎次郎御旗を奪ひ返した上あなたの怨みもはらさせ
 申さんさり乍ら此若宮様都へ御供致さんにも女房に乳は

なし何とぞあなたも御一緒に「これそれが叶ふ事ならば
 今のなけきはせぬわいのふ「子を持つて知る親の恩七十
 五たび泣といふたとへは物のかずならずかゝる歎きは
 にしへの安倍の童子が母上もそれはしのだのいきわかれ
 尋ね來いとのかたみのうたまたあふこともありなんにい
 かなればこれ限り相見る事もなきたまはなんと見捨てゆ
 かれふぞかならずまめで成人し父宮様の力となり朝敵退
 治に母が名をあけてもかぞへつくされぬかはいのものや
 いとし子に一世のわかれこれがまたとへみちびく十萬
 億土佛の誓あればとてなんのうかまふうかまれ死出の
 たをさの鳥ならでないて血を吐く思ひなり「スリヤ是が
 親子一世の御別れでござりまするか「サア今別るれば未
 來永劫顔見る事もならぬはいのふ若よさらば「さらば
 さらばも果しなく子の恩愛にま一度見たし抱たしと立寄
 ればこはいかにあの世此世と隔たるさいせうもはやわか
 れのあら堪へ難や刃のつみにしゆらの太鼓目にこそ見え
 ねふむあしもと山へのほれば劍につんざき谷に下れば紅
 蓮の氷白無垢かへつてからくれなるのめう火のけぶり恐

ろしなんどもおろかなり「とくよりうかゞふ長崎次郎大
 勢引連れ現れ出で「吳羽の前が幽靈又うせたか付そふう
 ぬが魂の太刀にとゞまる 佛丸降魔の利劍立去れ〜」み
 の「吳羽の前を打て立退く強惡不道の次郎高繁錦の御は
 たをこつちへ渡して観念ひろけと詞するどき太刀風にご
 くそつ惡鬼にひとしき次郎打てかゝるを追かけ追詰め錦
 の御旗ごうつうにて取得し上は若宮をいよく頼むとい
 ふ聲ばかり姿は消えて失せにけり〜」。

三二 五節句の内 生 禿紋日 雛形

常磐津文字太夫直傳 作者 瀬川 如阜

■「やつせばや戀に心もだて染浴衣こゝにめぐりてあわ
 しまのすゝにひかれてまねかれてかむろ〜とさくら
 こだま花のあしたの文もてはしるなさけのみばゑかはゆ
 らし三津五郎「かよふ神風ふりそでもやがて思ひの竹の杖
半四郎出もとは尺八末かけし起請誓紙の筆の軸こゝに小ろくが世
 わたりも道は一筋仲の町なじみの茶屋のあけくれに供待
 合の辻占も禿は袖の振合せ縁はいなものあはしまの由來

語りて來りける 三津五郎「これ〜子供衆さいぜんから見
 たところが名にしあづまの新吉原お前も花のみばえじや
 な「といはれてさすがおもはゆ袖をかざして 半四郎何
 をマアこちやそんな事は知らぬはいなア 三津「イヤ知ら
 ぬとはどふでんすなんほ幼い禿衆でも意氣地てくたのは
 りくやうコレ女子を守りの御神にて「〜そも〜紀州な
 ぐさの郡かだあは島大明神の由來を詳しく尋ね奉るに
 「せんぜうなだいじんの初會にはまつてうら約束第三回
 目のひめみやにて「はりさいてれん女郎と申奉る「本
 地は即ちこくうむてんの御器量にてうしとらの方は御一
 代の守本尊かけねなしせうあだつきのみせすが〜きちや
 んらちやかした長座敷ながい返事のと引でおいらん
 よびに▲「はしごからのぞくやりての目を忍び「宵から
 眠るかね四つに諸行無常な戀もあり「うは氣ではまる
 さんや堀猪牙は神代のうつほぶねあやのまきじた三盃機
 嫌はやす神樂のたいこもち「ばけ物はなしひけすぎて▲
 「おきまどはせる歌がるた戀ぞつもりて居つゝけに「長
 るふらちの病をも救はせ給ふ「御せいぐわん「御しん

ごんにおんそろくねむたかこそぐりそはかと興じける
 半「ほんに氣輕な修行者さんお前も大方此さとに深いお
 方があるであらふな」あはしまはたと手を打つて三津「シ
 タリ誠に梅檀は二葉とやら禿の名にはわかばじやなアあ
 りやうは此わしもちつと由縁が無いでもなし半「そんな
 ら私が其お方を三津「こりやよからふ當てゝみなサ、誰
 じやく」半「サアそれはな」ひくてあまたと見とれてほ
 れてませたねがひのこむらさきおゆかりさんのこゝろの
 底を汲んでみよなら井のもとにさくらあぶなきうつり氣
 をきいてつかへのたねまいて身じまいべやのべにふでに
 こひのいろはのつづて文字はれたとたつた三つですむそ
 れさへかほにひぢまくら▲「ふたつまくらののはしかけた
 かむろはいづもの神さんのかはゆがらんすさとそだち
 「はでやうは氣の中でさへ眞實しんの二世三世約束かた
 き女房氣はうれしからふじやないかいな」イヤ／＼そ
 こらはほをたゝり「むかしははでもあぢきなや今の身す
 ぎは新町河岸かんごんしんそんおはつほを「揚屋町々す
 すふりてとうかみ江戸町京町のまがきへふみの」かた

エイまかり出たる者は梶原源太景季といふのら者にて候
 ソリヤなんじや身共に生田のはなしをせいオ、話さふと
 もくまづ生田の森の合戦は「去程に平家の軍勢十萬
 餘騎一の谷にぞ籠りける味方のせいには六萬餘騎頼義經
 兩大将二手に別れて押寄する其時景季思ふよふ●「色に
 はなまじつれば邪魔一人さきがけ功名せんとかごにも乗
 らずたゞ一騎」生田のもりのさくならで神崎へとぞさ
 しかゝる新造禿花車仲居あつばれてきよのがすなと八騎
 が中にとりこめられ頭巾羽織も打落され大わらはの姿と
 なり「つい深入りの奥座敷待設けたる梅が枝はそれと
 見るより胸づくしコレなんぞいのう源太さんお前といつ
 たいかうなつたはなみ大抵の事かいな「初の御けんには
 れた客とこへも遅うゆくはづを一座の前もなんのそのあ
 すなぶらりよと儘にして心でやほな床いそぎしごきもわ
 きへ投島田「枕の下へやるてさへつとめぎはなれ馬鹿ら
 しい女郎めうがにかなひしと楽しむわしを振捨て、」よ
 その二階へ行かふとはなんほつはものさんじやてゝ氣強
 い男ととり付けば「取つて突退け大音上げヤアぬかした

だより▲わしをだましてオ、こはや●「なんほかむろで
 もこちやわけしつてよそのあくしよはわしやすかぬうい
 た手枕かり枕まくらびやうしのしなざだめ■三下り「あし
 のまろやにたがまろねせんぬしの心をひきみんたんほの
 かはざいふさつても水仙かん椿お前山茶花びわの花「長
 くみじかくそのよをかぞへしゆびもつがうもよしの木さ
 いかちさるすべりあれ程いふたにばからしいもしもうせ
 ずばなんとせうかへす手じなのほど拍子「これ邯鄲のそ
 れならで彌生に花の春遊び樂しかりける風情なり。

三二 倭假名色七文字

○七變化 るびら(源太) 常磐津文字大夫直傳
 作者 二代櫻田治助

■「いはすとも夫と知れかし三ツ大の紋日日がらの約束も
 引ばかへさじ二度のかけ梶原源太景季は「エ、イ●坂
 東一の若武者とみな人ごとにゆふべからけさきぬく」の
 中の町みそをあけやのけん酒にかつて兜の緒を締てしめ
 て結んでゆひ付てふりかたけたる梅が枝はをりをるびら
 の太夫しよくてんとたまらぬ花の顔見せはやざきのゑが
 ほもよしや足もともよろ／＼もので歩み來る 三津五郎「エ

り猫傾城その手でこれまでかきのめされまうけに乘ぢで
 そゝりぶし「蓼くふ蟲もすき／＼とやら今年やかほちや
 もあたりどしなぞとやつたも氣恥かしい突出されぬ内こ
 つちから「切上あけあけがいちよんちよんまくどりやお
 暇と立上ればイヤ／＼いなさぬ「いやいぬると「せり
 合ふ中へ若い者ア、モシ／＼こりやどうでござりますわ
 たしがお貰ひ和睦は田町の法印さん「さんけ／＼の法印
 様よ神おろし歸命頂禮と錫杖をふり立まいかいなアコレ
 ナア錫杖ふらしやんせんかいなエ、しんきな人さんじや
 おもしろや「うきに浮立景季がかついろ見するるびらの
 梅が枝園の早業分捕を生田の森の高名と歌舞伎の記録に
 とゞめけり。

三三 道千種の花色世盛(大和だんご)

作者 二代櫻田治助

■「梅檀の子をむすぶてふくれの秋月の友どり徒とわや
 く盛があとやさき見るを見まねのしやくちやうに鈴もふ
 りよき神いさめ松之助■まだしよわけさへしらぎぬや合千
 早ふる／＼合袖ふる巫女の合あづさの弓も合張つよきお江

戸生れの合目のはりもすゝふる手元かはゆらしやがて色仕と三つ扇義助出「それと三つ大」こゝらで大山だしいやうふどうは「こちらがおだんな」あさからお神酒で合のたまくさはぐだばアさんぢいさん合ばんにや庚申茶めして甲子福徳延命家内は三ほうかうじんのお前を見れば松之助合こちは己之介さんおやはないかと木綿襷かけてぞねがふ御最負の恵に育つたば巫女みばへ法印打運れて中よき同士来りしが里の童がこゑくにはやすを聞いて振り返り義助「ヤアアレ」あそこへ来るは氣違そふなこへ見へたらなぶつてやらふ松之助ほんにこりやおもしろかろふそんならこゝで氣違をと互に苦なしぐわんぜなし花野にしばし待居たる「萩の上風萩の露菊にものぢの亂れ咲松之助出「亂れそめにし合はじめよりあずま受出せ山崎と浮名に立しこひ中も合まかせぬ事のかずかず此身一つの物狂ひ狂ふ心は我のみか蝶もちぐさともつれ合ひらりくひらくく」田之介出「そこよこよと其人の行衛を尋ねやうくとそれと見るより走り付きかはる姿のあさましといはで涙のつゆしぐれわしじやあづ

まじや與五郎さん氣をしづめて下さんせこれなア申し蟲さへもつがいはなれぬあけはのてふ「われく」とても二人づれ未來迄ものなかくをあだにはせじととり付けば●「イヤ思ひ人はアレくく」あづまの森とうつなく「かけゆく袂ひかふる袖しどけなりふりともくく」に人の見る目もうやつらやこなたの二人は手を打てみ「そりやそりやこへ氣違よア氣違よほうさいよく」あづまはちやつと押圍ひ田之介「ア、コレく見ればマアかはゆらしい巫女さんに法印さん里の子供と同じ様に狂氣した者をなぶらずとお前がたの御祈禱でどうぞ心のしづまるやうにしかしいとけないお方々にこんな事いふたとてみ●「コレサく姉さんなんほ形はちいさくつても山椒は小粒でからいといふによ松之助それくなんほこちらが子供でもその御祈禱はよふ習ふて田「アノお前がたお二人がみの「頼むと有ば今こゝで」そんならどふぞお願じやはいなア●「オツトがてんといふまゝに」三上「さんけく」の法印様よ神おろしきめうてうらいと錫杖を振立てまいかいなコレナ錫杖を振らしやんせんかないなエ、しんきな

人さんじや「ほんにしんきな山ぶしさんわたしが代つて御祈念を」やんもしろや庭火たく天のうすめのながれとておかまのまへのお徳女郎あつちの隅ではちよここつちの隅ではちよこくたれに見しよ連べにかね付て品やるふりも親譲りおちやつびいではないかいな●「月夜がらすをナ夜明と思ひてつとんと沖の石かはく間もなき水しわざ合まゝもたいたり合しらぢもごろくとほんにつとめの合やるせなやませた所體もならをより七つか八つかむつまじと見えてもさすが頑是なし忽ち何か争の中へ狂人わけ入て●「コレこれはどふいふもんちやくかわけは知らねどゆびきり」中よしこよしホツホほらの貝目出度く一つ打つて置けしやんくく」▲「庄や●「かりうど」狐のよめ入●「だいがさ立がさだて道具ふりやれおふりやれ日でり雨其雨よりもしつほりとぬれて戀ぢのおどりをだいてながめてねんくころりんくよいとしねんねになにくやろぞでんくくだいにふりつづみ鈴やつほく手に持そへて」愛しそだてたのしみと思ひし事もいたづらにあはとなしたる腹立と「萩

のしもとをてうくく「打れてびつくり巫女法印おいらにやいかぬきちがひ殿わらへくと振捨て、元來し道へにけて行く●「あづまはさへおし止め情なやたれあらふ山崎與五郎さまとは人に後れぬ亂れ髪あづまが顔も見忘れてか現なやと制すれど●「風に尾花のさそはれてちりくくばつとちるふぜい詮方なくぞ見えにける三津五郎出ありふれし世のすぎはいを又こゝに」こんどしだしじやなつけんけれど雪か花かの上白米をちわと手くだでさらしてひいて情でこねてしつほりと色で丸めて二人して夜なべ仕事についてやなけし名物をめしませく家づとにかふなら今じや今を盛りの花道を荷ふ女夫の大和だんご狂人見るより松之助「ヤア吉原の俄がこへ來たサアく大和團子が所望じやと詞のしたより商人が心得取出す臼と杵三津まづ御目通りで夫婦が搗うり半四郎そんならこゝらで西「しつかとせい」今の世の中になかだちやいらぬしつちくはつちくつぎぎせる●「ヤレモサ。ウヤヤレ。ヤレサテナ」刻煙草がヤレ仲人する「しやうねめく」ウヤヤレサテ。ヤレサテナ●「おちよくとおこ

して置いてかべにつたの葉のき心「イヤ〜だんごにか
こつけて亭主をのろくしやうわるめコレ何もかも知つて
居る此頃となりの候とあぢな目つきであいそうににばな
のちやから袖口のほころびかゝる色事とへ、見たに違ひ
はござんすまい ●「コレそりやお前なんじやいな ■「そな
たをこひにわしが身は三味線の糸よりもほそくやつれて
なんよへ「うす挽うたが取持で引木の手に手しめられし
▶「あくしよ男にほれたのがわたしがふしやう女房にな
りふりさへもいといなう外に雄猫もだきはせぬまじな心
を知りながらどふしてそんなまくしかけ ■「いはれてす
はや團子のやきもち喧嘩と見ゆる内 ●「又狂亂の心付立
上るのにしづまるこなたあづまは其儘抱き止め 田「コレ
モウシ與五郎さんアレよそのお方はあのやうにお内儀さ
んを思ふてじやにお前は私が露程も可愛はないかいなア
モシ心を付て下さんせといふかほきよろり 松「そなたは
誰じや 田「あづまじやはいな〜 松「ドレ〜ほんにそな
たは藤屋のあづまこもやつぱりあづまの森そなたは藝
子こなたは名所どちらも〜オ、あづまぢや〜 ■「吾

妻といふは其昔猛き尊のおかもじさんお舟ゆさんにすい
となり其すい様のしたはしく戀をしなの、碓氷にて吾妻
やいのと宣ふよりあづまとこそは名付たり「我も尊にあ
らねども吾妻戀しあづまはとそら涙にいと猶 田「マ
それ程迄に ●「わたしをば思ふて下さんすお心はうれし
いながらにくらいしいお前のくせであふたびに藝子々々で
ないしやうは三味線枕に客さんとねから無い事無理な事
「いふてじらして口舌して女子をなかつほどでマア氣違
とはやほらしい正氣になつてと取すがり涙ぞ戀の誠なれ
こなたの二人は氣の毒顔 三津「道理こそさつきにからおか
しいと思ふたがそんならあなたはおきちかへ 中「そうし
て與五郎様とおつしやるはもしやあの山崎屋の 田「アイ
其與五郎様じやはいな 三津「何あなたが與五郎様ヤレ〜
それなればわたくしはお兄御の與次兵衛様の御恩になり
し月見の三五郎といふ者これなるは女房おいし 中「與次
兵衛様のお咎もゆり山崎屋のお家は與五郎様にてお立下
されますとの事故あなたの御行衛所々々と私共ともど
もにときくにいそ〜よろこぶあづま 田「ソリヤマアは

んの事かいなモシ與五郎さんアレ今のをお前聞かしや
んしたか 松「なんじや聞たか〜とは時鳥か但しからし
か意見の事か 田「エ、モ何をいふてもあのやうな 三津「サア
サアようござりますどんな事をおつしやらふとオイ〜
と御意次第お心にさへさからはねばおのづと狂氣は直り
ますると力を添ゆるその内に 松「アレ〜あそこへ行く
は隨徳寺の角蓮坊めさてはあいつもエ、エ色のうき世じ
やナア ■「坊さんが〜醫者のまねして小脇指それへそ
れ〜〜羽織着てサキやらでしきみの香をかくしオ、
世の中はこはやの酒にもまれてすいとなりすが身を食
ふたこ坊主お足の不足はなぜでんす乙姫さんへの心中に
「テモそれはぶ嫉せんばんな 松「ハ、ハ、時に二のかは
りの俄はどぶじやはなが聞たいサ、話しやとつても
付ぬ狂人の詞にこなたは顔見合せ 三津「ハ、アさてはこち
とが商賣の大和だんごぢ俄と思ふて 中「あのやうにおつ
しやるものなんぞお咄申さずば 田「それ〜わたしもと
も〜はなそふほどに狂氣の靜まる事ならばお前がたも
どぶぞマア頼みますると夫思ふせつなる心に 三津「なんと

しやうそんならどふなとてんほのかは 中「サア間を合し
てなんなりと 三津「さらばお咄し申ませふか ■「まづ吉原
の全盛遊たいこ末社は打むれて女藝者は我一と綾羅をま
とひ錦繡のかざりをなして趣向なす有が中にも取わけて
むくどりおどりの拍子取り「じけさ〜とこひにしやる
しけさ〜の御かんけ山さかこへてもまいりたや〜し
けさ〜のおかんけ山さかこへてもまいりたや ■「高い
山から谷底見ればおまんお萬はかはいや染分だすきで布
さらす〜おまんお萬はかはいや染わけだすきで布さら
す「佐渡で〜さく花イヨサノサツサにがたでひらくへ
とかくにがたはイヨサノサツサさま色どころさつてもお
もしろかりつばめ ■「しのぶ夜はそちらむかんせお月さ
ん色の世界じやにナしんきらし「あふたよはついておく
れなあけのかね色の世界じやにナしんきらしエ、しんき
らし 松「おもしろい〜其俄を見るに付け跡の月見は藤
屋の二階でそこ限なき夜と共に飲み明したる大さはぎ
ソレ其時の總踊サア〜音頭々々 中「おんど〜に不狂人
くるわかされて一踊これもめいわくかしのへ ■「色のち

ぐさのナアなん／＼中に萩の下露ぬりよとて萩のうはき
 なうはきなうは風にわれもこふ成るいたづらなき／＼やう
 と知らぬ男べし葛の恨みをかるかやにほんにこほる／＼あ
 いの花かはいらしさの女郎花「あやなくあだの名やたゝ
 んいろにこる身のつれなしと正體もなく伏沈む三筆」それ
 それおもひ出した事があるコレ／＼こゝに法性寺のお聖
 人より附屬した祕符のお守これをと其まゝ與五郎が額に
 守押當てなむ柳島妙見大士かんおういりきすみやかに病
 そく消滅不老不死と唱ふるきどく忽ちに氣もせい／＼と
 狂亂の心しづまりあたりをながめ 松「ヤそなたはあづま
 いつの間に三入「モシお心が付ましたか松」すりやあのわし
 は 田「アイお前は心が亂れしと聞いて身も世もあらぬ思
 ひそここ、尋ねやう／＼に逢ふてもしどない事ばかり 松
 「フムそんなら重るうき事に狂氣なしたか面目ないそふ
 してあのお二人は三筆「サアわたくし共の身の上も目出度
 いづくしのくはしい事も正氣におなりなされたからはゆ
 りりとお咄しいたませう 半「それいなアア何よりは
 ちつとも早うお供してとはいへあのお姿では三筆「それそ

心は行けど足元はあとに引るゝみだれがみたとへおくれ
 て死ぬるとも同じ道にと三勝がしよせん浮世をすてぐさ
 の露のはかなき命毛に残しり／＼べくもこれがかぎりと書
 置に言つくされぬ女文字筆の歩みの一足づゝに消えて行
 く身は惜しからね共遺が親子の別れのきづな切るに切ら
 れぬ恩愛の血筋の縁にしめからむ戸口ひとへの内と外
 互に隔つ中々も思ひに隔てなくなみだ墨もにじむや朧
 月 歌「いつにかはつて平左衛門殿の無とく心なるこんや
 のしだら其上に此お通までつき付たはやつぱり我に生延
 びよと情にかけし命のかせか 半「おそのさんへの義理と
 いひわたしに心ひかされて若や繩目の恥にもと無理にす
 すめてとゝさんが二人の縁をさつぱりと切つても切れぬ
 互の心半七さんが死ぬるとある此のき状の書置でどうマ
 アながらへ居られふぞ「親に先立つ身の不孝おゆるしな
 されて下さんせとぐど／＼言ふも口の内おもてはそれ
 とむねをすへ 歌「たとへ此場は落のびてもとてもものがれ
 ぬ人殺しこゝで死んだらこいつめをよもや其まゝ見捨も
 せまいオ、それ／＼と一腰を抜くに驚くお通が聲助「ア

れおれはちよつと小梅へいつてかごを雇つて来る程にお
 主はあなたのおそばに付て 松「そんならはやう」お二人様
 ドレいつて参りませうか ■「心もすぐな道すぢを足を早
 めて土手續き小梅の方へとゆく跡へ遠目に三原有右衛門
 そらかいさまにかけ來り新平「さてこそ戀人よい所にサア
 こつちへとひつ立るを二人は支へ押隔て 松「こりや此あ
 づまを何として 半「わたしが夫にあづかるお方めつたに
 そふは成ませぬぞ 新「ヤア小癪な女めならぬとぬかせば
 半「どうさんすへ」シヤ面倒なと立かゝるを有合ふ白にて
 さそくの隔所をかふと向づらみけんを杵のしゆもくづき
 打れてどつさり尻餅つきめでた／＼の若松様よ枝も榮え
 て葉もしけるお目出たやちよのこおめでたやと争ふはづ
 ゐに我手のあてみ倒るゝ三原を見向もやらす「千秋ばん
 ぜいばん／＼ぜいと手を打つれてぞいそぎ行く。

三四 其常磐津仇兼言(三勝半七)

常磐津文字太夫直傳 作者 二代櫻田治助

「ときはの松とちぎりしも今は仇なるかね言とふけ行く
 そらも四つ過てはや九つか半七が戀慕の闇のとほ／＼と

レと、様がと泣出す「ヤア今のはたしかと立寄る戸口」そ
 ふいやるは三勝か 半「オ、半七さんそこにあつたか 歌
 「お通が事をと取なをす 半「コレマア待つてとあせる母子
 はて、親にとりすがりわけもしら双をとむれば怪我さ
 せまじといとふ間にしやくりつおしつやう／＼にはづれ
 ておちるくわんの木より先へ門口まろびいで 半「モシわ
 たしも覺悟の此書置 歌「イヤ／＼死ぬるはわればかり娘
 を頼むさらばぞと振切り行くを 半「コレモウシ「三勝取
 つきノウ情なや今更そんなどうよくな邪慳も折による
 のかどもしや人めとむりに手を引て入口さしよせてとも
 しびおほふその内に頑是なき子のすやすやと寝ばなお
 こさじせめてものこれが名残と抱きとりねんねこせい
 せいいとが母はどこへいたあすは死出の山越えて二人一
 緒に行かふとはなぜマアいふて下さんせぬわしが心を知
 らぬかなんどのやうにつれない事をとかこつのも奥を憚
 る忍聲「半七もや、言葉なく恨みは道理さりながらひと
 りしのふといふもみなおつうをどふぞ孤兒にさせともな
 さのふびんゆるそなたばかりは萬年までも生きながらへ

てあれが事見立てやつてくれぐれもわがなきあとの香花
をたのむくくとくちごもる「アレまだやつぱりそんな事
言てなかせて下さんすなこれが世間にありふれたいろや
うは氣じやあるまいしよては知られず知らぬどしわや
くな縁を神さんがひよんなお世話の其のちに盡ぬるにし
を松のもんはなしに聞けばしつくりとあふてうれしき紅
入の二人が仲じや無いかいなそれからきつといひかはし
二世や三世を打越してこんどのくすつと今度の先の世
迄も夫婦じやぞへといくたびか約束したを忘れてか氣強
いはいのと取すがりわけもなみだにあやもなき今は詮方
泣く目をおさへ 歌「此上はなんとしやうおつうにそへて
平左どのへ其書置をのこし置き半」そんなら一緒に 歌「サ
ア早うと寝入りし我子に暇乞ひ身繕ひして共々立出ん
とする折柄に十手打ふりととりてのにんじゆ「ヤア半七の
人殺し動くなやらぬと取巻くにぞちやつと三勝うしろに
かこひ 歌「お手にかゝらずいさぎよう腹切る覺悟に極め
し半七妨けあるなど目をくぼる「シヤわうだうものうで
まはせとおめでかゝれば扱はなし「死ぬるをたかの半

れておきの石ぬれてあまへて抱付く「半兵衛も今更に小
いなが心深川で藝者になつたこゝろいきそのしんていに
ほだされておれもしつけぬたいこ持「もしくゝ旦那とい
けもせぬ役者物真似はやりうたつくだゝとむかい船き
たさの酒に二日ゑい「これがいなや半兵衛と人に知ら
れたなにかいとくやみながらもそれぞとは「心のうちを
半兵衛はふかくもつゝみかくしづまきいて小いなは胸せ
まり癪と涙をおしとめ無理いひかけて氣もせさせお前
のこゝろがすむかないままさらな事ながら人の行衛と水
の末ゑにしはふかい深川へ流れよるべの夜の雨ほんにふ
たりが身の上は色と情の二軒茶屋はでなありたけしつく
して人目にせけばせきせうのなをいやまさる思ひ草須崎
におつるかりねにも忘れた事は無いはいなほせつとつも
る言の葉も社頭のはかけきへかゝり戀のやみくもおやか
たさんにうそをつくだのきはんからういぞつらいぞ八幡
のゴント鳴のも氣にかゝりつとのいきぢてくだでもべん
けいさんの力でもひかぬ氣性はしほばまの秋の月ほどま
ん丸にかどのとれたるすいな身でとでもそはれぬ中なら

七がおそれずひるまぬ切先にとりてもあぐみかなはじと
みなくゝあとへ逃けて行く 歌「サア此間にこゝを半「半
七さん 歌「三勝こいと手をひいて「もはや此世に秋の月
嵐の雪とちりて行くうき名は石碑に残すらん。

三五 富ヶ岡屏風八景(小いな半兵衛)

作者 福森 久助

「野邊にかはづのなく聲きけばありし其夜が思はるゝ思
ひをそれとみづぐきもこゝろせかれて二つ三つはや半兵
衛がいのちけも此世にあきのあだし野と覺悟はおなじお
くのしゆびさけにまぎらしよふくゝとこゝへ小いなはわ
がづまの書きおくつゆのはかなさを見るに心はおどろけ
どさすがそれしやの何氣のふ「半兵衛さん何してといふ
にびつくり書置をうしろへかくし「オ、小いなわが身は
なんぞ見やつたか「イ、エ何も見やしませんがかくしな
さんすの「そりやなにを「サアひる兩國で喧嘩の様子相
手を切に行のならなぜあかしては下さんせぬお前故にさ
まざまと苦勞する身じやないかないなと人目なければとり
付てさき立つ涙止めかね男の膝に身をよせてとんともた

ば手に手を死出のやまびらき花に嵐もいとほぬとあだな
る八つのながめともびやうぶのほかは知る人もわりなき
中と知られけり。

三六 壽 靱猿

常磐津文字太夫直傳 作者 福森 久助

●「八幡大名」太刀は鞘弓は袋に納まるも嬉しき御代の
しるしかや 太郎冠者出「鶴もすおふのはづくろい空ものど
かな太郎冠者心も相の狂言はよい中村の能舞臺 詞「是は
此あたりに住居する大名でござる今日は一段の天氣でご
ざれば慰みに出よふと存するヤイ太郎冠者あるかやい
「ハア御まへに「念なふ早かつた今日は野遊山に出よふと
思ふ汝も供を致せ「ハア、かしこまつたと行く折から
「こゝら在所のナア旦那廻りにけふもまた 猿引出「まかり
出たらめ出放題酒のさのじの猿廻し 「扱もめでたやナ
ア思ふ願もかのへ猿せなにしつかと風呂敷もつゝむとす
れど御名残の残る暑さのはてしなき思ひもどふかこふし
んの是もましらと世の中をうかれうかれて來りける ▲
「こなたは見るより 詞「ヤイ太郎冠者あの猿引めがつれた

猿は大きな猿じゃあれへいて言はふには鞭むちが殊の外損じたに付き猿革靴にしたい程にその猿革おこせと取て参れ
 「畏おそてござるのふくく猿引お聞きやつたか」なかく承つたが革をあけますれば猿が死ます此儀はおゆるし下され「ヤア大名の申事ならぬと言ばよいく此大雁おほかり股をもつて猿引共に射殺うつけすと「身がまへすれば猿引が「アアモシく待て下さりませ成程猿革あけませふが其大雁おほかり股で射殺したら猿の革に傷がついて役に立ますまいこゝに猿の一打と申して死にまする急所がござりまする草に傷のつかぬよふに打殺して上ませう「しかとそふならいそいで打殺してわたせ「畏おそつてござる「むちおつ取て猿引が立よりは寄寄りながら「年月なれし恩愛の我子にましら引よせて「ヤイましょ「小猿の時から飼置いて朝夕のけむりさへそつちがかけにてらくく」と暮せし物をなさない●畜生なれどもよふ聞けよ▲せめて今度は人間に生れ代つて来るやうにおしへこんだる一ふしを▲「にけて此場を猿智慧とおしへる綱の一筋もたらぬ三筋の絲竹に合してうたふ猿引が「ざりととはくくエ、又有るか

なさんな又あるかいな「又有るまじきおのぞみは「たゞ今殿様殺せとあるならぬといへばおれ共にたゞ一矢にて射殺うつけすと引にひかれぬ強弓のあふせはかなきけふの仕儀草葉の陰でもかならずともに恨んでくれなとくりごともことわりせめてあはれなり「あはれをよそにせりたつ上意「是非なくくも立上り振上し鞭の下廻る小猿は畜生の今死ぬる身は三途川蓮の葉船に「乗る事も知らでふびんやかはいやと持たる鞭をぐわりりと捨てどふと伏してぞ泣居たる「ヤア猿をばうたいで何故にほゆるぞ「ハア、是が泣かずに居られませうか此猿は子がい色々を藝を教へました中にも船の櫓を押す真似を教へてござるが畜生の悲しさは今命の失せる事は知らいで例の船こぐ真似をせいといふかと思ふて船こぐ真似を致すそれがあれでほへまする」と悲歎の涙にもものゝふも物のあはれを思ひやり「ム、すりや何といふ今打殺すとは知らいで船こぐ真似をするとはあはれな事命は助け得さすると詞にわつと猿引が「ヤアそれは誠か有難やお禮は猿にお目出度うひとさし舞はせ申さんと幣おつ取て立上り「御武

と獅子とは御使者役なをせんしうや萬歳と俵を重ねてめんくしたのしう成こそ目出度けれ。

三七 小糸浮名たつみ

作者二代櫻田治助

運長久御家繁昌息災延命富貴萬福御祈禱に猿がまいつて能仕る御知行も増る目出度おどるが手元たつち御馬屋にまつきおろしの春のこまがはなを揃へてまいりたり元より鼓は波の音よせくる浪にたとへては小腰をゆり合せてもふたる風情の面白さよつつ立上りてたなを見よやれ天から寶があま下りて人命草木増長すれば東おもてのせんする地に積んだる寶はどれく綾が千反錦が千反寶物を積立候へてはんやはツアコリヤくくこなたの庭をけさこそみたれ小がねの花がさくやみだるくく■三下り
 「夜さの泊りはくくどが泊りぞなばかしやくしかむろが泊りか船の中には何とおよるぞくとまを敷寐しよほに梶枕にくく松の葉ごしに月見ればごしのく月見ればしほしくもつて又さゆるあすは船が出よす物おもたけもなくおよるとのごよ「ひんだのなよこだ若なへをしよんほりしよんほりと植た物今よぶ娶よめがなからふすよのしほらしや「一のへい立二のへい立三に黒駒しなのとる船頭どのこそゆふけんなれとまりくをながめつゝかの獅子にもふするははくさいこくにてふけん文珠もんじゆの召されたる猿

■「風さそふ鐘も此世を四つ明の枕二つにいひかはしはなれぬ中の仲町を●「つれていづくとあてどさへ啼て洲崎へ行雁のそらも心もおほろ夜にわれからいと暗き身は跡追人かと振り返りはや汐見橋とく過て垣根洩くる二上りの音じめもどこかかはゆらし▲「思ふ中にも隔の襖あるにかいなきすて小舟 勇次郎どこの寮かは知らねどもしつほりとした上方唄 菊之丞「思ふ中にもへだての襖と丁度お前と私が中をアノ伴藏のにくてづら 勇「ハテ其様にいやつてもいつたいマア伴藏にはそなたの方から 菊「エ、モウおいて下さんせ又じやらくくとそんな事▲「わしはしら波うつゝなき夜の寐さめの其むつごとを思ひ出す程いとしさのぞつと身も世もあられうものか 勇「サイノたとへそふ思やつてもねるをつとめの身ではないか 菊「サアそれを寐まいとやうく床へは入れど心をば ■「しめて名護屋の二重の帯が三重まはる 菊「しんきしんくで

やせたのがお前の目には見えぬかへ 勇「サ、もつともじや〜、それほどに眞實のそなたをよしないおれゆるにイヤコレ小糸とてもひらかぬわしがうんめい ▲「うづもれし身をさまふ〜と綱五郎夫婦が志命にかけてと〜のへし金もゆるなくその上にアノ大切な國行の一腰とてもあまつさへ贖物とまでなり果て歸參ならねば兄者人彌三兵衛殿への申しわけ 勇「死なでかなはぬ此佐七そなたはどふぞ思ひ直して生きながらへ綱五郎夫婦へこれ迄のよふ禮いふてくれやいのふ 菊「エ、そりやアノお前ほんの心で勇「ハチなんのいつはり菊「モシ佐七さんエ、お前はナア ●「よふそんな事今更にいはいれた事かなんじやいなじたい二人は許嫁うきにわかれてかなしきは ▲「いんぐわか業か神さんもきこへぬ胸をこめ本でツイ出直りがつきぬ縁泣て咄すも床の内翌とゆふべにけふは又かきたくる程逢たさに文して一寸書く筆の鞘町川岸へ迎ひ舟 ●「用事を付て紀の國や待せてつらき素戻のじらしの暮の其くせが止まいでかいなエ、憎らしいつれない事をとぶつつかり恨涙は深川に汐の満くる如くなり。

ゆるに七百餘歳をふる事も ■「などおもかけのかはらめや高砂住の江二木の松の夫婦と現じむつまじき神と君とのみちすぐに月すみよしの神遊び ●「御代萬歳の小忌衣はや住の江や高砂の ■「松の言のはちりうせすまき木のかづらながきよの豊なるこそめでたけれ〜、四十郎出■ともにはぐれた屠蘇機嫌 ●「其くせぞう煮もはら八はい ■「けさの出がけに出がけにやけさのたほが給仕で「エエ、エ舌鼓■「うてやはやせやこれさんまの鳥追^{半四郎出}●「イヤおやつかなわりや誰だぬしの事なら小ばらも立たぬてんとおてんとてんとう様かけて天から落ちた天人かキミ「エエおかしやんせくち車丁子ぐるまはひかれぬ袖をふりあふ縁もあるかいな御ひいきうけにきそははじめ ■「春の物とて箱たゝき萬歳鳥追神樂獅子きけん上戸の氣もかろく ●「サアきなこもちッ「あゆばんせ ●「ヤットまかしよとうちつれてかたもしどろにちどり足 ●「八百八町まぢまちをいさめはやすやには神樂 ッ「わだ三尺のつるぎをぬいて ■「あまの岩戸の昔よりばちとたいこの中よくて男も女も笑ふ門福神たちの寶舟だから御藏にすつしり

三八

五せつ句の内松色 操高砂 (太神樂)
 常磐津文字大夫直傳
 作者 瀬川 如阜

●「今をはじめのたびごろも〜日も行末ぞ久しき ■「久きたためし君が代にかねてぞ植しすみ吉の松は非情のものがらめでたき御代に相生の千年の縁とし毎に若やぎかへる春の色妹脊の操高砂の松もときはの名所かな^{半四郎出}「枝をならさぬときつ風治る國のありがたき民も戸ささぬ浦の波静けき春の長閑さに鶴の毛ごろもそでそへて木蔭のちりをかこふよ玉のはゞきにこがねのさらへさらりさら〜さしも世の幸こゝろにまかせては何所の^{なじよ}おきなな鶴のひまごのむまれ月日をいつぞと問へば ●「福徳元年正月三日まだ卯の刻に安々と「此浦やすの神の國神の御末の産ごへたかくうましをのあなうれしゑんねん不老を壽きて和子のうぶぎを縫ひ奉るあやが千反金欄緞子加賀に加賀絹越後にちゑみ奈良のナアさんささらしに脛の白きを柔の山ぢの仙人だにも通を失ふ戀路のならひ^{喜美大夫}「戀があらすば浮世もあらじ夫よけにいろも世にしる三千年の^{みちとと}細大夫「もゝのこびとは西王母彭祖が昔戀

とこがね柵にて米計る千町や萬町の鳥追が参りてッ「イヤチ、イ ●「殊にくるわの春景色亥子は今年の恵方からござるお客のはつ子の日 キミ「松の君たち根引してよい初夢のふみまくら「ふつつり顔も見まいぞといふたはうそのかはゆさに ■「かよひあみがさやほらしいおらがなじみは新町河岸を キミ「かたに手拭中ろじをきいたふうだに主や見たやうだコウ〜よつていきなじれつたいよひやかして■「これも神樂の神いさめッ「ほんにたかまがはらの立つ來なさるたびににおかめやおかめオ、かめ女郎やおかめ女郎うぬに見しよ迎髪かしらこれが當世荒神さんのおそなへふうだと人ぢらし ■「あとはかごまり水の曲扱あは餅の曲つきや ッ「すと〜んまかせてきた〜きた何餅にこと〜金持にこと〜あれはさのよいこれはさのよいやつとことつちやアうんとこな生玉やでござい名代々々 ■「うかる、春の幸ひありやめぐみを江戸の女わざにも春かせぎまたあるかたとたどり行く ●「これさ待なよイヤましてしばしわが心 ■「やつちやかしらにしかられたんほのかは鼓なるもならぬも目もとのしほ

にあたほうあだ付あだもうけ十二とうくおみきもさめてこれからいもの香酒や獨はやして太神宮様へうつたりまつたり恵方道萬よしとぞしゆくしける。

三九 深山櫻及兼樹振

七變化 秋の内玉藻の前
常磐津文字大夫直傳
作者 篠田 金治

「名どころをたづねてとをき玉ほこの道芝わけて金咲く陸奥近き下野や那須野が原の松の風くさの葉に置く白露も玉藻の前とめされたる 菊五郎出「むかしは雲の上わらは今たましるはあまさがるひなにのこりしあだごころ秋の野分のおとづれてふくろう松桂の枝に啼ききつなれぎぬ五つぎぬうら吹返す緋の袴せんけんたりし粧は「月のまゆすみ雪の肌花の姿の色見へてうつろふものとながめたる小町も及びなまめきてみすもる風におのづから身は烏羽玉のくらきにもかよひなれたるほそどのはながきよすがにア、しんきらしこひにはしづがましなれどざればみごとはうへくもかはらぬ夜半のさめごとしらべのいとのとけしなく「つま戸ひらいてはぎの戸のはぎはうなづく尾花はまねくつれて桔梗の男郎花にくやとわれ

もこういふて指にいはせていたどりのいろづくあとのふぢばかまうらむらさきじやないかない「さばかりいみじかりし身の寵衰へていつしかに遠ざけられし本意なさに涙のあめや海棠の花の眠れる風情なり「あやしの姿うかがふ伏勢くさむらかけより現れいで 詞「ヤア合點のゆかぬ内裏女郎くさむらふかき那須野が原十二ひとへに緋の袴とこ目なれぬしなかたち察するところ化性の物いまわれくが得物の手はじめサア正體をあらはすまいか「しもとをもつて打懸れば不思議や忽ち上臈の形はとしふる野干の姿これはとばかりけしとんだり 鼓歌「今は何をかつむべきそもわれこそは其いにしへ三國をつうでんせし金毛丸尾白面のあくじうなりと知らざるや 詞「那須野が原にたましい残り恨をなせしがさいつころ「かの兩助がめいけん姿はくつれど朽ちやらぬ石に残りし惡念もふんぬのきばをかみならしみやうくわの如くつくいきはおそろしくも又物凄し「さてこそ逃すな打取れと一度にかゝるをなやます業通「その一念も年ふりて「それよりけんうほうしが教化によつて虚空にかへりあくじ

うのかたちは去つて今も猶殺生石といひ残す昔語りの因縁をつたへくして久しけれ。

四〇 去年見し雪に再夕暮雨の鉢木

去年見し雪にあらねども 再夕暮雨の鉢木
作者 二代櫻田治助

「行衛定めぬ道なれば越かたもいづくならまし大言「これ是一所不住の沙門にて候我此程は信濃の國に候ひしがまづ一度鎌倉に登り秋にもなり候はゞ又々修業に出ばやと思ひ候「やどりがなと夕立のそらまだくらしき小家の軒たるきまばらに傾きて月にはあらでもる雨をしのぎ兼たる庵の口主か下主か前髪が鬢ふせぐ手に傳ふ袂もつらき風情なり「尼前間垣にイみて 大「申しくお若いの夏のならひと夕立に先へも跡へも参り難し簀のこのはしにもたゞ一夜「御芳志あれと有りければ 三十三郎「それはお安き事ながら主の留守にて候へばお宿はかなひ候まじ 大「ムムウあるじのお留守とは扱はこなたは御内衆か 三十一「イヤあるじと申は下拙が兄 大言「そんならこなたもあるじ同然石の上に旅寐をすればとよみかけしはそれは手弱女これは又輪廻はなれし尼法師色事の用心なら氣遣有るな

とのたまへば 三十一「そりやもふそつちに氣遣ひよりこつちに氣遣ひ有難い「尼法師でもはくくの鼻のそけばたさまで有ふともどふしたこつちのはづみではゆだんが成らぬとはしり込む「天下の賢者を持ちし身も此返答に行暮れてイみ給ふぞ殊勝なる 芝翫「世の中はなにか經世が詫住居いとむ業も内證の煙の代と鮎の魚釣得て歸る道もせに小川なすてふ涼 芝翫「扱も嚴しう降つたる雨かな 夫 邊檐點滴 如琴筑 支枕幽齋聽 始奇なりとさ れば今降る雨の音も「元きく雨にかはらねど今は抓なす 琴のねと聞ばき心なかくに解分衣もさしつまる刀もにぶき素浪人アラおもしろからずの雨の日やな「松下禪尼これこそは以前のおのこが兄ならめと 大「のふく主の御かた候か待まうけたる御かへり前後を忘ずる此吹降り今宵ばかりの御めぐみ頼みますると仰せける 芝「オ、夫こそやすき御無心ながら御らんの通りの此埴生何とお宿申べき 大「いやとよ草の薙も我ためには玉のうてなと有がたし是非に一夜の御芳志を 芝「さはあれ我等兄弟さへ住居兼たるていなればとゞめ申さん様もなしこれより

十八町あなたに山本の里と申てよき泊の候へば暮れぬ間に一足も「いそがせ給へと言捨て、庵の内へぞ入にける「尼公は跡をつくく」とア、いかにせん曲もなや大よしなき人を待ちつるよの「うき世の人の情なきも民をめぐみのとゝかぬと思ひなやみてたどらるゝ、「内には弟が目をしばたゝき 三十一「イヤもふし兄者人最前これへ尼法師の宿の無心と有たれどおるすの事故斷つてはござりませるがせめて斯様の人に値遇いたさば其報ひにて悪事いたした様にもあるまいかと 三十二「成程コリヤよふ氣が付いたしかし留てはしんぜても何をかふとの 三十三「ハテ留てさへ進ぜたら何も別に馳走にも 三十四「いかさまそれもそんな物吹降りといひぬかり道遠くはよもやと表へ出で「なふなふ旅人お宿まいらせふのふ餘りの吹降りに申す事も聞えぬのなふ「いたわしの有様な常さへまどふ道の邊をましてあやなき夕まぐれ雨をつれたる風の手に笠を取られじこけまじと一つ所にのみ打わび給ふそのけしき古歌の心に似たるぞやくるしくもふり來る雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくに「斯様によみしは萬葉にか

の大和路の佐野のわたりこれは又あづまの佐野のわたりの雨のくれになやみつかれ給はんより見苦しくは候へど一夜は泊り給へやなふオ、イ、旅のお僧と招かれて杖を力に戻り來て 大「ヤレ、夫は嬉しきお心ざしイヤモウ假の浮世に假の宿、假初ながら値遇の縁 三十一「一樹の蔭の舍りも大「此世ならぬ契りなり 三十二「夫は江口の雨の木蔭 三十三「これも雨の軒ふりて大「うきねながらの草枕「これへとこそは請じけれ 三十四「イヤコレ弟せつかくお宿申しても何も供養致さん物が 三十五「モシさもし物じやが此衆飯を上ましては 三十六「ア、コレ、なんと申ぞ暑氣拂に拵へた粟湯をかイヤ其様な物も上られまいエ、コレ御酒は有れども肴がなし「お菓子はないかといふしもの置ぬ棚をやさがすらん心遣をそれと見て 大「ア、コレ、お二人承れば粟湯とやら暑熱をさます能ある物それで日本一の醍醐味御馳走にあづかりたし 三十七「すりやアノあは湯をそれは祝着ソレ、源次其さゆへと目ませを心得粟飯を藥罐のさゆへかきまはし茶碗へうつし差出す切なる心尼公も賞翫あれば源左衛門 三十八「はづかしや旅の御僧此衆と

申す物我等世に在し時は歌に讀み詩に作りたるをこそ承つて候に今は此粟を以て身命をつなぎ候も前世の戒業つたなき故「けにや慮生が見し榮華の夢は五十年其郡郡の假枕一睡の夢の覺めしも粟飯炊ぐ程ぞかし 三十九「あはれやけに我々も打もねて「夢にも昔を見るならば慰む事もあるべきに 四十「なふごらん候へ住うかれたる古さとの松風の音聲そへて「ねられねばこそ夢も見ず何思ひ出の有べきとそゝろ涙をうかべける「旅僧もあはれに催されすみの杖をしほらるゝ 四十一「ア、いはれぬ事に夜も更け行さぞ御僧にもお勞ならん蚊帳のもふけも候はねばかやりをたいて參らせんそれにてしばしお休みあれオ、幸ひかな某が世に在しとき鉢の木を好きあまたもちて候ひしが斯様の體に衰へていはれぬ貧の花好と皆人にまいらせて今はやうくあれに梅櫻松を祕藏致し候がこれを今宵のもてなしに蚊遣となして參らせん 大「ア、いや、これは思ひもよらぬ事お心ざしは有難けれど重ねて世に出給ひてのお慰み御無用になしたまはれかし「イ、ヤとても此身はうもれ木のいつのさかりにいつの花いつの時をか待つ

べきぞ 三十九「たゞいたづらなる鉢の木を御身の爲に焚くならばこれぞ採葉汲水の「法の薪とおほしめせ 四十「雨もとぢては雪と成るかの仙人につかへし雪山の薪「かくこそあらめ我も身を捨人のための鉢の木伐るともよしやおしからじ 四十一「とくく、伐つて蚊遣りにといふに弟が立か、りいづれを伐やそむべきとしばし眺めて打詫る經世は其間何がなと 四十二「へんぴと申し客人へ其の馳走ぶりイヤほんに此頃里の子供等がざれ唄を某もうる覺へにはござれども時の興にお聞に入れふか 大「夫は何より御所望が致したいサ、シテ其唱歌は 四十三「イヤ物とてござると手拍子に「あふて戻る夜半の花が候物あはでもどる夜半の花も紅葉も見もわかぬ佐野の船はしおもひをかけて迎もぬれたる袖じや物やれうきないとへばちんちぎりがあさいよへふかき戀ぢに沈み參らせふ 四十四「ハ、ハ、ハ、イヤかやりはいかゞと言葉のうち火ばちに入てさし出し 三十五「松はもとよりのときはにて薪となすは梅櫻 三十六「きりくべて今ぞみかきもり 三十七「衛士のたく火にあらねども 三十八「いたくもふけしよるの蚊を「とくよりて防ぎ給へや 大「これは一し

ほ御親切なをざりならぬ梅櫻かやりに春の心して蚊のうれいをば忘れしぞや扱しもいかなる人の御行末お名は何と候ぞ 芝「ア、人がましやいにしへを名乗るも流石おもてぶせこれこそ佐野の源左衛門經世 三十一「同苗源次經俊と申者のなれるはて兩人「あはれと御覽候へやホ、すりや佐野氏の兄弟とやよしある人とははじめより見しにたがはぬ武具のたしなみシテ如何のよし有てかくは成行給ひしぞ 芝「いかにも某零落の仔細語らん聞いてたべ「いで語らんと座をしめて 芝「扱も過にし仁治三年將軍の御供なし在京の折にのぞみ武士の身に青丹よし「ならぬ都の八重櫻いにしへ今にむれいの衆徒等君へ忿怒の弓矢を張り若草山に城構へそれとたちまち六波羅の打手を蒙りかくいふ經世 芝「即ち傳へしアノ鎧まだ其頃はさはやかに「おどし立たる金小札ざつくと着なし駿足に一鞭當てひた／＼風を起して眞先がけ 三十一「けに某も聞つたふ「それと見るより惡僧ばら放逸むざんのだんびら物拔連れ／＼打取らんと虻蠅なんどの群る如くどつとおめいてかけよする 芝「シヤ小ざかしと蹄にかけ「ほんはか／＼

はかいの罪めに物見せんと縦横無盡かけたてられてもこりばこそ又むら／＼とおつ取巻きのがさぬやらぬと打かかるを「坊主さうかう拜み打或はけさ切しゆもく割佛だをしにばた／＼あたるを幸ひ難立て／＼千變萬化と祕術をつくし一時に逆徒を打半け勝鬨あけて歸陣なす 芝「折に鎌倉おもてより父たるさの、兵衛政經暗打に打れしとの告にひとしく下向の折柄一族の讒により御勸氣とて所領残らず類葉たる源藤太に押領せられ敵もそれと極れど彼は大名寄付かれず時節をうか／＼故郷に生甲斐もなき武士の「身の上あはれみ給へやと兄弟かつばと伏沈み泣きくどくこそ道理なれ「旅僧も至極のことはりに衣の袖をぞしほらる、「折もこそあれ百姓太郎作 傳九郎出い きもすた／＼走り來て 傳九郎經世殿々々かねて敵とねらはる、「こなたの縁者の源藤太つね／＼こちともチト小ぎもが人ぬせわじやがおかばら立道陸神へ願かけた其御利生か奥州へ打手とやりに拔がけて手勢ばかりで海道筋道の掃除を庄屋殿が知らせを聞くとかけて來た瓜やなすびを見るやうに敵の首を斬るならばサア今じや今じ

やと馬さくり踏散らしてぞ引返す兄弟聞くより勇みをなし 芝「待もふけたる父の仇 兩人「いで首取んと立上るをホ「ヤレ待れよと押しめ目出度う尼が門出と何か心はしら紙へ筆取上てさら／＼と書認めてヤヨ經世今宵蚊やりに折りくべし其鉢の木の返報に加賀に梅田越中に櫻井 三十一「上野に松枝と三ヶの庄の此御教書 芝「時頼判としるされて我へ賜はる 兩人「シテあなたはホ、フ今は何をかつつむべき我こそは時頼道崇が母松下の禪尼じやはい時頼坐禪に籠るの間我鎌倉に歸りなば本領安堵の沙汰なさん 芝「コハ有難き御仰せ然らば拙者はこれよりすぐさしあたる多年の本懐弟は残つて尼公の御供なせと身繕ひ「ヤレととめて 三十一「兄者人かたきはうつての鐵武者立向はんに素肌はいか／＼ちぎれたりとも此の具足 芝「お、いしくも心付たりな鏑たり共此長刀今こそいさめやせたりともコレ此馬にうち乗て「上野やさの、船橋取はなれし本頼の敵父の仇 三十一「念なふ本望兄者人ホ「いそふれ經世と御聲の下「いさみ勇んでかけり行く。

四一 大和文字戀の歌 (薄雪)

常磐津文字太夫直傳 作者 二代櫻田治助

■「久かたのあまつそらなる名どころのこゝにもありや大和路に戀の渡りか天の川水にも波の狂ひあり千草も花の亂れ咲 松之助出 ■「亂れて名をや流すらん薄雪姫はうき事にいつしか狂女となりふりも風に小萩のほら／＼と姿しどなき秋の蝶夫をたづねてあこがれてそこよこよとちら／＼「むすびすてたる短冊のさの一夜の假枕夢ならかへしやどつちへぞ ■「よばれ招かれひよつくりひよつくり／＼ひよつと氣輕きさくな鳥刺が 三津五郎出 ■「これもものにかんまへて一つ鴨二つふくろ ■「三つ見かけたよい雛鳥のよぶはわれらにきつ／＼きが有るならうれしかほよ鳥うそ鳥なしに誠なら此持前のさしざほでさいてくりよ／＼／＼と思ふたホ、オ、おかしなんの笑はゞ二世かけしいとし殿御のある身じや物を外に心をうつくしい業平さんで有ふともあだなききやうは露ほども合「そんならどこのかおとこめとちん／＼かもでうまい事言ひかはせみのなか／＼かホ、ヤレほうじろちくる

いめ「これなぶらずと其行衛「イヤ〜こつちはそんな事「知らぬ道もせうろ〜と川邊ちかくも來かゝりて水ぎはいとはず立よる姫 三津「ア、コレ〜あぶないそこは川だよ〜 松之助「ほんにのうそふしてこゝはなんといふ川じゃ三津「こゝかへこゝは大和のあまの川さ松「ふ、あまの川なら我思ふ戀しきお方はこゝにであらふ見ればあそこにつま越船こしがねのふ〜船人渡してたも船よなふ〜

「船よ〜に船長ふたをがねみ〜にふつととんきよ聲 芝翫「エイどいつだへ折角ごんつくひつかけてうまい夢のどふぶくら船よ〜とやかましいド、どんなべ、べべらほうだイヤアテモ美しいぢよなめきだなこいつは渡してやらずばともやいとく〜



「どつこい〜めつたにそふはとらのかはごんごどうらんきんちやくと見かけたおむすをおのれマアしめこのうさとはおもいはせんだいがしのたてしやらいのかずよりも「話は船でサアこちへ「イ

イヤこつちへ「イヤこちへと一互に引張る手と手と手 松「コリヤ面白〜手を引あふて盆踊りかサア〜ちやつと踊りやおどりや「なんだおどれハ、ア見た所が顔かたち扱はお娘はてつきりと三津「サア色氣ちがひと思はる、松「オ、氣ちがひじや〜アレ〜それそこへ「夏と秋とにへだてがなさに今も螢のこがれてひとりなかなぬ思ひの身をこがすこりや氣ちがひじやないかいのされど此身も君ゆへほんに泣てこがる、ほたるむしそれでよそ目に氣ちがひといやるも道理尤じやもつとも〜を五つ合せて五もつとも「いかさまおしやればそふかいの「そなた思へば七里がなだをナア命すてがい來た物なしかへもどろ



ふかすてがい來た物命ぢや〜すてがい來た物なしかへもどろふかサア、サなんとしよかどしよかいナア「かへりませふろふかサア、サなんとしよかどしよかいナア「ついでくりやるな八まんがねよなかはいお人のひとの目をさますお人のひとのかはい〜お人の人の目をさます

サア、サなんとしやうかどしよかいナア「かへりませふまたしやんせにくやからすがなくはいなうかる、内にも狂人の又立上つて松「オ、おまつりじや〜三津「イヤいろ〜な事をいひ出すは 芝「しかしけふは七月七日七夕祭はまつりだが松「サアその七夕ももとは人月を祈りて女夫とも「ついでん〜天上し牽牛織女の二星となり「女夫すまるによるひるとはなれぬ中のちわ事を「天帝

第六常 磬 種

さんの腹立てとしに一度のあふせより外はねつきりはつきりと引わけられしあまの川「それならこちともおだんぎで聞きはつたるもろこしの「ゆうしはくやうとやらいふ夫婦の仲もよいつはり月をながめて天竺へこした長屋のちやぶるまひ兎が餅つきしてこいな「こしや世がよい木に餅がなるへ「ウヤヤレ〜サテ〜ヤレナアレハサコレハサドツコイサノサ「やがて湧きましよ池に酒「隣のかみさんもちやけてこねどりごてさんそこだぞまんなかつきねえおやもさそふだに〜「今の浮世はよめが珠敷するばさま色ゆゑ化粧する「アレハサコレハサどつこいさのさコレナアかはしやんせ 兩人「評判々々名代々々 松「其もち月に引かへていく秋かけて契りてし「かはい男の所在には牛の角文字つな引て女子はくさのあやにしき織るてふはたもむしの音にいはずむしふりきつて行くが殿御かにくらしと「かこちて袖のふくろびをつわりさせよと秋つむしきりはつたりてふ〜つゆのことはぬれまさる「ほしのちぎりはつきせぬにきこへぬはいな 松「そのべ様「薄雪涙にくれながら只忘れぬは

しのぶ夜に枕ならべてねたときのその言の葉もはづかしけれどお前とわしがその仲は二世や三世はいふまでもないすつとこんどのこんどのさきの世までも必ずやいのといふたればうそぢやないかやほんにかとのたまふときのうれしさにうつてかへたる身の難儀かさなるうさに亂れがみ推したもとはかりにて流涕こがれ伏給ふ 三津「コレなく物じやアない〜サア〜おどつた〜 芝「幸ひ船に講中の預けていつた題目太鼓 松「ホンニコリヤ面白からふ 三津「そんなら一緒に芝「拍子をそろへて松「おどりじや〜「立渡る身のうき雲もはれぬべしたえぬ御法のわしの山風なむ妙法蓮華經なむ妙法蓮華經「有難やおどりの内にあらしこどもうかぢひよつておつ取巻きとりて「見付た〜薄雪姫に惚れてござる大膳様へそびいていつて手柄にするサアきり〜とと立寄るを二人が支へて 三津「成らぬ成らぬ此狂人が幸崎様の娘御なら鳥さしの此吉助がゆかりのお方 芝「此船頭の五平次もよしみはなけれど大悪人と噂に聞いた大膳殿へマア姫君は渡されぬはよ〜とそふぬかせばうぬらとも〜繩打つてそびい

て行くは 兩人「何ちよ〜とこいな とも「腕まはせ「やらぬとかゝるを兩人がもつてひらいてさそくときてん姫はこはさもしら絲のわくかたわかぬみだれ氣にそのべが有所こはかと狂ひ行くこそわりなけれその假名文の大和文字こひの言の葉はつ秋の星の手向と書納む。

四二 一樹蔭雪 籬 (山鳥)

常磐津文字太夫直傳 作者 二代櫻田治助

■「常磐津の松にも花ぞ咲にけり雪の顔見世寒からで爰に一個の大丈夫 ●「武智左馬之助光俊は 〇「よじやうがむかし思ひねのうた、枕の中ぞらに 〇十郎出「ア、だいぶ寒くなつて来たはへ幸ひ〜此土火鉢にかけて置た一銚子獨もてうど雪見酒どれ引かけてとつぎかゝる「折からこなたへ山鳥の友をさそふてとび來る光俊これに目を付けて 〇「はて合點の行かないこ、は所も浪花の堀江色宿の庭先鳶鳥でもある事か山鳥來つて人もおそれずアレ〜アレ幸ひの酒の肴やき鳥にしてせしめてくれんオ、そふだ 〇「鏡影まさにあり〜と 〇「すがたはでなる友鳥の

菊之丞 出 〇「お菊お糸と名によびよばれお客さんがた女郎衆

のもつれたわけや盃の中居に立つてとりさばきぐつと江戸づけ合の手に 〇「鶏鐘をひとつに里のむかひかごわかれはぐちのはじまりか何がすいやらぶすいやらいつもめれんになりふりもほら〜物ぞなまめかし 〇「見りやア宵から此内に見かけぬ二人どこから來た 菊「アイわたしらはナお前の迎に 〇兩人「中から來やんした 〇何おれを迎に新町から此堀江へ 〇「アイおてきが待て〜ござんすはいナア 〇何敵が待て居るとは 〇サア其さきがけに 〇「すでに手だれの御大將器量も至極天王山待設けたる太夫しよく瓢箪町の馬じるし備へをかためし仲居より手がらはしがちとさきがけに酒のつはものまへだれの緋おどしならぬ緋ぢりめんしつかとひきしめこまけたでこ、へ迎ひの色上戸きて見よかしの女武者「五三の桐もから紙の引手はなれぬ約束のきしやうの筆もかはらじとヨイ〜ヨイ〜ヨイヨイヤサ「やぶらぬ心見てとりてそふは五の文まくらまゝなせたいをたのしみにヨイ〜ヨイ〜ヨイヤサ 〇「ちよいとさなさい 〇「ござが三味ひく出さみ、をひく袖をひくゑんやらうんと車引大根引二度のつとめはまゆ